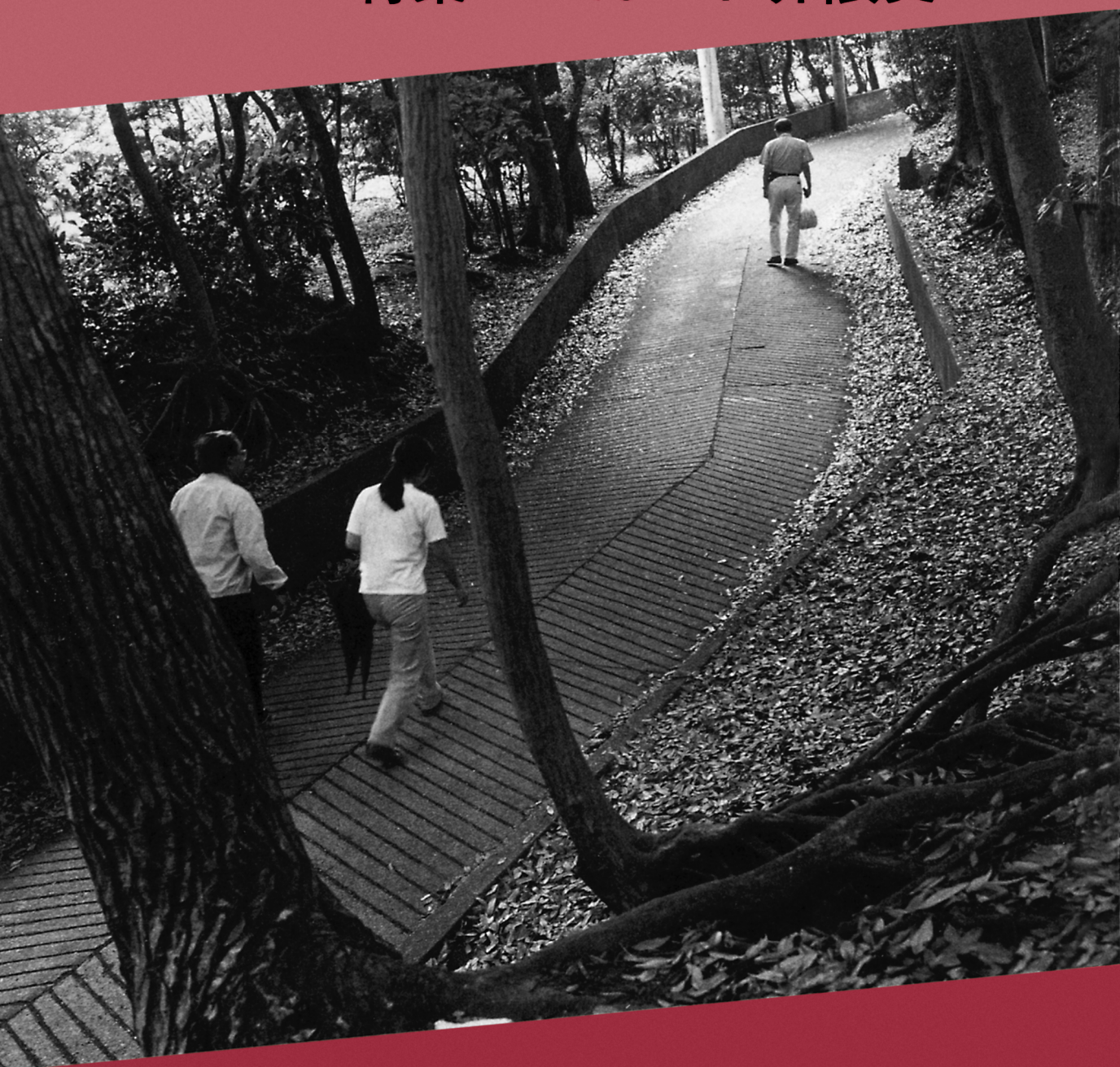
せんがわ 21

特集●せんがわ界隈史



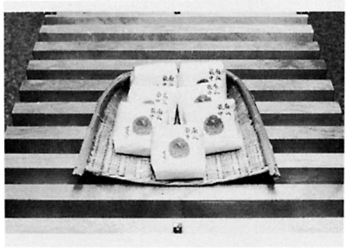
’93.9

御祝用菓子・御仏事用菓子ご注文承ります

仙川で生まれた

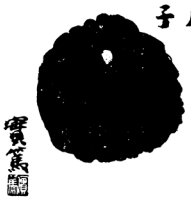
南瓜最中（かぼちゃ）

（粒あん求肥入最中）



深大寺銘菓 柚子

南瓜菓子



仙川商店街中央・藤屋ビル１Ｆ

☎ 3300-0416

南瓜最中本舗 藤屋

大塚矯正歯科医院

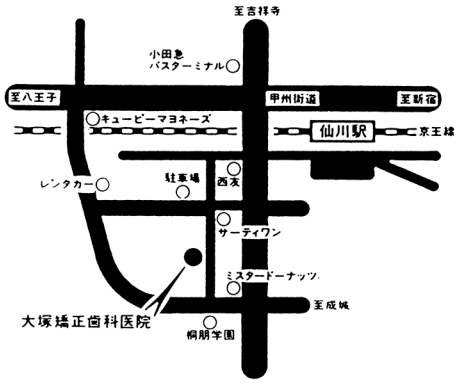
歯並びに関する お問い合わせ

御予約はお電話にてお願いいたします

TEL 3308-0707



Ohtsuka Orthodontic Office



休診日　日曜・祭日・木曜日

診療時間　10：00～13：00　15：00～18：30

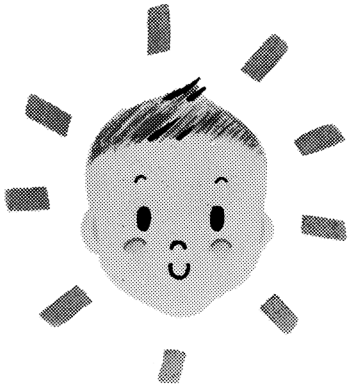
wakodo

あっかるい笑顔、はぐくみたい。

お母さんと赤ちゃんのあったかい関係を応援する。
やさしさが基本のパートナー、和光堂。



おしぼりウェッティー
旅行に、ドライブに、ピクニックに。いつでもどこでも、簡単にスッキリ拭けるのがうれしい。





ベビーフード
赤ちゃんだって味にはうるさい。
育ち盛りの赤ちゃんにおいしい離乳食、充実のラインナップ。

和光堂株式会社 東京工場 東京都調布市若葉町2-2 TEL (03) 3300-0111

スペース 仙川火曜劇場

◎毎月第１火曜日――――"小督"
◎毎月第２～第５火曜日――"耳なし芳一"
（但し１月・２月・８月――休演）
◎開演――午後７時30分（開場７時）
◎料金――前売（電話予約）￥1,800
当日　　￥2,000

小劇場　スペース・仙川
東京都調布市仙川町1～12
（京王線・仙川駅より3分・桐朋学園前）

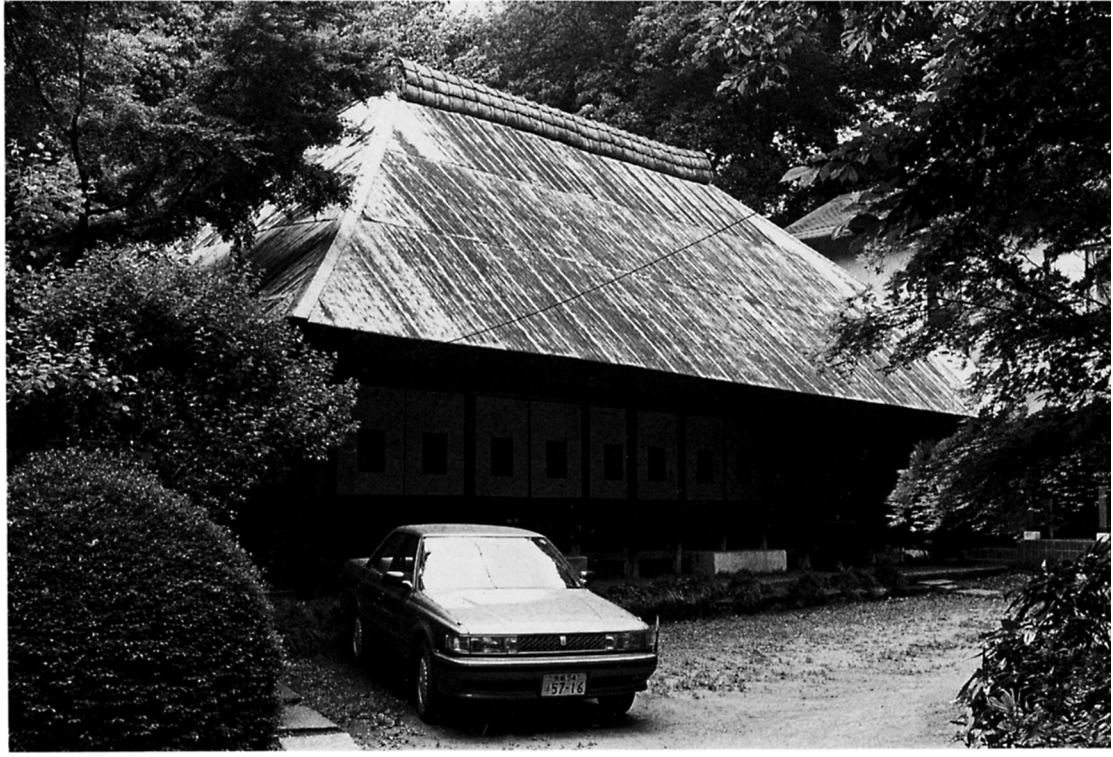
※問合せ・予約
☎ 03-3307-8044

スペース・仙川企画



女舞一人芝居
琵琶モノドラマ
耳なし芳一／小督
――平家物語異聞――

古き建物たちの語らい①



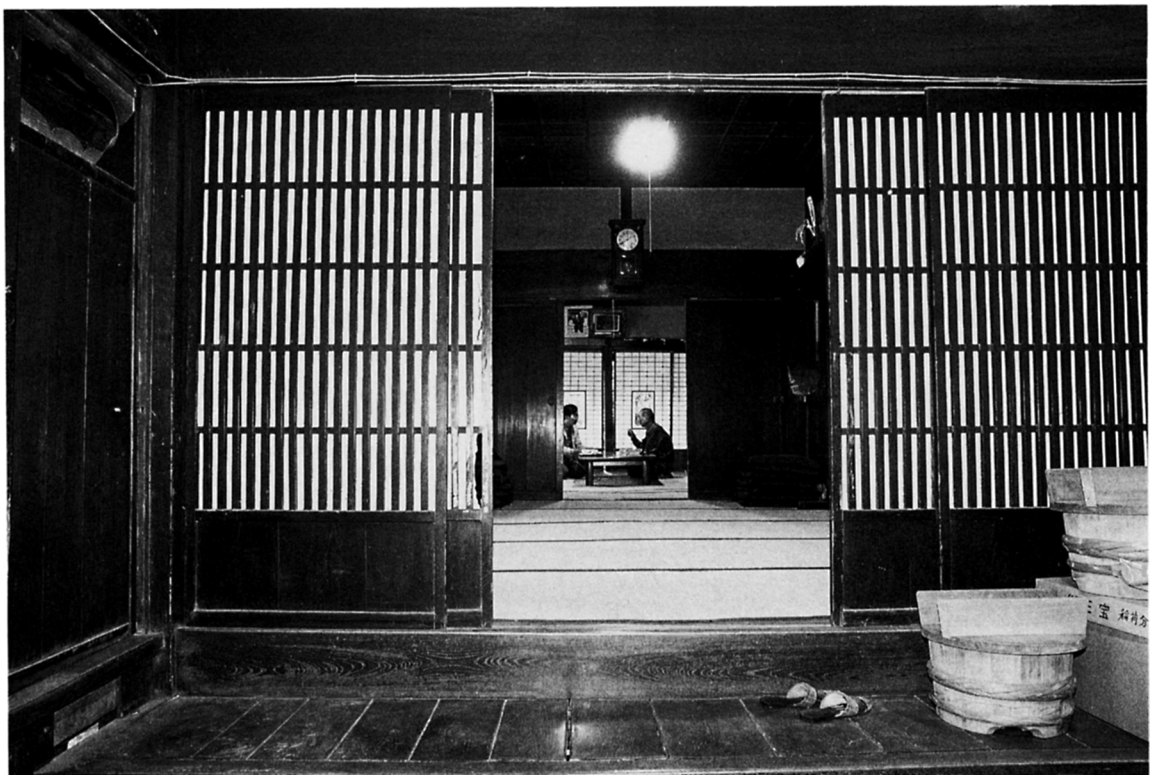
▶二百年以上も前に建てられた新井邸の母屋全景



◀母屋の裏にある文庫蔵



◀土間から玄関と座敷を見る



◀土間から座敷を見る

農家と馬宿

（新井一男氏邸）

（川口三八氏邸）



◀今も残る茅葺きの風情



◀百数十年を経た座敷



▶滝坂上の馬宿・川口屋の面影を残す

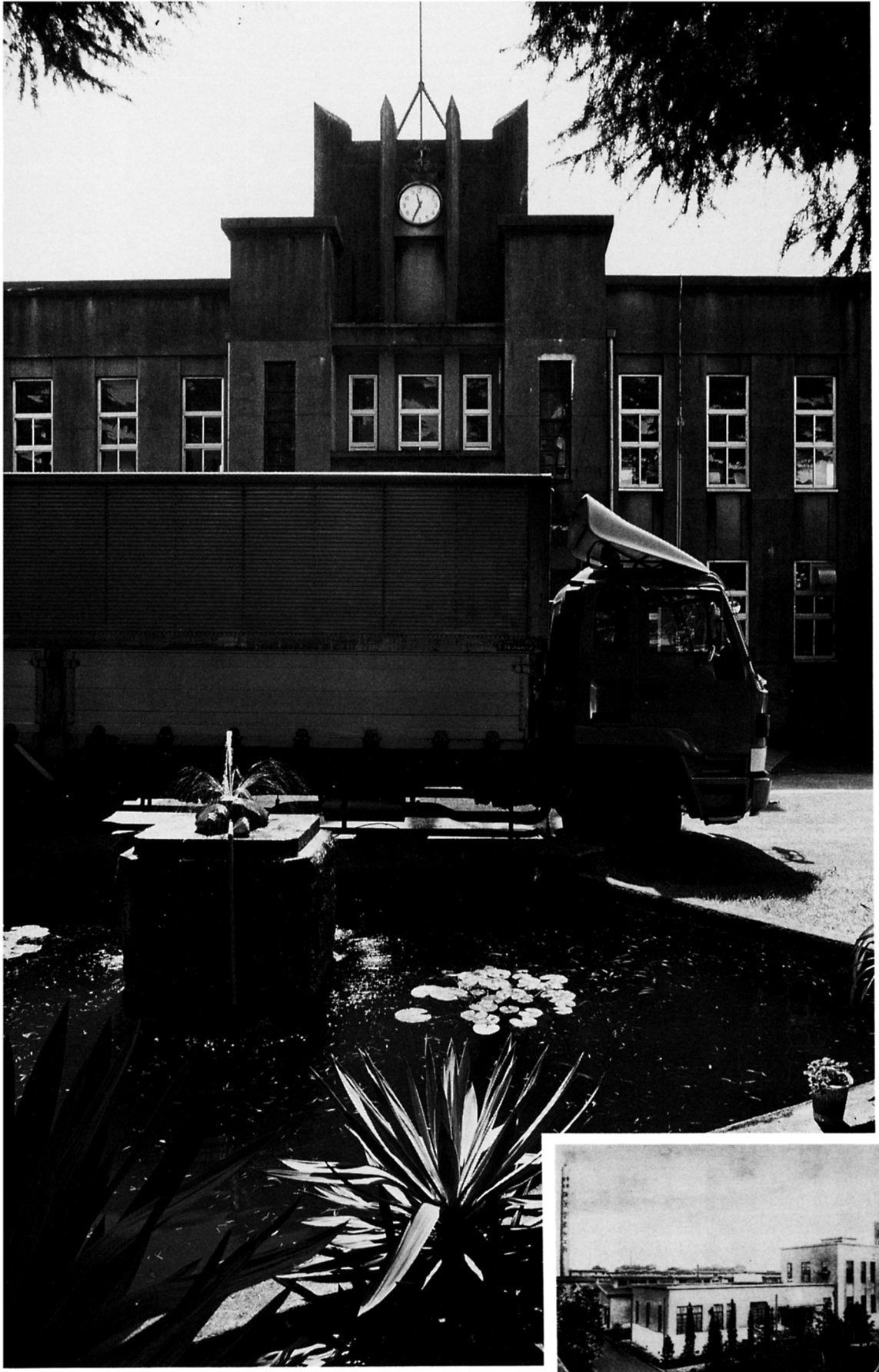


▶時代を刻む柱と階段

写真：加藤純一郎

古き建物たちの語らい②

和光堂東京工場



▲1932(昭和７)年竣工の事務所棟正面

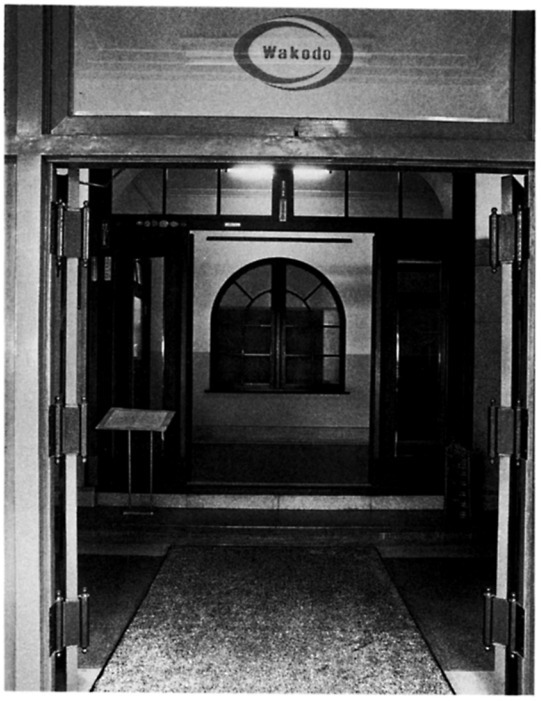
▲創建当時の事務所棟全景



▲威厳を感じさせる事務所棟

▼▼▼昭和のモダニズムを伝える内部のデザイン









▲▲付属の倉庫のデザインも個性的



古き建物たちの語らい③

桐朋学園大講堂

一九四二年秋・落成
一九九一年夏・解体





▲木蔭に見え隠れするなつかしい木造建築

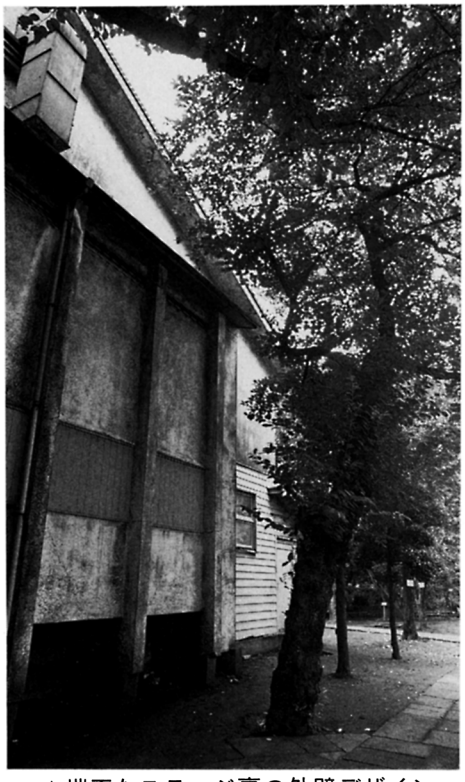
▲外壁の下見板張りが大きな樹木によく似合う

▼さまざまな記憶のしみついた大講堂(正面ステージより後方を見る)





▲２台の映写機が無人の空間をみつめる

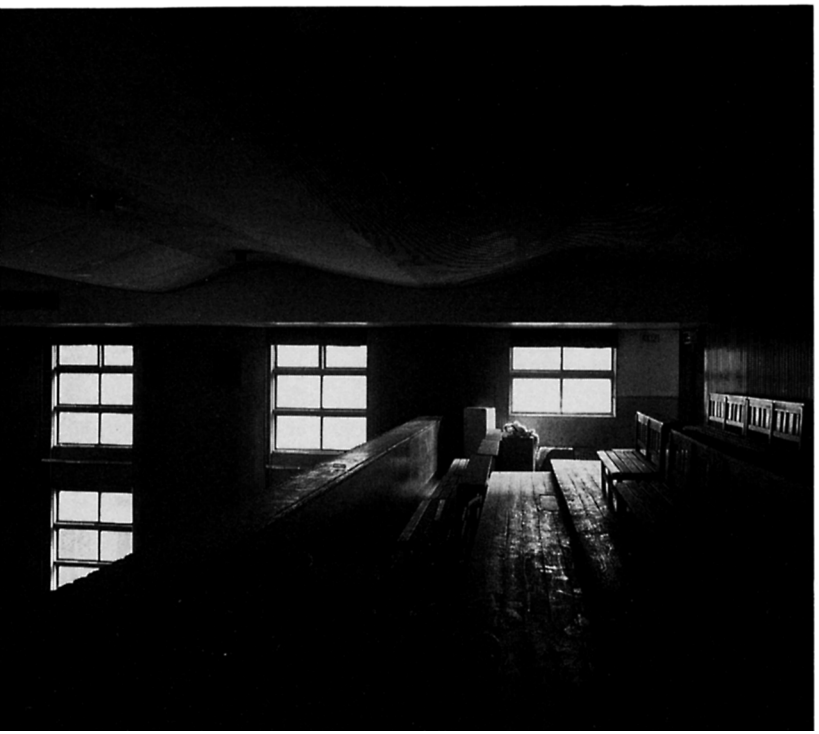


▲端正なステージ裏の外壁デザイン

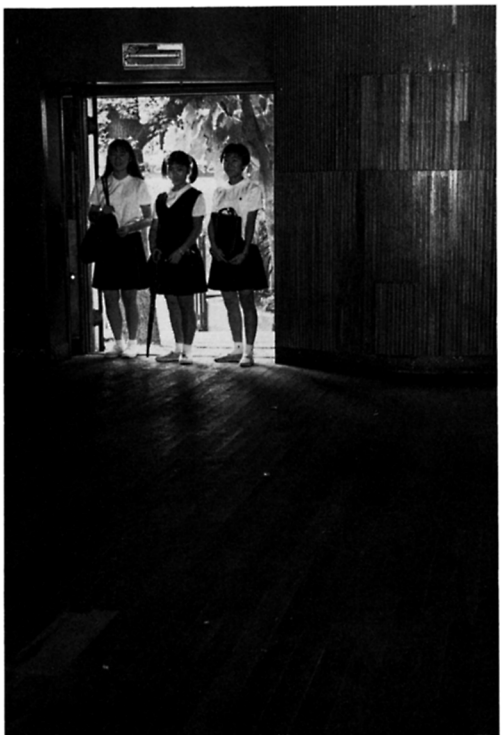


▲いかにも学園という落ち着いた雰囲気

▼光だけが何かを語っている（後方の中２階席）

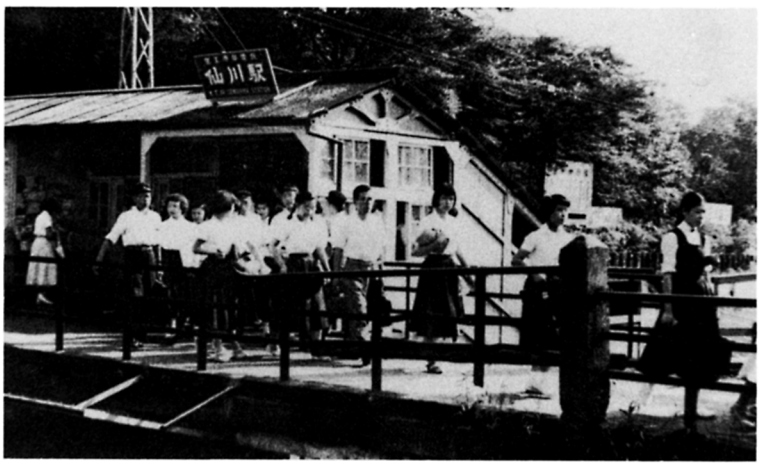


▼あの日、あの時をなつかしみつつ……





▲1950年代後半、入間たんぼにて



◀1950年代中頃、仙川駅の登校風景

思い出点描

―桐朋学園の写真帳より

▼1964年、東京オリンピックのマラソン風景



仙川の中での桐朋学園五十年の歩み

桐朋学園理事長
千葉　宏（ひろし）



桐朋学園の前身、山水高女が仙川に開校したのは昭和十六年のことである。山下汽船の創業者山下亀三郎氏が軍に献金した一千万円がその基金であった。同時に国立市に山水中学ができた。当時、軍の威光で、校地の購入には、地主の方にだいぶご迷惑をおかけしたと聞いている。地元のご協力があっての今日の桐朋である。

昭和二十年の敗戦で、軍は崩壊した。軍と深い関係にあった山水学園はその去就に苦慮した。鳩首凝議の末、これを官立の東京高等師範学校に移管することにした。東京高師側は第二附属校を意図したが、大蔵省が難色を示した。敗戦直後では当然のことである。そこで、東京高師の附属実験校という名目で、校名も「桐朋」と改め、私立校として発足させることにした。昭和二二年春のことである。ちなみに桐朋とは、東京高師の校章が桐で、その朋友という意味をもつ。東京高師の校長で、桐朋初代の理事長兼校長となった務台理作先生の命名である。先生は、当時、高名な哲学者として知られていた。

山水高女は、昭和十八年、校舎の半分を焼失している。落成わずか五カ月後のことで、原因は失火であった。この時は地元の方々が駆けつけ、消火に協力していただいた。このようなハンディを背負った新生桐朋の前途はまことに多難であった。無名に近い私立学校はまず生徒集めがたいへんである。ガリ版刷りの学校案内をもち、手分けして近隣小学校をまわった。「学校が有名にならなければ駄目だ」。私たちはいやというほど思い知らされた。東京高師に関係する学校として、卒業したての若い教師が続々と集まってきた。懸命の学校づくりが始まった。その先頭に立ったのが前理事長の生江義男先生である。

当時の仙川は、既刊本誌でお読みのように、一面の畑であった。店屋も二、三軒。風呂にはいるためには調布や上北沢に遠出した。しかし私たち青年教師は意気軒昂、仙川の住人として、しだいにわが町にとけこんでいった。やがて結婚し、住居も校宅ということで、仙川は完全に第二のふるさととなった。

学校はしだいに発展していった。まず焼失した校舎の復興、つづいて音楽科の併置、幼稚園・小学校の新置、音楽大学・短期大学の開校等々、昭和四十年代の前半までに今の形ができあがった。桐朋の名もしだいに都内から近県、そして日本中にひろがり、音楽科生の活躍は、やがてＴＯＨＯの名を世界的にひろめることになった。もちろんここに至るまでには、戦後日本経済の驚異的発展が大きく影響している。それとともに忘れてならないのは、地元仙川の皆さんの心からの支援である。平成五年五月現在、幼小・中高・短大・音大の卒業生総数は四八、八一三名、いずれも間接、直接に仙川の皆さんにお世話になった。このご厚意に報いるには、一層桐朋教育の実をあげ、「仙川に桐朋あり」の名声を更に高めるほかないと思っている。

●グラビア PART 1
時は流れ ― 移ろい行く界隈の景色 …… 105
ある家族の肖像 …… 112
●グラビア PART 2
せんがわ鳥瞰 ― 航空写真にみる〝むら〟から〝まち〟へ …… 176
せんがわの変わらざる原風景 …… 181
・せんがわギャラリー　雨田光弘 173／表Ⅳ

●マップ
実篤公園・記念館への案内マップ …… 41
昭和29年当時の商店街マップ …… 79
昭和58年の仙川商店街マップ …… 80
古き地図より …… 111
マップ21／仙川界隈史散策 ― 路傍の石仏をたずねて …… 114
せんがわ周辺の遺跡分布図 …… 128
神代村当時の字名と現在の町名の対照 …… 142
・私誌抄
此の地に生涯を託す／菊池璋 …… 67
ライヴハウス〝ゴスペル〟の不在／高崎梨菜 …… 83
仙川　失われ行くもの／奥田道大 …… 116
・コラム
仙川の風土から日本を見る／萩原祥三 …… 45
字下仙川向山の四季 …… 49
我が愛しの仙川駅よ／山岡義典 …… 51
仙川の製造業　萬平製作所＆月兎ソース …… 76
コミックエッセイ　実篤公園を描くの記／中島りえ …… 98
仙川の風土と心／萩原祥三 …… 101
仙川面白話三題／京町純彦 …… 102
〝清貧の思想〟を生きる／Ｉ氏 …… 117
界隈史特集号の発刊に際して／川原主計 …… 167
かつてのある日 ― そのごの出会い／加藤純一郎 …… 184
・資料
明治42年の「多摩新聞」より …… 20
仙川農業の歩み …… 73
せんがわ周辺の遺跡一覧表 …… 129
せんがわ界隈史参考文献 …… 160
・インフォメーション
ショッピングモール／ショップカタログ …… 162
トピックス　ブラジルフェア　１９９３ …… 164
せんがわ界隈史の会第二期発足 …… 169
せんがわまちニティ情報センター …… 170
募集・アンケート／編集後記 …… 173

表紙・口絵及びグラビアデザイン／山岡義典
表紙写真　／加藤純一郎
写真・資料提供　／伊藤綽彦、川口三八、川原武次、川原主計、酒井一真
中島藤尾、桐朋学園、神代高校、調布市郷土博物館
仙川商店街協同組合、京王帝都電鉄
イラスト　／こやまきょうへい、中島りえ、山下　琢
レイアウト　／青野　道子、岩田幹雄、松尾洋介＋１
タイプ　／木村任男（木村企画）
ワープロ入力　／伊藤綽彦、伊藤史彦、大久保信昭、大脇正昭、松尾洋介
山下　琢、吉沢喜美子、今待幸男、三沢千恵（ワークス）
題字　／小沢基弘、こやまきょうへい
校正　／伊藤史彦、大久保信昭、小山操、松尾洋介
広告・グラビア版下制作／木下　仁
本文版下製作　／新井　満、山口教良（シーダー企画）
印刷総務　／陰山俊憲、大江宏明（和幸印刷）
雑誌配付　／社会研究フォーラム

せんがわ21　目次

●口絵写真　古き建物たちの語らい
農家と馬宿／和光堂東京工場／桐朋学園大講堂／思い出点描 …… 2
・巻頭言　「仙川の中での桐朋学園五十年の歩み」　千葉喨 …… 9

■特集1　座談会
「大正・昭和のせんがわ〜風土と生活点描」 …… 12
植松好子／川口信子／清水八重子／田中トク／田辺テル子／浜島光子

■特集2　界隈史30話
≪くらし点描≫　昔語り ― 明治・大正・昭和の仙川界隈／川原イト …… 25
ランプから電灯へ ― 大正二年京王線敷設とともに／田辺喜勝 …… 28
大正 ― 戦前の生活点描／伊藤綽彦 …… 30
大正末 ― 昭和始めの下仙川物語／浜島寛 …… 32
新井家と入間町界隈／新井一男 …… 34
昭和期の大字入間のまちづくり／新井一男 …… 36

≪むさしの≫　仙川から深大寺へ／春原一穂 …… 38
仙川付近の草花の今昔／春原一穂 …… 42

≪かいわい≫　〝滝坂〟昔ばなし／川口三八 …… 46
神代村字下仙川向山／宍戸義男 …… 48
「むけーやま」から一言／中山俊夫 …… 50

≪てらまち≫　仙川の寺町／菅　隆慶 …… 52
昌翁寺住職五十五年／榎本晃道 …… 54
昭和初期の仙川界隈／酒井一真 …… 56

≪来たりもん≫　〝土くささ〟に住みつく／萩原祥三 …… 58
来たりもん第一号　半世紀を語る／中野朗子 …… 60
私と仙川 ― 母娘四人の戦中・戦後の暮らし／菊池溶子 …… 62
緑ケ丘団地三十年／山崎孝市 …… 64

≪しごと≫　仙川酪農事始物語／田辺喜勝 …… 68
仙川農業の担い手たち …… 70
和光堂東京工場ヒストリー／原田亮一 …… 74
仙川商店街と共に四十年／岡部敏英 …… 78

≪なかま・スペース≫　明治・大正 ― 講・青年団・消防団／伊藤綽彦 …… 84
仙川青年會の活動とクラブハウス物語／田辺喜勝 …… 86
仙川青友会二十年の歩み／川原徳重 …… 88
祭礼囃子 ―　〝仙川はやし連中〟の今昔の記／田辺豊 …… 90
小劇場〝スペース仙川〟　起・承そして転開／吉田央舟 …… 92
四中クローバーズ　おかげさまで十五歳／遠藤衛 …… 94
実篤公園と実篤記念館／堀公彦 …… 96

■特集3　界隈史年表　監修　伊藤綽彦／川口三八／佐美佑
仙川の大地〜先土器時代〜縄文時代〜弥生時代 …… 120
古代〜中世〜江戸時代 …… 131
明治〜大正 …… 145
昭和（戦前） …… 148
昭和（戦後） …… 152

座談会

大正・昭和のせんがわ

――風土と生活点描――

出席者（50音順・敬称略）

植松　好子（仙川町二丁目在住／仙川生まれ）
川口　信子（仙川町二丁目在住／上高井戸生まれ）
清水八重子（仙川町一丁目在住／仙川生まれ）
田中　トク（仙川町三丁目在住／入間生まれ）
田辺テル子（仙川町二丁目在住／仙川生まれ）
浜島　光子（仙川町二丁目在住／仙川生まれ）

――司会・文　青野道子

敗戦、公営住宅の建設、東京オリンピックなど、時代の潮流は昭和三十四、五年ごろから「せんがわ」に一気に押し寄せ、農家の生活を一変させたという――当時の衣食住の様相や結婚、出産、娯楽、年中行事など、伝え聞き、体験した大正・昭和の「せんがわの風土と暮らし」について仙川町在住の五氏に点描してもらった。

司会　仙川は現在、調布一の商店街を有し、実篤公園・記念館や桐朋音大、白百合女子大がある文教地区として知られていますが、古くは農業、養蚕の地だったそうですね。いつごろから生活の様相が大きく変化し始めましたか。

植松　田んぼがひとまとめに買い上げられた昭和三十四、五年ごろからですね。当時、浅草の住宅地区改善事業に伴い公営住宅の建設地が必要となり、真っ先に目をつけられたのが緑ケ丘の田んぼだったわけです。それから仙川の農家の生活が一変してきたんです。

川口　昭和三十九年の東京オリンピックを境に、甲州街道の道幅も拡げられ、人も多くなってきましたね。

植松　それまでは甲州街道もジャリ道で、両側にうっそうとした樹木が生い茂り、何かうす暗い感じでしたね。

田辺　その時分には仙川の人っきり歩いていなかったので、買物していても必ず知り合いに出会ってあいさつをしていたけれど、今はすれ違う方は皆さん知らない人ばっかり……。それだけ人が多くなってきたのだと実感します。

植松　商店も数えるきりしかなかった。甲州街道にはうち（種苗屋）と角のタバコ屋さん、はり灸屋さん、ソバ屋さん。駅までの途中に自転車屋さん、八百屋さん、魚屋さん。駅が今の橋の上にあって、その先に藤乃屋のおソバ屋さん、笹本のお肉屋さんがあるだけで、それから先はズーッと何もなかった。

田中　笹本のお肉屋さんは、養豚の仲買人もしていましたね。

田辺　そう。うちも豚を飼ってました。

植松　豚や牛にお勝手のクズをよくやったりしましたよね。

浜島　スーパーの鈴屋さんもありましたね。よろず売りで、佃煮から醤油、下駄まであった。

植松　買物は鈴屋さんへ行ってそれから笹本さんに行けば、ほとんど間に合った。お豆腐屋さんは烏山から売りにきてましたね。

浜島　烏山は割に開けていてお店も多かったので、自転車でよく買物に行ったわ。特に、洋裁関係のものは何でもそろっていましたから。

田辺　調布にもよく行きましたね。宿場町として栄えていたのでモノも豊富にあった。

植松　仙川や烏山にないと、「調布まで行ってこい」といわれ、金物屋さんへはよく買いにやらされた。自転車で行くでしょ。帰りは滝坂とつつじケ丘の坂を二つ上らなくちゃいけないから、小学生だったし、いやだった……。

司会　当時は行商が盛んな時代ですが、仙川にはどんなものを、どちら方面から売りにきていましたか。

植松　アサリ売りがオートバイで浦安からきてました。メガネかけたちょっとイイ男で（笑）、「仙川はよく売れるから、このあとまっすぐ帰れる」って話していた。魚の行商人も浦安からだったと思います。

田中　おばあちゃんの話では、うちのおじいさんは中気で十三年間病床についていて、白身の魚しか食べられなかったんですって。それで毎日、魚の行商売りの人がうちにきてくれたそうです。毎日お魚ばかり食べるので、家中が魚臭くって……と、よく言ってました。

浜島　越前の方からは農機具を売りにきていた。前田さんという人だよね。二年ぐらい前、結婚式でこっちに来たけれど、もう、懐かしくてね。

植松　よく名前まで覚えてるわね。

田辺　うちでも、一年に一回ずつ来る農機具売りの人を待って鎌を買い替えてました。年賀状も毎年来てましたね。

浜島　とろろこぶ屋も一年に二回ぐらい来てましたね。戦後は来なくなったけど。

川口　富山から薬の行商人が一年に二回来て、うちの宿に泊ってましたね。

司会　近くに病院はありましたか。

植松　昭和初めに、東京女子医大の同窓生によって至誠会病院ができました。

清水　烏山のほうに古谷病院と下田病院があった。

田辺　金子駅（今のつつじケ丘駅）のそばにも狩野医院があった。あそこは古いですね。

浜島　何かっていうと「手遅れだ」という先生だった（笑）。今考えると、昔は死ぬほどの病気じゃないと行かなかったから、そんな悪評が立っちゃったんですね。

植松　仙川で最初にできたのが松村医院で、至誠会病院の女医さんもしていたんですね。

川口　仙川で赤痢が流行した時期があったと、親戚の人から聞いていましたが……。

田中　私たちが小さいころで、明治の終わりごろだったと思います。

浜島　赤ちゃんのころ、蚊屋の中で寝ていて赤痢の消毒が目に入り、片目を失明した、とあるおば

年中行事一覧と主要作物の生産暦

月	日	行事	作物								
			稲	麦	アワ	ヒエ	大根	サトイモ	春蚕	初秋蚕	晩秋蚕
1	1	若水汲み									
	2	初荷									
	6	オセチ（六日年越し）									
	7	七草									
	11	蔵開き									
	14～15	小正月									
		繭玉作り									
		塞の神（ドンド焼き）									
	20	恵比寿講									
2		初午									
	3	節分									
3	3	雛祭り・深大寺だるま市									
	15～17	出替わり									
	20	彼岸・天道念仏									
4	18	お花見									
	20	煤掃き（養蚕の準備）									
5	5	端午の節供									
6											
7	1	釜蓋朔日									
	7	七夕									
	13～15	お盆									
	20	ソウゴアガリ									
	29	灯籠流し									
8	1～2	お盆（養蚕農家）									
		雨乞い									
9	1	八朔の節供									
		十五夜									
	12	裏方様の目玉団子									
10	14	天道日待ち									
	31	荒神様のお立ち									
11	9	イノコのぼた餅									
		一の酉									
	15	七五三									
	20	恵比寿講									
	30	荒神様のお帰り									
12	4	大師講									
	8	ヨウカソウ									
	8	ふいご祭り									

『調布の年中行事』（調布市郷土博物館）より

手拭かぶって、タスキがけに尻はしょりで畑へ



田中トクさん

あちゃんがよく話していた……。

川口　がにがら山のあたりに隔離病棟があったそうですね。その名残で今も、くぬぎの雑木林みたいになっていますね。

田辺　何か不浄の場という感じでしたね。

司会　ところで、そのころのごちそう料理といえば何でしたか。

田中　農家のごちそうは、たいていは自分の家で作ったおうどんなんですよ。それ以外だと、お赤飯とかおはぎでしたね。

植松　昔はお祭りがあると、お赤飯とお煮しめを作って、それを二段のお重箱に詰め「隣村の親戚に持って行け」といわれて配って歩いたじゃない。

浜島　四月八日の餅草団子とかお盆の饅頭とかお彼岸の牡丹餅とか、そういうものっきりしかなかったもんね。お菓子なんて滅多に買ってもらえなかったから……うちだけじゃなくて（笑）。

司会　普段着はどんなスタイルでしたか。

田中　お嫁に来たころは普段は紺絣の長着に半巾帯、前掛けを締めていました。畑へ行く時は、手拭かぶってタスキがけに尻はしょりなものですから、足の上のほうまでブヨに刺されちゃって痒くて痒くて……。〝もんぺ〟がまだなかった時代でしたからね。

植松　〝おてもやん〟みたいな格好？

田中　あんな格好いいもんじゃないですよ。だから私なんかいまだに手拭かぶらなきゃ仕事ができない（笑）。

田辺　私は、小学校を卒業するまでは着物に袴でした。

川口　昔の写真を見ると、着物に白いエプロン姿、おかっぱ髪、素足の女の子が多かったようですね。

浜島　学校の上履きは皆、わら草履ね。

清水　わら草履の記憶はない。私たちはゴム靴だったと思う。

植松　私は、国民学校のころはセーラー服でした。当時、刈り上げが流行していて、床屋に行くのはずいたくだからと、家でしてもらっていた。

川口　油の切れたバリカンでされると、痛かったですね。

司会　皆さんはそれぞれ仙川町、入間町、上高井戸のご出身ですが、当時はどの辺りからお嫁にくる人が多かったのですか。

植松　近所が多いですね。昔は四里四方といって、それ以上遠くなると何を言ってもわからないと。皆、お大尽になっちゃう（笑）。

司会　結婚式はどちらで挙げられましたか。

川口　大国魂神社です。結婚式場で挙げたのは、うちが仙川では第一号でした。

植松　私はうちの隣の京王雅叙苑で挙げたんです。私が一番最初だったので、衣装も新品。着物の見本用に写真を撮らされたんですよ。

清水　自宅でする方は皆、魚屋の井上さんにお料理をたのんで、組合からお茶碗やお碗などを借りてきたりしてましたね。

植松　式場でやったって、その後、婦人会とか消防団などへのお披露目を家でするから、三日間ぐらいは外へ出られなかったものね。

川口　私なんかも後座敷をやりました。皆、三日も四日も付き合えたのは、そのころ娯楽もあまりなかったからなんでしょうね。

田中　自分の髪の毛で島田を結

いましてね。なかなか眠れませんでした。

植松　私の場合、今みたいな髪合せがなかったので、サイズが合わなくてカパカパしていた。

田辺　烏山の宮崎さんへ島田を結いに行きましたが、帰りの電車の中で皆が喜んで見るので恥ずかしくってね。今でも忘れません。

司会　出産はご自宅でですか。

田中　そうです。助産婦さんにきてもらって。

川口　私は一番上の子が病院で、中二人が助産婦さんの所、一番下の娘が自宅分娩です。

植松　至誠会病院です。

浜島　私は三人とも自宅分娩。

清水　私は慈恵会病院でしたが、中山さんという、人柄も腕もいい助産婦さんが仙川にいましたね。

植松　だいたい、仙川っていう所はすごく穏便な人が揃っていらっしゃる。あんまり波風立てないようにと。本音と建前が違うのかもしれないけど（笑）。

田中　例え気に入らなくても顔には出さないですね。

田辺　よその人は皆さんよく、仙川の人は静かだ、と言われる。

司会　そうした面で特に躾られたご記憶はありますか。

植松　私なんかよく言われましたよ、人に物をあげる時は、いいものを人にあげて自分はカスを取るんだよって。例えば、料理を自分がお皿に盛りつける時は、尻っぽとか出来損いは自分につけて、いいところを人につけろと。だからおさんどんはやりたくない、と思ったものです。（笑）

田中　嫁っていうのは、たくあんにしてもいいとこ食べちゃいけないって、里で言われていたんですね。昔だからたくあんを四斗樽で二本も三本も漬けるんですが、私はずっと尻っぽのところを食べていたの。そしたら姑さんがね、「捨てるほどあるんだから、そんなとこ捨てなさい」って言ってくれたの。私、忘れません。

田辺　いいお姑さんでしたね。

浜島　仙川って、人はいいけど、ことば遣いが悪い。語尾に「べえ」が付いたり……。

植松　「がめちゃった（疲れた）」とか言うじゃない。

仙川って、人はいいけど、ことば遣いが悪くて……

浜島　息子がそれ、言うんです。会社でも「何言ってんだよ」と聞かれることがずいぶんあるよって。「お母さん、どうして標準語を教えといてくれなかったの」といわれるけど、自分がまともな標準語を知らないんだものね（笑）。

川口　この間もプールで思わず「わぁー!!　しゃっこい（冷たい）」と出ちゃった（笑）。「押す」ことを「おっぺす」とか言ったりね……。

植松　「さかった（盛んだった）」とかね。

司会　当時の〝遊び〟とか〝娯楽〟について教えてください。

田辺　芝居を見るのが楽しみでしたね。甲州街道のガソリンスタンド奥のスポーツクラブの場所が昔は村の市場で、農家の方がセリ売りをしていたんです。それが私が十五、六歳ごろにはなくなって、その後「梅沢五郎」という一座の芝居小屋がかかったんです。年に一回、一週間くらいの興行でしたが、実家が隣りだったので物珍しさにチョロチョロ見に行ったのをよく覚えています。夜の興行でしたが、三鷹や給田のほうからも人が大勢来てましたね。

清水　私は昌翁寺で見たのを覚えているんです。



浜島光子さん

川口　そのほかに娯楽があまりなかったので、お祭りに行くのも楽しみでしたね。

植松　中学一年の時、糟嶺神社のお祭りに花掛け行ってこいといわれて、あの大坂を下りていったんですよ。ところが帰り道を迷って、狐につままれたのか何だか、至誠会病院のほうまで行っちゃってね（笑）。

田中　祭りは烏山が一番早くて九月二十四日、仙川が九月二十六日、入間が十月十八日、金子が十一月十一日、給田は十一月二十三日でした。

田辺　仙川の祭りは「徳利（とっくり）祭り」といって、八幡様で行われていました。神楽やお芝居が時折はかかっていました。また、八幡様に下りてくる途中の左側の庚申があるところに、昔は太い藤の木があって、弁天様が祀ってあったんですって。

植松　私たちも八幡様にお神楽や「花柳一座」とかのお芝居を見に行きましたよ。その弁天様のところを下りていくと二股になっている先に一本細い道があって、それを上ってくると浜島さんの家の前へ出る道になっていますよね。あれが大昔の旧甲州街道なんですってね。

浜島　知りませんでした。

川口　馬車が一台通るぐらいの道幅だったそうです。

田辺　その弁天様のところに「洗い場」があって、農家の人は畑から摘んできた野菜をそこで洗って市場へ持っていったんですよ。

植松　私が高校一年ごろまであ りましたよ。子どもの時分、十二月になるとそこで障子を張らされてました。

神棚は男衆、お雑煮は女衆が……

田中　ここにお嫁にきたころはきれいな水でね、お米まで洗ったんですよ。

清水　橋から飛び下りて、あそこで私たち泳いだのよね。

植松　昭和二十六、七年ぐらいまで泳いでましたね。

浜島　弁天橋のあたりの桜がきれいだったね。この橋の名前をつけたのは、うちのひいおじいさんだったとか…。

植松　そう。昭和七、八年ごろ、コンクリートの橋になったのよね。

田辺　あの川で小海老をすくって食べたんですよ。

植松　海老ガニもバケツで取ってきて、茹でて食べたね。田んぼが売れてから全部、駄目になっちゃった。

司会　思い出に残る年中行事について、一月から十二月まで順にお話しいただけますか。

川口　お正月は、私の実家ではお雑煮も神棚も男衆が支度しますが、嫁ぎ先では神棚は男衆、お雑煮は私たちが作ることになっているんで驚きました。

田中　私の里でもお正月の三箇日は女の人には一切手を触れさせない。年男を決め、大神宮様へお祝いをあげるんです。三箇日の勤めを無事終えると、そのお祝いを年男にくれたものです。こっちへきたら女の人がお雑煮を作って神様も女でしょ。あら、この家どうしちゃったのかしら……という思いがしました。

植松　うちはいまだに男衆が「若水汲み」をし、神様の上げ下げをやるんです。お雑煮を作るのは私ですが、その前にお父さんを早く起こしてお風呂に入ってもらい、お浄めさせるんです。

田中　あら、えらい!!

川口　うちでは仏様にはお雑煮



川口信子さん

を上げるけれど、大神宮様や荒神様の神棚にはお座りとお明かり、御神酒だけ。だから二日、三日はお明かりと御神酒を取り替えるだけなんです。

司会　どんなお雑煮ですか。

田中　茹でた里芋と大根の入った煮込みのお雑煮です。ダシはかつお節でとります。

清水　うちも同じです。

川口　私はおばあちゃんから受け継いでそのまま作ってますが、前の晩にコブを敷いておくの。そこに里芋と大根を茹でたのを入れ、お醤油味にし、お餅がやわらかくなるまで煮込むんです。お碗に盛った時に茹でた小松菜をのせ、その上からかつお節をかけていただきます。

植松　うちは違うのよ。いわゆるけんちん煮で、おじいちゃんの代からのものなの。里芋、大根、人参それから椎茸も入れ、お醤油味にするの。昔は煮雑煮だったけど、主人の代では焼いてますが。

浜島　うちは田中さんの所と大体同じ。でも、分家でお姑さんがいないから、臨機応変にやっています。

司会　お正月の迎え方にはそれぞれの家の伝統や風習が生き続けているんですね。

植松　一月二十日の「女正月」も楽しみでしたね。お嫁さんが初めて里帰りできる日で、昔はそれまで実家に行けなかったんですね。

川口　二月は「節分」。この日は昔は年越ソバを食べ、魔よけに鰯の頭を豆がらなどに刺し、茹子がらと菊がらを燃やし、「いいこと聞くがら、借金なすがら、畑の虫と田んぼの虫の口焼き申せ」とか言いながらあぶるんだと、うちのお父さんから教わったの。

田中　それを菊の棒に刺し、柊の葉を添えて玄関とか裏口とか入口のある所に飾って流行病が入らないよう魔よけをしたんですね。

植松　三月は三日の「雛祭り」、深大寺の「ダルマ市」があって、それが終ると五月五日の「節供」まで当分楽しみがなかったものね。

　五月の節供に、府中の「暗闇祭り」に行くのが楽しみでね。女や子どもは担いでいかれちゃうというので、昼間しか行かせてもらえなかった。神輿の若い衆が竹の笹ゲラを持ってカチカチ鳴らしながら夜中歩いて帰ってくるんだけど、みんな甲州街道で寝ているんだもの。

清水　私も母親の長襦袢を着てお祭りを見に行きましたよ。

田辺　府中の明神様（大國魂神社）は、ご夫婦でお参りすると妬くんですってね。

植松　あそこは女の神様で、殿様に忘れられちゃって「待つ身は辛い」といって、お正月でも松を飾らないそうですよ。鳥居をご夫婦で渡ってもいけないとか。だから結婚式場があるのは不本意だと年寄りが言ってましたね。

浜島　七月の「盆踊り」も楽しかった。夜中の二時ごろまで遊んでいたものね。

田辺　仙川の盆踊りは最初、村の固い人から反対されてすごく叱られたけど、主人たちが構わず今の昌翁寺でやっちゃったのが始まりだそうです。昭和十八年ごろだったと思います。

植松　昭和二十一、二年ごろには青年団が素人演芸までやったのよね。浜島さんも歌ったんじゃなかった？

浜島　あの当時は臆面もなく「蘇州夜曲」なんか歌っちゃって

仙川の盆踊りは最初、村の固い人から反対されて……



田辺テル子さん

何事についても、女はシャシャリ出ちゃいけなかった



植松好子さん

ね（笑）。青年団に入ったのも私たちが最後じゃないかと……。

植松　そうね。男女、二、三十人いたけど、私たちが高校生ぐらいになると青年団に入る人がいなくなってきたね。

田中　八月は「雨乞い」がありました。大山に行って祈祷してもらい、竹筒に水をいただき、休まずに村まで帰ってきて雨乞いをするんです。途中で休むと、その場所で雨が降ってしまうとか言われて……。これも男の人たちだけで行きました。

植松　何事についても女はシャシャリ出ちゃいけなかったんだものね（笑）。

浜島　昔は古いね。旦那の言う通りだもんね。

川口　それが過ぎると、九月一日に「八朔の節供」がありましたね。私がお嫁にきた当初は、おばあちゃんが「実家へ遊びに行っといで」といってお赤飯をふかして持たせてくれたわ。

田辺　五節供の一つね。三月の雛祭り、五月の節供、七月の七夕の節供、九月の八朔の節供、そして十月ごろにシンジュの節供というのもあったと思う。

田中　九月の十三夜にうちでは、「一升盛りこぼしなし」といって、十五回分にちゃんと分けてお月見団子を作ってました。

清水　あそこの家は廊下に十三夜飾ってある、とかいって皆でよく見に行った覚えがあります。

田中　十月には「恵比須（エビス）講」といって、恵比須様に鯛を供える日がありました。「やせても枯れても鯛だから」とお父さんに言われて買いに行ったものです。

川口　十月の終りに荒神様を出雲へ送る「荒神様のお立ち」がありましたね。



節分の魔除け

田中　荒神様というのはね、毎年出雲大社へ一カ月間お参りに行かれるんです。子どもが三十六人いるので、三十六個のお団子を作って持たせるんです。その間家が心配になるので、お中参りが十五日にあるんです。その時は小豆のご飯を炊きました。

田辺　今でもうちではお団子を作ってやってます。

田中　上糝粉がなかったころはお米を石臼で引いてお団子を作りました。そのお団子は子どもに食べさせちゃいけないと言われているの。髪が生えるからといって。

田辺　女の子が食べると嫁に行けなくなる、と聞いたことがありますが……。

浜島　うちは食べさせてくれたわよ。固くなったのを茹でてお砂糖からめて皆に分けてくれたよ。

植松　私もごちそうになった記憶がある。

田辺　そうですか。それから寒い時期に「オシマチ」という行事があったそうですね。各家から男の人が一人ずつ二十人ぐらいが一軒の家に集まって、自分たちで料理を作って、一晩中寝ないで食べる、といった行事でした。また、

四月十日には、雹が降らないようにと、榛名山へ五穀豊穣の祈願に行ったんだそうです。

川口　農閑期に一軒の家がお宿になって、女だけ集まってお数珠を回す、という仏教に関連した行事も昔はあったそうですね。

司会　各ご家庭でも年中行事は簡略化されつつありますか。

清水　節分の日の豆まきは、前はお父さんが着物に袴姿でやってましたが、今は着ていませんね。

植松　うちでは豆まきを廃止しろ、廃止しろっていわれている。お父さんが留守だと息子にやらせるんだけど、「みっともないことやらせるな」って怒るの。小さい声で豆まきしてる（笑）。それからお正月七日の爪切り正月は残してありますが、七草粥、小豆粥は廃止しました。主人が文句言うのね。「こんな雑炊みたいなもの食べられるか」って。それじゃあ、おばあちゃんが丈夫な時に止してしまおうと、廃止しました。

川口　そうですか。うちの子どもたちは七草粥も小豆粥も大好きですよ。うちでは、初午の稲荷大明神にのぼりを立てていたけど、今はやってない。お雛様の飾りも簡略化してきていますね。

田辺　うちでは毎月一日と十五日には小豆ご飯を炊いて神様に上げてます。そんなことやったっていいことないけど（笑）、でも、主人がやらないと駄目だって言うんですね。

植松　あーら、大変ね。

田辺　お嫁さんに言ってるの、「私がいるうちはやるけど、後はいいのよ」って。

司会　「向う三軒両隣」のお付き合いの方は現在、いかがですか。

植松　今は二、三軒先はもちろん隣ですら、だれが住んでいるのか分からなくなってきました。昔は、隣近所の人が遊びにきたついでに晩ご飯を一緒に食べていったり、お風呂が故障しちゃったから入れさせてほしいとか、日常茶飯事にありましたからね。

川口　お隣りの家でお祝い事があると、お赤飯を炊いて持ってきてくれたりしましたね。

植松　今はもう、よそから越してきた方たちはシャットアウトしちゃって、全然家の中には入れてくれないものね。

清水　よそから引越してきた方たちにとっては、ここは仮の住まい。また、どこへ行くかもわからないから心を開くまい、とする気持ちもおありになるのではないでしょうか。

司会　そうした人間関係の稀薄さは今、親子や夫婦間でも問題となってきていますね。私たちも雑誌づくりへの協力を通して、異文化・異世代が渾然一体となる「快適なまちづくり」を目指し努力していきたいと思っています。

本日は貴重なお話をありがとうございました。

節分の日は、お父さんが着物に袴姿で豆まきを



清水八重子さん

〔註〕**徳利（とっくり）祭りの由来**――八幡神社は、氏子が仙川と北野（三鷹市）に分かれているので、なかなか両村の協議が整わず、神楽や芝居の興行はめったに行われなかった。

いつも九月一日に、役員により協議が行われたが、特別の理由がないと興行は実施されなかった。その代わり八幡様で、お神酒どっくりを並べて酒盛りをした。それが「徳利（とっくり）祭り」の由来である。

多摩新聞

本紙定價……一部三錢五厘郵稅一部五厘郵券代用ノ事
廣告料金……十字詰一行金二十錢 二十字詰一行金三十錢 一寸四方金七圓 一ヶ月三回掲載ノ事
編輯兼發行人 竹内四郎 印刷人 寺田慶太郎

（第三種郵便物認可） 十五號 明治四十二年七月三十日

發行所 多摩新聞社 東京府北多摩郡神代村佐須九百七十七番地
事務所 紙圖寺 東京府北多摩郡神代町字佐須

雜報

○赤痢患者　神代村下仙川六四六小林慎藏（五七）及同人妻竹内だい（二十九）本月廿四日疑似赤痢と決定し同廿五日同村七一三田邊銀藏妻あき（三八）二女はる（三）も同病に罹り隔離病室に收容さる ❶

雜報

神代村の赤痢益々猖獗を極む

目下の狀況は左の如し

○隔離病舍の設備及患者數

下仙川に赤痢發生の報に接するや吏員は直に十數名の人夫を引率して査究を別たず開院の準備をなし先發患者を收容したり然るに檢疫醫及村醫の健康診斷を開始の結果續々患者を發見し病舍の狹隘を告げ直に臨時村會を招集して增築を議決し急遽を決して一棟の建築を終るや即日滿員の狀態となり今や第四回の增築は兩三日前を以て完成し引續き新に事務室及藥局の建築に取係れり去月廿五日以來發生患者は將に五十名に近からんとし猶續發の恐れありと云ム

○警戒區域外に患者を出す

猛烈なる病毒は猶懸き足らずして隣接地入間村に侵入し一方は深大寺方面に新患者を見るに至り實に人心倘々の內にあり

○防疫事務所を設く

右の如くなるを以て神代村役場は取あえず病原地に出張事務所を設け警察署員及衛生組合、豫防委員等と協力して人夫を督し患者竝消毒事務に從事せり何分傳染病なるを以て人夫となるもの至つて少なく東京より人夫を雇入るゝの樣にして發生以來寸暇あき活動に洗石は屈強なる人夫も綿の如く疲勞せるも意氣旺盛の徒あるにより戰場と思へば意とするに足らずと元氣を振ひ居れり又少數なる役場吏員の如きは各種の用務に忙殺せられ殆ど徹宵し居れり特に日頃の訓練により警吏の活動は目醒しき者ありと聞けり

○糧食の杜絕

事務所の炊事方なりし川口方も雇人に患者を出したるを以て一時糧食杜絕したるも種々交涉の結果宍戸金藏なる者引受たるより事なきを得たりと

○病舍の狀況

入院患者の增加に從ひ八王子町多摩產婆看護婦會より熟練の看護婦九名を雇入れ充分患者の看護に勉めつゝあり又醫員は村醫狩野良輔氏及病舍主任醫森崎牟治氏と專心協力して治療せらるゝを以て患者は非常に喜び中にも一家擧げて入院せる齋藤某の如きは病床の上に枯瘦の躰を支ひて萬一不幸茲に命を終るも斯る充分なる治療を受くる上は死すとも恨みなしと感泣し居れり又特志家の內には輕症患者等の無聊を慰安せんとし新聞雜誌の寄贈申出もありとか聞けり時々檢疫醫官郡長警察署長及府都の衛生吏員は巡視して豫防上必要の訓諭を與へつゝあり

○警察官と村吏員

森田署長は增築上に關し慨然をなして村長にせまりし事ありとさなきだに增設を急ぎつゝある村長は一層職工を督して豫定より竣工の早かりしは偏に森田氏の熱誠なる注意の賜なりと其厚意を感謝し居れり是に反し部下警部某は少數なる吏員東奔西走の爲め事務所を豫防委員衛生委員等に托したま〳〵吏員不在なれば直に役場に來りて冷淡呼ばりをなす樣殆ど將校の一兵卒に對する如くなるを以て何等監督權なき此の一少警吏の暴戻の言語に係員の內には痛く憤慨し居る者ありと云へり

○義俠なる大工

此の渦中に在りて能く町村の爲め粉身建築の事に當りし大工小林市之助の盡力には村內一般非常に感賞し居れり

女中並木さんの厚意は我輩感謝する○下仙川の赤痢が烏山へ飛火する、他人の迷惑せぬ樣病の氣あるものはドシ〳〵診察して貰ひなさい、個人個生が大事だ○赤痢にて忙がしいものは役場吏員と巡査とお醫者と看護婦と人足だアお氣を付けなさい感染するとつまらない（物思生）

○赤痢に就て

府中警察の活動と精勵とは實に感謝する殊に森田署長各部長の御熱心には患者も村民も感涙に咽ぶ程難有がり手を合はせん計り（保護生）○千歲村避病院の看護婦早や醜態を耳にす

雜報

○府中警察より發したる警告は左の如し

○衞生上注意事項

過般來東京、橫濱の兩市內及隣接豐多摩郡內に於てペスト病發生し未だ終熄の期に至らず加ふるに南豐多摩郡內に於ては赤痢患者及疑似虎列拉患者を赤本郡下仙川、烏山、及三鷹村に於ては數名の赤痢患者を寥生し益蔓延の勢ひなり而して此等の傳染病は刻下何れも流行季節に屬するを以て之れが豫防制遏に勗むるは勿論一般衞生上特に左項に注意せられんことを望む

一鼠族驅除の目的を以て時々清潔法を施行すること

一捕鼠器を備付け又は猫を飼養すること

一鼷鼠を發見したるときは親りに手を觸れず直に警察官吏に屆出ること

一身體に創傷部あるときは病毒の侵入を防ぐ爲め可成傷部を包帶し置くこと

一飮食物には蒼蠅の集來せざる樣覆蓋を設くること

一飮料水は煮沸して用ゆべし小兒は冷水を好むを以て煮沸後冷却せしめて與ふべし

一雜水も可成清潔なるを擇び汚水は決して用ゆべからず

一不消化物又は腐敗に傾きたる物若くは不熟の菓物並に生の瓜類は食すべからず

一假令消化物と雖も暴食すべからず

一流水に於て飮食物亦は其容器類を洗滌すべからず

一夏期は可成酒宴遊興等の爲集會せざるを可とす

一疫屍を送るときは必ず腹部を冷却せざる樣注意し小兒には腹卷類を爲さしむべし

一腹痛下痢及身體發熱の徵候あるときは假令輕微と雖も直に醫者の手當を乞ひ決して等閑に附すべからず

一寢具は時々日光に晒し着物は常に清潔なるものを用ゆべし

一日常の業務は過勞せざる樣注意すべし

一傳染病患者上廁の疑ひある便所に排便すべからず

一井戶流の汚水溜は井戶側より少くとも三間以上の距離に設くべし

一家屋の內外は常に清潔に掃除すべし

一塵芥溜肥料溜堆肥等は住家より離れたる處に設くべし

一住家周圍の樹木は屋內に日光の射入及び空氣の流通を妨げしめざる樣時々樹枝を伐採すべし

一炎暑の際外出するときは日傘亦は帽を用ゆべし

神代村の赤痢

漸く終熄せんとす

前號に報知したるが如く一時旺盛を極めたる神代村の患者發生も關係吏員の盡力により漸く終熄せんとするに至れり然れども未だ何等發生の虞なしとせず故に豫防事務所は閉鎖の運に至らず必要の屋員を置けり去る十三日は警視廳第三部の檢疫醫石崎仲三郎氏及內田下仙川衛生組合長市橋巡査等の一隊にて病源地全部の大清潔及健康診斷を行ひたり又病舍に收容したる患者の經過頗る良好にして去十四日は小林儀三外三名の全治者を見るに至り殘引續き全治者あるを以て入院者も非常に減じ殊に小林等頭の退院者は手の舞足の蹈む處を知らざる者の如し

主治醫森崎牟治氏は去る十二日を以て職を辭し更に東京市役所衛生課に永く勤務せられたる醫學得業士加登信太郎氏を聘し氏は村醫狩野良輔氏と專心治療に從事せられ居るを以て患者は歡喜し居れりと右の如くなるに依り本月中には大部の退院者を見るに至る可く初發以來の患者數は四十七名（外に一名ありしも自費明治病院に入りしにより數に入れず）にして內死亡者六人なり

下仙川竹內ダイ、小林儀三、田邊アキ、死亡
田邊ハル、齋藤良助、死亡高橋フヂ、鈴木タキ、齋藤キン、死亡強島モヨ、良助長男齋藤喜一、松本マス、田邊重藏、齋藤ヲウ、同マス
深大寺富澤マツ、同フミ、下仙川死亡小橋嘉吉、同末吉、新井キヨ、倉田マサ、同喜之助、同金太郎、倉田ツン、同三之丞、田邊秦一、濱島ミヨ、深大寺死亡田村鶴一、下仙川田邊ツヂ、倉田コウ、鈴木ヤヲ、倉田マキ、上原ウラ
深大寺相田ムラ、入間近藤八十八、下仙川川崎百太郎、上原ヨコ、入間近藤つぎ、下仙川田邊ルイ、入間藤橋ダイ、下仙川田邊幸吉、入間藤四郎次、死亡近藤チヨ、深大寺相田萬五郎、相田サダ、入間狩羽シズ、下仙川田中セイ、倉田喜三郎
○町の同情　調布町長同戶田校長砂川村長の諸氏は何れも丁重なる見舞狀を神代村に送られたりと

今回以上三ヶ村赤痢患者發生には府中署及本廳北多摩郡役所等よりは係員の出張滯在され連日の炎天をも省みず晝夜寢食を忘れて豫防消毒設備等各職務に盡瘁せられ各村共遺憾なき設備をなしたるは關係諸員の力大なりと村內一般に感謝し居れり

○多摩百面相（投書大歡迎）

○赤痢が下火で安心致した、村費位は何でもない今年は豐作じや秋になればウント儲ませふよ（神代山人）　○赤痢避病院收容に就て色々と苦情を耳にす檢査醫の屢〻誤診もあるやよだ警官の手心も嚴に過ぎるとの評判だ兎に角風聲鶴唳の有樣が見へる寬嚴の程が六ケしいが實際回癒のものは早く出院させて下さい（夏村翁）

雜報

○赤痢患者　神代村避病院に於ける患者は初發より五拾餘名を算せしが看護と手當の行屆きたる爲め死者僅かに七名に過ぎず昨今に至り追々と退院の模樣あり

○多摩百面相（投書大歡迎）

○郡內は赤痢の爲め火の消へた樣だ靑年若衆さへ他出を警戒し調布町の素見連も少なくあつた困るものは妾達だア（娼妓某）神代村は進化が劇しい、新聞屋が出來るハイカラが出る才士濟をだが赤痢の多發には降參するが（村の小僧）○府中署長樣初め郡役所の本多樣村役場の御一同樣流行病に就ての御奔走御苦勞只管感謝仕候

○佐須の藥師樣の御蔭にて村內一人も赤痢がない靈顯恐れ入る

雜報

赤痢患者後報

○神代村

其後全治續出し本號〆切當時調査の收容患者は三十名なりしも月末迄には十名內外に減ずる可し是斯の如き好成績を得たるは主任醫加登信太郎氏及狩野村醫看護婦等誠心勉勵の致す處特に加登氏の如き其職務に熱心なる筆紙に盡し難き程なりと云ふ

○市橋渡邊兩巡査の奮勵

市橋氏は病源地方面を田原檢疫醫と時々健康診斷を行ひ又一面には清潔持續に勉め患家は拭ふたるが如く行屆き特に道路若くは家屋を掩ひたる枝葉を伐採しめ空氣の流通を計る等其注意の周到なる只管感服の外なし渡邊氏も患家の清潔法は遺憾なく執行せり而して兩氏共炎暑燒くが如きも係はらず每日管內を巡回して未然に防禦するに勉めつゝあり

右の如くなるを以て現今の處後發の患者全くなしと云ふ

○千歲村

仝村も前號所載後一、二名の患者ありしも其後全く跡を絶ち〆切當時の收容患者數は十一名なりしも月を出ずして大半全治の見込なりと是即ち此の恐るゝ可き傳染病を撲滅がない靈顯恐れ入る

○神代村

其後全治續出し本號〆切當時調査の收容患者は三十名なりしも月末迄には十名內外に減ずる可し是斯の如き好成績を得たるは主任醫加登信太郎氏及狩野村醫看護婦等誠心勉勵の致す處特に加登氏の如き其職務に熱心なる筆紙に盡し難き程なりと云ふ

○市橋渡邊兩巡査の奮勵

市橋氏は病源地方面を田原檢疫醫と時々健康診斷を行ひ又一面には清潔持續に勉め患家は拭ふたるが如く行屆き特に道路若くは家屋を掩ひたる枝葉を伐採しめ空氣の流通を計る等其注意の周到なる只管感服の外なし渡邊氏も患家の清潔法は遺憾なく執行せり而して兩氏共炎暑燒くが如きも係はらず每日管內を巡回して未然に防禦するに勉めつゝあり

右の如くなるを以て現今の處後發の患者全くなしと云ふ

○千歲村

仝村も前號所載後一、二名の患者ありしも其後全く跡を絶ち〆切當時の收容患者數は十一名なりしも月を出ずして大半全治の見込なりと是即ち此の恐るゝ可き傳染病を撲滅して町村に酬んと盼身治療に盡瘁せられたる主治醫重父江龍三郎氏及佐野醫師の勳勞ある賜ありとは吾人は聞くだに兩氏に向つて多大の敬意と感謝とを拂はざるを得ず村內全般の清潔行屆き又檢疫的戶口調査は間斷なく行はれ居るを以て目下の處後發患者の恐れなしと

○三鷹村

其後上連雀、井口新田方面に續發したる爲め發以來の患者總數は二十六名に上れりと雖村長及關係官公吏の晝夜衆行方遲に盡瘁せられたるの結果漸く〻後發患者を絶んとせり然れ共上連雀方面は兎角隣境の傾きあり何時患者を出すの恐れしも計り難く是には流石の村長始め係員も殆ど困じ居れり故に警戒一層怠りなく收容患者は主治醫狩野良輔氏の懇切の治療により多く退院者を出し〆切當時の現在數は十七名なりしも神代千歲と仝樣月末迄には大半全治退院の運に至る可しと

○東京府技師及內務屬の巡視

本府技師齋藤利一內務屬津原金太郎の兩氏は北多摩郡書記渡邊章本多仲層二氏の案內にて去る二十日三ケ村病舍狀況視察として巡視せられたり因に每々ながら府中署員の熱心盡力は只管感服の外なし

○村長の相互慰問

三ケ村長は相互に閑を得て慰問しつゝありと是等は隣村の友情としてある可きことなるか將た自治體の美風と云ふ可し

○赤痢患者續報　其後に於ける本郡赤痢患者數は神代村二十名三鷹村十五名千歲村九名中藤村三名にして各村共終熄の期に向ひつゝあり然るに神代村は又々去る四日深大寺字山町渡邊留吉長男定次郎發病しその後を以て警戒をさ〳〵怠りなし

○篤志家の同情　山形市三戶町一八八番戶井田伊之吉氏は特効藥水飴を神代村に寄贈に付仝村長は丁重なる禮狀を送られたり

雜報

○隔離病舍の閉鎖

北多摩郡に於ける赤痢病今や全く終熄し既報の如く中藤村は既に閉鎖し千歲村九月廿六日三鷹村本月三日神代村は去る七日病舍を閉鎖したり

……ころばぬ先の杖……

●元祖細川の靈腎者領拾世前田氏方剤

商標 平胃

清涼健胃本年の季候に最も的中藥は平胃なり食傷の後は胃弱の人に取付まし消化不良赤痢コレラは胃腸カゼ兒も貧家へは無料す御用心なさいまし

●極めて平民主義廉價販賣●試用郵券貳錢送れば無代進呈

言行一致能書無僞

本舖 東京府北多摩郡狹山村一三四 前田仁壽堂

一日分 五錢　十日分 叁拾五錢　壹ヶ月分 壹圓

水に挽し攪拌して服用すれば後ケ兒

明治42年	多摩新聞より発行の日数
（掲載号）	（日）
①第115号	7月30日
②第116号	8月10日
③第117号	8月20日
④第118号	8月30日
⑤第119号	9月10日
⑥第211号	9月30日
⑦第222号	10月10日

聖教新聞
仙川販売店
岡村英夫

仙川町２－11－23　　☎ 3307-7343

楽しい　お店で，夜の
ひとときを！

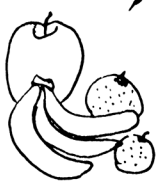


食べ処・飲み処
れすとる
☎3300-8111
芝信用金庫前

ハクビ京都きもの学院
仙川教室

生徒募集中！（トーマツボール内）
毎週木曜日　10：00～12：00　14：00～16：00
夜の部／18：30～20：30
入学金　3090円　受業料　4120円
維持費　（３ケ月分）1545円
☎（3309）5014

お気軽にご相談下さい
むさしや質店
仙川駅前森の中　☎3300-6348

フルーツショップ

しみずや
仙川駅前　☎3308-5177

日本テレビ・週刊文春にて紹介されました
味の店
とんかつ仙川
各種宴会40名様迄御相談下さい
仙川駅前東国書林横　☎3309-0144

ティールーム
チャティー・ず　う
落ちついた雰囲気のティールームで、憩いのひとときを…
仙川商店街入口（西友前）☎3308－9278

BOUTIQUE
QUEEN
仙川商店街（西友前）　☎3308-3819

ボクにも　キミにもできる

リビット
山田屋金物店
西友ストア前
☎3300-4407

パーマをかけるたびに健康毛になるバイオパーマ
着付，アップ，美顔術，メーク
山野愛子山の実会
堀内多賀子美容室
営業AM9：30～PM6：30まで受付
火曜日定休，第３火水曜日休み
予約優先　東光電気２Ｆ　☎3309-0676

与えられた美ではない創りだしていく美しさを
なりゆきまかせの人生からすばらしいふれあいの生を
——ファッションをとおして
そんなことができないか、
と願っております。

調布市仙川町1-12-1　TEL 3308-7264

ázi
FASHION
LIVE SPACE

お電話下さい。



●室内装飾専門店●

フェリカインテリア

●内装工事
クロス（壁紙）張り替え、ジュータン、クッションフロアー、パンチ等の敷込み、カーテン、ブラインド、アコーディオンカーテンの取付け。

調布市仙川町1-10-4
第2伊藤ビル1F　☎ 03-3305-0028

よしきりの宿駱がせく通り雨（一穂）

うどんをすすって、おはこ食べてあったかーい！

甘み処
よしきり

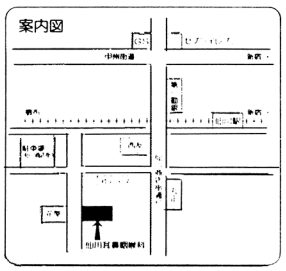
仙川町1-16　3300・8481

診療時間
平日　午前10時〜12時30分
　　午後2時30分〜7時
土曜日　午前10時〜午後1時
日曜日・祭日・木曜午前中休診



仙川耳鼻咽喉科

仙川町1-12-46 根岸ビル2F　☎ 5313-3281

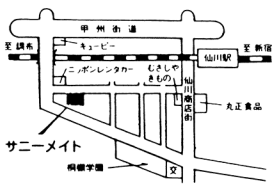


サンドイッチとお食事の店



グリル
サニーメイト
Sunny Mate

仙川町1丁目3番2号　☎ 3326-0252



魚貝料理と釜めし

なみはな

AM11:30～PM2:00（ランチタイム）

仙川町 1-4-28　☎3307-9854

Boutique CHEVAL シュバル

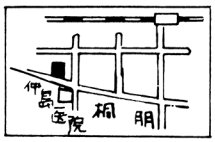


仙川町1-4-24

Tel 3326-8323

総合内装

やさま畳店



仙川町１－３－38　☎3300-2360

吉川屋 BOUTIQUE

仙川町１－10　第２伊藤ビル　☎3305-0838

画材・額縁

mottet

お蔭様で20周年を迎えました。

仙川町 1-9-61　☎3300-8287

伝統の味・ふるさとの味　手打そば処

家族庵

営業時間　11：00～21：00　火曜定休

桐朋学園通り　☎3326-9456

カットサロン

たけし

完全予約制　厚生省公認毛髪診断士

仙川駅徒歩２分　桐朋学園通り　☎5384-6274

Anchor Here

AND

COIL UP YOUR ROPES

SINCE 1977

ICHIKAWA BLDG. 1F

1-12 SENKAWA-CHO CHOFU-SHI TOKYO

TEL (03)3307－2611

遊んでいる本は有効に生かしましょう

古書

訪文堂書店

桐朋学園通り　☎3308-6455

小劇場／貸ホール

スペース・仙川

仙川町 1-12（桐朋学園通り）　☎3307-8044

くらし点描 1

昔語り——明治・大正・昭和の仙川界隈

川原イト

民協会報23号
昭和57年７月



大正13年頃の緑ケ丘弁天橋附近

写真提供▷川原武次氏

生まれも仙川で、三代に仕えた関係上、これから触れる話題は仙川のことをご存じない方のために書いてみました。

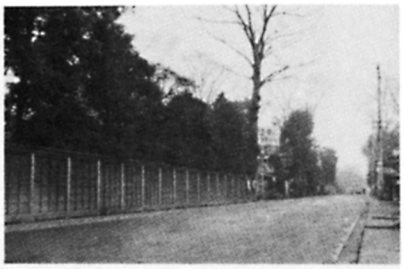
明治十二年頃、神奈川県北多摩郡下仙川村であったこの地は農業、養蚕地であり、米穀、雑穀類を主とし、サツマイモ、ジャガイモ、豆類や藍染に使う藍葉などを作り、東京方面（京橋、日本橋、築地）へ手車から牛車に変わりながらも出荷し、帰りは汲取をして肥料としていました。農作物の違いはありましたが、戦前位までそういう状態が続けられていました。

全くの高台の平担地で給田の坂を上ると、甲州街道に出ます。そのころの甲州街道は道巾十メートル位の砂利道、水溜り道でした。両側は大木が茂り、ウッソウと緑のトンネルをなしている中に、六十世帯位の家並が所々にありました。南北一帯障害物もなく、田畑、雑木林、雑地等で夜道は真暗で歩けませんでした。風向きで、烏山の粉屋のカッタン、カッタンという粉ひきの音や、吉祥寺方面、多摩川向こうの鐘の音等で、その日の農作業の段どりをしたと聞きます。

北方、仙川は流れが勢いよく、清かったので、現在の桜金属の所に水車小屋があり、精米、精麦、製粉の作業が行なわれていました。川には共同の洗い場がつくられ、野菜を牛車で沢山運んできて洗ったり、餅つきには米磨き。夏にはこどもの水泳も昭和三十年頃までできたものです。

白百合女子大学の所は、昔の城跡で古墳もあり、最近まで出土器等もありました。そのあたりは昔は乞食の巣になり、野火葬場もあったと聞いています。大正の初め頃、津村薬草園より帝国石油の土地となり、今は武蔵野の面影を残した立派な大学となっています。三五年頃には、心残りの青田が当時の価格で坪一万円位で、緑ケ丘団地として消えてしまいました。

仙川の中心は仙川駅入口十字路付近で、そこには日本橋よりの道標〝一里塚〟（現在は史蹟として石が建てられている）がありました。其の辺を塚と呼び、昭和の中頃まで〝塚〟の屋号のタバコ・駄菓子屋がありました。





上　昭和31年　甲州街道
下　同　仙川交差路（現Gスタンド）



昭和８年９月の八幡神社祭礼

今の小田急スタンドの所に大きな木の並木道がカギの手に茂り、大地主の商家があり、数十人の人を使って、米穀、肥料、材木の売買をし、土蔵も五、六戸あったそうです。この娘さんは、矢絣に袴、リボン姿で、上布に小豆入りのお手玉、ゴム毬で遊び、人力車も使用するなど、人目にも羨やましい限りであったと……。

私の母などは紺の木綿縞の着物で、小石を入れたお手玉、里芋穀を丸め、糸でくくった弾まない毬で悲しかったと言ってました。しかし袴は買えないが、学問だけはとの両親の考えで、学校にはよく行かせてもらえて有難かったと語り草として聞いています。

明治二六、七年頃、この家のご主人が稲妻強盗に日本刀で殺害されるという一大事件がありました。

現在は勾配の少なくなった滝坂は当時非常に急であり、滝坂上には馬宿があり行商人の宿場でもありました。多摩川の向う岸より東京方面へ牛馬車や荷車で往復する時は、車は登れず、家族の者が後押しに行き、やっと上がったものです。又帰る時は荷車を引きずりおろし、その休み場でもあったことは記憶にあります。その後、段々と切り崩されてはきましたが、やはり急坂であり、こどもの頃、梨売りの車の後押しをして、もらって食べた〝梨の味〟は今でも忘れられません。震災時に滝坂がまた切り崩され、その土をトロッコで滝坂下まで運んで、やっと甲州街道滝坂に新道が完成しました。

昭和の初め建築家の設計による、ちょっと見られない立派な木造の優雅な屋敷ができ（田舎の旧屋敷を移籍した）、甲州街道の名物とまでいわれました。しかし、次から次へと人手に渡り、三十年頃、京王雅苑ができました。結婚式場のはしりとなり、仙川近辺の人はここで挙式する人も多かったようです。つぶれ屋敷跡のため、何をしても続かないとよくいわれましたが、現在はマツダ・トーマツボールとして栄えています。

●

昔の人は、実直、品行方正、実行力もあり、団結力もさることながら親切でもありました。明治の頃、夜学へ行く青年が箒、ゴミ取りを持参し、夜学の帰り道、馬糞を集め肥料のたしにしたとも聞きました。青年たちは桑や梅などを植え、団費を集め、材木をみんなで持ちよって公会堂を造りました。そこで、講習会や農業改善の勉強をし、視察等を行ないながら農業の振興をはかりました。

昭和の初め頃、昌翁寺では、夜学へ通っている学生が、住職の榎本晃道先生を中心に、近所の子供達を集めて寺子屋を開き、読み書きを教えていたそうです。

青年団員は脱穀機を購入し、農家を廻り、脱穀の手伝いをしたものです。ある一人の青年が行きずりの老女を背負い隣村まで連れていったという美談もあります。

当時は娯楽は殆んどなく、村祭り、廻り芝居、青年団親睦会、運動会、などが唯一のたのしみでした。

そのなかで〝オシマチ〟があります。この時は、男衆がご馳走をつくり、くじ引きで五、六人が榛名山へ五穀豊穣の祈願に地下足袋、草履、着物姿で代参に行きました。これも昭和の初め頃には、いつのまにか消えてしまいました。

旱魃の折、大山へお水を貰いに行き、仙川において、裸で雨乞いをしたことも思い出になりました。お湿りがあると隣から隣へといい伝えられ、お湿り正月といって半日位休みました。この時は白米の飯に少々おごった惣菜が並んだものです。

女性は良く姑につかえ、家族制度をこわすような事は絶対にありませんでした。我慢強く朝早くから夜おそくまで働き、慰安など殆んどなく、蚕があがって農作業が一段らくすると、三日正月があります。この時は饅頭やそばなどのご馳走を作ってたべました。

お嫁さんにとっては、一年中で一番楽しい里帰りの時でもありました。私も、少しは味わった経験があります。普段は木綿縞紺絣の長着に小巾帯、タスキがけに尻はしょり、手ぬぐいをかぶるというスタイルで……今考えてみると、よく作業ができたと感心してしまいます。農作物代金等は蓄えて、土地の購入資金にすることが多かったようです。

京王線開通と戦後の農地改革により一大発展期を迎えました。参考までに仙川駅の経過を記してみます。

中央線がこの辺を走るという計画で測量をした時、農作物、蚕の桑等の被害があると、測量を妨害したそうです。その後、明治四一年に京王電軌が電車事業を始め(坪一円)、大正末期平坦地を現在の地形に切り下げ(坪十円)、昭和三一年、駅前広場として、坪九千円で買収されたと、父の書に記されています。

大正二年京王線が開通した当時は、見渡す限りの平野畑で、駅は第一勧銀前タバコ屋の所の平担地にありました。単線で、金子駅や烏山駅からは急勾配のため、乗客が下りて電車の後押しをしたという笑話しものこっています。

その頃、駅近くの家に五燭の電灯が、一軒一個灯され、家族中で電気の囲りに集まり、夜なべ仕事や団らんをしたということも、よく話題として聞かされました。

現在の駅西側の陸橋は都道ですが、当時はそこに改札口があり、人力車、小さな食堂、駄物売場もあり、商店街の道には殆んど家はなく、震災後、東京の金持により大きく買い求められ、現在の商店街の基となりました。

昭和十五年、海軍将校が来て、軍人子弟の学校にと、約七千坪ぐらいの畑を、坪十七円で買収され、山水高女(現、桐朋学園)ができました。当時百円札で支払われたので、お金の勘定がたいへんであったそうです。

続いて、府立第十五高等女学校(現、神代高校)や大工場等ができ、急激に人口も増加し、現在一日平均四万人が乗降し、全線中、九位を占めるほどになっています。

今では商店街も盛況で、調布市でもきわだっており、商店街の後継者が中心になり、夏の仙川名物のあわ踊りも、年毎ににぎやかになっていることも皆さんご承知の通りです。

このように昔を知る人も段々と消え去られ、古いしきたりや年中行事も少なくなりましたが、今後も少しでも多く、仙川の昔を語り留めたいものです。武蔵野の面影も少なくなり、にぎやかな仙川になりましたが、昔を回顧して、なつかしく偲ばれることが度々です。

民生委員委嘱以来十五年の年月を振り返って、何か地域社会のために活動できたかと疑問をいだきます。残り少ない年月を悔いのないよう頑張り、有意義な思い出を少しでも多く残したいと思います。

九十四歳で天命を全うした母は、不平不満は絶対にいわない立派な人生を送られました。母の教訓を重んじ、これを参考にして、特に老人福祉活動に協力するつもりでおります。

編集部(民協会報)より第一地区として、仙川の昔をとの注文がありました。歴史等、学問的な事は学者先生におまかせして、私は大正生まれですが、明治、大正を昔と考え、仙川に住む人々の実生活の一部をしたためました。

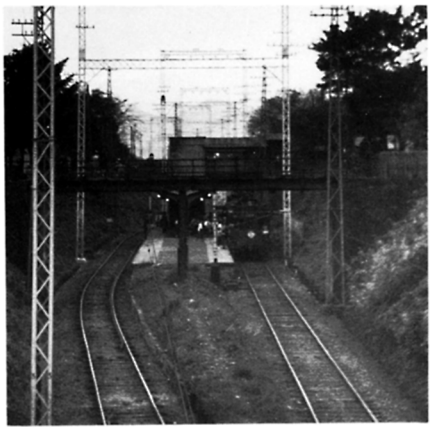
(仙川三丁目)

くらし点描2

ランプから電灯へ田辺喜勝

――大正三年京王線の敷設と共に――

本誌9号所収
昭和59年3月





昭和20年頃の仙川駅(上)と
甲州街道(右)、田辺さん撮影

文明開化の波が、大正二年頃からこの〈せんがわ〉の地にも急速に押し寄せ、電気の供給、道路整備、橋の建設などが、当時の村びとたちの尽力によって次々と着工されていきました。

電燈が灯された日

新宿―八王子間の電車の運行、沿線一帯の電気の供給、多摩川の砂利を都心へ、との目的で、京王電気軌道株式会社が明治四三年九月に設立されたと聞いております。

大正二年四月十五日、京王電車が笹塚―調布間に開通し、同年六月に電気の供給が始められてからちょうど七十年になりました。

当時の照明は明治十一年頃、以前より使用されてきた行燈に代りゴマ油用のランプができ、それより四、五年後には石油ランプに改良されていた。この近在では、現金収入の多い養蚕が盛んに行なわれていたので、吊りランプが殊のほか重宝がられ、急速に広まっていったようです。

電燈が灯る様になると、「夕方は必要な時間がくれば点灯し、朝になれば自然に消灯する」という極めて便利なこと、ランプ掃除もいらないという事で歓迎されたが、ランプの石油代からするとだいぶ割高になるので、普通の家庭では一戸一燈位がせいぜいで、それも最低五燭光の契約が多かったと聞いています。

電燈と石油ランプの併用によりその後案外伸びなやみ、関東大震災の発生により、より安全な電燈に代えるものが多くなり、燭光もアップして電気需要も一段と伸びを見せ始めました。それでも電燈が調布一円で百%の利用状況になったのは、昭和十年頃であったといいます。

昭和十年代になり会社の方針としてか、利用希望者にはメートル器を取り付け、一戸につき五灯―七灯の設備をすれば一燈一燈の燭光契約でなく、使用量による契約に変更し、利用者には京王閣遊園地（現在の京王閣競輪場）の優待券を何枚かサービスとしてつけた様な事もありました（五灯の場合は五キロワットマデ、七灯は七キロワットマデが基本料金）。



電燈料金の契約表（大正四年四月発表）

種別 / 燭光別	室内燈 一燈月額	外燈 一燈月額
五燭光	金五拾五銭	金四拾五銭
拾燭光	金七拾五銭	金七拾銭
拾六燭光	金九拾五銭	金九拾銭
弐拾四燭光	金壱圓参拾五銭	金壱圓弐拾五銭
参拾弐燭光	金壱圓八拾銭	金壱圓七拾銭

電球は御使用三ケ月以内に断炭の節は補償として一個金弐拾銭可申受三ケ月以後の断炭は無償御取替可申候

〔電燈の種別〕

一、電燈は当分の内白熱燈のみとし左の区別により御申込に応じ申候

定額燈　将来御継続の目的を以て御使用の長短に抱わらず月極の料金を申し受くるもの

臨時燈　或る期間又は臨時に取付日数を限り御使用のもの

一、電燈は日没より日の出まで年中毎夜送電致候

但雨天、曇天の日は送電時間も適宜延長可仕候

村役の代表者たちの活躍

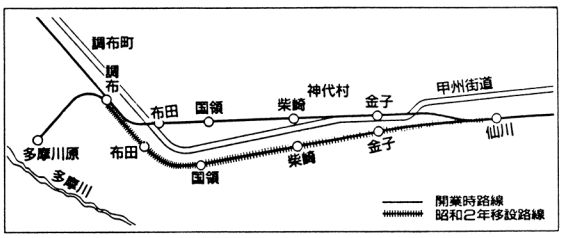
大正の始まり頃、ここに文明開化の波が押し寄せ、道路整備等についても時の政府のテコ入れもあり、甲州街道の難所とされていた滝坂も、世田谷街道の起点辺りより下は新道に、新宿寄りは堀削され、世田谷街道も東寄りにつけかえられました。この工事とほぼ前後して京王線の路線変更工事が始まりました。仙川のキューピー工場の南東角辺にある七号橋（当時はなかった）より布田駅辺りまででした。

仙川地区は現在でわかる様に開溝地下式です。仙川の農家は、甲州街道の両側に一定の間口を持ち（大体二十四間、十二間の二通りになっています）、地つづきに畑は南北にのびていますので、京王線が南側を横切ったため、当然畑の往き帰りには軌道を横切らなければなりません。今まで何んの障害もなかったので、適当な場所に横断路つけていたようです。

しかし堀削になると当然、橋が必要になってきますが、なかなか会社側でよしという返事が得られず、当時の村役の代表者たちが接渉し、だいぶ難航したがようやく両側に道路をつけ、橋をつける事になったといわれています。

長いものには巻かれろ式の時代に……と、今日になってその労苦に感謝の気持を利用者共々送りたいと思います。

（仙川二丁目）



仙川・調布間新旧路線図

大正	2	笹塚一調布（4月15日）・電車の補助機関として新宿一笹塚間・調布一国分寺間乗合自動車営業開始
	4	新宿三丁目まで開通（5月30日）
	5	調布一多摩川原（現京王多摩川）（6月1日）
		調布一飛田給（9月1日）
		飛田給一府中が開通し新宿一府中間全通（10月31日）
	9	新宿一調布間複線化（6月15日）
	11	玉南電気鉄道を設立し、府中一八王子間を再出願
	12	調布一府中間複線化（5月1日）
	13	調布一多摩川原間複線化（4月1日）
	14	玉南電鉄　府中一八王子（3月24日）
	15	京王電気軌道と玉南電鉄合併（12月1日）
		新宿一八王子間の連絡輸送開始（12月4日）
昭和	3	統一軌道による直通運転開始（5月22日）
	6	御陵線　北野一御陵前（3月20日）
	13	武蔵中央電気鉄道の八王子一高尾山麓間買収（6月1日）
	14	八王子一高尾山麓間営業休止（6月30日）
	19	陸上交通事業法により東京急行電鉄と合併（5月3日）
	20	御陵線休止（1月21日）
	23	東京急行電鉄より独立し、京王帝都電鉄設立

京王電気軌道の開通区間等

くらし点描3

大正―戦前の仙川生活点描

伊藤綽彦

本誌3号所収
昭和54年1月



仙川商店街航空写真（昭和22年9月撮影）

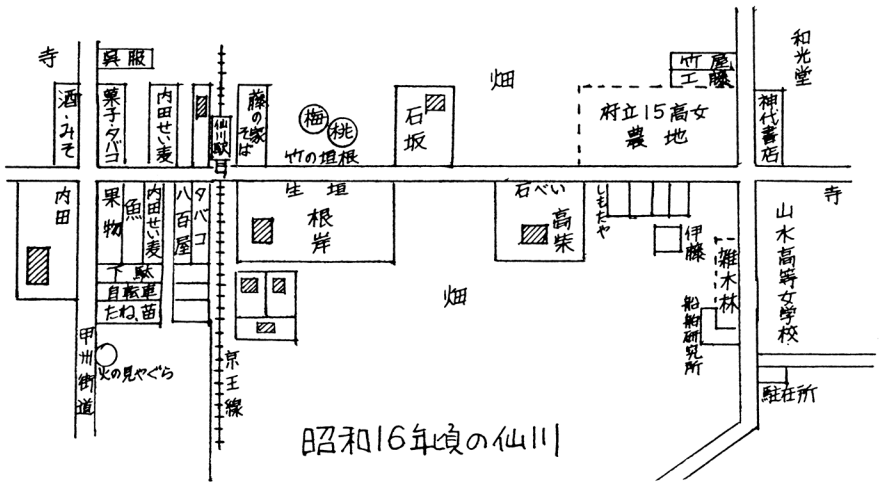
仙川駅は大正二年四月十五日、下仙川駅として開業、六年に仙川駅と改められた。駅の北方、三鷹市新川の勝淵神社近くの湧水池から流れる、仙川を名としたのである。開通といっても笹塚―調布間で単線、定員四十四人乗り、車体の長さ八メートルのポール式木製四輪車が、全線で六輛しか走っていなかった。電灯線が布設され、人家に灯がともされたのは翌年のこと。辺り一面真の闇だから、電車のスパークは稲妻のように光った。

京王線開通前の交通機関は、乗合馬車と人力車だった。甲州街道上をラッパをならしながら、乗合馬車が四谷大木戸と八王子間を往来していた。六、七人乗り、午前、午後各二回の運行で、ガタクリ馬車ともよばれ、郵便物も運んでいた。

仙川商店街の店舗第一号は、甲州街道に面した角のつか（今の丸商不動産の所）だった。初めは居酒屋、後にタバコ、菓子、収入印紙などを販売した店である。滝坂下の万屋、給田の米（よね）店（雑貨、灯油、よしずなど販売）と共に、明治の終りころの、この辺りの数少ない商店の一つであった。つかというのは、ここに一里塚があったことに由来する。大正の初め、つかと並んで今の斉藤鍋屋が、げたの製造販売をしていた。現在地で酒類販売を始めたのは、十年ころのことだ。成城、三鷹方面からも、客がきている。駅のそばの鈴木タバコ店は、京王線開通と同時に開店している。駅舎は垣根の前にあった。駅は初め谷間にはなく、道路と同じ面にあった。烏山から仙川の高台を上りつめた所にあり、電車は金子（今のつつじヶ丘駅で甲州街道上にあった）へ急坂を下って行っていた。このころの人々はどこへ行くにも歩くことが多く、現金収入の乏しい農家では、特別の時以外京王線の利用はしなかった。八王子まで開通していなかったので、高尾山遠足の滝坂小学校の生徒は吉祥寺まで歩いて中央線に乗った。

大正六、七年ころ、駅の北、甲州街道へ出るまでの道の両側には、西側に鈴木タバコ、松田屋（小料理）、製材所、武蔵屋（呉服）、角が二階家の貸家、東側にはまゆ買い入れ所とつかがあった。

まゆ買い入れ所は、今の第一勧銀の地にあった。養蚕は、日露戦争のころから大正年間にかけて盛んだった。初夏、農家の庭先にわらが広げられ、まゆかきが行なわれた。若葉幼稚園経営の永野家には、蚕室という二階家が残っている。蚕が上がるころ、まゆ商人がたくさん集まり取引きが行なわれた。買い入れ所の建物は、内部は柱がなく広々としていたので、芝居、浪曲、落語などの興行が



かかった。藍の栽培も盛んで、紺色木綿の染料となった。夜明け方のまだ暗い中を、東京市内に下肥を取りに行くため、農民が肥桶をつんだ牛車をひいて、甲州街道を通っていたのも、大正年間が盛んだった。稲城方面のなしや炭をつんだ車が滝坂を上がらず、子供が押す風景もあった。

一方、駅の南に、藤の家そば店ができたのは大正五年のことである。西友の地には根岸家ができ、四谷から土、日曜ごとに、子供たちが遊びに来ていた。今の実篤公園の管理事務所わきの広場辺りにあった、皇大神宮の御祭りが盛大に行なわれたのは、五年のことだった。今、社殿は公園入口左の小道の傍に移されているが、そこには、明治十九年奉納と彫られた手水鉢がある。この皇大神宮から南東にかけて、桜の並木に囲まれたかやの原っぱが広がっていた。祭りの日には、仙川駅折り返しの臨時電車がたくさんの人を運び、原っぱは神楽、芝居、露店でにぎわった。この原っぱで、神代村青年団は秋の運動会を催し、兵隊は馬と共に露営などの訓練をした。実篤公園の池は今と変りなく子供たちは沢がにを取り、夏には水泳をした。滝坂青年団は、ここでわさびを栽培した。前は湿田で、小鷺がまい下りていた。

新宿―府中間の開業は大正五年、複線化は十二年、東八王子まで直通運転されたのは昭和三年。仙川駅が今のように切通しの谷間にでき、駅舎が橋の上、今の星和書店の所にできたのが昭和二年。三年に、桐朋の隣りに並ぶ西照寺などの浄土真宗六カ寺が、築地の小田原橋から移ってきた。関東大震災後の、区画整理のためである。震災後の郊外への人口の移動は、堤を切った流れのように激しかった。この西照寺の池にいたちが水を飲みにきたり、丸正食品から斉藤食料品店にかけてあった松林で、きのこがとれたりした。陸地測量の石坂家は、高台で地震に強くきれいな地下水をえられる地として、ここを選んだ。かやの原っぱ一帯では、中島家が養鶏、養豚を始めている。

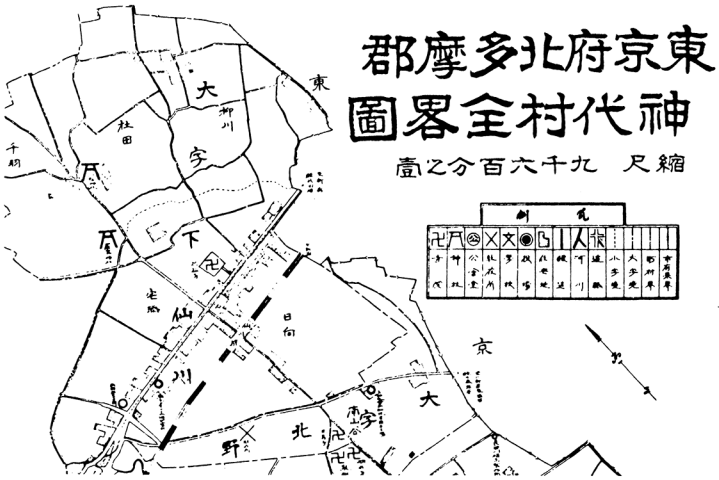
至誠会第二病院は昭和四年、和光堂は七年、府立十五高等女学校（今の神代高校）は十五年にできた。山水高等女学校（今の桐朋）が、九段から移ってきたのは十六年九月。駅から視野に入るものは、一面のトマト、なすの畑ばかりだった。「駅から学校までの道の両側がほとんど畑で、駅前に藤の家と向かいの根岸さん、中ほどに石坂さんと高柴さん。高柴さんは大谷石の塀をめぐらした立派な家で、なにか鳥の彫刻をした門の扉が、ひどく厳しい感じだった。その隣りに草ぶきの農家、四つ角に神代書店と、そのぐらいしか家がなかったのではなかろうか。ひっそりした感じの生垣道だった。学校の前は生垣はなく、正門の辺りから西は、低い雑木の生えたやぶになっていた。そのやぶが、道路にそって五、六メートルの幅で続いていて、肥だめがあった。」と、職員が記録する。空襲激化につれ、実篤公園裏の高台に高射砲陣地ができた。高度一万二千メートルのB元に損害をあたえることはできず、落下する砲弾の破片で危険だった。

（急ぎ足に戦前の仙川商店街メインストリートと付近の風景を点描してきた。聞書に快く応じてくださった多くの方々にお礼を申しあげます。）

くらし点描 4

大正末ー昭和初めの下仙川物語

浜島寛





私が物心ついた大正の末から昭和初めにかけての仙川町は、物語等に見る農村の光景と全く変わりなく、特長としてあげれば、私たちの字（むら）は当時、北多摩郡神代村字下仙川と称し、地名に〈川〉がつくにも関わらず「高台」だという事でしょうか。従って周囲どちらを向いても名のある坂を有し、下れば田が多く、沢が各所に点在していました。そして「仙川」と称する川も、沢というか湧水というか、上仙川（新川町）の丸池周辺を源とし、中仙川（中原町）の北側を流れ、そして下仙川（仙川町）の田んぼを潤し、給田、大蔵を経て多摩川へ落ちる訳ですが、その間、幾多里人等の生態（いきざま）をその清らかな水に写し湛えた事と思います。

一方、田も、狭い谷戸田ながらもそれぞれに似付かわしい名称を持ち、水上の方を「千羽（せんば）」、鎮守様の周辺を「社田（やしろだ）」、その下を「柳川（やながわ）」と呼んでいました。思うに米が良く稔り、小鳥がたくさん集まるようにと千羽田んぼ、豊穣のご利益を鎮守に祈る社田、柳川もまたお米はもちろん、鮒、どじょう、うなぎ等が住みよさそうに……と名付け、その昔仙川田んぼを開き、耕作に心を込め専念し生き抜いた先祖の夢がしのばれるようです。そしてまた、取るに足らぬ雑魚ながら、戦前までは貧しい農家にとっては唯一の動物性タンパク源だったのです。

高台に居住する人々は、主に今の弁天橋に通ずる男坂、女坂と、宅添橋のいわゆる柳川田んぼへ下りる坂を上り下りして田作りに精出していた訳で、春にはレンゲ、夏はホタル、秋冬には稲子とり、せり採み、タナゴ釣り等が味わえる田園風景を戦後の昭和三〇年頃まで残していました。一説によると、先祖は川のほとりに居住し、甲州街道が開かれてから現在の場所、道路面へ移り住んだ由聞き及んでもいます。

京王線が敷かれて間もなく、たまたま乗った電車の窓に写る景色は、新宿の近くまで畑や畦道が多かったのを覚えています。従って電車に乗る事自体、農家の暮らしでは珍しく、私事で恐縮ですが、祖父に連れられて駅の近くで落人（むらびと）に会いでもしようものなら、〈まあまあ、孫さんとどちらへお出掛けですかよう〉と、多摩特有の尻に〝よう〟の入る語尾上りで話かけられ、祖父が答える。〈えー、やっと植田が終ったもんでよう、東橋へ行って灸すえて、帰（けえり）に浅草の観音様（かんのんさめ）へでもお参（めえ）りして来べえと思ってよう〉とまた尻が上がる会話が続く。金子駅を発った電車の汽笛が少年の耳をかすめる。〈じいちゃん、電車が来ちわうよう〉とせきたて、手首をつかんで馳け出し間に合い、当時は乗ってから車掌が切符を切りにきたように覚えています。当時の京王線は確か一輌だったと思うので、省線が十輌位に連結して千駄ヶ谷方面からホームに入ってくる姿に目を見張り、列車の片側に座る運転手の詰襟服と顔にいかめしくかかるあごひも姿が印象深く、心に残っています。

本誌10号所収
昭和59年７月



還暦や 農夫の級る 仙川史
仙川史 字町都市の 歴史かな
仙の川 幾代咲いたる 米の花

近頃しきりにいわれる「シルクロード」ですが、横浜港が開かれ、八王子、遺水、町田を抜け、浜に通じる俗に横浜街道、国道十六号線沿いが、近くでは生糸路線の一環であったようで、八王子、五日市等の町は絹で栄えた町だという事です。

だが、仙川周辺は道順としてルートより外れ、家の造りなどもいわゆる蚕室（さんしつ）造り風の家は少なく、平凡な草屋根の家が多かった様です。養蚕はこの時代唯一の現金収入の道で、仙川の約四十戸程の農家のほとんどが蚕の飼育を業（なりわい）の一つとしていた様で、蚕を指して〈おこさま〉と呼び大事に取扱っていました。

また蚕は、春蚕（はるご）、秋蚕（あきご）ごとに季節で分けられ、この辺では主に春蚕に力を入れ、気温の高い夏場に繭作りをした訳で、やはり蚕室を持たないので住まいを全室、〈おこさま〉に当て、繭作りが終わるまで約百日余りを家族は部屋の片隅で寝起きするという暮らしでした。従って、夏の盛りに、室中の蚕が桑の葉を食う音が毎日、ひがさら、夜までも続き、賑わしく、糞の臭いが私たち子供の鼻にも何か強い印象づけをしたのを今でも思い出します。当時、暮らし向きにも差があり、例外の家もあったように思います。

従って野良は桑の木が多く、次に雑穀畑で、ここかしこに雑木山の組合わせに続き、どこへ行くにも桑畑を通らなければならなかった事を子ども心に覚えています。また通り筋には、一字（ひとあざ）に一、二の繭の集荷場、当時は会場（かいば）と呼ぶ大きな建物があり、思うに、そこに集めた繭を仲買人が馬車や手車などで西のロードにのせ、生糸にして浜へ送っていたのでしょう。今の第一勧業銀行の辺にしばらくその名残りを止め、そこでたまに木戸銭興行師がきて催した芝居、活動写真が懐かしく思い出されます。

しかし大正末期から昭和にかけ、世界的に景気が悪くなり、その上、人絹等の進出によりようよう日本の絹糸産業界にも斜陽の兆しが見え始め、大人の苦境が子供にも分る程でした。各家々では繭をあきらめ、急速に鮮菜物作り（胡瓜、茄子、水瓜、秋野菜等）に転向したようです。さしもの桑畑も年毎にこがれ、野良は数年で鮮菜畑に変わり、養蚕に代わる現金収入源として、女、子供、年寄り、牛馬等交え、夏の盛りを一家総出で働く仙川の人々の日々が、戦前戦後を通して永く続きました。当時は下町の市場でも西産物（にしやまもの＝東京の西に当たる多摩、三鷹方面の産地を指す）としてもてはやされ、高値で取引きされていました。

ちなみに、二、三日分の仕切（野菜代金）を貯めれば、当時で百円、今でいう百万円近くになった様です。高額な代金を取得する家も一、二あったようで、家で待つ家族を尻目に、たとえば玉の井、吉原あたりで骨休めする気風（きっぷう）の良いお百姓旦那が仙川にも二、三人いたようです。神田市場あたりで鮮菜物を通して、〈仙川の何某〉と噂され、仙川の人情風土を世間に広めた当時幾人かの方々は、見ようによっては貴重な存在であったと思います。

何にせよ機械も少なく、身体一つで働かざるを得ぬ当時の事、譬えにあるように太く、短かく、惜しむらくは早逝の人が多かったようで、野菜作りの名人たちも今は、仲良く昌翁寺で仙川町の発展を見守りながら静かに眠っていることでしょう。

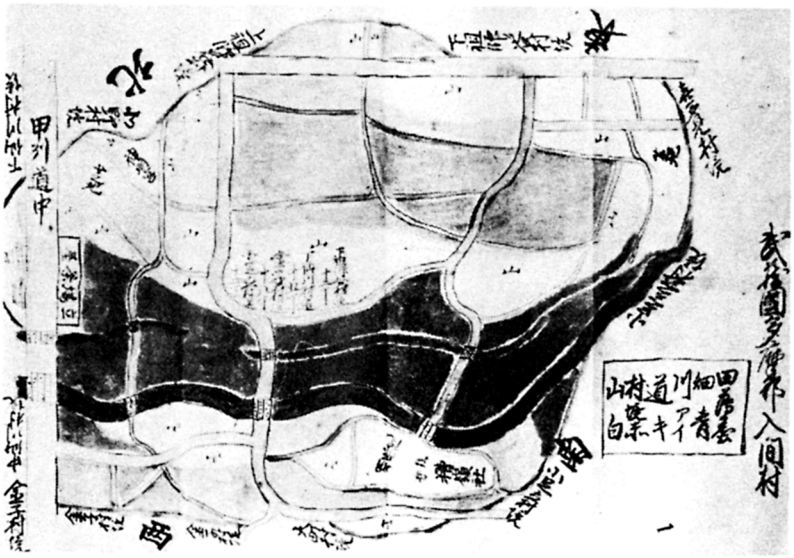
（仙川二丁目）

（友に誘われ、己が無知をも省りみず、今一度小学校へ逆戻りして、うろ覚えではありますが、過ぎし仙川町の有態（ありさま）を綴らせていただきました。私共もはや幾人かの孫を持つ年齢となり、残る何年かを、町の方々とより良き町の発展に心を注ぎ、夢を賭け、ペンを置きたいと思います。）

くらし点描5

新井家と入間村界隈

新井一男



入間村　村絵図

わたしの祖先は、織田信長の天正年間（一五七三～九一年）の頃に、遠州（今の静岡県の西部）浜松の新居宿からこの地に土着した、と伝えられています。今川氏真に加担したグループだったので、移住せざるをえなかったのでは、と考えています。わたしで二十代目になります。

郷の名前、新井（居）を姓とし家紋の正紋は丸に剱酢漿草、略紋は桔梗、初め現在の稲荷社の隣に住居がありました。鎌倉道に面していて路をゆく浪人などが刀をかたに銭を借りるようなことがあり、物騒なので現在地に移転しました。明和六年（一七六九年）の火災により名主をしていた住居を消失。再建された家屋は、今より六代前のころ狛江・小足立村の冨永氏（元狛江市長の冨永氏の祖）に娘を嫁がせていた関係で、解体して建前料五両と共に婚家先に届けました。その家屋は、十数年前、冨永家の子供達の要望で建て替えられるまで現存していました。現在のわたしのところの母屋は、建ててから二一〇年ほどになります。狛江といえば、わが家は狛江の泉竜寺の檀家となります。

これは余談ですが、埼玉県入間郡にある高麗神社は、七世紀ごろ百済や高句麗の朝鮮半島からきた渡来人がつくったもので、そこの宮司は代々子孫が引き継いできていますが、同家の系図にみられる高句麗系の姓のひとつに新井があります。川越街道から秩父にかけて、新井姓が多い。長瀞には、新井姓の豪族屋敷があります。高麗（こま）と狛江、入間（いるま）と入間（いりま）、金子（八高線の駅名）と金子（地名があり、つつじケ丘駅の前名にもなっていた）など類似していることから、渡来人のひとりとしてこのあたりに移住してきたのではないか、と考えることもありますが、確実な証拠はなく俗説に過ぎません。

新井家は世襲の名主で、新井市郎右衛門と称していました。幕末まで、この入間村（現在の入間町と東つつじケ丘、若葉町の大部分の地域と西つつじケ丘の一部）は、佐橋（さばし）、石谷、中川の三旗本の知行所（幕府から俸禄として給付されていた土地）になっていて、新井家は佐橋の知行所の名主でした。石谷は成城寄りの土地を支配し名主は清水家、

入間村商売家調査〔天保14（1843）年〕

氏　名	業　種	領　主
平兵衛	油　醤油　万荒物	石谷　友之助
吉蔵	升酒　鍋釜荒物　菓子	石谷　友之助
万右衛門	升酒　酢　醤油　塩　油　小物	石谷　友之助
長五郎	煮売茶屋　蕎麦切	石谷　友之助
彦兵衛	紺屋	石谷　友之助
鉄五郎	持出し茶屋　飴菓子等小売	石谷　友之助
三次郎	草履　草鞋　菓子類小商	石谷　友之助
藤吉	煮売茶屋　餅菓子	佐橋　兵三郎
又吉	煮売茶屋　蕎麦切類商	佐橋　兵三郎

出典　「商売家名前書上帳」（新井家文書）
調布市史中巻より



糟嶺神社

中川は滝坂寄りで名主は吉田家（現在、調布白菊幼稚園経営）でした。

秋、取り入れ前の時期になると、四谷左門町に住む佐橋の殿様が馬に乗り見回りに来るのですが、その際は中庭に葦簀（ヨシズ）で囲った風呂を用意し、昼食の準備をして迎えました。そして、その年の作柄から年貢を決めたそうですが、こうして少し手心を加えて貰ったようです。殿様の幕末の頃の葬儀には、新井家五両、一族五両を香典として持って行ったそうです。稲荷社の維持費として四反（一反は三〇〇坪）ほどの土地をもらっていて、佐橋の殿様も祀ってあります。今でも四月の命日には、墓前で花見をして偲んでいます。

鎮守の糟嶺神社には二十数年前までは社務所がなかったので、祭りの時には氏子総代の我が家に村人が集まり、唐櫃（からびつ）をかついで糟嶺に行き、大釜でうどんをゆでたりして直合（なおあい）したものです。祭りは紀念祭（二月一五日・紀元節を祝い、今年の豊作を祈る）、大祭（一〇月八日）、小祭（一一月一八日・収穫物を奉納）の年三回です。宮司は、今は国領神社の野沢さん、その前は世田谷給田の池亀さんでした。

一説によると、糟嶺の起源は、鎌倉時代に粕谷村の名前の元になった粕谷氏がこのあたりも支配していて、ここに先祖の霊を祀ったことに始まる、とされています。粕谷は、前には糟谷といっておりました。ご神体の中に入っていたお札に寛永（一六二四～四四年）の年号のあるものと、塗り替えたことを記す文化だったか文政だったかの年号（一八〇〇年代の前半）のあるものとがあります。室町時代の作と推定される、一刀彫の小さなご神体もあります。

この糟嶺神社は小字（こあざ）で陵山（りょうやま）というところで、丸山、また稜山（みささぎやま）と呼ばれる小高い丘の上にあります。ここは古墳という説もあり、「狛江百塚」と呼ばれるくらい狛江に古墳が群集している、その端にあたります。もと、社殿の左にひとまわり三メートルほどの大きな松の木がありましたが、落雷で枯れてしまいました。関東大震災では盛り土で地盤がゆるいため社殿が倒壊し、再建のため地業を行うと、なにやら一ヶ所だけ地面の手応えが違っていました。その後、大雨の雨水が社殿脇に勢いよく吸いこまれるのを見た石工の話から、土の下に空洞の部分があるのではないか、と想像されます。

明照院は、深大寺の末寺です。初め、弁天山にありましたが、別当寺（神仏信仰融合にもとずいて神社にもうけられた寺）として遠いので、元禄時代に糟嶺の土地の半分をさいて移転させました。糟嶺の後ろが削られて崖になり、今石垣になっていますが、このため古墳の仕組みが壊されたのではないでしょうか。

（聞き書き・伊藤綽彦）

くらし点描6

昭和期の大字入間のまちづくり

新井一男



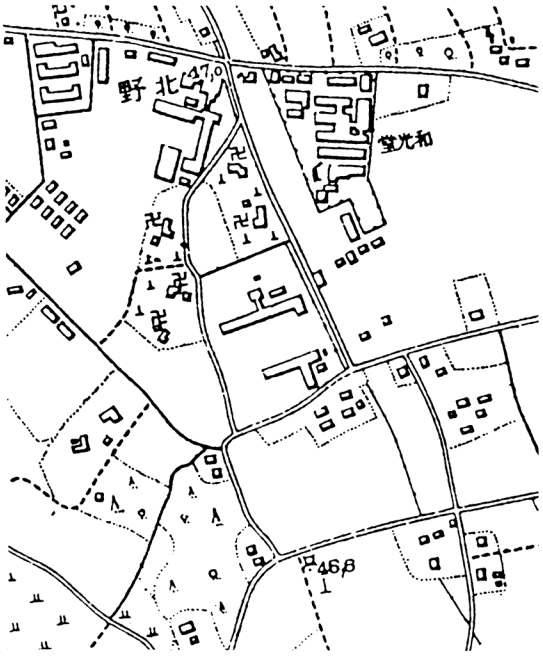
わたしは一九二一年（大正一〇）生まれ、昭和の初めの滝坂小学校の生徒です。学校の帰り、今の実篤公園の池で泳いだものです。雪の日に入間では雪掻きの範囲が家ごとに決まっていましたが、それがない成城境からくる子どものほおば（下駄の一種）の歯に雪がつき、雪を落とすため電柱にたたいたひょうしに鼻緒が切れ、泣いている光景もありました。

遠くに小田急電車や京王電車を見ることができ、警笛も聞くことができました。池上の本門寺から布田の蓮慶寺に向かう太鼓や人声のにぎやかなお会式の行列が、滝坂にさしかかる時には家で聞くことができました。

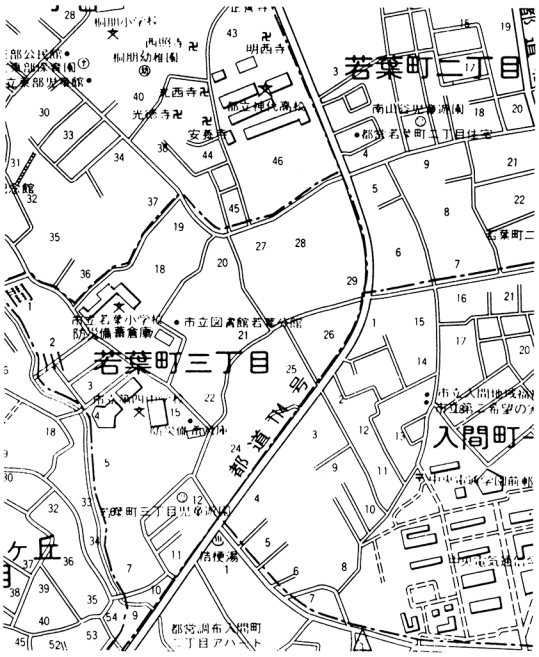
衣類などの買い物は、たいがい歩いて国領、布田に行きました。毎月二五日には布田天神の市があり、端切（はぎれ）などを買ったものです。部落の店といえば、滝坂下の万屋（日用品・酒）、入間川のところの橋場（酒・駄菓子）、大坂を上がったところ（今、マンションになっている）に煙草・駄菓子の鈴店、成城の徳さん店ぐらいで、あとは甲州街道筋にあっただけです。葉書は、甲州街道角のツカまで行きましたが、今の商店街のところにドイツ人が住んでいて、バラの生垣から五、六羽飼っている七面鳥が飛び出してきて、追いかけられて驚いたことがあります。

農業の肥料は、今と違って人糞（しもごえと呼んでいた）を使っていたので、肥担桶（コエタゴ・糞尿を運ぶ桶）を牛車や手車にのせ、行きは野菜も積んで新宿や千駄ヶ谷の人家にもらいに行きました。畳一、二枚ほどの大きさの糞尿をためておく肥溜が、畑のあちこちにありました。近所の者と連合で肥をとりに行き、給田や仙川の坂で車を押し合う光景は戦後も見られました。

父の新井七郎は、一九三三年（昭和八）から四三年（昭和一八）に死ぬまで神代村々長をしていたので、和光堂、山水高等女学校（現在の桐朋学園）、府立第十五高等女学校（現在の神代高校）などの土地取得に関係していました。神代高校や寺町のところまで我が家の土地であり、和光堂には畑一町歩ほどを運動場として貸しました。和光堂の土地斡旋には、村の二、三男の就職を条件に加味していました。また、そこで働けると待遇もよく、温泉旅行もあるので、是非にと村の娘の就職依頼が多く、正月には女工になった娘が晴れ着で挨拶にきていました。



昭和20年当時（神代高校50周年記念誌より）



平成３年　調布市全図より

山水高等女学校の火事は、一九四三年（昭和一八）四月一五日の朝でした。父は、緊急村議会を開き対応を協議しました。村の消防力が貧弱なので、国領にある手押しのガソリンポンプ車を譲ってもらい、戦争中のことと て不足のガソリンは父が面倒をみるということで話が進みましたが、父の死で沙汰やみとなりました。

逓信省の講習所を城山地区につくる話しが持ちあがったのは、昭和一二年頃でした。その頃は松林、雑木林、桑畑、そして畑だったこの地区と、成城の方の人も含めて六三人程の地主達が我が家に集まり、売るとか売らないとか話し合っていました。やがて、昭和二五年に講習所の施設を拡充して、電気通信省職員訓練所東京第一電気通信学園神代分室（現在のＮＴＴ中央研修センタ）として開設され、翌二六年に中央電気通信学園に名称が変わりました。玄武寮や青雲寮などの寮があり全国からかなりの数の社会人の研修生が集まっていて、彼らの利用もあったので、数軒しかなかった仙川の商店の数も次第に増えていきました。

都道一一四号ができたのは一九五五年（昭和三〇）頃ですが、そのため都道の向こう側、大坂との間に幅六尺ほどの我が家の土地が残ってしまいましたが、そこの北側が鎌倉街道と呼ばれていたところです。都道のできた頃、母屋の前の養蚕室で託児所を始めましたが、それが今のさくら幼稚園の前身です。桔梗湯を始めたのは、一九六四年（昭和三九）に都営入間町住宅ができた際、是非にとの要請があったからです。

調布市会議員を一九五九年（昭和三四）から六七年（昭和四二）まで二期、その後、都会議員を三期つとめ、現在は東京都選挙管理委員会委員長をしております。市会議員の時には消防団々長を兼ねていたこともあります。調布市の都市化が進み、建物の高層化や危険物の増大のため、生業のかたわらの活動だけではすまなくなり、消防庁に事務を移管して消防力の充実を図ろうとした時期でした。そこで、分担金を払うことで消防署ができ、梯子車を配備できるようになりました。そうなると、消防団はいらないのではないか、税金の二重払い、無駄遣いだという意見が出て、対応に苦慮しました。

また、改革を求められた課題に、町名地番整理がありました。住宅地として急速に発展したために、旧土地所有者の境界線や飛地も含めて番地が分けられているといった、旧町名の複雑さを解消するため、竹内市長の時代（一九五八～六二年）に町名地番整理が始まりました。桐朋学園の南西、実篤公園にかけての一帯は小字で萩野と呼ばれていて、萩が咲く野原には軍隊が馬をつないで野宿などもしていたところです。それで、わたしは萩野という町名を主張しましたが、若葉町というどこにでもある町名になってしまい残念でなりません。

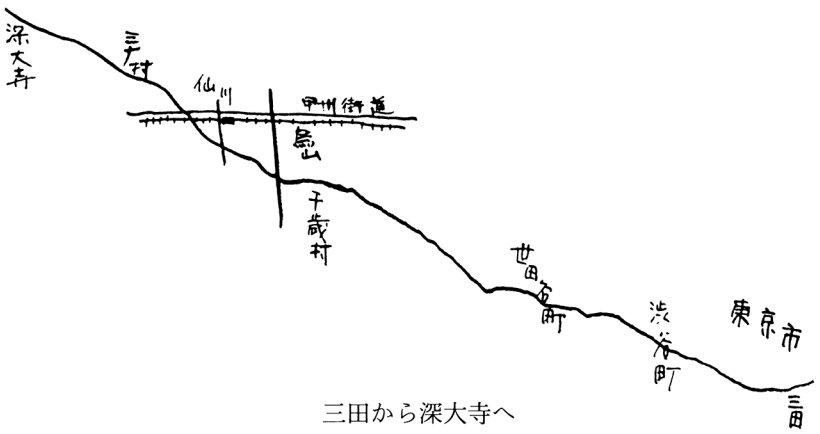
（聞き書き・伊藤綽彦）

むさしの 1

仙川から深大寺へ

春原一穂

本誌４号所収
昭和54年４月



三田から深大寺へ

秋の日を背に、二人の少年が千歳村で渋谷街道の榎の十字路を給田横丁に右に折れ、甲州街道を左に曲がり仙川方向に歩いていた。大正十一年の九月下旬の午下りのことだ。朝四時に芝の三田を出発したのである。

四谷丸太の原木を育てる杉林や、落葉が堆肥となり、薪や炭の原木となる櫟や楢等の雑木林を吹き抜ける風韻や蝉の声に、大森林であった大昔の武蔵野を偲び、すくすくと育つ畑の野菜に、かつての森林を焼畑農法で開拓した朝鮮半島からの帰化人達の苦労を心にえがきながら、其の行跡を探ってみようと五里近い道を歩いて来たのである。

武蔵野とは、東京、埼玉、千葉と神奈川の一部の地域で、大化元年（一三三五年前の西歴六四五年）の大化の改新以前に荒川を中心に東京の北東部から、奥武蔵にかけて勢力を持った天邪志の国造と、多摩川を中心に、武蔵野台地南から川崎、横浜にまたがる地域に勢力を持った胸刺国造とが居て、此の二勢力の争いで天邪志の方が大和朝廷の援助に依り胸刺を亡して武蔵の国が生れたのである。

武蔵という言葉は一説に依れば、大森林を焼き払って其の灰を肥料とする焼畑農法に依る野焼きの火のことを野火とかサシまたはサスと呼び、其の火が広大な地域のそちこちで数え切れぬ程あがったので、無数のサシと言うのをつめてムサシと呼ぶと伝えられている。深大寺の近くに地名で佐須という所があり、又野火を或地点で防いだ所に野火止という地名も残っている。



甲州街道の両側には太い欅の並木が空を突き上げている。其の間に遠く近く藁か茅葺きかわからぬ屋根の農家が見える。其の農家の中には、家の囲いに欅を植えたのもあり、そんな家の屋根は北側が地面に着きそうに低く作られていた。朝鮮半島の高句麗国が新羅国と支那大陸の唐国の挟撃にあって滅ぼされ、その後高句麗王族の若光が彼の一党一七九九人を引連れて、我国に霊亀二年（西



ホタル袋



ムラサキカタバミ

歴七一六年）元正天皇の御代に亡命して来た。彼等に武蔵の国の中程に地を与えて（現在の飯能市の秩父寄りにある高麗郡）、武蔵の開拓をさせた。彼等は我国より文化の程度も高く、農耕技術も優れていた。焼畑農法は彼等が残した技術であった。また建築材としても防風用にも適する欅を家の囲りに植えたり、街道に並木を作ったりしたのである。そして北風を防ぐために北側の屋根を低くしたのも彼等であったとのことである。

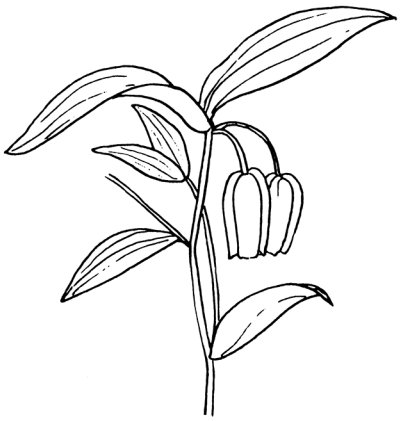
給田の坂を下りて仙川にかけられた橋を渡って坂を登ると下仙川の村に入った。川沿いの農家の裏には孟宗竹の林というか、畑というべき竹藪（筍を採るために植えられてあるから竹畑であろう）があった。それは殆んどの農家の囲りにあり、ここが市場でも有名な「仙川の筍」の産地であったのだ。竹もさることながら、栗の林も多いのに気がついた。滝坂の上の道の右側に「弘三大師……深大寺道」と記された石の道標が建てられていた。これについて右の道を行くと柵も無い道沿いに栗林があり、其の樹下に大粒の栗が沢山落ちていた。丁度一休みしたい所であったので、二人は此の林に入り込んで拾い始めた。懐のふくらんだ頃、一人の老婆が地をなめんばかりに曲った腰で、手に籠を持ち、ひょこりひょこりとやって来た。「オウオウうちの栗もいっぺえ落ちたなあ」と拾い始めた。二人は折角拾って食べようと思った栗だが、持主が現われてはそんなことは出来ないので「お婆あさん!!　ここにも拾ってあるよ」と懐の栗を籠に入れてやった。この栗は山栗でなく丹波栗で美味そうな色をしていたので、墓口から五銭玉を出して「お婆さん栗を五銭だけ売ってくれませんか」と言うと、「ゼニなんかいらねえよ、両手で持てるだけ持っていきな。オメエたちに拾ってもらった礼だよ」と籠を突き出してくれた。喜んだ二人は十個宛数えて懐に入れ、深大寺への道を教えてもらって歩き出した。栗の皮を歯で剥ぎ、渋皮を爪ではがしつつ教えられた道を噛りながら辿った。



道はやがて下りとなり、坂下の両側は田圃で稲が青い穂をたれていた。道路縁にはたんぽぽが白い毬をふらつかせ、あきののげしが黄色の花をつけていた。坂を登った所が金子の台地である。（此の地名は源氏の流れをくむ金子十郎が鎌倉への道の守護のため、此の地に砦を築いて居た故の名である。其の砦跡はいまだに探しあぐねている。）道の左に東京大学の淡水魚の研究所があり、この先で道はT字となり突当りに神社と左側に小学校があり、小学校の横の坂を下ると右側の小高い所に森に囲まれた深大寺があった。積まれた石垣の間から清水が湧き出て、小川には沢蟹も居た。山門の手前の丘に不動堂があり、中腹から滝が落ちていた。



春　蘭



ホーチャク草

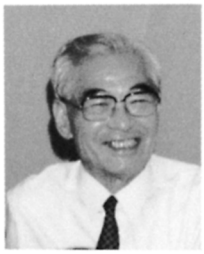
かつて仙川の土堤に咲き乱れて、今は
ほとんど見つけることのできない野草

寺の石段を昇ると国宝の立札のある茅葺き屋根の山門で、これは桃山式のものとのこと。深大寺は奈良朝の天平五年（西歴七三三年）、帰化人の子息の満功上人の建立で、法相宗であったが約百年程後に天台宗に改められた。国司の反乱を鎮圧するため、其の降伏を祈願する祈願寺とされ、武蔵野の精神的な力が重要視された。国司の反乱が収まったので、天台宗の道場として寺領七ヶ村を治めることになった。正暦二年（西暦九九一年）には天台宗の座主元三慈恵大師の自刻像を、弟子の慈忍和尚と恵心僧都などが安置した。其の後源氏、北条氏等に寺は保護され、徳川家康も寺領五十石を与えた程であった。本堂に向って右側にキリシタン燈籠と重要文化財の梵鐘があり、寺の裏は武蔵野の昔を偲ばせる雑木の森林である。此の中にはムラサキ草（後に江戸紫と呼ばれたムラサキ科の多年草）が　見つかることがあるとのこと。此のムラサキ草は根から紫の染料がとれるので、上代の宮廷貴族の礼装用衣服を染めるのに用いられ、これが租税の対象として物納させられたので盛んに栽培されたのである。その時のこぼれ種か根が残っていたのであろう。

深大寺の周辺は地下水の湧く土地が多い。此の水は地殻の変動による多摩川の流れの変動した地下水であろうと考えられる。この湧水地の囲りには、自然に聚落が出来た。これ等は「狛江」と呼ばれていた。仙川の水源地や神田川（お茶の水）の水源地も此の近くが湧水地である。

深大寺山門の向い側高台の南東隅に、深大寺城址があった。高台は舌状の岬になっていて、下は湧水が溜って出来た沼になっている。これは城の飲料水として使われたものであろう。此の城は世田ヶ谷城と同類の山城と平野城を併せた形式の城であったらしく、城址と言っても石垣等が残っている訳ではなく、柱の跡が掘り出されたのでそれと判ったのである。小田原記等によると、天文六年（西歴一五三七年）に川越の上杉朝定が、小田原の北條氏綱の軍を防ぐ目的で、平安時代に建てられた館跡を再興し、武将の難波弾上に命じて城として整備させたのである。しかし北條軍は同年の七月六日に朝定の川越の本城を破り、弾正も松山城を破られたので、深大寺城は無用となった。

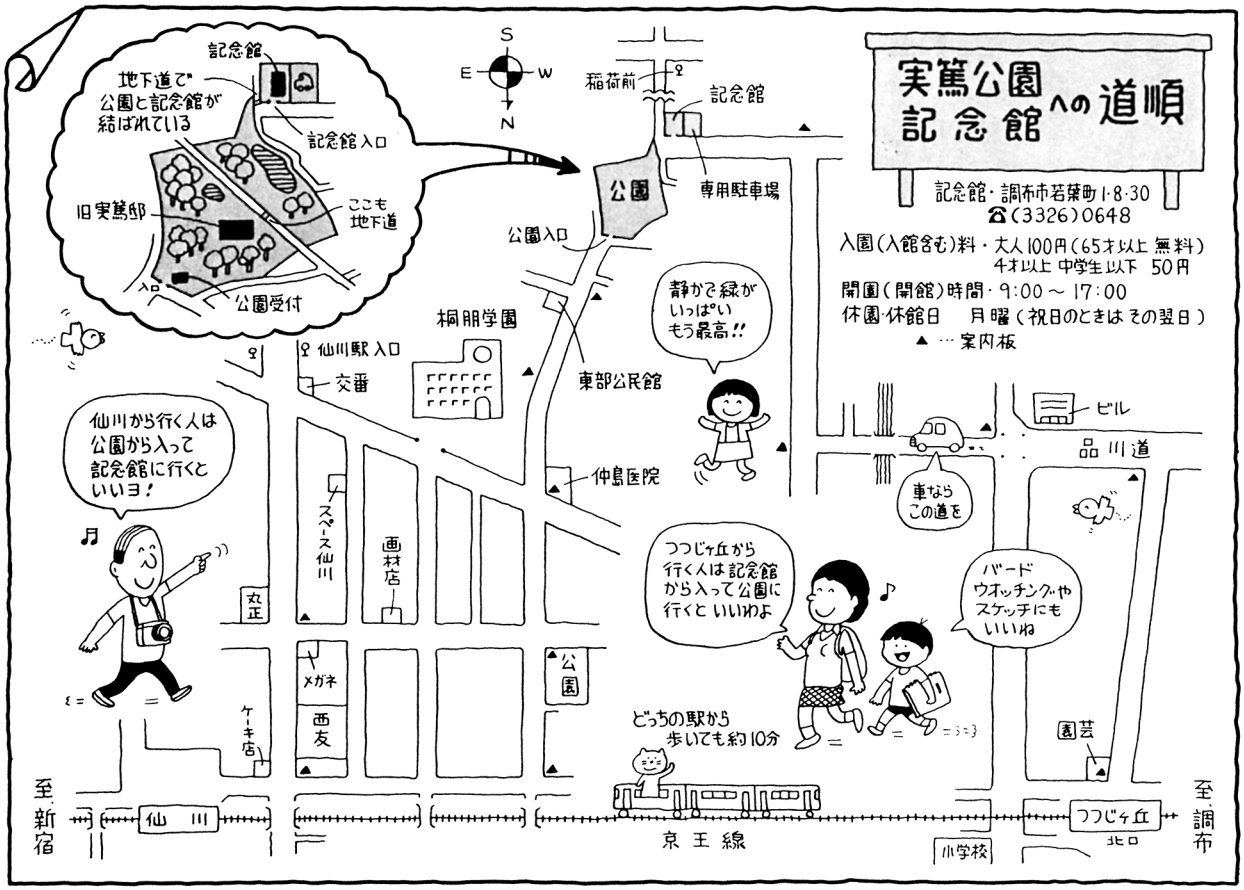
此の沼には蒲（ガマ）科の蒲が褐色の蝋燭を立てた様な穂を風がゆする中に、白鷺が二、三羽片足で考え込んでいた。もずの疳高い声に追い立てられる様に、音坂から佐須の坂を下り、京王線の調布駅の脇の道を多摩川堤防に出て、土堤道を多摩川沿いに川下へ向かった。そして前年の増水で欠潰した所を迂回し、二子玉川を大岡山に出て目黒駅前に辿りつき、家に着いたのが夜の十時過ぎであった。気がついてみると、懐の栗はいつの間にか半欠けも残ってはいなかった。



春原一穂氏



画／中島りえ



注▷記念館は資料館増築工事中のため平成六年春まで休館中です

イラスト／こやま きょうへい　ⓒ せんがわ・21

むさしの 2

仙川附近の草花の今昔

春原一穂



溝蕎麦

甲州街道が仙川を跨ぐのは、給田の坂下の大川橋だけで、道幅は昔も今も同じで四、五メートル位である。起伏の多い川沿いの低地は田で高い所は畑と林と藪であった。橋から川上に行くと左側の高台に沿って、川は百二十度程曲り右は田圃で、水源地はここから約三キロメートル川上にあった。前述の様に水源地は地下水の涌出したもので、三鷹村大字上仙川の勝淵大明神社の手前の丸池と呼ぶ三百坪程の小判形の池で、池の底に七、八ヶ所の釜（涌出口）があった。食糧増産に重要な役目を負った仙川も戦後の為政者の高度成長の掛声でその使命は排水溝と転身させられ、下流の宅地造成で大雨の時には水が逆流する様になり、ついに埋められて児童公園にされてしまった。池は入口の右隅に三×五メートル程の楕円形のコンクリートで、僅かに昔の名残をとどめている（現在は三鷹市新川五丁目丸池公園となっている）。

往時は雑木林に囲まれた幽すいの地で、池の縁には松や胡桃（くるみ）、樫、櫟（くぬぎ）が池の鯉や鮒、鯰（なまず）、鰻達と語り合っていた。川へ流れ出る附近の湿地には蓼（タデ）科の茎の刺を利用して鰻をつかむと言われる鰻蔓（ウナギヅル）―別名鰻攫み、これで尻を拭かれたらさぞ痛かろうと思われる刺が茎や葉柄に下向きに生えている継子の尻拭い（ママコノシリヌグイ）、蕎麦（ソバ）によく似た溝蕎麦（ミゾソバ）が入混って生え、六月頃から十月頃迄赤い小花がそれぞれの季節に合わせて咲いていた。

現在の白百合女子大学は旧津村順天堂の薬草園であって、この薬草園の裏口の辺りの仙川は川幅が三メートル程拡がっており、中州の様になった所に芦の生えた場所があった。川底は粘土質で、水もきれいだったので子供達の水泳の場所であり、その川下の桜金属（株）横の坂下に石橋があり（現在の弁天橋）、橋の際には米を研いだり野菜を洗う板の洗場があった。川中には車軸藻（シャジクモ）科の車軸藻に混って洋食のツマに使う十字花科の和蘭芥（オランダカラシ）、別名水芥（ミズカラシ）が生えていた。田の畔には春の七草の中の十字花の芹、ナズナ（ペンペン草）、同じく菊科の仏の座（田平子）、秋を一人で彩る様な彼岸花科の彼岸花（曼珠沙華）。舗装されていなかった路端に忘れ霜を被た枯草の陰から碧色の瞳をぽっちりと開く胡麻の葉草科の大犬（オオイヌ）のふ

本誌５号所収
昭和54年９月



二人静



文字摺草（捻花）

ぐり、紅紫の小花を晩夏の頃咲かせる柴蘇（シソ）科の薄荷（ハッカ）草（葉からハッカをとる）。河川敷には砥草（トクサ）科の杉菜の胞子茎である土筆、撫子（ナデシコ）科の繁縷（ハコベ、春の七草）、蛍が夜空に豆ランプを点滅させる頃に薄紅色の吊鐘を下げる桔梗科の蛍袋（ホタルブクロ）、茎をかじると酸ぱい蓼科の酸模（スイバ、すかんぽ）、若芽を酸模の代用にかじる虎杖（イタドリ）、百合科の黄色に赤味を帯びた鬼百合に似た花の野萱草（ノカンゾウ）、紫の小花がかたまって咲く野蒜（ノビル）などが、鳥麦や芒（ススキ）、蓬（ヨモギ）の群生する中に交じって生えていた。水中には源五郎虫や風船虫がタナゴや鮒と遊び、真夏の川風に戦ぐ葭（芦）に大騒ぎする葭切（ヨシキリ、ぎょうぎょうし）の声も、コンクリートブロックで固められた仙川やアスファルトに舗装された道、さらに田や畑に団地や住宅が建てられた現在では見たり聞いたり出来はしない。

しかし河川敷を昔のままにしてある桜金属の裏側大川橋までの高台側のみに其のおもかげを残していた。「危険につき入るべからず」の立札の脇の柵のすき間から孫達と潜り込んで、土筆を大型ポリ袋に一抱えと蛍袋の若菜を五、六本頂いて来た。桜金属の横の切通しには林の木の根が顔を出し、秋には赤土の崩れた址に、箒茸（ハハキダケ）科の琴柱（コトジ）箒茸や、箒茸（ネズミ茸）［これら二種は食用茸］、狐の茶袋科の成熟した茸の傘を破ると茶色の胞子を烟の様に吹き出す狐の茶袋（キツネノチャブクロ、烟茸）が、又林の中の切株には時折松茸科の椎茸が生えることがあった。

林中の日当りの良い所には、蘭科の黄色の花径五ミリメートル位の卵形の金蘭と白花の銀蘭、紅色の小花が花軸の囲りを螺施状に巻き咲く文字摺草（モジズリソウ、捻花）、半日陰の川岸近くの斜面には多摩地方でヂヂババと呼ぶ「男性と女性のシンボルに似た形の花弁が一ツの花の形を整えているので他の地方でもこれと同意義の呼び名をつけている所が多い」春蘭（黒子・ホクロ）が咲いていたが、金蘭と銀蘭は人口の急増と自動車の排気ガス、建物の高層化に依る気流の変化等のため、茸と共に姿を消してしまった。

林の縁の方にあった、千両科の対生する四枚の葉の真ん中を抽いて一本の花穂に白い小花をつける一人静（ヒトリシズカ）と、二本の（三本のこともある）花穂に互生する葉が四枚の二人静、菊科の葉が開くと縁の切込が深く破れた傘の様なヤブレガサ、紫の2センチメートル径位の一重の花の嫁菜（これの園芸品種に改良されたのが都忘）等もあったが、一人静と二人静、ヤブレガサ等は姿を消し、今では禾本（カホン）科の芒、鳥麦、菊科の荒地野菊、姫女苑（ヒメジョオン）、豚草、地縛（ジシバリ）や蒲公英（タンポポ――日本タンポポは殆ど無く西洋タンポポ）が、空地や道路縁を我物顔に生えている。

春原一穂さんは、〝よしきり〟のおばさんの御主人です。春になったら春原さんに案内していただいて仙川の野草めぐりを企画したいと思います。

－紳士洋品専門店－

MEN'S

ツカモト

仙川商店街中程　☎ 3300-6707

1853

彼雷哩

コーヒー専門店

商店街中程

AM10：00～PM11：00

☎ 3308-9497

手作りの味

自家製煮物漬物　新鮮塩乾物

アキヤマ

10:00 ～ 20:00 日曜定休

仙川商店中程　☎ 3300-6803

LOARET 伊奈河

調布市仙川町 1-16-18　☎ 3309-5454

月星シューズ

月星特約店

UC・JCB・VISA・MC

靴の明治屋

仙川商店街中程　☎ 3300-1067

そば、うどん専門店

野州茶屋

京王ストアとなり　☎ 3307-4584

割引券

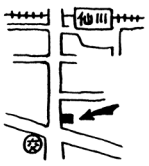
※本誌ご持参ください、お買上げ金額より、
一割引いたします。（有効期限93年10月30日）

手芸、和洋裁、毛糸、コットン

なかや本店

調布市仙川町 1 － 15 － 28

☎ 3300-6805



ファッション＆インテリア

藤 株式会社 丸藤

京王ストア駐車場前
仙川町1－15－51

☎ 03(3308)3700
03(3309)3455

味よし，ボリュームあり，安い
ちゃんこ鍋

桃乃花

手作りおつまみ沢山あります。パーティー承ります。

営業時間12:00 ～ 14:00(日，祭，休み)
17:00 ～ 23:00

神代書店２Ｆ

定休・第１水曜・第３日曜　☎ 3326-8047

《若葉町二丁目仙川教会前》

☎ 03(3308)8018

若葉歯科医院

午前　10：00～12：30　休診日 木曜日
午後　2：00～8：00

〒182 調布市若葉町２－19－38
（ハイムシナジー若葉町２Ｆ）



仙川の風土から日本を見る

萩原祥三

大袈裟な題名をつけたが、ごく当り前のことを考えてみるに過ぎない。

此の界隈にどの位の人が住んでいるかわからないが、此処には古くから、多分古代から人が住んでいて、江戸時代にほぼ村落の構造がきまったと思われる。現在のこの地域の大方の人たちは、昭和の三十年代以降の住人である。従って今日のこの地域の構造は複雑で、簡単にはその姿を纏めることはむずかしい。変っていないのは自然の地形だけである。自然といっても人が住むことによって変形してしまうから、自然というものは、文化的変容を被った自然である。日本の村落は、歴史時代を通じて、色々な変化を遂げ、江戸時代に今日の原型となるフォルムを完成させたと思われる。これは村落の仕組みであるから、政治的な支配・被支配は勿論、生活様式、民俗、宗教——こうした人間の意識を形成するものがこの時代にできたと思う。

これがほぼ二七〇年つづく。こんな長い期間、変動の少ない儘で秩序が固定された例は歴史上珍しい。従ってこの間日本人の深層にまで及ぶ意識=ものの考え方、態度、風俗は、それ以前の古層の原形を保存しながら、しっかりある型を造りあげたと思う。これは容易には変らない。表層、風俗はどんどん変っても、深層は容易には変らない。

仙川地区で生活すること三十年余、この変らないものを私は見つづけてきた。私が物好きにも地方政治にコミットする機会をもち、仙川地区を舞台とする市議会選挙という、またとない演劇を舞台裏からじっくり眺めることで、この日本人的不変の形を知ることができた。多分、仙川で演じられているお芝居は、日本全国、都市・地方を問わず大同小異、仙川の芝居だけが特別だというわけではない。これは、私の田舎での体験と見事に符合する。

市議になるには、後援母体という一座を仕切る集団の存在が欠かせない。社会党などといっても、実動部隊は、戦後の足軽集団である労組である。この労組パターンも、農村共同体残存集団や商工会的利益集団を形成するグループの論理と余り違わない。ほぼ江戸期共同体を支配する、個人主義なき集団主義、義理と人情という愛すべき心情と封建的秩序感覚支配である。嘗ての小作層に属する人々は、農地改革によって富豪とまではいかなくとも、移住民（これも元農村共同体住民又はその末裔）に較べれば金持ち層である。野心ある人は位がほしくなる。残念乍ら本人はその積りでも、残存農村共同体内の階級秩序は歴として生きていて、誰も推せんしてくれない。せいぜい民生委員止まりである。市議のバッジが狙えるのは旧自作農か小地主階級の人である。ごくつまらないことのようだが、今日の自由にして平等の有難い日本国憲法の下でも、立候補の自由はあっても、てんで選挙にならない。

紙に書いてある自由・平等では飯も喰えないし、議員にもなれない。つまり次元の異なることであろう。一事が万事ではないし、大層結構な世の中にはなっているが、こんな所に旧い日本はどっこい生きつづけている。

今日、国家の選良氏がどんな状態にあるかは、毎日、新聞、雑誌、TVが嫌になる程見聞させてくれるから誰しも承知済である。この大時代劇だって、よく歴史をほじくり返してみれば、古い時代にモデルはいくらでもある。外圧の批判の対象にされる「談合」その他、所謂「日本モデル」は、悪い面ばかりみないでよくみれば、日本文化の構造であり、日本意識の長所にみえてくる。個人主義、民主主義ではなく、強きが弱きを助け、横並び、家族主義、人情型エトセトラ。「談合」によって小企業もつぶれない。談合即日本的ネゴシエーションである。変型民主主義ですらある。

考古学に対して考現学があり、最近では路上観察学なるものもある。

仙川というまち、そのうごきの中に、日本が見えてくる。

かわら 1

〝滝坂〟昔ばなし

川口三八

本誌６号所収
昭和55年１月



昭和十四年頃の川口邸



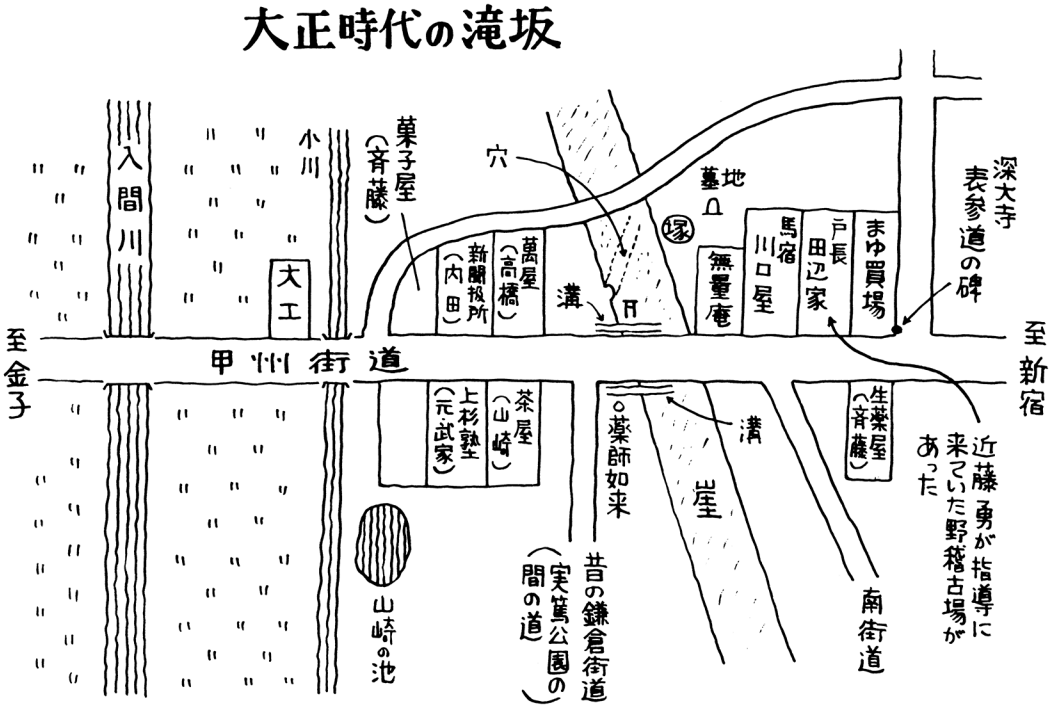
川口家兄弟姉妹

甲州街道はいくつかの段丘を横切って東西に通じていますが、大きな段丘を越すところには坂があり、〝日野の坂〟〝谷保の坂〟、そしてここ〝滝坂〟など、街道の難所でありました。道路が舗装され、自動車が発達した今では、坂道の存在は何んの苦労にもなりませんが、その昔馬車や人の力で荷物を運んでいた頃は、人々の難儀の場所でありました。当時、私の家は滝坂の上で馬宿を営んでおりましたが、その頃の界隈の様子を仙川の歴史の一頁として記してみたいと思います。

昔の〝滝坂〟は、その名の通り滝の様な急峻な坂で、狭い道の両側は切り立った赤土の崖に覆い繁った樹木が空をかくし、昼間も暗い風情でした。雨は急流となって砂利を流し、玉石がごろごろとしていて、車はおろか馬もようやく登るという難所でした。市内（東京）へ荷車で往復する人は、多摩川の川向うから、家中であと押しにきたり、帰り頃には出迎えて坂下までずりおろすのが常でした。

多摩川の押立に鮎場があり、明治天皇が鮎漁に行かれた折、ここ滝坂で御乗馬が足をすべらせ落馬しそうになり、それがキッカケとなって、度々坂を切り崩し改修されたということです。坂の上にあった我家はその度毎に、玄関を道路の位置に下げたので、家の中が雛壇の様になって仕舞っております。その後多磨御陵が出来た折、新道が開かれました。さらに東京オリンピックの時、現在の様に拡幅延長されましたが、幸いに旧道は残されて昔の偲かげを残しております。

我家の西隣りに明治末頃まで〝無量庵〟という尼寺がありました。洋ランプが流行り始めた頃、尼さんが日本橋まで行ってランプを買い求め、近所の子供達を集めてはその明るさを自慢していたそうです。ところがうかつにも荒縄で吊り下げていたので、縄が燃えランプが落ちて火事になり、尼寺は焼失して仕舞いました。その頃は菜種油による行燈や燈明が主であり、ランプの光は大変明るく、それこそ文明開化の輝きであったことでしょう。この尼さんが仙川でランプを使用した最初の人だそうです。現在寺の跡には何にもありませんが、近くに墓地だけが残っています。



又墓地の北側の畑には古代の住居跡がありますが、埋れたままなので詳しいことは判りません。

この辺りは昭和二〇年代までは、武蔵野の姿が沢山残った静かな農村でした。滝坂の南斜面には雑木林が続き、近くは入間川が流れ、自然にめぐまれていたので、昭和のはじめ頃までキツネやムジナが生息していました。入間町で捕ったキツネが製にされて、滝坂小学校に標本として今も保存されていると思います。

滝坂の稲荷様の下に、昔、道普請のために砂利を採掘した穴があり、奥行が五、六百メートルもあるといいます。その穴にムジナが住んでいて、近所の若衆が煙責めにして捕えたそうです。又水溜や穴倉に落ちてつかまるムジナもいたそうです。野兎やイタチも沢山いて、私の家にもムジナやイタチを獲る人が泊っていて、近くの田圃や川にワナを仕掛けていたそうです。〝むじな沢〟の地名が残っているのも、その生息と関係がありましょう。

時は少しさかのぼり、幕末の頃の話ですが…、一人の盗賊が調布宿のあたりから大勢の人達に追われて滝坂の下まで逃げて来ました。とうとう追いつめられ、道路の溝につき落とされた賊は進退きわまり、「殺すなら殺せ!!」と開き直って叫びました。追ってきた二十人程の人達は驚き、皆遠巻きにして見ていましたが、誰も手を出すことが出来ません。しばしして見兼ねた一人の左官の人が「俺がやってやる!」とその賊を竹槍で刺殺して仕舞いました。

それから道の真ん中で一同の者が焚火を囲んで屯していると、眼光の鋭い一人の侍が通りかかりました。賊の親分が仕返しに来たと思い込んだ皆は散り散りに逃げましたが、その侍は「俺は大沢村の近藤勇だ、逃げるな!」と大声で叫んだそうです。後に新選組の隊長となった近藤勇が偶然に通りかかったという訳でした。この騒ぎで庄さんという人は近くにある〝山崎の池〟にとび込み隠れていたので、後々まで〝池庄さん〟とのあだ名をつけられたそうです。

この仙川には古い遺跡があり、又あちこちの界隈には昔の色々な出来事が語り残されていますが、昔を知る方々が次第に少なくなり、貴重な歴史が消え去ろうとしております。私たちの町の歴史を少しでも多くたずね、記録にとどめたいと思いますので、皆様の御指導、御協力を切に御願い申し上げる次第です。

（仙川町二丁目）

かいわい 2

神代村字下仙川向山

安戸義男



昭和40年頃の緑ヶ丘の民家

緑ヶ丘二丁目は、以前は神代村字下仙川向山と言い、農家僅か四軒の淋しい所でした。

ここから南方向、給田境に甲州街道の一部と、京王線の一部が見え、夜になると軌道の外燈がポツンと一つ見えるばかり。あたりは真暗闇で空を見ながら歩く始末。鼻を抓まれてもわからない位でした。

私達の子供の頃は、綿の着物で布のカバンを肩にかけ、下駄を履き、田圃の畔道を道芝の生えている中を毎日、歩いて滝坂小学校に通ったものでした。

仙川と向山は、田圃で遮られ、曲がりくねった道、これが主要道路でした。

雪の日など、一面の銀世界。時には溝に落ちることもありました。

夏は道いっぱいに草が生い茂り、朝登校する時、先頭に立つ者は足まで露でずぶぬれになるので、今日は誰が露払いするかで競い合ったり、両側の草を結んでは人を転ばせる様ないたずらをしたり、夕立で小川が溢れた時など、泥だらけになって、フナやヤマメ、ドジョウすくいをしたものです。

遊びばかりでなくこんな仕事もしました。

春の彼岸には、道ぶしんと言って、道路の凸凹をシャベルやジョレンなどで、道路の補修をしたり、用水路の川さらい（水の流れを良くする）も恒例となっていました。

仙川の水源は新川の丸池の湧水で、農家では、大根、ネギなど野菜の洗い場として、また暮れには、餅米のとぎ場としても利用されました。

餅つきは、杵づきのため、親戚や近所の人の助けを借り、夕方から翌朝まで搗いたこともありました。

その後、上流に工場が出来、住宅が建ち並び、工場排水が入り、魚は絶滅、溝川となりました。稲作も草丈は立派に育つが窒素過多で、穂は出るが実が入らず、それが二年、三年と続き、耕作者全員が田作業は一切諦め、現在の都営緑ヶ丘団地となりました。

その頃は、河川も整備されず台風の時には河川が溢れ、団地一帯が湖と化し、床まで水びたしになることも幾度か。その後、河川の改修工事が進み、今では水害の恐れはまずなくなりました。

以前は、西を見れば晴れた日には富士山が



ケヤキの大樹の根

裾まで、はっきりと見えました。ところが、団地が出来、高層ビルが建ち、今では見ることが出来ません。

人口の急増で学校不足となり、南西に八中、西に緑ヶ丘小、緑ヶ丘幼稚園、その西方には白百合女子大学が出来ました。

道路も拡張され、生い茂る大樹も切り倒され、昔の面影はありません。

緑ヶ丘は、これからも二十一世紀に向かって、益々、発展していくことでしょう。

（緑ヶ丘二丁目）

字下仙川向山の四季

田舎の四季（唱歌）

春…道をはさんで畑一面に麦は穂が出る菜は花盛り
眠る蝶々飛立つ雲雀吹くや春風袂もかろく
あちらこちらに桑つむ女日増し春蚕も太る

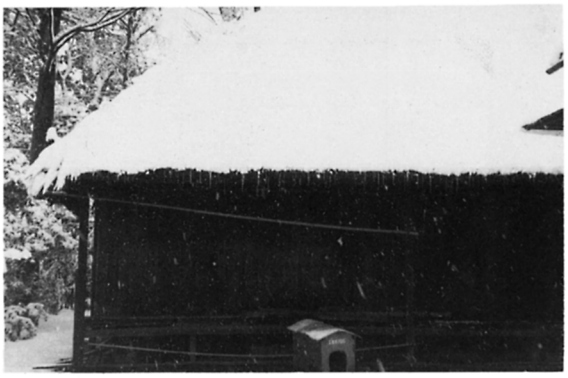
夏…並ぶすげ笠涼しい声でうたいながらに植行く早苗
長い夏の日いつしか暮れて植る手先に月影動く
帰る道々あと見かへれば葉末〳〵に夜露が光る

秋…二百十日も事なくすんで村の祭の太鼓がひびく
稲は実が入る日和はつづく刈ってひろげて日に乾して
米にこなして俵につめて家内揃って笑顔に〳〵

冬…松を火に炊くいろりのそばで母が手際の大根なます
これが田舎の年越肴棚の餅ろくネヅミのお友
更けて軒下に雪降り積る

米米昔を偲び思べて米米　伊藤吉五郎





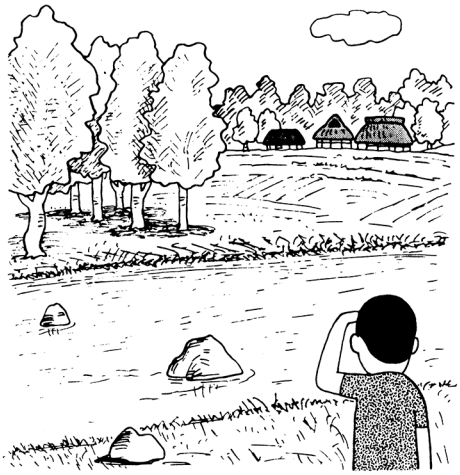
（写真提供：宍戸義男氏）

「むけーやま」から一言

中山俊夫



昔の名残を留める
アパートの看板



わたしの家のすぐ前は調布市緑ヶ丘、後ろは都道を隔てて世田谷区の給田である。

わたしの母の実家は仙川滝坂の上にあったので、幼い頃母に連れられて度々その家に行った。甲州街道は人の行き来が賑やかであったが、家からの道筋は大部分が道芝の生えたいわゆる農道で、車の通った轍（わだち）の後を選んで行かねばならなかった。くぬぎ林を通り抜け、夏は青々とした穂が繁り、冬は寒々とした田圃道を通って裏道から近道をして行ったものだった。

母が話に夢中になっている間、わたしは坂の上からよく道路工事の状況を眺めていた。丁度その頃滝坂の急坂の隣に、新しい勾配のゆるやかな今の道の前身が盛んに工事中であった。大正も終りの頃である。道の両側が削られ赤土が露出した現場には、トロッコのレールが敷かれ余分な土はこれに乗せられて下の方へ運ばれていた。坂道なので下りは殆んど自力で走り、登るときは馬に曳かせたようだった。ガタガタ独りで走ってゆくのがとても面白く、よく飽きずに眺めた。工事の休みの時に近所の子供達が道端に置いてある台車に乗っているのを見て、ちょっとでいいから乗ってみたいと思っていた。工事は殆んど人力に頼っていて、今にして思えば、どこかの開発途上国の工事現場と全く同じであった。

実家はそこで蕎麦屋をしていたので、家の近くに行くと、いつもケンチン汁の匂いやそばの香りがプンプンと匂ってきたのを今も忘れない。車曳きの重労働で疲れた往来の人の食欲を随分そそったものと思う。今のドライブインで絶好の立地場所だった。腹の空いた馬方達は馬を繋ぎ餌を入れた桶を置くとすぐ店の中へ入ってしまうのだが、丁度学校から帰った子供達が集まって後の世話をする。気のきいた馬方は小銭をそっと桶の中に抛りこんでくれる。馬が餌を食べてしまうと、チャンと後にそのお金が残り、これが子供達のうれしいお小遣となったので皆喜んで手伝ったものだとよく古老から聞かされた。

わたしの家の方は〝ムケーヤマ〟と仙川の人達は呼ぶようだ。漢字では〝向山〟と書く。わたし達の方では全く馴染のない呼名である。



昭和15年頃の仙川駅付近
（酒井一真氏提供）

その名のとおり、向う側にある山の中のように思われたのかも知れない。そう言えば、母がよくあんな遠い処へ嫁にやるのかと人に陰口をいわれたのを聞いたとか。もっともその頃多摩川の向こうは〝川向こう〟と言って、川が溢れたら容易にこちら側へ帰ることができなくなるから、川向こうには嫁にやるものではないと言われていたという。

京王電車のことも一言ふれておかなければならない。その頃わたしは小学校を出ると渋谷の学校へ通った。千歳烏山まで歩き電車に乗るのだが、朝早いので、駅ではいつもの顔ぶれ数人だけであった。電車は小さな木造みたいな車できしみきしみ走っていた。五年卒業の頃になると、素敵なロマンスカー（当時その名はなかったと思う）の急行「御陵前」行きの新車が走り、また帝都線も開通した。世の中がどんどん進んできたようだった。帰りには新宿から乗るのだが、千歳烏山行きに乗ると上北沢で殆んどの人が降りてしまうので、わたし一人のことが度々あった。それでも車掌さんは「松沢病院前」「上高井戸」と声をかけてくれるので、内気なわたしは終点の千歳烏山まで行くのに随分気まずい思いをしたことがある。

現在の十輌編成の長い電車や、車中で耳にする外国語、地方の方言、外国人の顔などを見るにつけ今昔の感に堪えない。

仙川の駅はもっと大正橋の近くで、電車が金子（現つつじヶ丘）を出て、長い坂道を登ってくるのを胸をはずませて眺めていたことなど思い出す。新宿からの帰りには、母は仙川駅で降りて実家へ寄って来るのが常だったようだ。

（三鷹市北野四丁目）

我が愛しの仙川駅よ
―抄録―

山岡義典

（昭和58年11月・本誌８号所収）

仙川駅で乗り降りする方は、ホームの上屋を支える柱が古いレールを組み合せて作ってあることをご存知でしょう。この柱は、特に上端部をアサガオ型に曲げてあり、そのカーブが何とも美しく味わいがあります。

さて、この古レールの柱ですが、よくよく見ると何度も塗り重ねたペンキの皮膜の下からアルファベットの文字や数字が浮き出しているのが見られます。

例えば―GH H 1922 KRUPP1925, CARNEGIE 1911, B.V.G.BOCHUM 1921, といった具合です。勿論、製作会社と製作年代を示しているのですね。

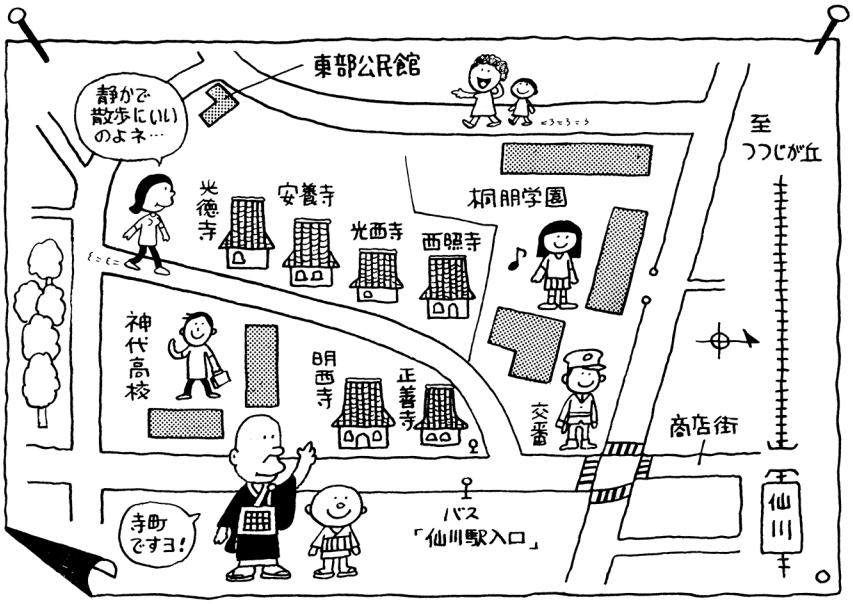


これらの中で一番古いのはCARNEGIE 1911, です。カーネギーはアメリカの大鉄鋼会社、一九一一年は明治四四年です。この年の六月、二年前に創立した京王電気軌道株式会社が笹塚―調布間の軌道工事に着手しています。この部材は恐らくその時に用いられたものでしょう。最初の試走車が走ったレールかもしれません。

てらまち 1

仙川の寺町

菅 隆慶



プロローグ

我が町仙川は、京王線の仙川駅と、にぎやかな商店街を核にして、その周辺にたくさんの学校、住宅が存在し、あふれる活気と落ち着いたたたずまいが調和している。仙川の寺町は、この仙川の町の一角に存在する。もっとも寺町などと言うと、寺院が甍を競う浅草、近くは北烏山の寺町の様子が想像されるが、我が仙川の寺町は規模も小さくまた、三町にわたって分散しているので、寺町という表現は誇張の感がしないでもない。とはいえ落ち着いたたたずまいを形成する上に、寺院の存在も少しばかりはかかわっているように思う。

各寺院の歴史

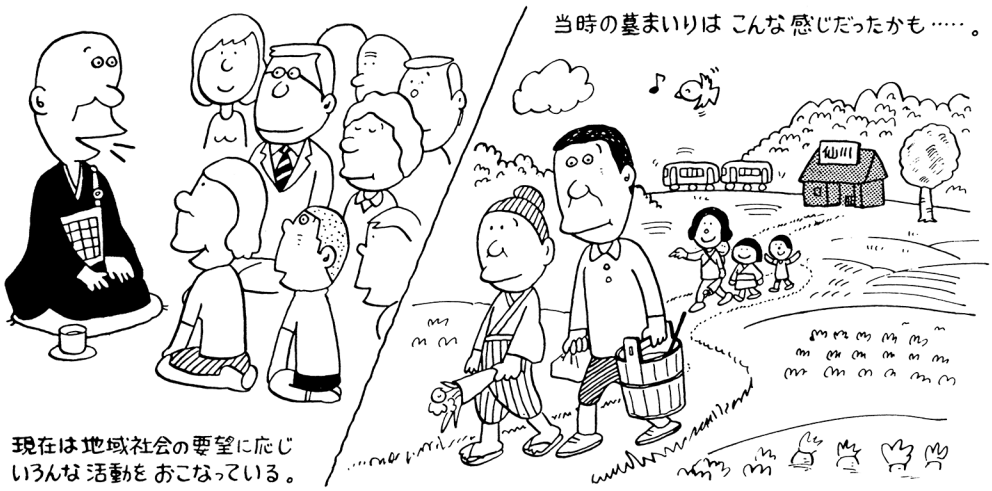
仙川周辺には仙川町に一、若葉町に六、入間町に一の計八ケ寺で、宗旨は天台宗が二ケ寺、浄土真宗本願寺派が六ケ寺となっている。各寺院の歴史については本稿の主題から外れるので、別表に概略を記すにとどめる。

寺町の形成

仙川町の昌翁寺、入間町の明照院は、いわゆる「土地の古刹」であり、開創以来今日まで寺の周辺地域に住む檀家を主対象にして宗教活動が営まれてきた。それに対して若葉町の六ケ寺はすべて昭和初期に仙川（当時は北多摩郡神代村）を新天地として移転してきた寺院である。これらの六ケ寺は別表にも示した通り、長く築地本願寺（現在の中央区築地）の五十八の地中子院の一院として本願寺の南西側に位置していた。ところが大正十二（一九二三）年に起こった関東大震災の折、地震のあとに発生した火災によって築地本願寺、全地中子院が焼失してしまった。各寺院は直ちに急造のバラックを建てて、近い将来築地の寺町の復興を期したのである。

しかし、東京市は防災上の見地から道路網の拡充を骨子とした都市計画を推進することになり、一部の寺院は立ち退きをしなければならなくなった（現在の晴海通りはこの時に出来た）。一方、本願寺も人口の郊外分散に対処して、寺院が郊外に分散して移転することを奨励した。こうした事情から大部分の寺院は移転を決意して移転先さがしを始めた。しかし、墓地があるということで法律面、住民感情の面で移転先が限られたこと、また、一ケ寺だけで移転するというのも淋しかったのか、結局こちらへ何ケ寺、あちらへ何ケ寺とほ

本誌７号所収
昭和58年８月



とんどが集団で移転することになった。門徒の多くが下町なのであまり遠くない所、駅から近い所という条件に合致した仙川を移転先に選んだのは六ケ寺であった。移転工事は寺院によって前後するが、おおむね昭和二年に開始し、昭和四年に終了した。こうして仙川の寺町ともいえる形態が形成されたのである。

寺町の変遷

前述の通り若葉町六ケ寺の門徒のほとんどが下町を中心とした区部に在住していた。当時の仙川は現在と違ってのどかな農村であり、駅から寺まで畑と屋敷のみであったから、法要、墓参のため寺を訪れる門徒にとって、この田園風景は最高の贈り物であったが、中には「これはえらいことになった」と思った人もいたようである。そして、このように区部の人々が多数仙川へ訪れたことは、昭和初期においてはこの農村に都会のにおいを運んだと言っても決して過言ではない。

仙川は太平洋戦争での空襲にあわなかったし、また、戦後の住宅の増加、周辺道路の拡張、整備などで人車の往来が激しくなっても、昭和初期の寺町のたたずまいは比較的長期間保たれてきたのである。

寺町の課題

仙川の寺町が形成されて五十年過ぎた今、地域社会における寺町の存在はまだまだ小さいようである。各寺院は開創以来、檀家、門徒を対象にした法要、布教を推進してきた。しかし、こうした固定された対象ではなく、もっと広い対象、つまり地域社会に対する宗教活動の必要が叫ばれてきた。こんな要請に応えて過去にはこども会、そして現在はボーイスカウト、文化教室、法話会、掲示伝道等の諸活動等が行われている。寺院はこのような地域社会を対象とした宗教活動をさらに充実させ、また、地域社会がそれを正しく評価し、あらゆる機会に多くの参加者が得られれば、寺院は町の宗教機関としての地位が確立し、地域社会との結びつきが深まっていくことであろう。これによって地域社会における寺町の存在が大きなものになっていくと思う。

（安養寺住職）

◇仙川各寺院の歴史◇

寺院名	宗旨	開祖	開創年代・変遷
昌翁寺	天台宗	快要法印	慶長年間、現在地に開創
明照院		秀海法印	天文年間、現在地に開創
光西寺	浄土真宗（本願寺派）	了頓	元和年間
明西寺		了休	寛永年間
安養寺		了玄	麻布に開創
西照寺		了源	神田に開創
正善寺		了雲	日本橋に開創
光徳寺		了閑	明暦の大火後、築地へ移転
			関東大震災後現在地へ移転

天文　西暦一五三二年～一五五五年
慶長　〃　一五九六年～一六一五年
元和　〃　一六一五年～一六二四年
寛永　〃　一六二四年～一六四四年
天和　〃　一六八一年～一六八四年

〔出所〕「寺院案内」調布市仏教会発行

昌翁寺住職五十五年

榎本晃道





麦をまく人（昭和19年秋，寺の裏の畑）

本誌11号所収
昭和59年12月

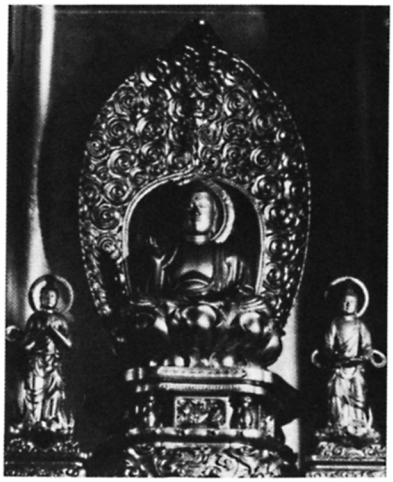
わたしは明治三五年三月二〇日生まれです。父は高井戸村の吉祥院の住職で、祖父は並木という姓の百姓で、不動さまの熱心な信心家で、月に二、三回は成田山に参詣していました。そんなことで祖父は父を坊さんにしようと上野寛永寺に弟子にやりました。父は十八才ごろ榎本性に変わります。長男だと兵隊にとられない規則なので、神奈川の元武士の榎本家の養子となったのです。やがて、高井戸村の並木屋敷に、寛永寺の許しをうけ吉祥院という寺を建て、父晃恭が住職となりました。わたしの名は道雅ですが、得度してから晃道となりました。

わたしは高井戸の小学校二年のとき、白山（文京区）の竜泉寺へやられました。住職が「勉強しろ、勉強しろ。」とやかましく、一日中小部屋に閉じこめられていました。そのため腎臓脚気になり、座敷も歩けません。三年のとき高井戸に帰され、田んぼでフナをすくったりの毎日、じきに病気も直りました。六年からは神代村滝坂小学校に通うことになりました。大正三年、十二才のときです。昌翁寺が無住なので面倒をみてくれないか、と北野の懇意な人から父に相談がありました。住職が借金のため夜逃げした、というのです。そこで、わたしが飯炊きばあさんと住みこんで、法事や葬式のときに高井戸から父がくることにしたのです。

昌翁寺は、旧仙川村に領地をあたえられた家康の家来の飯高主水貞政が、快要法印とねんごろであったことから、おれの墓場を作ってくれと頼み、法印を開山とした寺です。明治初年、檀家はわずか七、八十軒で苦しかったそうです。現在、分家から分家と増えて三百五、六十軒。墓地にも限りがあり、普通の寺としては目一杯です。

明治一三年三月二八日、もらい火で寺は焼けました。本堂は立派だったそうです。わたしがきたころの建物は、よそから運んできた辻堂だったので人が上がれず、あとは坊さんの寝る庫裡だけでした。昔、寺では葬式をしなかったので、それですんでいました。寺は田六反、畑二町歩ほどもっていて、玄米で十俵から十二俵の小作米がありました。戦後の農地改革で、この田畑はみんな小作人に渡しました。

私の生れた月日は三月二〇日で、前年生れの約一年令違う生徒とでは身体、知恵共におくれ気味で、学校では何も分らず、今から思えば落第させて戴いた方が善かったと思います。しかし考えてみれば、俺は人の跡をついて仕事に一所懸命過せばよいと思いつづけて来ました。滝坂小は高等科二年をいれても全校二百人ほどで、同級生は男女で二十七、八人でした。生存者は伊藤太郎さんと私だけになりました。高等



本尊　阿弥陀如来像



旧本堂

科二年までいき、中学は天台宗中学（今の駒込高校―文京区）です。三年からは京王線の定期券購入費を父がくれなくなったので、自転車で新宿まで一時間ほどかけていきました。定期券代は半年で三十円くらいでした。朝の五時頃に出発して代々木新町（今のガスタンクの所）のいとこの家に自転車を預け、角筈から往復七銭（片道四銭）の市電で水道橋乗り換え、巣鴨行きで白山上の中学に通いました。伊勢丹の北側は田んぼ、新町辺りは畑がありました。

中学では、小学校と同じく数学や歴史など思うようにいきませんでしたが、植物では百点をもらいました。去年でやめた三十数年も続いた植木市（月三回、八の日）も、この百点で気をよくした植物ずきに始まります。境内を貸せば、めずらしい植木の寄付を得たり、安く買えたりで植物園がつくれる、と考えたのです。東京西部植木親睦会の植木市で、会員は三百二十人ほどでした。中学卒業後、そこにあった天台宗大学（今の大正大学）に学びました。

大正一二年九月一日の関東大震災のときは、昼寝をしていて気付きませんでした。障子を開けたら、墓石が全部倒れていたのでびっくりしました。甲州街道には、足をひきずり避難していく焼けだされた人びとが続きました。デマですが、朝鮮人が暴れだし、いま登戸を渡っている、という通報があり大騒ぎでした。西照寺などの六ケ寺は、震災後の区画整理で、昭和の初めに築地から移転してきました。

大正一四年一〇月に父が死に、一二月にわたしが住職になりましたが、辻堂をこわし本堂再建工事が始まっていた時期です。父は一五年の完成を見ることができませんでした。建築費は、当時の金で一万八百円ほどでした。いま建築中の来年三月完成予定の本堂と客殿の建築費は、三億円ほどです。

昭和一二年の中国との戦争から太平洋戦争へと広がると、戦地へ動員される人が増えていきました。天台宗の特使という名前をもらい、檀家で出征兵士があると壮行会で激励の言葉を述べました。一九年七月から青山の青南国民学校（小学校）の六年、男子二十人ほどの学童疎開を受入れました。俳優の仲代達矢がそのなかにいました。明照院、金竜寺など数ケ所に分宿しました。寺の前の川原さんが、いもやおもちを差入てくれたことがなによりの食べ物で、学童の印象に残っています。二〇年四月、来襲のB29一機が国領に墜落しました。私も挺身隊の一人となって、飛行機の材料をつくる東京アルミニューム工場（今のキューピーの所）に勤め、倉庫係をしました。工場としては、他に和光堂、万平、桜金属があるくらいでした。

戦後、調布市の保護司と民生委員を勤めてきました。戦前の昭和八年から一二、三年頃に金子に浅草寺経営のセムイ学園、という全寮制の問題児矯正施設がありました。その責任者だった天台宗大学の先輩から、保護司になることを要請されたのです。これらささやかな社会奉仕で、五五年に勲五等瑞宝章をいただきました。

わたしは、体はあまり丈夫でなく、頭は自分から進んで考える力もないので、人の跡についていければと考え、人の言われた通り実行してきました。坊さんのときは、一所懸命、邪念をはらって仏をおがみ、お葬式を勤めてきました。昌翁寺住職五五年。これが、わたしの一生です。昭和五六年からは照運が跡を継いでいます。

（昌翁寺前住職／聞き書き・伊藤綽彦）

てらまち 3

昭和初年の仙川界隈

酒井一真



昭和５年４月滝坂小学校入学記念

私が仙川に御縁を頂いたのは昭和三年六月からのことです。築地からの移住で、畑道を入っての寂しいところとて、当時五才の私はたまの来訪者には必ず手を振って「また来てね！」がきまり文句になっていました。夜道は提灯で駅までお送りするのが母の役割でした。雨の日はぬかるみ、自動車は車輪が沈んで大騒ぎでした。冬は霜柱が立ち軒先からは太い氷柱（ツララ）がさがり、積雪の日も年何回かありました。周囲が畑で風の日は砂埃がひどく、大風に備えて樫、欅（けやき）、銀杏を植えました。

当時は関東大地震の後だけに、台地で安全性も高く、緑も豊かで閑静なこの地に土地を求めた民家も何軒かありました。駅の近くでは今の商店街東側に石坂さんが立派な屋敷を構え、洋館の応接間からは時折ピアノの音が流れ、ガレージから運転手つきの自家用車が出るようすを見て子供心にも目を瞠ったものです。石坂さんの向い側には四ツ谷の老舗「釘万」の根岸家の別宅が広い敷地をもって構えられ、その少し先にはドイツ人の老夫人が洋館の住まいから、通りかかる子供の私に「ババチャンって呼んでちょうだい」などとやさしく声をかけてくださったのも懐しい想い出であります。そのような次第で、大勢としては素朴な農村でありながら、モダンな一面も見られる仙川でした。そうした新しさを見てのことでしょうか、仙川駅の橋の上に川島さんというお年寄りが家を建て、人力車を用意して客を待ち、中年の息子さんは上野の精養軒にいたこともあるとかで、同じ名前の洋食店を開いて、もっぱら出前でやっていたことでした。

これには、関東大震災後の区画整理で築地から移転した六ヵ寺の参詣人も念頭においてのことであったかと推測することですが、それほどの用もなく、親子共に廃業し、息子は勤めに出、年寄りは子供相手の当て物のおもちゃ菓子を商いして暮らしていました。川島さんは一見恐い顔でしたが、駅の土手に草花を植えるなどやさしい人柄の方でした。

ところで、当時の村びとは新しい移住者に親切でいろいろな知識を伝えて下さいました。

当時、実篤公園のある辺りは、大神宮様の森と称しており、荒れはてた社殿が現在の公園事務所の位置にありました。そこから急の坂道が池の左手に向って下り、坂道には太く縒（ヨ）られた鉄線が杭を伝って下がっていって、終点には大きな木の鳥



ガリ版刷りの小冊子



昭和10年２月の西照寺わか草子供会

居が半ば朽ちつつも立っていました。鳥居の脇には手水鉢があり、池は欝蒼と茂る樹木に囲まれて不気味でした。池からは小路を隔てて、滝が水音を立てて、その下の中の島をめぐる池に流れこんで、滝口のあたりでは沢蟹をとる子供たちの姿もよく見られました。

また、その昔大神宮さまには主がいて、ある時池の水がざわざわと音を立て、向いの稲田の穂が一斉に靡いたかと思うと、大きな竜がみごとに天上していった話や、ここの田圃は底なしに深くて、ある時隣村の老夫婦がこの畦道を通る際、お爺さんが足を滑らせて落ち、お婆さんがあわててその手を握って引きあげようとしたところ、共に曳きずられて姿を消したので、そこを「ぢぢばばたんぼ」と呼ぶようになったと教えてくれました。事実、戦時中に農家の働き手が招集され人出不足となった時、中学生の私たちは勤労動員でここ仙川の田植えを手伝ったことがありました。その時驚いたことは田が沼のように深く、ある深さのところまで杭が打たれ、そこに横木が渡されてそれに足を支えつつ苗を植えたことで「ぢぢばばたんぼ」を改めて想い起こしたことでした。

ちなみに、昭和五十九年に調布民話研究会で『調布の民話集』を発刊され、八十の民話を掲載されていることを御紹介いたします。

ところで仙川の子供は滝坂小学校に通い、私の入学は昭和五年です。新入生は男子三十七人、女子四十一人で、服装は殆んどが着物で、冬など鼻汁をこする子の袖はきらきら輝いていたものです。お正月はお弁当が餅で、ストーブで軟らかにして食べるので教室には良い香りがただよいました。通学の途中で大正橋から見る富士山はみごとで、これだけは今も変わらぬ風景です。橋の手前は桑畑で下校の途中桑の実をつまんで食べる子供たちの唇は紫に染まってこっけいでした。子供は下校すればさっそく群をなして野原で日の暮れるまで遊びほうけていましたが、それでも農繁期には畑を手伝い、市場に野菜を運ぶ荷車の後を押す、けなげな子供の姿もけっこう目についたものでした。

昭和の初年は各地で子供会が盛んな時期で、私のところでも先代が開いて、童話、紙芝居、人形劇、手品などで日曜日の午後を過ごしました。先代は毎回『わかぐさ』という絵入りガリ版刷りパンフレットを自作し、お菓子を添えて配りました。正月は菓子に代わって凧と羽子板を配り、村のあちこちでこの凧があがり、羽子つきの音が聞こえました。集まる子供は仙川、入間、金子などから百人を越す人数で、女の子は弟や妹の子守りを兼ねて参加したことでした。会は三十余年続きましたが、参加者の一人蔵見昭八さんが東部公民館館長として赴任された一昨年、公民館だよりに二回にわたり、西照寺の子ども会（遊び、楽しみ、のんびりムードの子ども向き寄席）として詳しく体験記を載せて下さいました。

当今、仙川駅は近隣一の乗降客の多い駅となり、街のようすも一変して賑やかです。越してきた当時たった一つのそば屋「藤の家」さんも、今は世代交代で「カフェ・チャティーずう」と経営を一転して、若者の街にふさわしい姿に変えて繁昌のようです。

（西照寺住職）



戦前からの住人 西さん宅



来たりもん 1

ざくさざに住みて

萩原祥三

本誌１号所収
昭和53年８月

私と仙川とのつながりは、いわば偶然にすぎない。だが人間が何処に住みつくかなどということは、皆そんなに理由があるわけではないだろう。

然し、住めば都という諺もあり、そこの自然や人情が、いつの間にかある雰囲気を醸し出す。いわばそれが郷土意識の一種になるのであろうか。

私が此処に越してきたのは、昭和三五年六月、だから先祖代々から此処に住みついていた人々から見れば、いわば新参者であり、来たりもんであった。今は若葉町と改名されたが、戦前から、この入間に住みついていた彫刻家の西常雄さんを知っていたことが、私とこの土地の結びつきの縁である。西さんのアトリエのある住居の周辺は、武蔵野の面影が残っていて、私はたちまちこの村が気に入った。

かつて独歩の住んでいた頃の渋谷は、その当時の武蔵野であった。私が住みつき始めた、昭和三〇年代半ばは、まだ入間・仙川は昭和の武蔵野の名残を止める牧歌の響きが残っていた。第一、はじめて京王線の仙川駅に下りたとき、マッチ箱（今でも余り変ってないが）のような駅舎から、きれいな富士の姿が見え、感動した。

仙川商店街などという、今日殷賑を極めている調布一の賑わいなど勿論なく、土地の人の用を足すにほどよい店が、ぼつぼつと建っていた。深大寺へは前に来たことがあり、仙川という駅の名は私のかすかな記憶に残っていた。これは川の名前か何かなのかなと思って通りすぎた。はじめて土地を見に訪れたとき、駅の線路に沿って、地図で調べると金子という字名の、つつじヶ丘方面へ歩いていった。キューピーマヨネーズの工場をそこに見た。斜めの道を歩いてくると、桐朋学園の木造の建物があり、道を隔てて和光堂の建物があった。キューピーも和光堂のシッカロールも親しい名前であり、何か初めて住むまちでない親しさを憶えた。見知らぬ土地は何か拒む堅さをもって

せんがわ私年誌

昭和三三年　はじめて仙川を訪れる。

昭和三五年　駅から十五分、入間に住み始める。ガス、水道なし。井戸は深く掘り、水うまく冷たし、ただしポンプの空廻りにおびゆ。隣人、秋になると柿の実をくれ、梅雨時には梅の実を恵む。桐朋、神代高校などを見て、公立の小・中学と思い違う。学校が近くてよしと思いしは不覚。

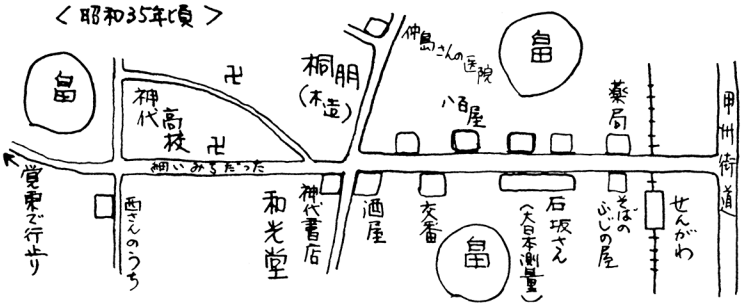
昭和三七年　若葉小の分校より独立校への運動などをする。

昭和三八年頃　緑ヶ丘地区などに団地誕生、この頃より急激に発展しはじめる。覚東で止まりし道路、次第に狛江に伸び、狛江と調布つながる。

記憶定かならざるため、年譜的に記すること不可能なるも、いつの間にか仙川地区は次第に繁華となり、調布一の町となる。

●　●　●

編集子来りて、せんがわ私誌のつづきを書けという。昭和三十八年で切れているが、かく生きて在るので、その後の三十年!!、何と長く生きさらばえて来しもの哉。花袋に名著『東京の三十年』あり。花袋は上州館林より出て来て、東京の三十年を書く。おけらの如



いるものだが、この土地には、それを余り感じなかった。一つには土地に昔から住んでいる人の人情によるのかも知れない。

私の子供たちは一人は小学校、一人は就学前の年齢だったが、子供たちは昔から住んでいる人たちの子供たちの中で元気に育った。若葉分校は若葉小になり、隣りには中学が建ち、入間村は入間町になり、仙川は駅中心に、京王線、甲州街道の両側に拡がるまちのセンターに変貌した。でもこの仙川のまちから、〝土くささ〟は今でも抜けていない。この土くささこそ仙川の良さではないかと思う。狭い通りを歩けば、スーパーの中から、店先から威勢のよい呼声が飛んでくる。夕方は縁日のように人を縫って歩かなければならない。肌と肌の触れ合いのショッピング、道の真ん中での長い立話し、それを私は土くささと呼びたい。決して垢抜けすることだけを求めなくてよい。仙川はいつまでもそういう牧歌を残して、肌の温かみのただようまちであってほしい。

ここで少し人のことに触れよう。お世話になっている存命中の方については、いつかまた書く時もあるだろう。

一人は里見安吉氏、ご家族の方は今でも若葉町に住んでおられる若葉小学校のPTAの初代の会長さん。私が特にお願いして就任していただいた。その当時、里見さんは横浜のフェリス女子大学で英語を教えられていた。内村鑑三の弟子に当る方で、無教会主義の敬虔なキリスト者であった。ライフワークとして実に立派な、『ダンテの神曲解説』という著書を残しておられる。恐らく空前絶後のPTA会長であろう。惜しくも会長在職中亡くなられた。

もう一人は千葉緑氏、この人も少し前惜しくも亡くなられたが、奥さんの経営する店の前に立って、顧客に面白く話しかけておられたのを憶えている人もあろう。佐賀県の産、イタリーはじめ長い外国放浪生活の画家、国会議員の肖像画を描いておられた。話し出せば、あらゆる話が次々に出てきて尽きない人であり、稀に見る快男子であった。こういう人にはもうこれからは仲々お目にかかれない。

仙川という町は、多くの人を呑み込み、伝統をつくりつづけている。昔から住む人も、新しく来た人にも、魅力あるタウンでありつづけたい。

（入間町一丁目）

き弊生同じく上州の山より出て徒に他人の労働を盗みしのみにて、仙川の三十年を誌さんとする。哀れ成哉。莫逆、ひと大方かくの如くにして生の痕跡を、隣人の記憶にのみ留め、それしも亦幾莫もなく虚空に消えるを常とする習いなれば、編集子の好意にあやかりて以下、記憶の渕より、取り出し記せんとす。

昭和四一年一二月　第二の故郷たる仙川の地の近くに職を得。自らの飢を凌ぎ妻子を養うためのみ。この日より、家を出て、仙川駅まで歩き京王線にて程近い勤め先まで、単調な往復の日々つづく。

仙川駅　このマッチ箱の駅は、今日に至る迄、変らず。仙川が次第に家並を整え、桐朋学舎が鉄筋になり、ヒンターランドは仙川台地の周縁に延び拡がるも、この地区の田舎風と謂わんか、鄙振リの不変ざるを象徴するものの如し。蓋し仙川は将来も偉大なる田舎たらん。鄙を寧ろ誇るべし。此地が仙川、野川によって作られたる台地なるが為ならん。

ここ迄書き来りて、私誌なるものの全く記すべき事項のなきを知り、顎然とする。記憶とは、記憶すべき事項の存在して初めて刻まれるものなり。さすればわが三十年はこの仙川小天地に跼蹐、酔生夢死の歳月たらんか。

仙川とは何か。三十余年も住むや、不思議な愛着の如きもの生ず、人情と自然の混融せる情緒というべきか。私誌の記すべきは唯一つ、このフモールのみ。（一九九三・三記）

来たりもん2

半世紀を語る 中野朗子さん





（上）線路南側より和光堂をのぞむ
（昭和17年、川原武次さん写す）
（右）昭和10年頃の中野夫妻――自宅玄関にて

――創刊号の「せんがわ界隈史」を書かれた武田さんの言葉を借りますと、中野さんは、〝来たりもん〟の第一号でいらっしゃるということを耳にしたのでお訪ねしました。昭和の初めから仙川に住まわれたそうですが、その頃のことからおきかせ下さい。

中野　私が仙川に越してきたのは二八才の時ですから（現在七五才）、昭和五年になりますか。それはそれは美しい農村地帯でした。私達は現在の第一勧銀のあるところに住みつきました。その頃主人は、川崎第百銀行（三菱銀行に合併された）の浅草橋支店長をしていたので、そこまで通っていたわけです。当時の京王線は箱が一つ、つまり一輌で、三〇分間隔ぐらいで走っていたでしょうか。金子の方に向って線路の両側は桜並木になっており、ちょっとした桜の名所といった感じです。先号の武田さんも書いておられたように、駅を降りると富士とそれに連なる箱根の連山がくっきりと見えまさに感動的という他はありませんでした。今の商店街は、昔もメインストリートであることに変わりはないのですが、ふじの屋さんと石坂さんの他は農家が一、二軒あったきりで、梅林になっていました。交番もずっとはずれに位置していました。

今のようなショッピングの街・仙川とは似ても似つかず、買物に大変苦労しました。烏山から御用聞きが来ていたので助かりましたが、来客があるのに頼み忘れたりすると三〇分ぐらい待っては、確か五銭ぐらいの切符を買って烏山まで出掛けていったのです。

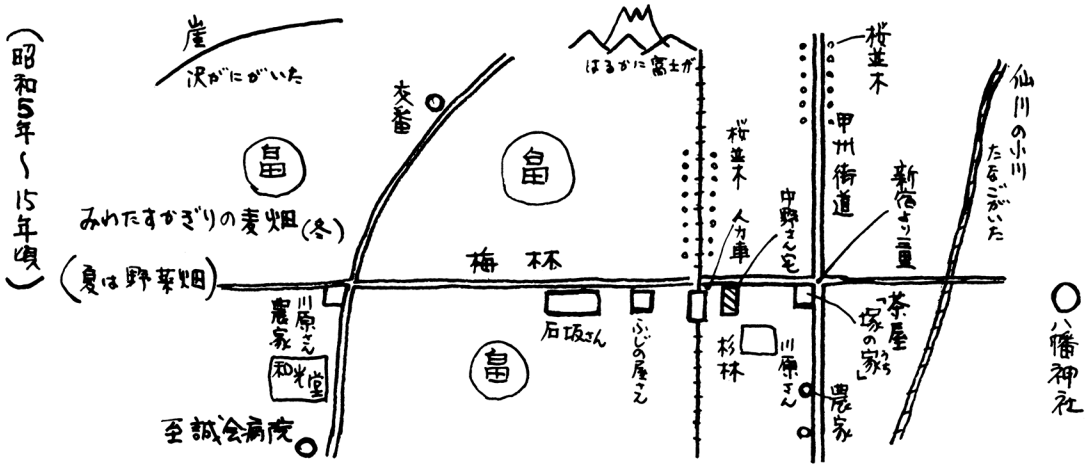
――そうですか。ほぼ半世紀を経ているのですから、私達が想像する以上に田園地帯だったでしょう。そのあたりを生活をまじえて、もう少しお話し下さい。

中野　まず、今の神代書店から南は、見渡す限り麦畑でした。夏は野菜畑で東京の野菜供給地となっていたのですが、冬の麦畑の印象は大変強いです。武者小路さんのお宅あたりは（当時はまだない）崖ぶちになっていて、湧き水が流れ、そこに沢がにが群れていたので、よく取っては楽しんだものです。駅から北の方に向かうと、まず、私の家の前には客まちの車夫がおりました。

――聞いております。創刊号の「神代村」という農夫の像を写真に撮らせてもらう時に、西常雄さんをお訪ねしたら、やはりその車夫の顔の像がありました。

中野　そうですか。きりりとした美男子のおじさ

本誌２号所収
昭和53年10月



んでした。私も何度か人力車に乗せてもらいました。そうそう風邪をひいたりすると、その人力車に乗って至誠会病院まで行きました。至誠会病院は当時結核療養所になっていましたが、一般の診療も行なっていたからです。

私の家の裏は杉林になっており、さんこう鳥がよくツキホシヒと鳴いていました。月星日（ツキホシヒ）ときこえることから、三光鳥とでも書くのでしょうか。庭にはへびが出てくるのです。長さ三メートルもある青大将には驚かされました。

甲州街道の角には、お菓子、タバコ、お酒などを売る休み処として「塚の家」（つかのうち）という茶屋があり、ここが新宿からちょうど三里の休憩地点になるのです。朝、新宿をたつと昼食時にここに着き、一服する訳です。街道は今の半分ぐらいの道巾ですが、金子の方に向って下り坂になっており、やはり桜並木が続いていました。さらに北に行くと仙川の小川があり、八幡神社まで春の菜の花とひばりのさえずり、ほんとうになつかしく思い出されます。夏になると、降るような天の川が見え、外にテーブルを出しては毎日星空を仰いでいたんですよ……。

――現在、書道の教室をなさっている訳ですが、その辺のいきさつをお話し下さい。

中野　不思議なもので、子供の時から書道はいちばんきらいなものでした。音楽とか運動の方がはるかに好きだし得意だったのです。マンドリンやテニスをやって、随分ハイカラだったのですよ。

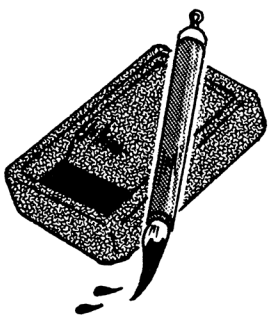
京都で日本画をやっていた父（広田百豊画伯）の関連から、必要にせまられてやっているうちにものになったというべきです。昭和十六年から教室をもったのですが、戦時中、銀座の支店長をしていた主人が過労から肺をすっかり侵され療養生活に入ってしまったので、書道教室で生活を支えなければならなくなったのです。主人は療養生活のまま昭和二五年に逝ってしまい、私は大変な苦労を重ねる結果となってしまいました。

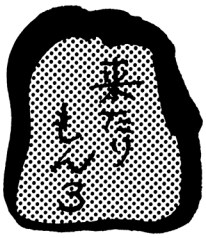
――そうですか。今日は五十年前の仙川について大変詳しくお話しして下さってありがとうございます。最後に何か一言お願いします。

中野　先程も申しましたように、書道は好きで始めたのではないのです。皆さんのためにという、何か自分の使命として考え、勉強し続けてきました。ですから壁に突き当るということはなく、今日まで続けてきました。仕事とはそんなものだと思いますが、どうでしょうか。

半世紀の歳月は、この土地をすっかり変えてしまいました。それはそれでいいのでしょう。美しい住宅地としての発展をただただ願うばかりです。

（聞き書き・小沢基弘）





私と仙川

母娘四人の戦中・戦後の暮らし

菊池溶子

昭和一六年の秋、開校まもない山水高等女学校（現在の桐朋学園）一年に私が転校してきたことが縁で私達家族は仙川に住みつくことになりました。当時、父は海外勤務で、母は、私を頭とする娘三人の教育のため、家を建てる候補地を探していました。すると、たまたま学校に隣接する畑をそっくり売りたいという農家があり、母は三百坪で充分と二の足を踏んだのですが、結局ドッサリと土地を背負わされる羽目になりました。戦争中で、物資も人手も不足していましたが、母はあちこち駆け回って半年ばかりで新居を建て、翌一七年の真夏、私の十四才の誕生日にこの仙川に引越してきました。

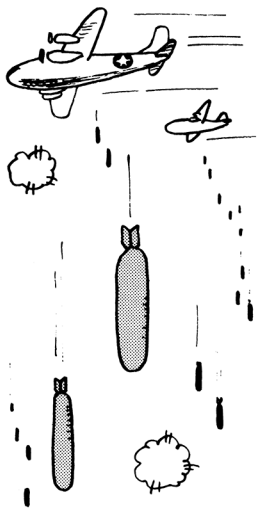
荷物も片付き、心ばかりのお祝いの膳を、と始めた途端、カチンカチンと音をたてて吸物のお椀の中に大きな黒い虫（あとでカナブンと知りましたが）が飛び込んで来ました。ゾッとして上を見上げると、灯に大小無数の虫が群がっているのです。都会生活しか知らなかった私たちは鳥肌立って食事どころではありませんでした。戦後に殺虫剤や網戸が普及するまでは、蚊やブヨを始め様々な虫に悩まされたものです。雨戸を締め切って、蒸し風呂の中で頑張ったり、蚊帳の中で勉強したり、夕食までしたことすらありました。灯を消して蚊帳の中で涼んでいると、何処からか迷い込んできたのでしょう、蚊帳の外では蛍がチカチカと頼りない青白い光りを放ち、私が捕まえようとすると、風に吹かれるようにまた何処かへ消えてしまうこともありました。

当時、仙川の駅から桐朋までの道筋は、こんもりと繁った樹木に囲まれた立派な門構えのお邸が左右に二軒づつありました。後にそれは根岸さん、高柴さん、石坂さん、そして工藤さんのお住まいと分かりましたが、とにかく、いつも人気なく静まりかえっており、夜はフクロウが鳴き、母娘四人手を握り合って一目散に家路に急ぐという有り様でした。この道も舗装されていませんでしたが山水に通う生徒達が踏み固めたせいか、まずまずでした。しかし、あとの道は農道のようなもので冬の霜柱が立った後などはぬかるんで、泥田をこぐような有様でした。私達の家の前には中島さんのお邸の、とてつもなく大きな森がつらなっていました。当時の仙川というのは、実業家の武蔵野の別荘とお寺と森と一面の麦畑、そこに新築の山水高女や和光堂が点在しているのどかな田園地帯でした。



生垣が根付き、庭先に芝生もつけて、やっと住まいらしくなったと思った昭和一八年の秋、戦火は激しさを増し、食料不足も深刻になって、私達は準農家に指定されてしまったのです。三反以上の土地を持っている人は、畑を作って自給自足せよとのことで、お米の配給も半年ほど停止され、作ったさつま芋やじゃが芋を供出せよとのお達し

です。家庭菜園すらしたことのない母は途方に暮れ、やっと手に入れた鍬一丁持って千坪の畑の中で泣きたくなった、と今でも言っています。隣近所の農家の人々に習い、真似ごとをして、何とか青々と芋の葉は繁りましたが、いざ収穫となると地中から出てくるのは何と貧弱な筋だらけのおさつばかり。これでは、とても四人の命をつなぐどころか、供出に出せるものなどではありませんでした。それで、日が暮れると母は晴れ着を風呂敷に包み、私がお伴してせっせと農家を拝み歩き、私達の食料や、供出用の「農林一号」というおさつをかき集めました。戦後も二五年位までは食料難の時代でしたが、母の腕も陸稲や小麦や小豆まで作れるまでに次第に上がり、私達はむしパンやうどん、時にはおはぎまで食べられるようになりました。



昭和一九年の秋頃から、B29が何機か東京目指して、私達の上空を銀色に輝いて飛んで行くようになりました。その頃、私の家のすぐ近くに高射砲陣地が出来て、はるか一万メートルの上空で編隊を成して悠々と飛んで行く敵機めがけ、ドカンドカンと華々しく発砲するのですが、とても届かず白煙を花火のようにあげるだけでした。二〇年の東京大空襲の夜は、飛び起きてみると、東の空全体が真っ赤に燃え、パチッパチッとオレンジ色に炎が上がる様子が、ここからもハッキリ見えました。何月何日のことか忘れてしまいましたが、私達の庭、そう私達四人が入っている防空濠の十メートル位先にB29の機体の一部が落ちた時はさすがに生きた心地がしませんでした。空が裂けるとはああいう音を言うのでしょう。キーン、シュルシュルシュー、防空濠の中は土煙が充満し、妹は怖ろしさのあまり「死ぬ！」と叫んでいました。ややしばらくして、怖る怖る私が地上にはい出してみると、庭中がギラギラ銀色に光っているのです。出来たてホヤホヤのアルミニウムの機体が焼けちぎれ、中にはシートのようなもの、英文の焦げた書類が散乱していました。母と私は、まさか中でパイロットが死んでいたら、と覗きこんでみると何の姿も見えないのでホッと胸をなで下ろしました。中型車一台分位ある大きな物が頭上から降ってきたのですから、あと少々のズレで私たち四人の今日はなかったのです。その本体は国領の民家に落ち、一家全滅したと後で聞きました。



昭和29年頃の菊池邸界隈

五月、川崎方面が空襲された夜は、白い光りを放つ丸くて大きな照明弾が空中に浮いていて、ここでも新聞が読めるほどの明るさになったのは不気味なものでした。

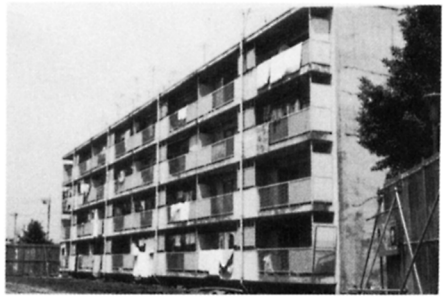
まだまだ怖ろしい体験をしましたが、父も帰国し、八月十五日のばか暑い終戦の日を迎えました。

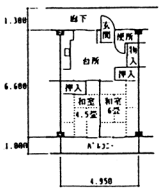
私は二〇年三月に山水高女を卒業し、日本女子大学に入学したことになっていましたが、実際に登校したのは十月からです。それからは、一時間に何台も走らない京王線に乗って、すし詰め状態の通学地獄が始まりました。笹塚から先は完全に焼け野原で、国鉄の新宿駅のホームに立って見ると、四方八方真っ平らで、ここは随分と高いところだなと妙に感心したものです。その後、妹二人は結婚して仙川を離れていましたが、子供が出来たのを契機に、母の土地に家を建て、再びこの地で暮らすことになりました。今年、満九十五才となった母も、足は弱りましたがボケもせず元気で、孫と曾孫に囲まれ、本当に仙川に来てよかった、今が人生で一番幸せと言っています。

（若葉町一丁目）

緑ヶ丘団地三十年

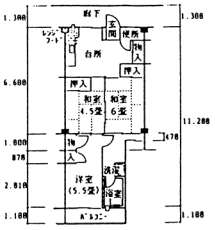
山崎孝市





改善工事前（左）と工事後（下）の外観と間取図





三月、雨の午後廊下や階段の方から子供たちの甲高い声が聞こえて来る。外で遊べず館内を走り廻っているのだろう。

緑ヶ丘団地二八号館二九号室に三十年前入居した日、我が家の子供達が嬉々として、廊下等を走りまわっていた当時が思い浮かぶ。

下町の狭苦しい所から、まだ武蔵野の面影を残したこの土地にきて、子供達よりむしろ、私や家内の方が浮き浮きとした気分になっていたかも知れない。だが、見知らぬ土地で一面識のない人々と新たな地域生活を始めることに一抹の不安もあったが、もって生まれた楽天性、団地の人々皆さんが新天地で初体験だ、下町気質でやってゆこうと思ったら隣近所すぐ親しくなれました。親しくなれば話し合う機会も多くなり、考えることは皆同じ。

入居当初は団地の住環境も整わず、地域社会の公共施設等はまったくなかったのです。仙川駅から団地までの道も雨が降れば泥濘る道で、長靴なしでは歩けない。小学校は若葉小と滝坂小しかなく、第四中学校は市内でも一、二をあらそうマンモス校、共働きの夫婦には子供を預ける保育園もない。浴室もなく、当時は仙川商店街中程の銭湯、三鷹市新川町の銭湯に通うなど大変不便な生活を強いられていました。入居間もなく緑ヶ丘団地自治会が結成され、初代会長の小池常作氏をはじめ自治会役員を先頭に、お父さんお母さん達が東京都住宅局、調布市等に、公衆浴場の誘致、保育園の誘致、小学校、中学校の新設、集会所の増設、学童保育所の新設等々の陳情、要請活動が始まり、以来十年余の間に、居住者の要求運動が実り、種々の公共施設が実現しました。

また、団地内の親睦活動も活発に行われていきました。団地自治会主催の緑ヶ丘小学校の校庭でのラジオ体操、運動会。毎年八月には団地の中央広場で納涼盆踊り、団地祭、秋には文化婦人部中心の文化祭、敬老会等々、千二百世帯全会員参加のもとに生き生きとしたなかで楽しく開催されてきました。

しかし、自治会活動も二十年、三十年ともなると、生活環境の向上に伴い各会員の安堵感と一種の「なれ」的なものが生じて来る。そんな時にかぎって役員同士の意見の対立や個人的中傷による諍いが絶えなかった。その時期数年間、私は事務局長としての要職に就



住宅改善完成記念祝賀祭（平成三年九月）

いていました。各年度の会長及び役員諸氏と問題の解決に奔走したものでした。

その様ななかで、昭和五十年の役員会議の時に、一人の役員から建設省の「既設公営住宅活用計画」なるものを新聞が報道している。当自治会も、一間増設と風呂場の増改築を実現するよう運動を進めようとの提起がありました。早速、役員会で検討され、特別委員会が設置され活動に入ったのですが、増設が不可能とみたのか、活動は終わってしまいました。しかし東京都はその翌年あたりから、浴場のない中高層住宅の改善事業について本格的に取り組みを進めておりました。そうしたなかで、五十八年九月都住宅局の係官が緑ヶ丘団地が「中高層改善計画」に適応するかどうかの調査を実施して行きました。

この調査を契機に、当時の自治会長の故龍野正良氏が、浴室とあと一部屋あったらと多くの居住者が望んでいる、是非とも実現できるように運動をしようと積極的に取り組まれました。会長が先頭に立ち、理事会（代表、議長会）で検討され「住宅改善促進委員会」を結成して誘致運動を開始しました。その後、十年間にわたる同委員会の活動は誠に頭のさがる思いでした。各年度の役員はもとより全会員が敬意を表し、進んで協力活動を行うようになり、草創期のような活気ある自治会活動が復活しました。全員一丸となって、一間増設、浴室新設工事の早期実現に向って邁進し、そうこうして、昭和六十三年に第一期工事が始まりました。多棟数団地の居抜き工事（居住者が住んでいるまま）ということで、都建設関係者、業者、また、我々自治会員すべてが、はじめての経験であり、試行錯誤のなかでの工事でした。

当時、自治会長として三年目の私は、住改委員会の要請で、各号館から世話人を選出し居住者の要望をまとめ、業者との打合せ会を月に一、二回住改委員会主催で開き、工事の無事故、早期完成を目指しました。一期、二期、三期におよぶ大工事が、平成三年十月に関係する全棟で無事完成し、再生緑ヶ丘団地が出来上りました。

住宅改善完成祝賀記念行事も盛大に行い、式典においては、都議、市議、都建設関係者、建設業者及び会員の工事功労者に、自治会として感謝の意を表しました。二日間にわたる祝賀祭には、過去の団地祭に比べてもかつてない多勢の居住者が参加し喜びをわかちあいました。千二百世帯三千人が、この住宅改善工事完成のために心を一つにした活動は、当団地自治会三十年の大きな財産になりました。

この工事の際、資材搬入、車輌乗入れ等、近隣の居住者の方々にご迷惑をお掛けしたことを深くお詫びすると共に、厚く御礼申し上げます。また、祝賀祭の寄付金、会員名簿及び記念誌発行にあたり、広告掲載等多大なるご厚情をお寄せ下さいました団地内外の商店、仙川商店街、一部企業の方々には会員を代表し、重ねて厚く御礼を申し上げます。

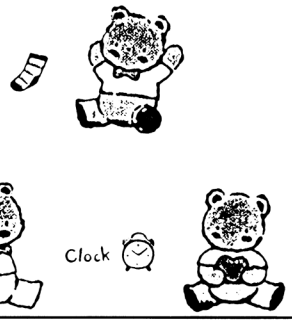
（緑ヶ丘団地自治会長）

あの街、この街、みなさんのしばしんです。

●地元のおひとりおひとりとの長いおつきあいをたいせつに、
明るい窓口でご奉仕を——これがしばしんの合言葉です。

しあわせ、一歩一歩

芝信用金庫　仙川支店　☎3308-8171
182 調布市仙川町2－21－10



心のふれあいを大切にします
ハートの銀行
DKB 第一勧業銀行



●調布仙川支店
東京都調布市仙川町3－1
電話 東京(03)3300－3331

★地元ご発展のために

- 給与・年金の受取りはあなたの銀行－東京相銀－
- スーパー定期－定期預金は今，自由金利の時代です。
- 普通預金・カードローンが1枚で－コンビニエンス－

東京相和銀行　仙川支店　☎3308-7331

◎貯める、◎ふやす、◎借りる、
を通帳一冊にパック。

SUPER PACK

三菱のスーパーパック
お申し込みは窓口へ。

心のかよう結びつき —Linkage—

三菱銀行
仙川支店
〒182 調布市仙川町1-18-37
TEL.(03)5313-4111

地元と共に発展する
永楽信用金庫　仙川支店
お気軽にご相談ください
永楽しんきんの便利な機能をご利用下さい。
- 融資・住宅ローン　・カードローン
  ・個人ローン　・スピードローン
- 夜間金庫・集会室・貸金庫

調布市仙川町1-15-1　各種ご預金のお取扱もいたしております。　☎3326－7001

此の地に生涯を託す

菊地　璋

時として新宿、原宿ではと見紛うばかりのトップドレッサーの女性がバス停に佇むのを見かけることがあります。二十余年の歳月がこうも街を変え、住む人を変えていったものかと、都市化の波の激しさ素早さと云うものに想いを繞らせると、此の仙川台地から成城学園に通じる都道を取り囲むように連なり、そして断続した植木畑となだらかな田園風景、其処此処に点在する雑木林の黒々とした梢、そしてこの道のどの地点に立ち止まっても、視野の中に入らないではいなかった富士の望遠、春爛漫の花の香りとウグイス、そんな絵に画いたような構図が特に珍しくもなく、このあたりの風情としてその辺の何処にでも転がっていました。

昔、原と云う地名で呼ばれ、それが入間村になり、それから入間町、若葉町に区分けされて現在に至ると聞き及んでいますが、春夏秋冬で色とりどりに変化し季節を呼び込んだ畑もスッカリ住宅に埋め尽くされました。特に此処二、三年高層マンションの建築が急増して視界を遮ぎられ、富士の高嶺を拝むのも殆んど侭にならなくなっています。

調布駅から成城学園駅に通じる都道、若葉二丁目界隈のバス通りも、現在では商店、マンションが立ち並び、人の流れも車の流れも盛んですが、かつては閑散とした道路沿いに仕舞屋、事業所、小店などがパラパラと歯の抜けたように見渡せるだけの、もう四月だというのに暖かい筈の春の風が肌に冷たく吹き抜けて彼方に散って行くのが見通せるような、そんな索漠としたものでした。だから私が私の家族と共に、昭和四五年のことですが、この地を安住の極楽浄土として、脳裏に描いた田舎と都会とが融合する理想郷とまでは欲張らないまでも、移り住んでくるのに相当の決断がいったのは当然でした。

私誌抄　その一

しかし、恐らく線引きされ区画整理され、縦横に整然と行き届いた通路道路を構え高級住宅街としてその名を馳せた成城学園、野放しの発展を余儀なくされたにしろ、同じ地続きの同じ条件を兼ね備えた我が仙川、東に仙川の清流、西に野川の清流を控え、晴れた日には遠く丹沢山塊、そして新宿の夜景までもがクッキリと手に取るように眺められる此の高台に生涯の願いを込められた方は、矢張り一人、私だけではなかったようです。私達が移り住んでからというもの、見る間に、正に急速度で街の風景が変っていきました。

実は私、永年自治会の御世話を末席で御手伝いをさせていただいておりますが、手元の資料で判断する限り、若葉町だけに限りますが、ここ十年来殆んど世帯数に増減がありません。慶弔費の支出でみますと、出産祝費の年々の漸減に対して、敬老祝費、それに残念乍ら弔費の支出がますます増える傾向です。この街も既に爛熟期から老齢の域を迎える街に達してしまったのでしょうか。

私がまだほんとに青臭い頃に読んだ武者小路実篤の私小説の中で、著者が仙川に移り住んで間もない頃の広大な自宅の庭の描写がこまごまと書かれていて、たまたま通りかかった私が、あまり実景とピッタリ当嵌っているのに感動したことがありましたが、実篤さんも此の仙川台地に生涯の想いを託した一人だったのでしょうか、その頃の開発途上の初々しい仙川の情景が緻密に描かれ謳いこまれていたように記憶しています。

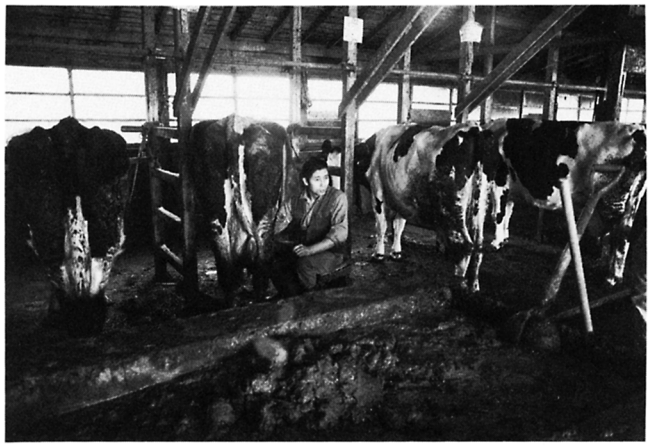
（若葉町二丁目）



しごと 1

仙川酪農事始物語

田辺喜勝



「調布は酪農の盛んなところだったんですけどね」
仙川地区最後の酪農家山内鋭治さんは語る

仙川地区の酪農は、昭和三年頃に仙川に一人の酪農技術者が来訪したことによって始まった。

この人の名前は和田さんといい、新宿の中村屋がパン作りに必要な原料乳を確保するため、現在の正栄食品の駐車場（三鷹市新川）に「中村屋プラント」の名前でオープンした牧場の責任者として札幌の牧場から招いた人物である。

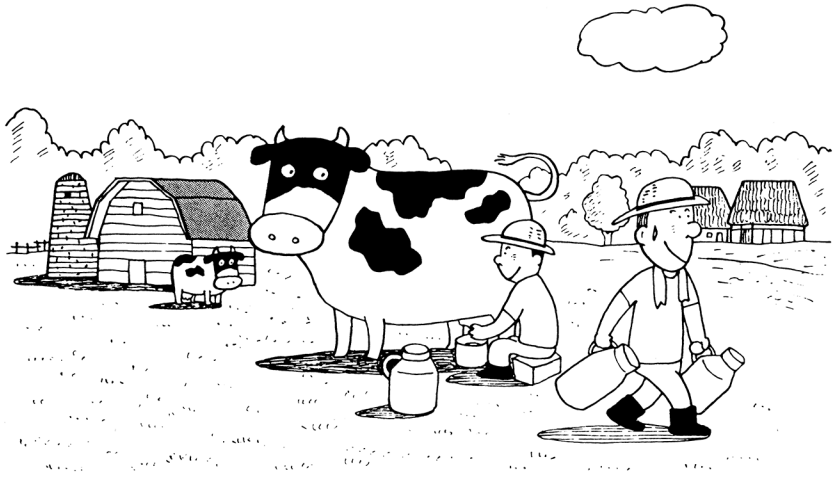
和田さんは、畑の肥料を自給出来ずに新宿の方まで買いに行っていた仙川の農家を見て、「牛を飼えば畑の肥やしを自給出来るうえ、時間の節約にもなる。一挙両得だ」と彼らに助言し勧めた。その時、和田さんと農家の人達の間を取り持ったのは、中村屋プラントに土地を提供した斉藤喜重さんであった。

ほどなくして、仙川の農家層の人達も酪農を始める決心をするのだが、いきなり成牛を買って始めるには経験もないしお金もかかる。その時、和田さんは「種はうちのをやるから、始めは仔牛を買ってきてそれを育てればいい。」と言ったという。当時から酪農が行われていた忠生村（現在の町田市忠生）へ仔牛を買いに行き、十五戸ほどの農家が酪農をはじめるようになる。こうして、北多摩地区初の酪農が始まった。昭和七年のことである。

仙川地区で始まった酪農は、北多摩地区内で拡がっていった。しかし、盛んになったとはいえ、その実情は、決まった出荷先もない不安定なものであった。そこで、定期の出荷先を確保すべく、酪農の組合「北多摩酪農」を結成し、甲州街道沿いに事務所と出荷所を開設した。仙川地区のみならず、立川、拝島や多摩霊園の方からもリヤカーを引いて出荷に来る酪農家がいた。これが昭和八年のことであるから、酪農産業の環境作りは早いピッチで進められた。「西多摩乳牛」始め、出荷先を幾つか変えながら、昭和一七年頃には「キノミール」全盛時の和光堂へ出荷していた。

戦時中は、食料統制が行われ、主に野菜生産。餌も手に入らず、酪農は下火となる。

戦後しばらく経つと、食料統制が解除され、北多摩酪農は再び酪農市場に乗り出す。しかし、それは決して楽な再スタートではなかった。組合ではなく個人で大手メーカーと出荷の契約を結ぶ酪農家が現れ始めたのであった。そんな状況の中、北多摩酪農は自社製品として「都牛乳」の販売を開始する。仙川、三鷹、昭島、東久留米、国立、飛田給の酪農家がこれに参加した。また、仙川の田辺さんは商店街（現在のジーンズショップ陸右



エ門の場所）に牛乳店を出し、都牛乳の直接販売を始める。

しかし、せっかく配達の契約を結んで配達を始めても一～二カ月で他の大手メーカーに鞍替えされてしまうことが多く苦労が絶えなかったという。なお、この頃の北多摩酪農は、搾った牛乳の加工を西多摩乳牛や全酪牛乳へ委託していた。

販売数の伸び悩みとともに、牛の餌不足も悩みの種であった。餌さえ確保出来れば、牛の頭数を増やし、それだけ多く出荷出来る。また、当時は月三万円で一家族が暮らせた時代である。酪農家にとっては牛を三頭飼えば入ってくる金額であるが、それを五～六頭に増やせば、月に十万円の収入が見越せたのであった。何か餌になるものはないか、と北多摩酪農の人達はしきりに考えていた。そんなある日、田辺さんはウサギやヤギの餌とされていたオカラを牛にも食べさせてみると、実によく乳が出た。豆腐屋にしてみても、オカラの処分に困っていた頃であるので大助かりである。以来、毎日、バイクに乗って成城の豆腐屋までもらいに行った。次第に、他の豆腐屋からも取りに来て欲しいと請われ、バイクでは回収しきれず、自動車を購入したのであった。

昭和三十年頃、この地区で牛乳を取る人は、赤ん坊に飲ませるか、健康に気を使う人ぐらいなものであった。国立の方も含め、二百本位配達していた。当時、牛乳一本の値段が十二円。まだまだ高級品であった。

昭和三一年には東大、早稲田、中央などの学生生協に納品するようになる。最盛期には一校につき、多くて五百本ほど卸していた。一般家庭への配達では大手メーカーに太刀打ち出来ない都牛乳にとって、大学生協は大事な顧客であった。しかし、明治大学での販売権利を手に入れた矢先、多くの大学が「大学牛乳」の名で一本十円の牛乳を販売し始める。都牛乳の卸値は一本十円六十銭、販売価格は一本十二円で設定しており、大学生協の販売から撤退を余儀なくされた。これにより、都牛乳の経営は大きく傾いた。その後、大きな販路を見出せぬまま都牛乳は有名無実化してゆき、昭和三十年中頃、ついに破産となり、その歴史が終わるのである。

都牛乳がなくなると酪農家の数は減り、その土地が住宅や団地になっていった。人口が増加し、宅地化が進められる中、酪農・農業ともに減少していった。そして、唯一残っていた若葉町の山内牧場も、昭和六一年を最後に、乳牛の飼育をやめて肉牛へと切り換えた。この仙川で昭和七年に始まった乳牛の飼育は、五十四年間続けられた末に幕を閉じたのである。

（聞き書き・松尾　琴）



せんがわ農業の担い手たち

本誌３号（昭和54年１月）所収

1、この地で、いつの年代から農業を営んでおられますか。あなたは何代目ですか。
2、農業を行なうことの楽しみは何でしょうか。その喜びや生きがいを教えて下さい。
3、農家としての伝統的な正月行事、習俗を教えて下さい。イ、今もされていることでは。ロ、今はされていないことでは（いつ頃までされていたかもお知らせ下さい）。
4、この地（仙川・入間）での昔からの農業の歩みの中での大きな変化、出来事は？　お父さん、おじいさんから伝え聞かれたことも含めて下さい。
5、生産物の主な出荷先はどこですか。もし、せんがわに朝市（週一回ぐらいの）が立つ様になって直売りできる場ができれば、あなたは参加されますか。
6、あなたの農地の現況は耕作に適していますか。また、通勤農業についてはどうお考えになりますか。
7、せんがわのこれからの農業の展望はいかがですか。どんな考えをお持ちでしょうか。

緑ケ丘

■伊藤吉五郎（76才）野菜

1私は大正十年から。四代目。2感情的にものを言わない大自然を観察しつつ、作物の成育を助け、農作物を収穫すること。3イ、餅をつき神佛に鏡餅を供え、家族揃っておぞう煮を食べる。ロ、親戚一族が日時を決めて集まり順番に新年宴会が続いた。終戦後に消滅。4幕末から明治初年にかけては天秤棒をかついで新宿・四谷方面へ飼料運び（祖父の話）。明治十年頃荷車が初見え、つづいて馬車運送が出現。大正十年頃貨物自動車が現れる。この頃より農作物も米・麦・粟・ひえ・養蚕から野菜作りに転じ、現金収入を目指すようになる。昭和四十年頃から宅地化が進行し農村が大変化。5出荷はしていない。参加は考えてみる。6周囲に立木・家屋が接近し風通しが悪いため適さない。7物価高と増税で収益的には無理。最善の努力で生甲斐ある生活を続けたい。

■宍戸義男（58才）苗木

1十代目位。2自分で栽培して収穫できること。自然に親しむこと。3イ、神棚にしめ縄をはり鏡餅を供えお灯明と神酒をあげ新春を祝う。4昔は新川の丸池から湧き出る清水で水田を耕作したが昭和三十八年頃より急激に水が汚染され稲作は皆無となった。6適している。7人手がないこと、宅地並課税で収益が上らぬことなどで農業経営はなりたたない。

仙川町

■富沢清太郎（32才）野菜

1大正の初めからで2代目。祖父は大工。2作物がよく出来た時がうれしい。でもよく出来た時は安くて又こまるけど。3特になし。4個人的なことだが、昭和四十年～四十三年頃にかけて、緑ケ丘の農地を売って埼玉の金子（八高線沿線）に畑を購入したこと。5世田谷市場。6ほぼ毎日、車で一時間かけて通っている。通勤農業でガンバッテいきたい。7益々、都市化が進んでいくだろう。無農薬野菜を！といっても市場に出すのは実際は難かしい面がある。

■森屋次郎（63才）野菜・果物

1徳川時代から2もうかる仕事ではないが時間に拘束されないこと、また作物の成長が楽しみなこと。3イ、特別なものはないが、個人的には、三ヶ日に神棚に鏡餅、ぞうにを供え燈明をあげ、七日に



スケッチ　栗田行雄

七草がゆを十五日には小豆がゆを供える。ロ、戦後はなくなったが、冬至の日に「お日待ち」の行事、また「雨ごい」の行事などがあった。さらに農作業の休暇日などもあった。4徐々にではあるが、田畑が少なくなってきたこと。5世田谷青果市場。直売りは、現在、個人的にやっているが、農作業が忙しくて専念することは出来ない。6現在、通勤農業を行なっている。7税金が高く仙川は農業に適さない。故に埼玉へ通勤農業をしている。個人的には後継者もいる。

■斉藤喜太郎（46才）ブドウ（観光園）

1安政時代から五代目2四季を通じて各種の植物が栽培、収穫でき、また、その過程で自然の恵みを受けながら、その生長ぶりを見守っていけること。5ぶどう狩りをしているので出荷はしていない。直売には参加しない。6高層マンションが隣接しているため、耕作に適しているとはいえない。通勤農業については、自家労働力が少ないので、困難である。7土地税制に重大にかかわっていると思われ、この税制次第である。後継者問題は深刻である。

■浜島与志雄（40才）鶏卵

1明治時代から2、3代目2播種～収穫までの作業の成果。4自家米として耕作していた田が、昭和三十年代に入り、生活汚水の用水流入の為、耕作不能となった。5わからない。6宅地の中で箱庭的立地条件にあるため病虫害も多くひじょうに不利である。通勤農業については考えていない。7都市化に伴う農業環境の悪化、農地の宅地並課税等、農業生産性を無視した状況の為、これからの農業経営は極めて厳しく、農業そのものの存在を悲観視している。

■田中鈴太郎（60才）野菜

1幕末当時から2先祖代々より受継いだ土地で汗と努力により野菜栽培する喜び3イ、近所の7、8世帯で協力し合って餅つきをすること。ロ、17、18年前まで毎年十二月二十日頃から各家庭を廻り昼夜にかけて順に餅つきをする。そして一献かわす。4都市化が進み、河川は汚染され通風が悪くなり農業経営がむづかしくなった。5都内中央市場が多い。調布市農業祭でも直売りをしている。朝市も尚結構と思う。6農業環境が悪くなったことや後継者等の関係で耕作がむづかしくなった。7農地はあくまで農地課税で。

■伊藤義男（39才）野菜

1約二〇〇年前。江戸時代中期。六～七代目。2収穫の喜び。自分で作る喜び。3イ、元日八幡神社へ初詣。4農地の宅地化。5世田谷市場。参加したい。6大いに適している。7宅地並み課税で農地は減るでしょうが、将来の食糧危機に備えできるだけ農業を続けたい。

■川口三八（45才）鶏・ぶどう・野菜

1元禄13年頃より。2種をまく瞬間と収穫のとき。束縛されない気軽さ。3イ、戦後大部分省略化され今では特別ない。ロ、余り記憶にない。4大正時代より野菜作りが始まる。戦時中、食料の強制供出。戦後は23年の農地改革。最近では農業の機械化されたことと農地の宅地化。5市場及び自家売り。参加したい。6耕作は次第にやりにくくなっている。通勤農業も採算的にはむつかしい点も有る。7展望は暗い。その理由は、宅地並課税の実施と相続税の高率化。出来うる限り農業は続けたい。

■伊藤強（31才）野菜

1 11代目4大正14年まで養蚕で以後そ菜に変る。緑ケ丘（旧向山）は昭和34年頃まで水田や畑であった。5東京新宿青果松原分場。参加する。6耕作に適している。7首都圏近郊都市として都市化の傾向にあり、今後農業は固定資産税の宅地並み課税等により困難な状態になってきた。せんがわの農業も一部を除き全滅に近くなろう。

■川原武次（65才）自家消費用のみ

1徳川三代（寛永）の頃からで十一代目。2今は自家用の野菜をつくっているだけですが、やはりおいしく安心して食べれます。3イ、一日初もうで、七日七草、十一日蔵開き、二十日えびす講。ロ、三日初荷、十五日精の神（まゆダンゴを飾る）4明治三十年頃の中央線の測量反対運動ー当初甲州街道沿いが予定されていたが、当時養蚕が盛んで、蒸気機関の石炭煤煙が桑畑を汚すということで反対。京王線は電車で煙をださないから賛成し、



大正二年開通した。大震災前後の養蚕からそ菜生産への転換と篤農家や実行組合の活躍。5今は家庭菜園（別名七色畑）だから出荷はしていない。余れば近所の人達にあげる。7農業だけでやっていくのはむづかしい。農作物から工作物（貸しビルやマンションなど）でやっていくことに変わっていくだろう。

■川原鉄弥（59才）野菜

1 15代目くらい。2作物の成長の様が何んとも云えない。また時間にしばられず、自分の思うままに仕事が出来ること。3イ、一般的なものしかやっていない。4農地が少なくなり、宅地化が進んだこと。5世田谷区内の市場。直売りには参加すること。6農地が住家に近く、耕作に最適と思う。通勤農業については厳しいと思う。7住宅が増え、次第に農業がやりにくくなり、なんだか悲しい気持です。

若葉町

■山内鋭治（49才）牛乳（山内牧場）

1江戸時代初期より十八代。2先祖代々の土地を守り食料生産する喜び。3イ、正月三ケ日は男が朝早く起き、東の方から樫の枝を折ってきて、それを薪におぞう煮を作り神棚に供える。ロ、おぞう煮の箸は樫の木を割って作り、神様に供える時は毎回新しいのを使う。一日十四日はまゆだんごをつくった。4（父から聞いたこと）京王線ができたこと。東京より寺が移ってきたこと。和光堂ができたこと。（私の経験）住宅の進出。ビニールハウスの始まったこと。5名糖牛乳。朝市などはよいと思う。6大変良い土地。通勤農業は考えない。7消費地での生産は有望。ただし税金が安ければ。

■清水勇雄（46才）野菜

1九代目。3イ、元旦には男が初水を汲み神様にお神酒とお明りおすわりを供え、家内安全を祈る。ロ、一月十四日にはまゆ玉を作る（おかいこ、農作物の豊作を祈願）。十四日朝日の昇る頃、前日につくった災の神（竹で家のようにつくりワラで覆ったもの）を前年度のお札等を一緒に火につけて焼く。4昔は養蚕・米・麦・さつまいも等が主。水田は二十年位前に宅地化。5世田谷荏原青果市場。朝市の参加は分らない。6普通。調布市外にも農地はあるが手不足で耕作しておらず通勤農業は不可能。

入間町

■清水正男（50才）洋蘭・野菜・植木

1十三代。2汗水たらして野菜等の出来栄の良い時。知人に花や野菜をあげて喜ばれる時。3イ、新藁でしめ縄を作り住宅、土蔵等に飾る。一月十四日には歳の神といって前年のしめ縄を焼く。ロ、子供の頃には三河万才がまわってきた。最近は農家で門松を飾る家が無くなった。4農協の設立。農地減少宅地増（昭35年以来）。農地の宅地並課税。5洋蘭は世田谷区用賀、青山生花市場。野菜は世田谷区用賀青果市場。植木は仙川昌翁寺。6大消費地に近いため蘭作りには適している。7新鮮な野菜の供給、快適な都市空間緑地を提供し市民と一体の発展を期待。

■清水正芳（52才）植木・野菜

1八代目。3イ、三ケ日神様に朝夕あかりをあげる。5参加する。7税金問題しだいである。

■栗山清治（35才）野菜

1昔から。2土地を守る。3イ、市場の初荷。4最近は農業がやりにくくなった。5参加する。6家の近くに農地がまとまっており耕作しやすい。7仙川の近くはやりにくいと思う。

■小島利和（43才）野菜

1八代目。2収穫の時。3イ、しめ飾りを飾りおぞう煮を食べる。4養蚕から野菜に変った。5丸大松原。参加を考える。6まあまあ。7先の望みは薄い。

■鈴木寿夫（49才）野菜

1六代目。2収穫。3イ、男が女より先に起きて神様にあげる雑煮を作り、三ケ日そなえものをする。4作物が変ってきたこと。おこさま（カイコ）からせんざい（そ菜）へ。5参加する。自家売りもしており、イチゴなどは量も少ないこともあり、全て自家売り。6適している。別に考えていない。7先ぼそりになると思う。

■資料篇

「せんがわ」の農業の歩み

●江戸時代初期（十七世紀前半）の石高（合計）（田方）（畑方）

下仙川村百七〇石、九一石、七九石
入間村　二四九石、一三一石、一一八石
合計　四一九石、二二二石、一九七石

〈資料〉「武蔵田園簿」――十七世紀前半の生産状況を伝える徳川幕府編纂の村別石高表。掲載の値は石未満を四捨五入したもの。

●江戸時代後期（十九世紀前半）の農地の状況

下仙川村　「水田少く陸田多し、土性野土……」
入間村　「土性黒野土民戸八十三烟、陸田は居宅につきて開き水田は村の中央にあり……」

〈資料〉「新編武蔵風土記稿」――文政十一年（一八二八）徳川幕府が編纂した地誌で、各村の歴史・地理・産業等を紹介したもの。

●江戸時代後期（十九世紀前半・天保年間）農家戸数

下仙川村　四四戸
入間村　八〇戸
合計　一二四戸

〈資料〉「武蔵野歴史地理」――昭和三年に高橋源一郎が編集。武蔵野の各村落につき資料収集、実地踏査を行ないまとめたもの。ここに掲載した数値の出典は不詳。天保五年（一八三四）の全国人口調査によるものか？

●江戸時代末期（十九世紀中頃）の石高

下仙川村　四八四石
入間村　三三八石
合計　八二二石

〈資料〉「旧高旧領取調帳」――明治初期（九～十四年）に内務省が旧幕藩の石高を調べたもの。掲載の値は石未満を四捨五入。「武蔵田園簿」の値との比較から江戸時代の二百数十年間の生産高の伸び（約倍になっている）が分る。

●明治初期（十九世紀末期）の農地・農家の分布状況

（略）

〈資料〉「地方迅速測図（布田駅）」明治十～二十年に陸軍参謀本部が発行した一連の二万分の一地図。当地図は明治十三年の測量。当時の農地・農家分布がよく分る。　資料所在―㈱大日本測量

●明治末～大正時代（一九一〇年代）の蔬菜栽培開始の状況

「例えば（中略）神代村に於て、蔬菜の栽培を主とする地区は、東京市に近き東部の下仙川・入間に過ぎずして、栽培年代は今より十数年前のことなり。即ち、今日に於ては、入間の如き九十四戸中其半数は東京向の蔬菜の栽培に従事するも、今より五年前迄は二十戸内外に過ぎざりしなり。」

〈資料〉「帝都と近郊」小田内通敏著　大正七年（一九一八）刊。明治末から大正初期にかけての東京西郊＝武蔵野台地の市街化進行状況や農村の変化の姿を実地踏査により描写・記録している。

●昭和十三年（一九三八）の農地分布

（一四二頁地図参照）

〈資料〉「神代村土地宝典」帝国市町村地図刊行会発行。当時の神代村の各字別に筆割・地籍を詳細に記録。主な施設についても記入され、この頃の地域の様子がよく分る。（資料提供　川口三八氏）

●昭和五十年（一九七五）の世帯・人口

（世帯）　（人口）

入間町一、八六三世帯　七、〇五一人
仙川町一、七三八世帯　四、九五一人
緑ケ丘二、六三一世帯　八、五七四人
若葉町一、七〇一世帯　五、一九三人
合計七、九三三世帯　二五、七六九人

〈資料〉「昭和五十年国勢調査東京都区部区市町村町丁別報告」より集計

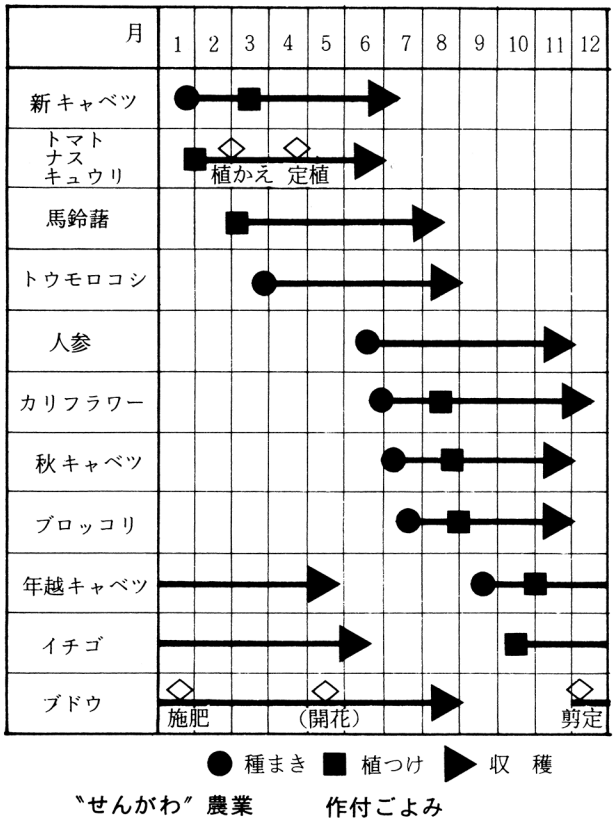
●昭和五十三年（一九七八）の農家戸数

（戸数）　（農業専従者）

仙川支部　三二戸　三七人
※入間上支部　二九戸　二六人
※入間下支部　四戸　六人
合計　六五戸　六九人

〈資料〉「昭和五十三年度調布市農業経営調査」より。（※「せんがわ」地区のみ）

（山岡義典）



〝せんがわ〟農業　作付ごよみ

しごと3

和光堂東京工場ヒストリー

原田亮一

東京工場建築概要

敷地実測　四、六七九坪　六八

建築物

第一號　事務所　鉄筋コンクリート二階建　二〇四坪一

第二號　作業場　同　平家建　三四五、〇

第三號　作業場　同　同　一八八、〇

合計　一、二七六、六五

建築工程

起工　昭和六年八月二十二日

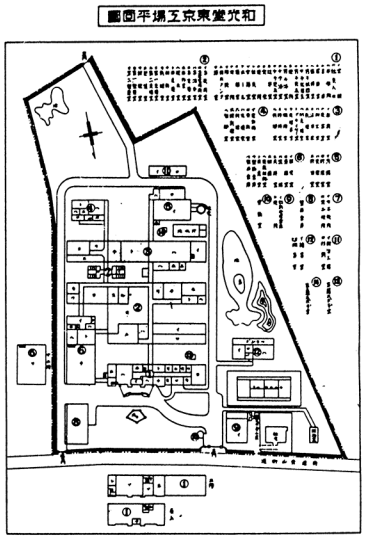
上棟式　昭和七年一月二十五日

竣工　同　五月三十一日

設計監督　當社營繕部

工事施工

建築工事　大倉土木株式會社



出所　和光堂東京工場
『新築記念帖』
（川口三八氏提供）

今回図らずも、タウン誌『せんがわ21』より原稿の依頼を受け、貴誌創刊の頃はもとより、自らの二十年余の仙川での生活を懐しく想い返しながら筆を把りました。

先ず、工場の外側より日頃住民の皆々様のお目にとまったであろう、設立以来の工場の小史を記してみましょう。

昭和七年五月　北多摩郡神代村北野に和光堂東京工場が新設され稼動開始。

この近代的工場は昭和九年七月には、東京府下に於ける優良工場として、時の監督官庁である警視庁より表彰を受ける。

昭和十一年七月　噴霧乾燥装置棟新設。

昭和二十年六月　戦災により焼失した旧淀橋工場内の研究所を東京工場に移設。

昭和三十八年十月　都道沿い敷地西側にシッカロール製造新設備棟完成。其他の製造設備も漸次自動化を計る。

昭和三十八年十一月　従来の石炭ボイラーを廃し、自動重油ボイラー新設、之により煙突よりの排煙量減少。

昭和四十三年八月　新噴霧乾燥装置棟新設稼働開始。

昭和五十九年七月　旧テニスコート跡に鉄筋コンクリート三階建ての新研究所建設、研究部門の一層の充実を計る。

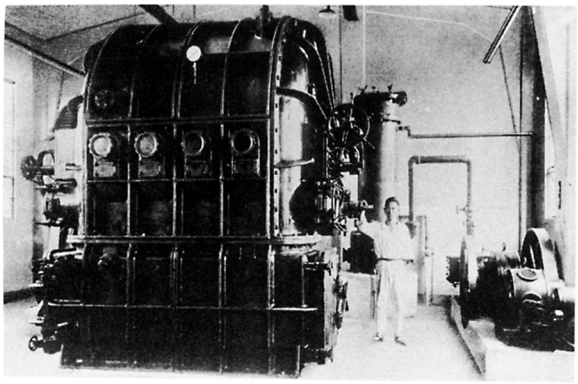
平成四年十二月　旧シッカロール工場撤去、物流倉庫、工機作業場新設。

さて、私が仙川の東京工場に新入社員見習実習として初めて訪れたのは昭和二十九年二月のことでした。

まだ、仙川駅の改札口が商店街から甲州街道に至る跨線橋上にあった頃で、商店街と言えぬ僅か十数軒のお店と、生垣に囲まれた住宅等が混在した淋しい通りで、駅を出れば工場の煙突はすぐ目に入るものの、工場正門に至る道などは無く、一面の麦畑の中に狭い農道があっただけでした。

そして昭和三十二年四月、本社より工場に転勤を命ぜられ、工場裏の社宅に妻と二才の長男と共に移り住んだのが、私と仙川との長いつきあいの始まりでした。

その頃、上司先輩より聞いた工場新設当時の話の幾つかを記してみましょう。



アール・デコ風のデザインが美しい機械



会議室

当時、旧工場は新宿淀橋にありましたが、徐々に商業地区に移行しつつあり、今後此の地域での生産活動は困難になるであろうとの予測から新工場建設予定地を物色していました。仙川は、新宿からも近く、台地上にあって清潔な環境にあり、奥多摩水系の豊富な水量を誇る地下水を有し、更に純朴且つ協力的な地元住民の皆様の温かい心情にも触れ、直ちにこの地に工場建設が決定したとのことでした。

従って、工場完成後は地元の方を優先的に採用して地元との結び付きを濃くして来たので、昭和三十年当時でも、親類縁者が多い上、既に親子二代で勤務している方達もおられ、至って家族的な雰囲気に包まれていました。

又、とかく問題を起こし易い工場排水については、工場敷地内において先ず処理を行った後、排水管は工場裏の社宅の路地を通し都道の地下を横断、当時の従業員の運動場（現神代高校敷地）の東南隅にて直角に西南隅まで走り、更に当時の農道である坂道の下を通って、現在の若葉小学校付近の水田用水路に放流、最終は野川に至っておりました。

当時の生産品は主として農産物加工食品類で、排水による水質汚染は少ないと考えておりましたが、現地の農家の方々にとっては排水が農産物に及ぼす影響への懸念もやはりありました。そこで現実に被害が生じた場合の補償の問題、水路の年間清掃料としての応分の支払い等の取決め等もしっかりと約定していたところ、排水がかえって農作物に好影響を与えて農家の方々に喜ばれる結果になったと聞いております。

こうした地縁に恵まれた地域社会との結び付きが現在まで続き、操業以来に六十年余無事に過ごせたものと嬉しく思っております。

排水路についてのもう一つの思い出は、昭和三十五年頃だったでしょうか、神代高校庭の東南端より若葉小に至る未舗装坂道の中間地点で、道の下に排水管が通っている事を知らないトラックが、その土管を踏み壊して大騒ぎになったことがありました。然しこの事故により舗装も完成し、以後問題も起きませんでした。

旧いことばかり書いていましたら、既に与えられた紙数も尽きかかってしまいました。

最後に私事を少しばかり書かせて頂きます。

仙川での最初の十年間は工場裏社宅、昭和三十五年からの九年余は神代高裏の借上社宅で生活しましたが、山内牧場から若葉小に至る辺りの雑木林と径は、当時絶好の散策コースで、子供達をつれて自然の息吹きを満喫したり、種々と学ぶ事も多かった場所でした。最近ふとあの付近を通ってみましたら、昔の俤は一変してしまっているのに驚き、且、嘆き悲しんだ次第です。

その当時この辺りでの俳句作品を幾つか拾ってみます。

涼しさのつぶやきはふと暮鳥の詩
泣き濡れて木の実拾ひし日の記憶
日当りに木の実と戯るる猫の知恵
駈くる子の径どこ迄も百舌の昼
枯葉からから噛みしめている子との距離
虫の死や枯れ極まりし地の素貌
児と母の対話に春の色あつまる
木の実落ちまろびそを追う子よ吾子よ
焚火はぜをり嘘美しく聞いてをり
冬木遠し懐して愚夫愚妻

（元東京工場長　元常勤監査役）

の製造業

堅いもの

㈱萬平製作所

仙川町３－５－２　（307）1211

●プロフィール●

昭和12年に下高井戸で木ねじ製造を開始し、14年に仙川工場新設。18年に株式会社設立。業務は①ねじ製造販売、②鋲螺釘製作用機械工具の輸出入と販売。主製品の十字穴付ねじ及特殊ねじの生産能力は 6.5 億本、アメリカ、カナダ、オーストラリア等への輸出が約45%をしめる〝国際商品〟。最近は接着材の進歩で、ねじの使用量が減っている。従業員の半数が自転車通勤、まさに仙川の地元企業です。







ネジの素材

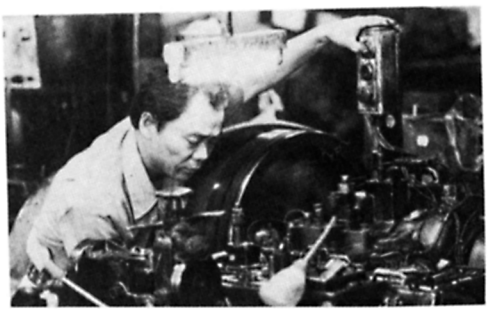
製造プロセス

実篤さんの書



半製品





計量から箱づめへ



最終製品



本誌12号（昭和60年12月）所収

せんがわ 来かいもの

月兎ソース㈱

入間町１－35－11　(484) 3322

●プロフィール●

昭和37年に脱農業を志ざし、杉並にあった老舗の〝月兎印〟を買収し、創業。昭和39年に株式会社へ。業務は、①ソース・ケチャップ・酢類の製造、主に学校給食・産業用に納品。調布市内の全小学校がＧＥＴＴＯの無添加ソースを使用中。②総合食品卸売。スーパーにある食品は全てそろっている。地元の方々の共同購入大いに歓迎しますとのこと。

カメラ　丸井　潤



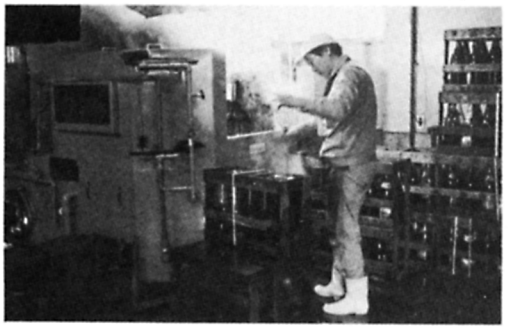


社長の清水一男さん



製造プロセス

びん洗い





一次貯蔵用木製タル

びんづめ



製品群



しごと 4

仙川商店街と共に四十年

岡部敏英



開店当時のサンエー薬局

私が脱サラを決め、不動産屋の口車にのり、仙川に薬屋をひらいたのは昭和二十九年の春、数え年三十二才でした。

当時仙川は根岸、石坂、高柴の三家の広い敷地と、農家との間に点在する新興商店街でして、西側は何とか商店らしい体裁がありましたが、東側は空き地が多く車が自由に擦れ違うことが出来ました。

商店主の多くは、地元の方、或いは何か縁故のある方で、全くのよそ者は私が初めの方であったと思います。何処と何処とが親類であったということの知らぬ私の、何気ない言葉がもう本人の耳に知れわたっていて驚いたものでした。

水は井戸を汲み上げ、火は石油コンロ、下水管は無く、吸込みという井戸みたいな穴から地下に浸透させ、ゴミは庭の隅に埋め、風呂はミルクや蚊取線香の空き木箱を燃して沸かしていました。

当時の地番は北多摩郡神代町字下仙川と言いました。

商店会の会長さんは西村呉服店さんで、私も若く青かったのでしょう、会合で口をはさんだ結果、平井下駄屋さんから、大福帳を渡されて、会計というポストを押し付けられ、会費を微収しても、街燈の電気代の支払いに、ことかく始末で、やりくりの連続でした。

暫くして、今のビリヤードさんのところに風呂屋さんが出来、風呂にくる客を相手に夜の商売も効くようになり、大島土地（若葉町一丁目）の分譲、若葉町都営住宅の新設等でだんだんと人口も増え、石坂家、高柴家、農家の伊藤さんの敷地の開放と共に、新しい商店が新築売り出され、商店街らしい体裁が整い、さらに緑ヶ丘団地が出来て、商店にも活気が出て、一時は食料品店では、行列しなくては商品を買えぬ程でした。新興商店街の基礎がこの時代に出来、そして成熟時代へと移っていったのでしょう。

やがて、西友、丸正、京王ストアの大型店進出の時期を迎える事になりましたが、おかしな事に、反対は勿論ありましたが、商店街は意外にこれを素直に受入れたようです。勿論、食品関係のお店は、相当の苦労もされ努

昭和２９年当時の商店街



（岡部氏の原図に編集部調べを加筆）

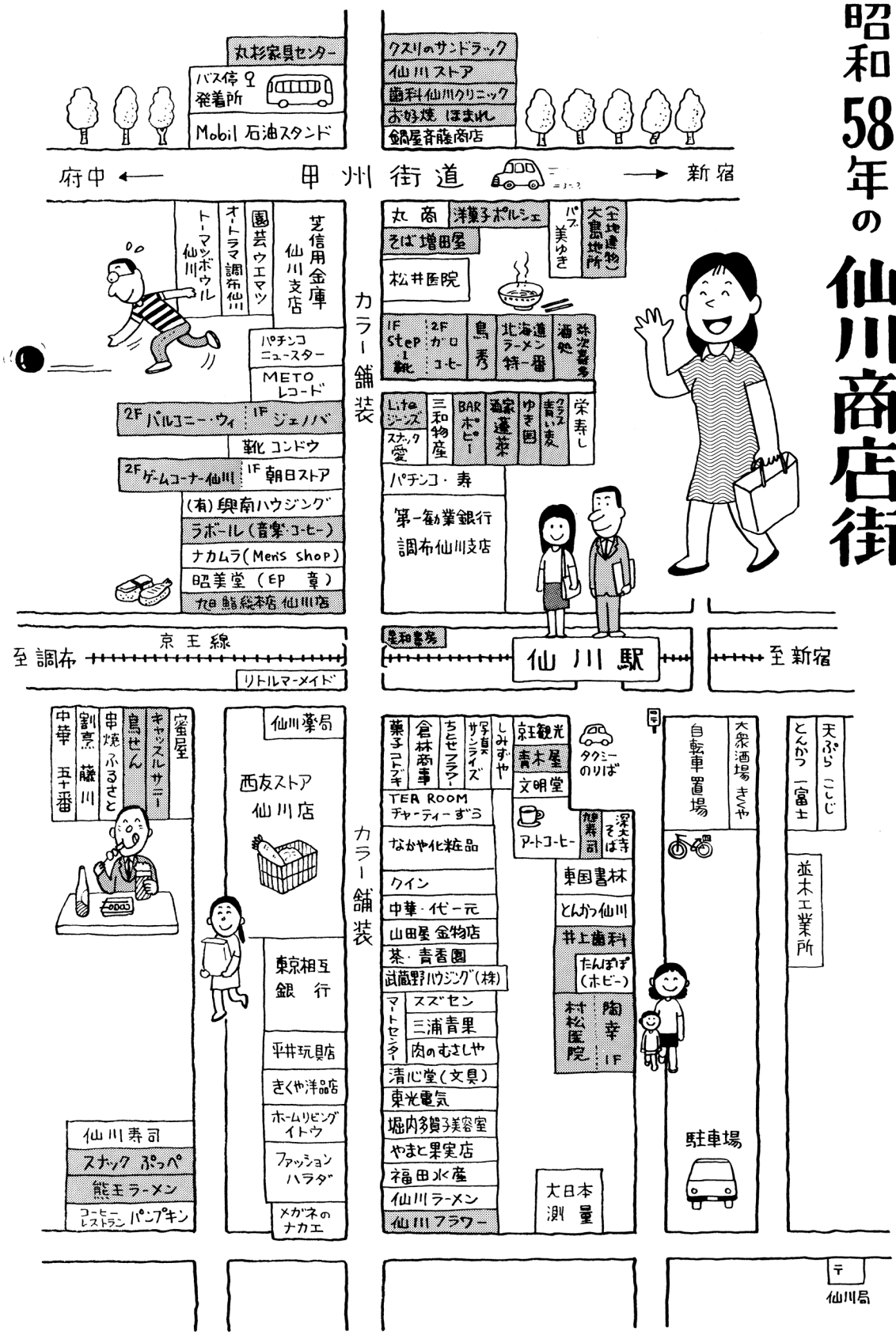
力もされ、これに対抗する独自のなにかを身に付けられたようです。幸いなことに仙川の商店は、自分の持ち家、自分の土地の方が多く何とか凌いだようです。

しかも、幸いにも大型店の進出は、むしろ他の地区からの客を呼び、商店の努力とあいまって仙川に行けば安くてなんでも間に合うと、三鷹、国領、成城、狛江からも人を呼ぶ結果となり、当時の役員さんに先見の明があったということではないでしょうか。

そして、次に初代商店主が引退、二代目の時代を迎え、古くなった建物が次第に建て替えられ、量販専門店の進出が目立ち始めました。しかし商店主は、新増築部分の余裕をうまく利用して、これを貸す事により、建築費の償却と、安定収入を得ていくものと思われ、これは初代が苦労して、土地、建物を手にいれておいた怪我の巧妙ではなかったのではないのでしょうか。

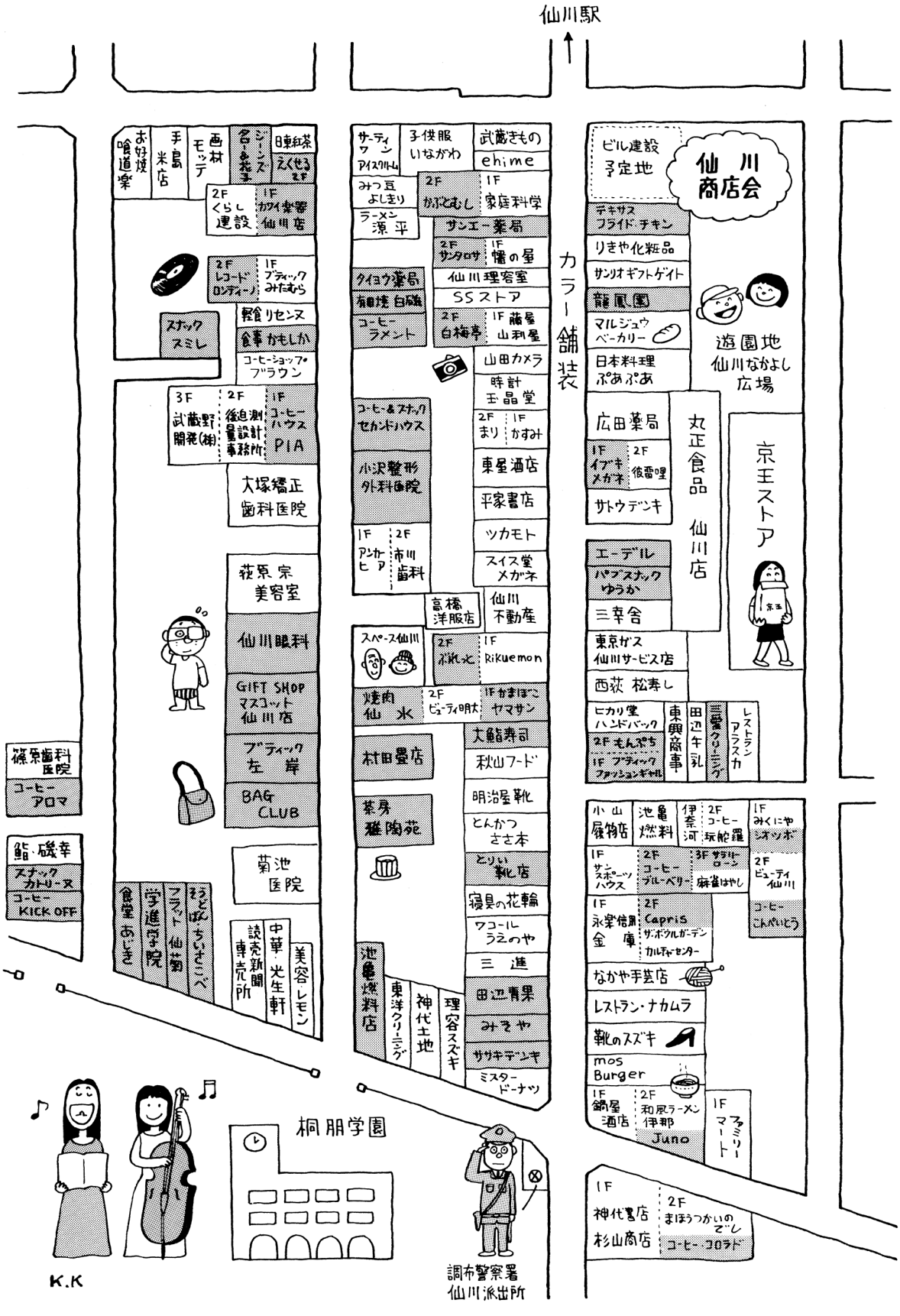
今、仙川商店街は、調布一の商店街としてさらに若い人の力で発展して行くものと思います。駅前広場の新設、区画整理、小田急バスの駅前乗り入れ、駅舎の改築等これからの課題も山積しておりますが、新しい後継者がこれらの課題をきっと解決して行くものと信じております。よそもののこの私が此の地に住みつき四十年、ここで死期を迎えることができるのも、この仙川を愛し、仙川商店街で生きつづけることができた幸せに感謝せずばなりますまい。（元サンエー薬局店主／仙川一丁目）

昭和58年の仙川商店街



▒▒ 移転・改名・廃業などの理由で、平成5年6月現在なくなっている店舗

このマップは昭和58年5月28日付けの「新三多摩新聞」に掲載されたものを元に、編集部で新たに作成したものです


仙川駅
仙川商店会
ビル建設予定地
遊園地 仙川なかよし広場
京王ストア
丸正食品 仙川店
カラー舗装
桐朋学園
K.K
調布警察署 仙川派出所

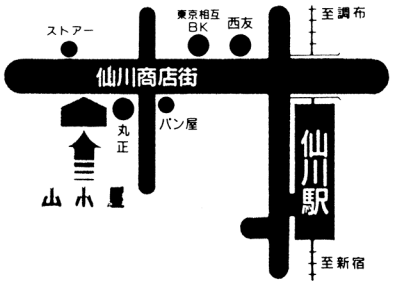
生鮮食料品のビックストアー

新正宿 MARUSHO 仙川駅前店

年中無休 10：00～22：00　　☎ 3300-1415

Elégance boutique

ehime | CHOFU SENGAWA 1－12－12　TEL 3326-2476



おいしい和牛を，お安くご奉仕するお店
ご家族連れや，ご宴会にお座敷をご利用下さい。
（４名様～40名様迄）

焼肉レストラン山小屋（仙川店）

サービスランチタイム
午前11：30～午後３：00日祭日は除く　午前 11:00～深夜 3:00

☎ 3308-4980

ぷあぷあ

日本料理	洋風居酒屋	パブ
ぷあぷあ	HEARTLAND	ベースボールイン
	PUAPUA	ぷあぷあ
☎ 3308-0280	☎ 3307-0810	☎ 3309-6469

トンカツ

笹本

仙川商店街　永楽信金前　　☎ 3300-2661

ライヴハウス〝ゴスペル〟の不在

高崎　梨菜

ライヴハウス〝ゴスペル〟は平成二年六月に仙川一丁目にオープンした、ブルースを中心に聞かせる店である。オーナーは、開店の五日前に二五才の誕生日を迎えたばかりの高崎梨菜さん。彼女は以前に「何もない道路を歩いていた時、ふと顔をあげると目の前にライヴハウスが在った」という夢を見たことがある。その夢は啓示だったのか、今ではゴスペルのオーナーであり、また横浜や大阪でも音楽関係の仕事を手掛けている。

「最初はもっと都心の方で始めるつもりだったんです。でも、バンドブームの頃だったので、ライヴハウスに対するイメージが悪くてなかなか貸してもらえません。そんな時、とある不動産屋さんで『何に使ってもいい場所がある』と紹介されたのがココだったという次第です。」

「世間のイメージと違って、ライヴハウスは本当はもっと身近な存在になれると思っています。だから、今みたいに若い人の場所と限定する気はありません。例えば外国のライヴハウスでは、おなかの出た中年のオジサンが一人でライブを聞きに来ていたり、みんながそれぞれの楽しみ方をしています。だからこの店も大衆的な場所、誰でも気軽に入れる場所にしたかった。そのために、先ずライヴハウスってどんなところなのかをチャント知らせる必要がありました。」

オープンしたての頃はとにかく認知度アップに奔走した。駅前でのチラシ配りや掲示板での告知、商店街協同組合に加盟してからは地元の飲食店に足を運び、その度に店の名前を出して意識してもらうよう頑張った。招待券を配ったこともあるという。

「音楽好きのお客さんは、遠くからでも足を運んで聞きに来ます。でも、電車に乗って来れるのであれば、何処に在っても同じということにもなるんですね。それでは、ここに在る意味がなくなってしまいます。」

私誌抄　その二

「聞きやすい音楽を集めたプログラムを組んで、地元の人に聞きに来てもらおうとしました。反応は芳しくありませんでしたけど…」

ゴスペルがオープンした時、この店を迎えたのは様々な苦情電話であった。以来「毎日戦争しているみたいな状態」が始まる。

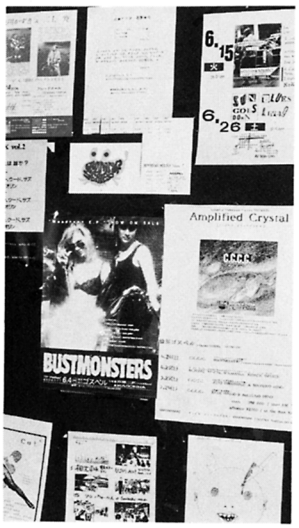
確かに店の防音設備は万全とは言えず音漏れがある。これは付近住人には苦痛だ。また、髪を染めた若者達が道路にたむろする姿もチョット怖い。小・中学生の子を持つ親は不安になるのかもしれない。「おっかない」と言う人もいる。その結果としてゴスペルは、まるで新聞の読者投稿欄に載っていそうな嫌がらせ（抗議と呼ぶには度が過ぎる）を受ける。店の入口に生ゴミがブチまけられ、頼みもしない出前が大量に届いた――。

「現在抱えているミュージシャンたちを、もっと開かれた場所で演奏させてあげたいんです。だから仕事に専念できる環境が必要なんです。」

ゴスペルは今年の七月で閉店する。ライヴハウスという存在は、長い年月をかけて形成されてきた仙川の町並みや風土に馴染めないのか。音楽の専門大学があり、数多くの音楽家たちがいるまちなのにライヴハウスは育ち得なかった。一人の若者の情熱と、まちの風土との出会いはスレ違いに終った。その理由は第三者からは見えない。しかし、この出来事もまちの歴史の一コマとして確実に記録されてゆくのである。

インタビューを終えた帰り道、ハーモニータウン仙川の商店街のスナックからカラオケが騒々しく響いていた。

（インタビュー・松尾洋介）



今の第一勧銀仙川支店の地に、まゆ買入所があった。養蚕は明治から大正末までが最盛期で、ほとんどの農家がしていた。どこでもそうなのだが、田辺さんの家も蚕場がなく、座敷、台所、至る所に竹製の棚がもちこまれたので、部屋のすみにふとんを敷いて小さくなって寝たという。五月の春蚕、八月の秋蚕、そして晩秋蚕まであったが、田辺さんは春蚕しかしなかった。養蚕が主な現金収入なので、お蚕さまとかオコサマと呼んで熱心に飼育した。まゆの値が下がると桑をぬいて、白菜、スイカ、それにわずかだがうりに移行した。昌翁寺の檀家で、スイカを五十から百個、お金の代わりに納める農家もあった。

鎮守の仙川八幡社は村社なのだが、村民は無格社としていた。村社だと神社本庁がくるし、上納金がかさむし、祭りには村長参拝もあるとかで、とかく費用がかかるので格をかくすことにした。だから、下仙川村の小学生は祭りの参拝はしなかった。

この境内に富士講の碑があり、明治、大正のころ、下仙川、中仙川、北野で富士信仰が盛んだったことを物語っている。大正一五年八月のお盆すぎ、昌翁寺住職榎本さんたち三人が代参（みんなに代わっての参詣）となり、富士吉田の御師（お札を配ったり、おはらいや参詣者の案内や宿を業とする者）佐藤さん宅に泊まり、頂上から須走、藤沢を経て帰ってきている。

榛名講は二月一五日にあった。榛名山は農業の神様で、前年に代参した者が進行役となり、くじ引きで数人の代参をきめた。代参はいただいてきたお礼を四月一五日に配った。その日は小祭りといって、農事を休んだ。

お日待は、冬至（一二月二二日ごろ）の前日に日の出を拝み、五穀豊饒を祈った。この夜、日がこれ以上短くなると困るので、日が昇るまで徹夜で語り明かした。

雨乞いに、神奈川県の大山に行く大山講があった。阿夫利神社に参拝し、御師の家で祈祷してもらい竹筒に水をもらって帰る。弁天橋付近の仙川にその水をまき、仙川の流れをせき止めたなかで、みんなが水をかけ合った。

庚申講は、庚申（かのえさる）の日に徹夜で飲食をともにして語り明かした。この夜、腹の中にいる虫が体からぬけて天に昇り天帝にその人の罪過を報告するので、その夜はつつしみおののいて善を行うべきだとされていた。

青梅に古くからある霊場、御岳山の御獄講は、ここの御師が今でも伊藤吉五郎さん宅にきている。

神代村青年団は、むかしの若者組とか若衆組が明治末から第一次世界大戦のころにつくりかえられたものである。大正七、八年、明治神宮造営があり、青年団は神宮外苑に植える樹木献上のため動員された。種、肥料、木炭などの共同購入やあっせんをしたり、エンジンを買って脱穀機にとりつけ、農家をまわって脱穀の手伝いをしたり、桑畑をつくったり、養蚕の研究をしたり、今の実篤公園下でわさび田をつくったりなど、土地に密着した活動をした。昌翁寺の西隣りの地に材木を持ちよって集会所を建て、青年たちがたむろして剣道などもした。村祭りや旅の芝居興行のほか娯楽のない村では、この青年団の親睦会や運動会が楽しみだった。

民間消防活動として、神代村消防組ができたのが明治二七年。手押しポンプ、ホース、はしご、とび口、おけ、旗、ちょうちんなどの購入や、貯水池、火の見やぐら造りの費用や運営費は、全て村の負担であり村民の月掛け貯金で集められた。大正一三年の集会では、「消防手は満二〇歳、すなわち徴兵検査を終わって消防手となること。月掛金を最高五〇銭、最低二銭に変更する。」と決議している。

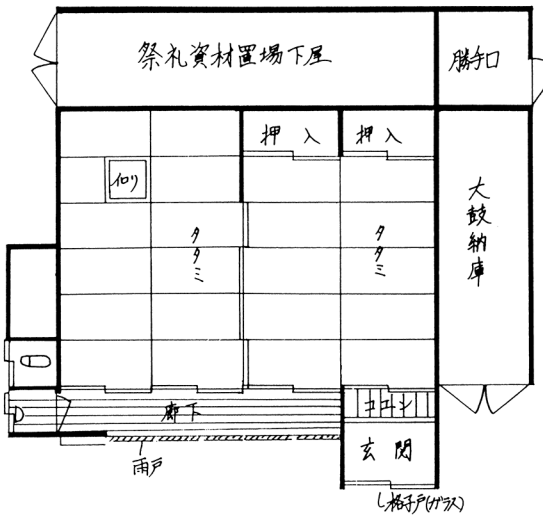
昭和一四年の団員の職業は、農業二三、商業一一、大工四、とび職一、欠員一となっていて、この地域が農業を基本としながらも、住宅や工場が進出してきていることがわかる。

仙川は大きく変わってきた。現在の仙川がどのようにしてできたかを知ることは、将来の仙川を考えるために不可欠のことである。

なかまスペース2

仙川青年會の活動とクラブハウス物語

田辺喜勝



下仙川青年會倶楽部

建物面積 約20坪
昭和27年頃までここで
おはやしの練習をしていた

作図／田辺 豊

仙川地区の青年団が出来たのは、大正三年頃だったと思います。うちの親父も青年會の活動をしていて、青年の活動の場として倶楽部をつくりたいと考えていたようです。そこで、今のトーマツボウルの向かい、確か中村さんと云う方の土地だと思いますが、そこに建物を立てて始めました。活動の名前は「仙川青年會」、建物は単に「倶楽部」と呼んでいました。二四畳位ある広い部屋を半分に仕切り、右側は剣道の稽古場、左側の部屋には囲炉裏があり、集会や夜警の詰所にしていました。青年會のメンバーだけではなく、一般の人も集会所としても使えました。

当時は剣道が盛んで、田中正作さんが稽古をつけてくれました。今は範師にらなれた森屋次郎さんが剣道を始めたのもここです。しかし、約十二畳の部屋ですから、狭くて二組位しか稽古出来ませんでした。

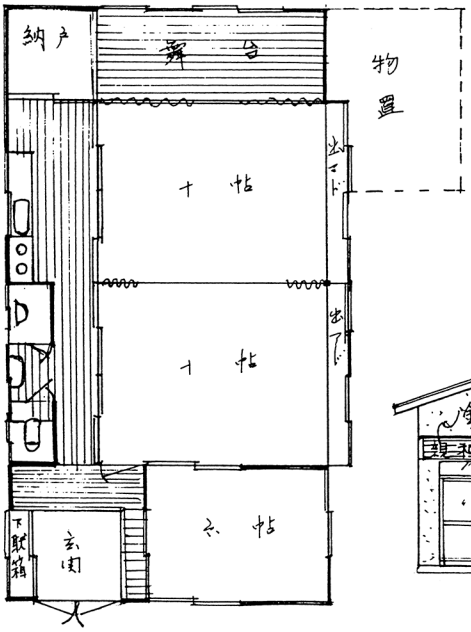
昭和二年頃、倶楽部の場所を昌翁寺の敷地内、現在は外車のショールームのある辺りへ移すことになりました。しかし、移すといっても移築の費用なんかありませんから、夜、細長い提灯をつけてみんなで担いで建物ごと移動しました。

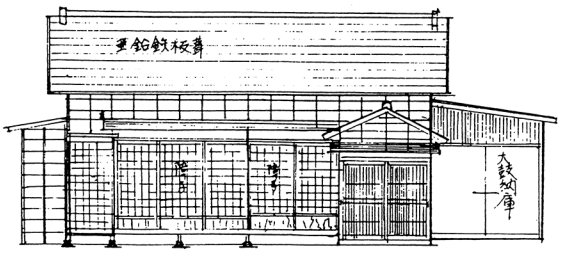
この場所は坪数も結構ある広い所でした。後から梅を植えて、収穫した梅の実を各家庭に買ってもらって活動資金の足しにしていました。そういえば、昭和三〇年頃に実篤先生がこの梅の木を高く買って下さったこともありました。

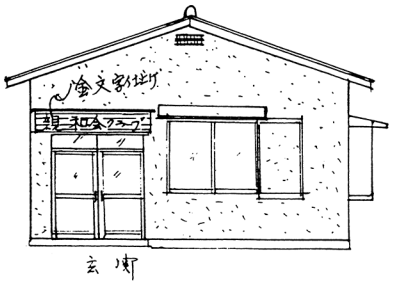
当時の青年會の活動は、農薬や、蔬菜の種の協同仕入れや、石炭の協同購入などでした。今の武蔵境に石炭の貨車が着くと、みんなで出掛けて行って石炭を一車両分買い、それを私達の先輩がカマス一袋に五〇キログラム位詰めて、各家庭に一冬分の燃料として何袋づつか配ってまわりました。こうした、労働で活動資金を得ていました。また、青年會活動と並行して村の活動も行いました。それは、道普請や大雪の時の雪掻きなどです。

昭和一二年頃、青年會で軽油発動機や脱穀機を購入し、各家庭をまわって農作業の手伝いをしていました。これは皆さんに喜ばれました。しかし、当時、軽油は高かったので、重油で動くディーゼル式の機械に替えたのですが、これは故障が多くて本当に苦労しました・・・。

昭和一五年は、紀元二千六百年を記念する行事が全国で行われた年でした。この地区でも、神代村内の青年団が十一支部集まって、滝坂小学校の校庭で合同の運動会を行いました。私達仙川地区の青年団が優勝し、その時の優勝旗が今でも残っ







仙川親和会クラブ

建物面積 約22.75坪
木造平屋建瓦葺モルタル塗り
吹付仕上げ　昭和34、5年頃

ているはずです。青年団の団旗もあったのですが、これは戦争中に誰かが処分しました。なお、この頃の名称は神代村青年団仙川支部でした。

昭和一六年になると、神代村青年団は深大寺青年団と滝坂青年団に二分割され、この地区は滝坂青年団仙川支部となりました。青年団の文化活動に女性が参加するのもこの頃です。文化活動といっても、一緒に読書をする位のことですが、「今どき本なんか読んで何になる」と世間から白い目でみられました。そういえば、何かの大会で深大寺代表として女性が声明文を読んだのを覚えています。

終戦間もない頃は青年団の名前を使わず、青年會としていました。団体活動が好ましくないとされた世相の反映です。戦前の様に、神代村全域の組織的な活動ではなく、単に仙川地区だけの活動でした。

戦後、娯楽の一つとして盆踊りを始めました。しかし、風紀上よろしくないというので駐在所の巡査が来て「止めろ」なんて言うものですから、喧嘩になりました。その後も、この巡査とは何回か喧嘩したのですが、何時の間にか仲良くなり、謄写版をくれたり何かと助けてくれるようになりました。この巡査は島田正義さんという方で、後に調布大正会の会長を務められました。

この頃、青年會の文化活動の一環として講習会を開いたこともありました。しかし、どうも左寄りの講師が多く、村のお年寄りに「そんなもん行くな」なんて言われたこともありました。

昭和二二、三年頃、柴崎山の方に使われなくなった軍の営兵所があり、その建物を解体して燃料にしてしまったことがありました。皆で夜中に出かけて行って旧軍の持ち物を勝手に壊してしまうんですから、かなり大胆なことをしたものです。駐在所の巡査には「今夜は見回りしないで下さい」なんて根回しをした上ですが。今でも「あれは怖かった」と皆で話したりします。この頃、再び神代村全域の青年組織をつくろうということで、神代村青年団をつくり、この地区は神代村青年団仙川支部となりました。

昭和三〇年頃、この辺の土地も宅地化されるようになり、再び、倶楽部（この頃の名称は下仙川青年會倶楽部）の位置を移動しました。住職の榎本晃道さんが同じ昌翁寺の敷地内に場所を提供して下さいました。

昭和三四、五年に、田辺八郎さんが会長をされていた町内自治会の親和会が大きくなり、集会場所として使っていた倶楽部の建物が手狭になったので、共同で建て替えることになりました。建物の名称も「親和会倶楽部」と代わり、その後、青年會の名称も活動も自然に消えていきました。

発足当時からの青年會の活動記録は、赤い大きなトランクの中に入れて代々引き継いでいました。先年、消防団の記録が発見され、記念誌が刊行されましたが、青年會の貴重な資料も、どこかの家の倉庫から無事発見されることを願っております。

（聞き書き／久保直子　大脇正昭）

仙川青友会二十年の歩み

川原徳重



昭和46年 発 会 式

今から十年前、私が調布市消防団を任期満了で退団した頃、知人から「仙川青友会に入らないか！」と誘われたと記憶しています。

この頃、父も元気に働いており、私も調布市役所の職員として勤務しており、仕事がわかってきた時期でもありました。今から思い出すと滑稽なことかもしれませんが、「仙川青友会」を「仙川政友会」と勘違いをしていました。「地方公務員として政治活動をしている団体に入るのはまずいな！」と思い、すぐにお断りしてしまいました。数年後、仙川青友会に入会して、一昨年より代表幹事を仰せつかり現在にいたるわけです。仙川青友会とはいったいどの様な団体なのだろうか？　他地区の方々からよく質問されます。

仙川青友会の前身は昭和四十六年五月二十三日に、自民党調布支部青年部の仙川分会として発足しました。（発足時の写真があります。）その後、もっと幅広く視野を広げ、地域に密着した活動を行おうとの趣旨から昭和四十八年十二月五日に、現在の仙川青友会としてスタートしました。今年で二十年になり、いわゆるやっと成人に達したことになります。私まで、八代にわたる代表幹事さんや役員各位、そして先輩諸兄の方々のご苦労の賜物と思います。

仙川青友会は、地元仙川「仙川町、緑ヶ丘、若葉町（一部）」で活躍している自営業（農業、商業。会社員等も含む）を営んでいる青年の集まりです。祭礼等の町内行事に積極的に参画し、研修会や旅行など親睦のための行事を行っており、将来の仙川の中核となる人たちの団体であり、現在の会員数は六十名という多くの方々が加入しております。

本年創立二十周年を迎えますが、仙川青友会も今日まで幾多の波風がたったと聞いております。現在の社会的な風潮で、「自分さえ良ければいい！」と、いわゆるエゴ的な考えがはびこるこの世の中で、地域のためにボランティアで活動している会員の皆様には敬意を表したいと思います。



家族懇親のバーベキューの夕べ（'93．5．15）

仙川青友会の諸先輩の中からは、仙川だけでなく調布市のために活躍されている方々を多数輩出していることをみるとき、この仙川青友会は調布市内にあって特異な団体であるといえます。

今年前期の活動を振り返ると、一月に新春の集い、四月には調布市のゴミ問題について考えようとの趣旨から調布市清掃事務所のご協力をいただき、ゴミの処理施設の見学会を催し、「自分達の出したゴミ」が、どのように処理されているのか、「今自分達は、どう協力できるのか！」自分の目で確認し、五月には会員と家族の親睦会を開催いたしました。

七月には、税のことを考えようとの趣旨から固定資産税の評価替えについての研修会等を予定しております。

今年の秋には、仙川青友会の成人式ともいえる創立二十周年の行事を行うことが、昨年の通常総会で決定されました。この二十年間活動できましたのも、仙川地域の皆様と先輩諸兄のご指導、ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

これからも、会員一同地域発展のため努力する所存でございますので、ご指導、ご協力を切にお願い申し上げる次第です。

（代表幹事／仙川町一丁目）

歴代代表幹事

初代	浜島与志雄
二代	川原　鉄郎
三代	斎藤　常一
四代	伊藤　強
五代	田中　次郎
六代	斎藤　庄一
七代	伊藤　秀樹

（敬称略）

仙川青友会　創設のころ

古くから仙川地域には青年団という組織があり、農家や地元に長く住んでいる人達を中心に大勢参加して、祭礼や盆踊り、そして他地域との交流など、活発に活動していました。

昭和三十年代にはいると、青年団活動が社会情勢の変化で衰微し、団員も減少し青年団も消滅してしまいました。

その後しばらくしてから、若い人達の交流を計る場をつくろうという趣旨から、参加を呼びかけ三十余名の賛同をいただき、昭和四八年に仙川青友会と名称を新たに発足いたしました。

丁度そのころ調布青年会議所が設立されて、仙川からも数名の方が参加し活動していました。青友会の設立についても、会議所の皆さんにいろいろとご意見をいただき、会の運営についても新しい形式を取り入れました。

あれから二十年、若い人達の組織として継続し発展していることは誠によろこばしいかぎりです。

地道な活動の中で、相互の信頼を深め人間形成の場として、又仙川地域を担う人材の育成の場として、末長い会であって欲しいと願ってやみません。

（青友会ＯＢ）

なるほどスペシャル

祭礼囃子 〝仙川はやし連中〟の今昔の記

田辺豊

――毎週土曜日の夜ともなると、仙川町二丁目の田辺豊氏宅内のスタジオからテン、テン、ツク、テンツク、テンツク、と心地良い囃子のリズムが聞こえてくる。仙川地区で活動を続けている〝仙川はやし連中〟の稽古がここで行われているのだ。そういえば、祭りの時に耳にする以外で、はやしをちゃんと聞いた覚えが全然ない、という人も少なくないと思う。そこで、少し肌寒さが残る四月のある土曜日、スタジオで稽古中の〝仙川はやし連中〟を訪ねてみた。――



気分の高揚と平常心

「はやし」は祭礼時が出番とあって、やはり何かと威勢がよく、名称からして「はやし組合」でも「はやし会」でもなく「はやし連中」であり、また、歌曲で云うところの「一曲」を「ひとッぱやし」と言い放つ。落語風に言えば「するってぇと、オメェさんなにかい」的な風情を感じさせるのだ。

さて、この「はやし」なるもの、さぞ庶民的な伝承文化なのであろうと思いきや、さにあらん。そもそも、「はやし」は今を遡ること約千四百年前、推古天皇の頃に始まったとされ、その後、幾度かの盛衰を経て徳川の時代に隆盛をきわめたというからその歴史は長い。しかも、平安後期以降の「はやし」は大奥および武家のみが行うことを許されていたものであり、今でも、雛祭の五人囃子の姿にその名残を見出せる。

何時の頃からか、現在の様に庶民生活の中にも浸透し、祭礼を盛り立てるに欠かせない存在となったのであった。因みに、仙川で行われている「はやし」は、世田谷八幡の宮司であった大場増五郎氏の大場流を継いでいるそうである。では、この仙川地区に於ける「はやし」の歴史を振り返ってみよう。

年代は定かではないが、もともと仙川地区にも「はやし」は存在した。しかし、何時の間にかその活動も停止し、道具もなくなり、歴史から姿を消していった。戦争の影響という話もある。この忘れられた「はやし」は、昭和二十一年に当時の青年会の尽力によって復活する。青年会メンバーの一人であった田辺豊さんは「道具一式が質屋の倉庫から出てきたんですよ。多分、先代のはやし連は道具を質入れした金で一杯飲んで、そのまま解散しちゃったんでしょう」と苦笑まじりに当時



練習を終えて ハイ、ポーズ

の様子を語る。さて、こうして復活した有志三十名程のはやし連は、町内の古老に笛や太鼓を師事し、昌翁寺敷地内にあった青年会倶楽部で毎晩の様に練習に励んだ。昭和二十六、二十七年には渋谷神山町などの祭礼へ遠征も行う活躍を示したのだが、人手不足の問題からか、昭和三十三年には再び活動停止に追い込まれている。

しかし、既に幾多の紆余曲折を経てきた「はやし」である。そう簡単に消え去る筈もなく、昭和五十七年六月に幾度目かの復活を目指す運動が起きたと聞いても何ら不思議はない。今回の復活劇の中心にあったのは、伊藤孫一氏、浜島健二氏、伊藤薫氏、稲垣春雄氏、田辺豊氏の五名である。何とかして、歴史ある郷土芸能を伝承したいという願いが、二十四年ぶりの復活を呼んだのであった。後継者育成の為、八幡神社奉賛会や町内有志の方々に呼び掛けて会員募集を行った。練習所は、神社、かおる幼稚園、仙川保育園、市立第八中学校、田辺豊氏の事務所の隣の部屋、と転々とした後、平成三年に現在のスタジオに落ち着いた。

この様にして、仙川地区に於ける「はやし」は、歴史上に姿を現したり消したりしながら今日に受け継がれているのである。

「やはり祭り好きですからね、演奏中は気分が盛り上がっていいですね」と浜島健二さん。また「それでも日本特有の間の置き方が大事」と語る。気分の高揚と平常心、この二者の微妙なバランスが難しくも大きな魅力なのかもしれない。

「はやし」の魅力については嬉しそうに語る彼らも、話題がこと後継者の問題に及ぶと口が重くなる。笛、鉦、大銅、調べと呼ばれる締め太鼓が二台、これらを担当する五人が揃えば一通りの演奏は可能になるが、踊り手や笛がもう一人加わればバリエーションが更に拡がる。「どれもこなせるのが理想だが、なかなか……。特に笛が難しいので」と田辺豊さんは愛用の笛を手にする。現在のメンバーは九人で、みな熟年世代。「ちょっとしたキッカケさえあれば若い人達にも参加して貰えるんだけどね」とメンバーは言う。平成三年の「甲州街道フェスティバルサミット」では調布市を代表する民俗芸能として長野県諏訪市に招かれ、また本年五月には「ＴＡＭＡらいふ21」にも参加している。その活躍ぶりを思うと何ともったいない気がする。以前は「子供連」もあったというが、やはり時流なのか。メンバーの誰かが口にした「借しいねェ」という言葉が印象的であった。

我こそはと思われる方、一度見学に行ってみたら如何なものか。

（聞き書き・松尾　琴）

仙川はやし連中連絡先／田辺豊
０３・３３０９・５４３１　※一〇時～一七時

なかまたち

小劇場〝スペース仙川〟

起・承そして転開――

吉田史舟



わざわ座公演「日本風物史」より「鹿鳴館の頃」

起――　檄

天下の美男美女よ集れ
父ちゃんも母ちゃんも
ボクもアタチも集れ
……

診療室兼住宅を、無理矢理芝居小屋に改造して、小劇場〝スペース仙川〟を造った。

扉に〝檄〟を貼ったら、新聞が書いてくれたので、善男善女がわさわさと集ってきて、何時の間にか三十人程になった。じじばば劇団〝わざわ座〟が結成され、某日柿落(こけら)しならぬ〝こけおどし公演〟が、はなばなしく開催された。

それは一九七六年春、医院の待合室が老人のサロンと化したと云われる様になって、日本も高齢化社会に突入しようとする時だった。

日本髪のおばちゃんと、ちょん髷のおじちゃんが、月一回の〝劇団わざわ座日旺劇場〟で妍(けん)を競った。

座員は五～六十才代が主だったが、上は八十才、下は小学生という奇妙な劇団だった。じじばば劇団を作ったのは、ポンコツにならないためには、頭や体を使うことが一番で、それには芝居など最適かと思われたからだ。それに共鳴して、何人かの若者が集ってくれた。芝居は役者だけでは出来ない。照明、音響効果、舞台作り等、おじさん、おばさんには出来ない作業を、その若い人達が受持ってくれた。

週二回の稽古を積み、月一回の公演を通じて、幾つかのレパートリーが生れた。

一年後の箱根温泉への修学旅行の際には、某旅館のホールで、四十人の座員による初めての出張公演が行われた。酔客が大勢、トイレットペーパーを投げて興奮した。「新橋演舞場など糞くらえだよ、おめぇ」と褒めてくれた。

老人ホームの公演では、六十才代の寝たきり老人を、八十才の老人が慰問するという奇妙なこともおこった。

初めの頃は超満員が続いた日旺劇場も、だんだん飽きられて、役者二十人、観客五人という様なこともあったり、栄枯盛衰を繰り返している内に十数年が過ぎた。世の中も高齢化の問題から目をそむけることができなくなり、老人対策に本腰を入れるようになったので、じじばば劇団の使命も一応果せたと思い、一九九一年に幕を閉じた。

僕は六十五才になって、保険証はマル福になったけど、今は青春真っ直中だから、歳をとって動き廻るのが億劫になったら、第二次わざわ座をやろうかなと思っている。



源平の世を彷彿とさせる幟旗


張りつめた空間に響く琵琶の音

承――　眼科開業の傍ら〝小劇場スペース仙川〟を創るに当って、僕は三つの夢を持っていた。

一、高齢化社会に対応して、老人の遊び場を作りたい。二、演劇、音楽、舞踊等、ジャンルにこだわらず、実験的な試みをやっていきたい。三、邦楽系の芸能の発表の場でありたいということだった。

一つめは、〝じじばば劇団わざわ座〟で、ほぼ思い通りの活動をすることができた。

二と三については、民族音楽のフェスティバル、前衛舞踏、フラメンコ、琵琶の演奏会等が散発的に行われた。

一般に邦楽の演奏会は、同好者の発表会の形で行われることが多い。一般の人や青少年、外国人に楽しんで貰うためには、どうすればいいか考えた。

僕の場合は琵琶で、それも四百余年前の形を頑固に受け継いできた薩摩琵琶正派と云われる一派だ。それを、現代風に分り易い形に変えてしまえば、枝を矯めて木を枯らすということになりかねない。伝統の形を保ちながら、現代人に受け入れて貰えるエンターテイメントにして、それを継続しなければならない。僕は面白い芝居の中に、伝統的な琵琶を、そのままの形で入れることにして、無期限の継続公演をすることにした。

琵琶モノドラマと称する一人芝居で、平家物語ゆかりの作品、〝耳なし芳一〟と〝小督〟を出し物に、毎週一回の公演を続けて七年が過ぎた。

全国から呼ばれるようになって、医院を廃業した。友人が、医者を止めて河原乞食になるのかよとびっくりし、患者のおばあちゃんからは、無責任だよと非難された。公演は三百三十回を数えて、客の居ない時などは、坊さんになって、お寺でお経を上げているような気分になる。

最近の東京は、小劇場がたくさん出来て活気を呈しているが、残念なことには、日本では専ら小劇場は若者の出入りする場であって、おじさん、おばさんには余り縁のない場所になっている。

これは、大変勿体ないことと思う。

最近、映画館が細分化されて活気を帯びてきた様に、小劇場にこそ本当のエンターテイメントがあり、大人の芝居がある、と下北沢あたりをうろちょろしている僕は思っている。

大部分の大人は、観るとすれば商店街の福引で当った大劇場の演劇であり、小劇場が目の前にあっても足をふみ入れようとはしない、食わず嫌いの人だと思う。

そして文化の香り豊かな街づくりと云えば、立派なホールを造って外国の芸術家を呼んできたいと言う。一市民が何をやっていても、市民の多くは無関心で商売に励み、梨園ならぬ桐園も、市民の中に下りてこようとはしない。

転開――　今、スペ仙の企画として考えられているものは、説教節の語りで、蝋燭の明りにゆらめく昔ながらの〝写し絵〟の公演と、一人芝居フェスティバルだ。

一人芝居は、やる側の思い入れが殊の外深く、観客は対決を強いられ、その緊張感が快い刺激をもたらす。

琵琶モノドラマは、今年の夏はヨーロッパへデモンストレーションに行く。

若しも売れたら、琵琶をかついで世界中を放浪してこよう。

日本の芸能に興味を持つお知り合いが、海外に居たら、御紹介いただければ幸甚です。

又、スペース仙川の企画に、何か御提言いただければ嬉しいです。

スペース仙川企画　吉田央舟
TEL&FAX　03・3307・8044

四中クローバーズ おかげさまで十五歳

遠藤 衛



すべてはこの緑化事業から始まった

思えば今から十五年前の昭和五三年四月、私が第四中学校のＰＴＡ会長として、お世話になったとき、久保校長先生から「校庭の拡張は出来たけど校庭に木が一本もなく殺風景だし、風が吹くと教室に砂が入ってしまって、どうしようもないので植樹をして潤いをもたせたいのだが……」とお話しがあったので、早速ＰＴＡの協力を得て先生を含め準備委員会を発足させました。

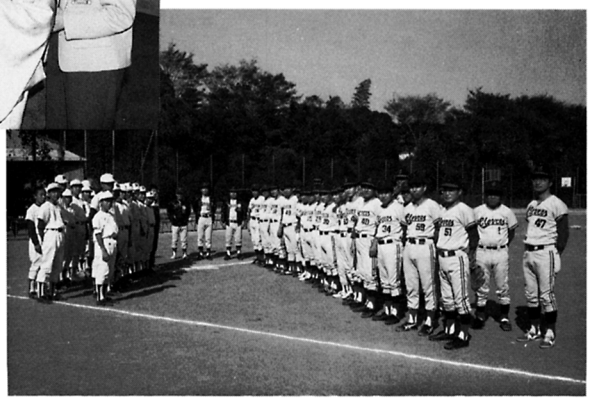
第一期工事（五三年）は校門附近の緑化、第二期工事（五四年）は校庭に築山式にして植樹することに決り、作業には、お父さん、お母さん六十人と先生が参加しました。馴れない手付きでスコップを持ち、一輪車で土を運び、額に汗して土まみれになっての作業、三年生も体験学習ということで参加、こうした大勢のみなさんの力が結集して学校緑化事業は完成したのです。今日では、大きく育ったくすの木、山ガシの寄植、体育館側には秋になるとあざやかな黄金の葉に変るイチョー、入学式には見事な花を咲かせてくれるサクラなど、緑豊かな環境となりました。

この緑化事業の際の昼休みに行ったソフトボールが本当に楽しく、せっかく知り合ったのだから、これからもつづけようということになり、梶教頭先生はグランドは校庭を使ってもいいよと言ってくれました。それではということで始まったソフトボールがキッカケとなって、今日のクローバーズが誕生したのです。最初は「せっかく知り合ったのだから」とは言っても顔も余り知らず、名前も知らない二八人のおやじが、ジャージに運動靴姿で四中の校庭に集り、ソフトボールから軟式野球に発展、そのうちユニホームがほしくなり、チーム名も四中の広報「四ツ葉」を横文字に変え「クローバーズ」とし、本格的？なチームとしてスタートしたのです。メンバーは還暦を迎えた人もいれば四十歳そこそこの人もいて、現在六五名、平均年齢約五四歳、これを紅白に分け試合をし、対外試合も年間で四～五試合行っています。

クローバーズの特色は全員野球、「和」の野球です。朝七時に校庭に来れば、必ず一度は打席に立てて、必ずどこかの守備につける、これがクローバーズのモットーです。朝早く



結成15周年記念祝賀会にて



親善試合「平均年令43.5才」VS 四中野球部

起きて来て、ラジオ体操、キャッチボール、トスバッティングだけで、後はベンチに座っているだけでは……。メンバーは、こどもが四中を卒業してもクローバーズで野球をつづけられます。しかし今日に至るまでにはいろいろなことがありました。はじめて野球をやる人、高校でやっていた人、会社で、あるいは草野球をやっている人との技術の差はかなりありました。そのためクローバーズのモットーである全員野球にものたりなさを感じるメンバーも現れはじめ、一時はこれを理解してもらうのに大変な時もありましたが、今ではみんな楽しくプレーをしています。また、校庭への自動車の乗入れやタバコの吸いがらの問題がおこりました。あるいは練習後の反省会と称して缶ビールなどを飲みながら野球とは違った楽しみを味わっていたのですが、校内でもあるのでと学校側から注意され、その後は、自動車は乗入れない、タバコは指定場所以外では絶対に吸わない、ビールは飲まないことを決め、今日でもキチンと守っています。また、練習が毎月第一、第三の日曜日の朝六時からでしたので、周辺の方から声が大きい、ボールの音がうるさいなどの苦情が出てしまい大変こまったときもありました。しかし野球が出来なくなってしまっては、ということで練習時間を一時間遅らせ七時からとし、大声は出さない、八時までは金属バットを使わないことを住民の方と約束して理解をいただいて来ています。

私たちは、好きな野球をやるだけでなく、校庭も使わせてもらっているのだから、学校、PTAに対しても何かお手伝い出来ることはないかと話していた時、PTAから夏のパトロールに協力してほしいとの話があり、早速パトロールに協力し、十年位つづけています。また、ソフトボール、インディアカ大会などにも参加させていただいています。あるいは、親子の断絶が叫ばれはじめたころ四中の野球部と年二回試合を行い、メンバーのお母さん手作りのトン汁で昼食を一緒に食べながら(今では吉野屋の牛どん)こどもたちと語り合い、お互いの理解を深めたり、全員で校庭の草取り、校庭の整備をして来ています。

また、クローバーズと同じような会をつくっている六中、七中の校長先生、PTA会長、先生、それに会の代表者が集って「爺父の会」を発足、市内の中学校に呼びかけて父親ソフトボール大会を実施し、三年後位には、ほとんどの学校が参加することとなり、現在ではP連事業として大きく発展しています。

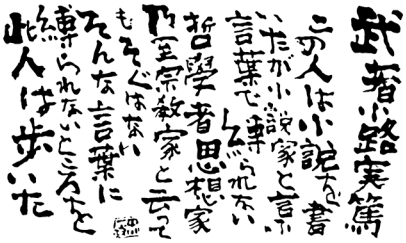
クローバーズでは、野球の他にもファミリーハイク、一泊旅行、毎年一二月の納会には、我々が毎日健康で楽しく好きな野球を出来るのもみんな女房のおかげということで、夫婦同伴で女房の「労」をねぎらっています。こうしたみなさんの努力と地域、PTA、学校の深いご理解によって一五年という歴史を印しました。会員一同心より感謝いたしております。

(クローバーズ会長)

実篤公園と記念館

堀 公彦





書／中川一政

ここに一枚の写真があります。

縦長の画面。竹林を背に杖を手にして着慣れた和服姿でたたずむ老人がひとり。視線の先はたぶん無心に餌に群がり泳ぎ回る池の鯉たちに注がれているのでしょう。

はるか後方に刈り取られた稲わらが干されているのが見られることから、どうやら秋の日のひととき、仕事の手を休め鯉たちの餌やりに庭に立った折に撮られたものと思われます。

逆光を浴びて、この庭の主・実篤その人の表情は定かではありませんが、シルエットからは優しく穏やかな眼差しが感じられて心安らぐ思いのする写真で、数あるポートレートのなかでも私の好きなものの一枚です。

日本の原風景といってもよいこんな情景は、昭和三十年代初頭の頃には多摩の地域でもきっとあちこちでよくみられた光景だったことでしょう。

…一二月二十日（昭和三十年）、安子と二人で調布市入間町萩野四六八（現在の表記は若葉町一―二三―二〇、実篤は〝仙川〟といった）の新居に入った。二人の終焉の家となった。

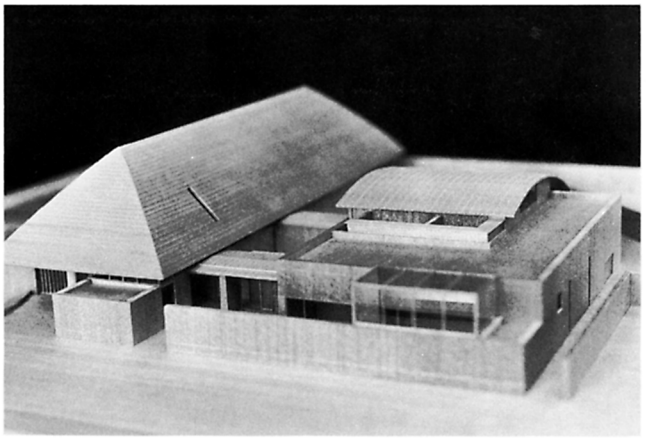
―「武者小路実篤全集」（小学館版）年譜より

ここに記されている「仙川の新居」というのは、いまは実篤公園となっている場所のことですが、四十数年前のこの辺りの状況については、残念ながら当時の仙川界限に縁のなかった私にとってはこの一枚の写真で想像するほかにすべがありません。

写真の背景に連なる田んぼの周辺は、今では記念館をはじめ住宅が軒を連ね、当時を偲ぶべくもありません。記念館の建設でもご協力いただいた地元の山内鋭治さんによると、入間川一帯は葦の茂る清流で、幼い頃はよくこの辺りで魚取りをしたと言います。また実篤公園の付近は大蛇が出るとか聞かされていて、決して近寄らなかったものだそうです。



実篤邸（『芸術新潮』
昭和31年２月号より）



平成六年完成予定の「資料館」（建物右側）

仙川に居を構えてちょうど十年目に当たる年、実篤自身、調布市制十周年を祝う文章の中で当時を振り返って、次のように記しています。

「……この十年の間に私の近所もずい分変わりました。……一、二年来ないお客は畑だと思った処に家が建ち並んだので、私の家をさがすのに骨が折れたと言っています。

……私の住居の前は広々とした田で、私はこの田が人家に変わるとは夢にも思わなかったのですが、この一、二年の内にその田がすっかり宅地に変わり、もう何軒も家ができ、夜真暗だった処に点々と電灯がつき夜の眺めはすっかり変わりました。……」

（昭和四十年調布市「市勢要覧」より）

さらに文章は「……老いたる文士は孤狸のように段々山の中に逃げる性質があります……」と続きますが、それから三十数年を経た仙川の町の変貌振りに、山中に逃れたはずの実篤先生はどんな感慨をお持ちですか……と聞いてみたいような気もします。

●

昭和五十一年春に実篤と相前後して旅立たれた安子夫人とその遺志を継がれたご遺族のご意向によって、その屋敷跡が調布市に寄贈されました。市では実篤氏が生前こよなく愛し続けた自然をそのまま保存する形で、二年後の昭和五十三年、実篤生誕の日に当たる五月一二日から「実篤公園」として一般公開の運びとなったことはご承知のとおりです。

さらに七年余の長い準備期間を経て、隣接の地に武者小路実篤記念館が完成したのは、ちょうど実篤生誕から百年、調布市にとっても市制施行三十周年の記念すべき昭和六十年秋のことでした。

そして今、その記念館では平成六年春の完成をめざし、実篤に関する「情報センター」の機能を持った「資料館」の建設が新たに着々と進められているところです。

この資料館では将来を展望して、実篤はもとより白樺派周辺の資料の充実をはかることにしていますが、さらにこれまで要望の多かった閲覧室を新設するほか、新たにコンピューターによる情報提供を行うのための準備も進めています。



仙川の地を終焉の場所として選び、その自然をこよなく愛し、人間を信じ、真理を追い求め続けてきた武者小路実篤――。その実篤が生涯かけて文学や書画、さらには新しき村の運動などを通して語りかけ残していったもの、それらを次の世代にしっかりと継承していくことが私たちに与えられた大きな課題だと考えます。この公園と記念館こそ、そのことを実現できる、まさに「実篤のいる空間」であり、これからもより多くの人々に親しまれ、充実したものになるようにさらに心がけていくつもりです。（武者小路実篤記念館館長）

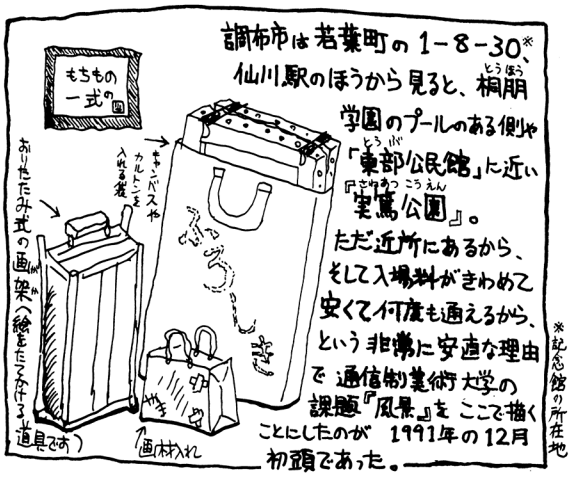
A thousand thanks for
Mr. Minamo Ran & Mrs. Fukuda Saino (Café de Lycéenne)

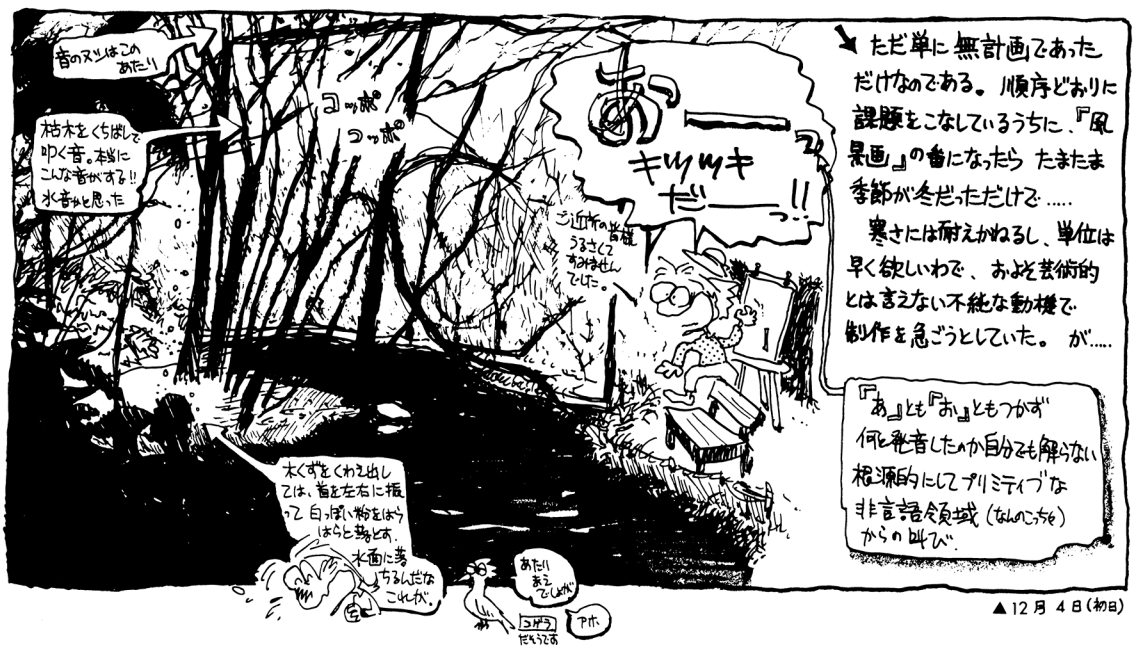
実篤公園を描くの記

若葉町在住　中島りえ









▲12月4日(初日)

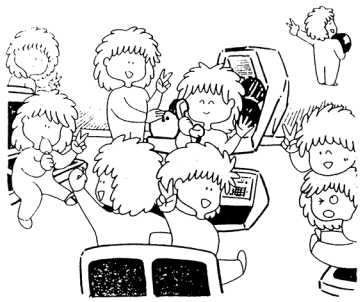

そもそも『実篤公園』とは、感受性豊かで元気なおじいちゃん武者小路実篤（むしゃのこうじさねあつ）が住んでいた屋敷と庭（池も含む。庭はどちらかというと雑木林的）をそっくり公開したものであって、『公園』と名のついた今でも非常にプライベート空間に近い性質をもった
……なにしろここは面白いのである。前述の姿勢もどこへやら、まもなくそこで遭遇するものにいちいち感激したり面白がったりする方に時間を費してばかりいるようになっていた。
カモ(?)の夫婦がくる
うひょ
カワセミもくる
ダハ
わ
バードウオッチャーもくる（真剣すぎて鳥をトリ逃がした人）→
▲翌年3月12日
▶2月26日
話しかけてほしいのだろーか?
寝ていくセールスマン(?)氏
いやまさか
えんきんほう 遠近法ができてますね
と指摘したのは9歳の男の子。5年前から絵画と音楽を習っているそうだ
じゃあ相当上手なんだね
と言うと、
いえ、まだ未熟者で
と返され無謀なほどの有望さを感じる元気であられるかな?
場所だとも言える。（それでも公開当初よりはかなり「公園的」になってきている）団体でも勿論来れるが、庭の中に入るほど、個人や少人数のための空間が維持されているのが判る。
空いた日に園内にいれば、それこそ『自分の庭』のような気分でいることもできるはずで…
ことに冬の平日などは（気候にもよるが）ほぼ貸し切りのような人入りの少なさである。
それでもいろんな人々が通り、大抵は黙って通りすぎて行かれるがユニークな反応も多かった！
何を思ったかしばらく黙って、くすくす笑いながら後ろにいたが唐突に『秋のゆーうーひーに』と歌いだして逃げていくやんちゃ坊主
（ちゃんと文部省唱歌なのが律義である）
▲2月23日。
「やんちゃ坊主」（関西の概念か?）とはいえ、ここが関東的(?)
結果的にここで2枚の絵を描きおわったのが翌年1992年のなんと4月14日である!! ほとんど飛び飛びにしか来れず、かなりさぼった時期も入ったためもあるが……
もうこの頃には何を学びにいったのか判らなくなってしまっていた。
お目にかかった皆様、長いこと目障りなところに陣取ってすみませんでした。
お世話になったここに書ききれないたくさんの人々におれ申しあげます。
ご息災で!
世界の多様性と自分の目と手の至らなさがちょっと判ったぐらいか。
えらそうなことを……
▲よくわからん絵になってしまいました
終 あわり
1993年6月27日
何度もおしゃべりに来られた方もおられる。
制服姿（当時 中学2年生）のAちゃん。絵もかき、マンガに詳しく、相手の年齢にあわせてマンガ談義のできる特技の持主
塾なんだよこれから
◀モッテ画材店で再会!
お、おもしろすぎる〜
2日続けて話しこんでしまったがじつは本誌関係者であった写真家のK藤J一郎氏
話がユニークで奇妙なり
◀12月14日・15日
公園を「個人的空間」として最大限に生かした代表格(?)。

いつでも，どこでも，24時間年中無休で，

あなたをお待ちしています。

セブンイレブン調布仙川店

甲州街道沿い，仙川駅入口　　☎3305-0711



快適スポーツ空間

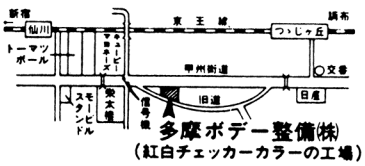
トーマツボウル仙川

御予約は電話でお早目に！

仙川町2-20-1　　京王線仙川駅前　☎3308-8151

磨いてだめなら　塗り替えましょう！

解体部品装着ＯＫ！　安く直ります



多摩ボデー整備K. K.

調布市東つつじケ丘１－15－３　甲州街道滝坂　　☎3307-6105

広げよう〝実篤と新しき村〟の輪！

広げようパチンコの輪！

絶好調！
パチンコ

コ　ト　ブ　キ

京王線仙川駅前　　☎3308-8450

焼肉専門店　　商談，クラス会，パーティーの席にご利用下さいませ

焼肉あかべこ

サービスランチタイム
午前11：30～午後２：30　日，祭は除く

午前11:30～深夜12:00　定休　火曜

仙川駅第一勧銀前　　☎3308-4419



せんがわの風土と心

萩原　祥三

わたしに与えられたテーマは、編集子の注文である。多分、そんなに深く煮つめて考えられたのではなく、せんがわの〝土地と人情〟というほどの意味であろう。そういうものが存在し、もしありとすれば、それを文章化できる内容を形成しているのかどうか、私には見当がつかない。私はここで育った人間ではないし、この土地の風土、人情についても知らない。ただ三十年余、ここに住みついている外来人のひとりにすぎない。

二十四、五年前、縁あって調布市誌という小さな冊子の編集にたずさわったことがある。私が分担したのは交通・通信であるが、ここが故郷ではないので、体験を書くことは不可能で、乏しい資料から近代の調布を記述するのに骨が折れた。近世以前になると、多くの郷村はほぼ同じ状態で、各市町村の史誌の類は、類似又は同一の資料を使うことも多い。近代以降になると、様子が少し違ってきて、例えば一本の電車が通るか否かで発達の様相が変る。しかし、それは開発とか近代化という現象形態の相違であって、郷村の内部を形成する意識（心）まで全く違ってしまうわけではない。

和辻哲郎の古典的名著『風土』によれば、風土とは人間存在の型であって、風土の型は風土的・歴史現象の解釈によってのみ得られる（岩波文庫版二七頁）とされる。和辻の「風土」は今日では文化人類学や比較文化論で論ぜられる問題であり、和辻は世界史的視野に立って人間学を風土論として展開したのである。

仙川の風土という微視的というか顕微鏡的問題を考えるのに、「風土」を持ち出すことはいささか大袈裟であるが、仙川もまぎれもなくモンスーン型日本の平均的土地柄である。だから日本文化論や風土論で論ぜられることは仙川にもあてはまる。しかも仙川という土地は、現在では世界的大都市「東京」の一つの部分をなしているが、江戸というまちが刻み造ってきた都市的な要素も人情もなく、むしろ農村型である。地政学的には東京圏であるが、その人情・風俗は江戸時代の農村型の風土である。人情、風俗、言語、思考などは江戸の町人型とは違っている。つい三十年余り前までは農村の形態を現実態として保持してきたからである。永井荷風の文学的世界とは縁がないし、つい近い時代まで、自然という土地の上でしっかりと生業を続けてきた人たちを母体としているのが仙川である。洗練された都会風は仙川の気質ではない。今日ここで生活している地元の人たちと接すると、私のような移住民は、郷里の田舎、農村の人たちに接するのと同じ感触をうける。私の近くに私と同じくにから仙川の農家に嫁してきた人がいる。この人の郷里は田舎の農村である。実に良い人で、私は多大の恩恵を蒙っている。この人は多分郷里での意識と同じものをここに持ち込み、違和なく生活してきたと思われる。

こう考えてみると、風土を考える場合、都か鄙（みやこ ひな）という二つの区分がわかり易いと思われる。この分類は江戸時代既に論じられている判別し易い分類である。都が洗練で、鄙は野暮などという俗説には私は組みしないが、全く違う風土性（自然性、生業、民俗等）から分泌される歴史的文化的類型である。仙川は鄙に属するから、鄙の気風、気質、心をもつ。大地を長年相手にしてきた人々であるから、素朴で時には困るほど保守的にもなる。知的な雰囲気はもっていない。むしろ情的である。表には出さないが、外来人士は、この土着の民の中に半ば自分の先祖の魂をみつけ、他方顰蹙（ひんしゅく）と軽蔑を感ずることもあるかも知れない。私は土着の人々に好意をもつひとりであるが、人口の大部を占める移住民も、既にこの仙川風土に土着して、鄙人たる己れに気づかないにすぎないのではないのか。嫌悪とは己れをそこに見出す感情にほかならない。

仙川はかくて、往古から未来にわたり、鄙のマインド、スピリット、フモールをもちつづけるだろう。

仙川面白話三題

京町純彦
（若葉町一丁目）

仙川に皇大神宮

実篤公園入口左の小径をやや進むと、右側に小さな祠がある。東南に面した大理石の立派な鳥居に「滝坂皇大神宮」とある。皇大神宮といえば、伊勢の皇大神宮を想起する。皇大神宮と名の付く神社は全国的にも珍しいと思うが、その皇大神宮が鎮座しているのである。

祭神、創建年月日不詳といわれるが、調布市郷土博物館発行の『調布の文化財』（第二号）によると「土地の伝承として吉田奥左ェ門という人が伊勢詣りを三十三度行ない、その記念に神体（白幣）をもらってきて現在地（実篤公園）に自分の土地を寄付して祭ったのが社のはじまりといわれる」とある。今でこそ社殿も古くて小さく、つつましく鎮座しているが、かつては現在の実篤公園を神域とする広大な神社であって、俗に神明さん（田畠を守る神）と呼ばれ、毎月一日、十五日には縁日が出て大いに賑わい、近郷の尊崇をあつめていたといわれる。

最近は毎年受験シーズンになると、合格祈願のため参拝に訪れる学生さんが目立つようである。

現在東つつじケ丘在住の清水利秀さんがお社の仕守をしているが、この利秀さんが語る幼い頃のお社にまつわるエピソードは前に本誌で紹介した。お社の前を南東に急勾配で下る細い坂はお社の呼び名をとって神明坂といい、調布から見る富士三景の一つとして、あるカラー文庫に紹介されている。例祭は九月十五日である。

一つの建物に市と区が仲好く共存

甲州街道と三鷹街道口の交叉点を新宿方向に折れ、しばし歩いて仙川に架かる仙川橋を渡ると、間もなく右側に街道に沿って長い七階建てのマンションがある。このマンションは調布市と世田谷区の境界を跨がって建っている。

そのため登記上は世田谷区なのだが、住居の表示は一つ建物の中でありながら市部と区部に分かれている。しかも建物のほぼ中央にある玄関入口を境に、新宿寄りが調布市緑ケ丘、調布寄りが世田谷区給田なのである。普通新宿寄りが世田谷区、調布寄りが調布市と思うのだが、そんなことのため、このマンションを訪れる人はしばし戸惑ってしまうのである。八十を超える居住者は凡そ半々で、片や世田谷区民、こなた調布市民ということになる。

これを管理面からみると、行政上では警察、消防、郵便、水道、教育、保健所、ごみ処理など行政管轄が二重になり、取扱の相違もあって非常にややこしい。居住者にしても地域的には殆んどが仙川へ買物に出るのだが、世田谷区側の住戸では新聞は烏山の販売所が入るため、仙川のスーパー、商店などの広告、チラシが殆んど入らず買物情報が不便という。

また、ごみ処理では置場をそれぞれ別にしているが、調布市、世田谷区の清掃事務所の可燃、不燃ごみの収集日がたまたま交互なので、調布市住戸側も世田谷区住戸側もお互いに便乗して、毎日ごみを搬出できるというチャッカリした利点?もある。困るのは分別の問題で、調布市側置場から見ると、調布市側ほど分別のきびしくない世田谷区側の分別（可燃、不燃の二分別のみ）にならって、ごみを出されることらしい。また世田谷区は粗大ごみは有料だが調布市は無料なので、世田谷区住戸の粗大ごみも調布側に出されてじまう。

郵便物では、玄関にあるメールボックスが全住戸分連番で一カ所に設けられているので、マンション名と室番号が正しく記入されていれば、調布市、世田谷区どちらの住所番地を用いても受発信できる。

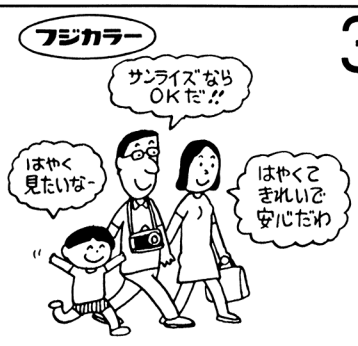
学校の通学域、警察の巡回域などなど、一つの建物が二つの行政区割に跨がることから起る珍妙な問題、エピソードがまだまだあるようである。

仙川は女性天国

仙川が京王線沿線随一のファッショナブルタウンといわれてから久しいが、それは今でも変わらない。それを仙川が白百合女子大、桐朋学園の門前町だからだという人もいるが、そうとばかりもいえない。たしかに朝八時を過ぎる頃ともなると仙川駅を出てくる女子学生を中心とした娘子軍に気の弱い男性は圧倒されてしまう。しかしそのことを認めながらも仙川はもともと水と緑に恵まれた女性的な風土、優しさが土壌としてあって、それがファッショナブルな街を芽ぐくんできたのではないか。

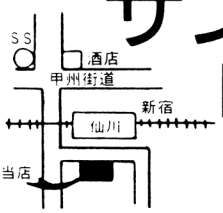
シッカロールの和光堂、キューピーマヨネーズ、栄太楼本舗など女性志向のメーカーがいち早くこの地に良質な水を求め得て工場を拓いたのも故あるかなである。平日は仙川の昼間人口は夜間人口の倍以上にふくれ上がる。その大部分が女子学生であり、また仙川の事業所、商店などに勤める女性であり、域外から買い物や所用で訪れる女性などに占められる。その影響で仙川地域の昼間人口に占める女性の割合は八十%前後（地元銀行調べ）という。当然のことながら女性好みのお店が多くなる。男性が自分のスーツを買う店を捜すのに苦労すると嘆くのもよく判る。先日ある新聞に吉祥寺が若者の街から主婦の街に変容しつつあると報じていたが、仙川は女性の街、それはまだ若者の街として連動、発展する可能性を秘めているのではないか。





3時迄のが今日出来る店!

仙川駅前 サンライズ現像所



スタジオ撮影 証明・オーデション写真 お見合・記念撮影

☎03-3300-6808
☎03-3326-4116
ヨイイロ

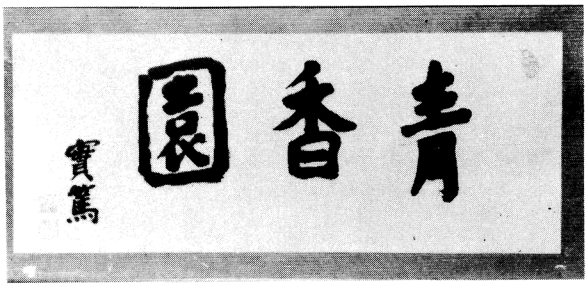
BOOKS
MEDIA BOX
CD VIDEO

東国書林

営業10:30～23:00（平日）
22:30（日祭）
京王線仙川駅前
TEL 3308－5613

MAGAZINE BOX313

商店街・芝信前
TEL 3326－8424





お茶・のり専門店 東京相和銀行前 TEL 3300-8737

うなぎ蒲焼

煮物
焼物
揚物

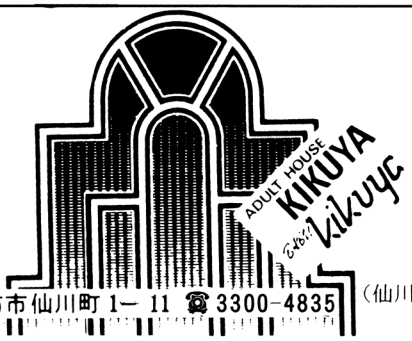
鈴仙

西洋弁当
幕の内弁当

仙川商店街・東京相銀前
☎ 3326-4455

アダルトハウス キクヤ

アダルト紳士洋品専門店



ミセス ブティック

キクヤ

〒182 調布市仙川町1－11 ☎3300-4835 (仙川商店街)



ひとむかし前の駅の顔('79)



駅前のひろば('83)

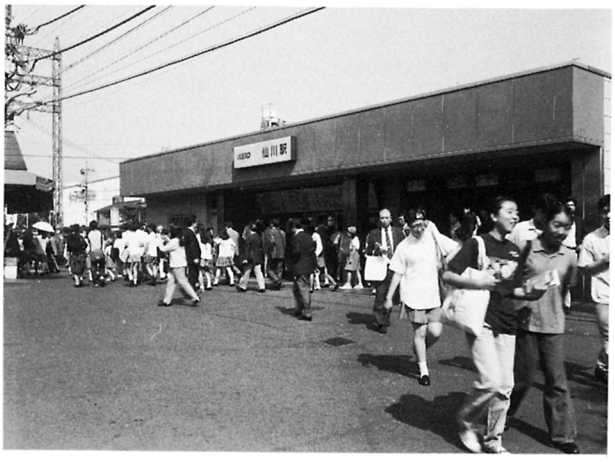
移ろい行く界隈の景色

時は流れ——

昭和50年代から

平成3年の今へ

モノトーンでシンプルな駅の顔



春には見事な桜をバックに





モール整備前の商店街通り('79)



モール整備後に新装すすむ(丸正も移転)



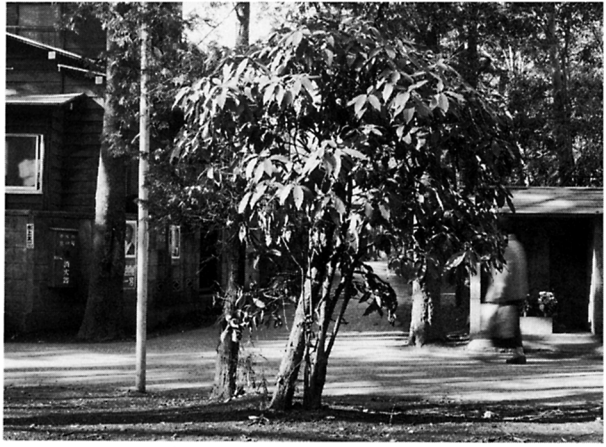
仙川駅前入口交差点角の一里塚('78)

コンビニエンスストア角にさりげなく





若葉の大坂上の庚申塔附近



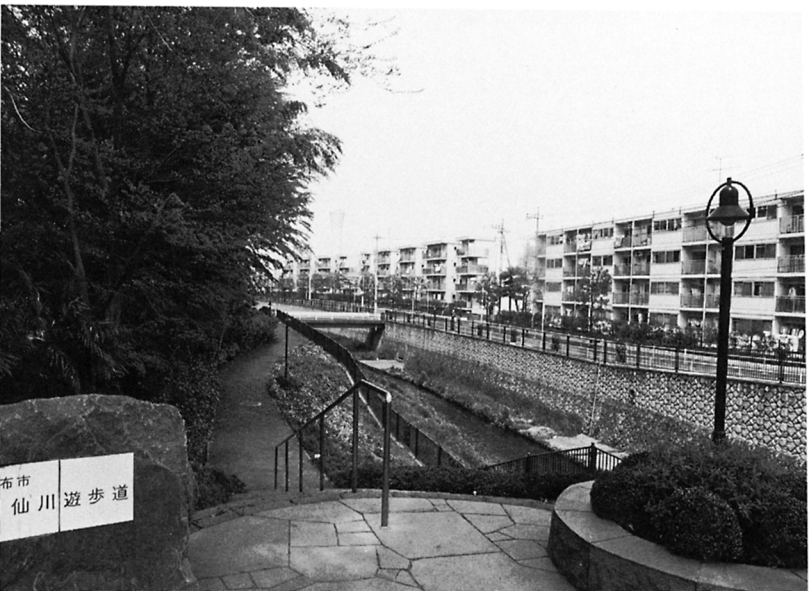
印象深かった雑木林のこもれ陽('79)

緑



時を忘れて遊べた緑の川辺('78)

今様の河川改修と河岸整備



道



甲州街道新道と旧道の合流地点('78)



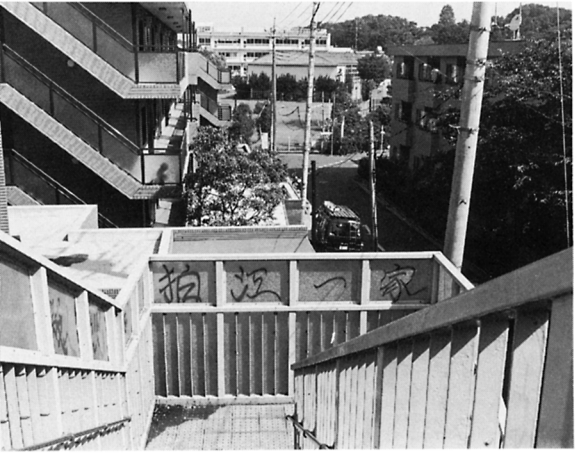
「仙川遺跡」と知る人は少ない



甲州街道沿いの板塀の家並み('79)



駐輪場と店舗付マンション へ

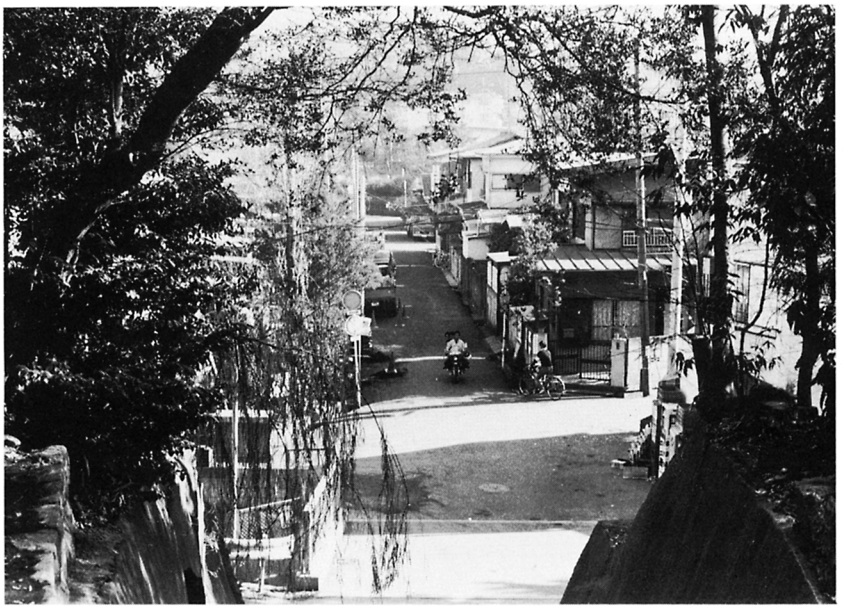


平家から中層マンションへ



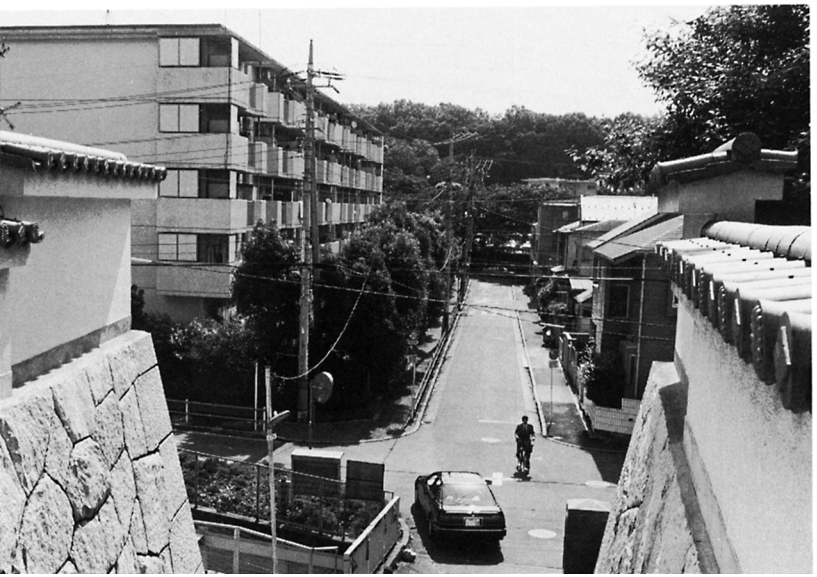
入間歩道橋上から第四中をみる('85)

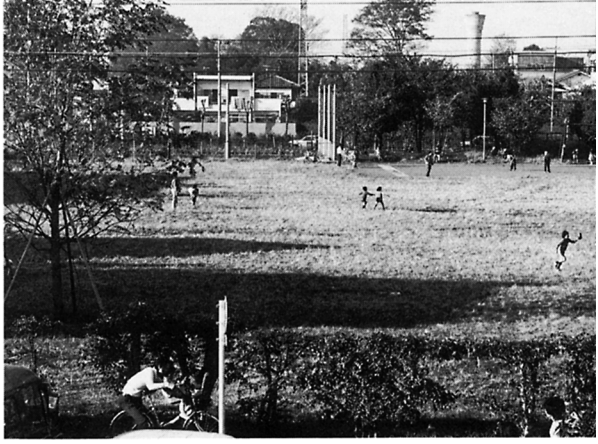
家



明照院から東方向を見る('78)

改築後の入間町二丁目住宅





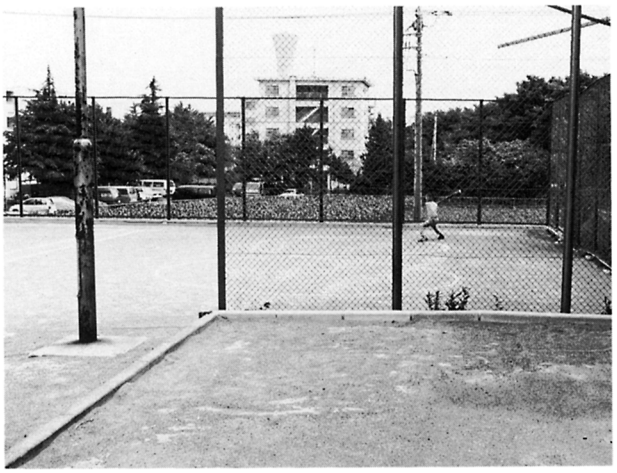
仙川第二仲よし広場('85)



仙川アヴェニューの北側の駐車場

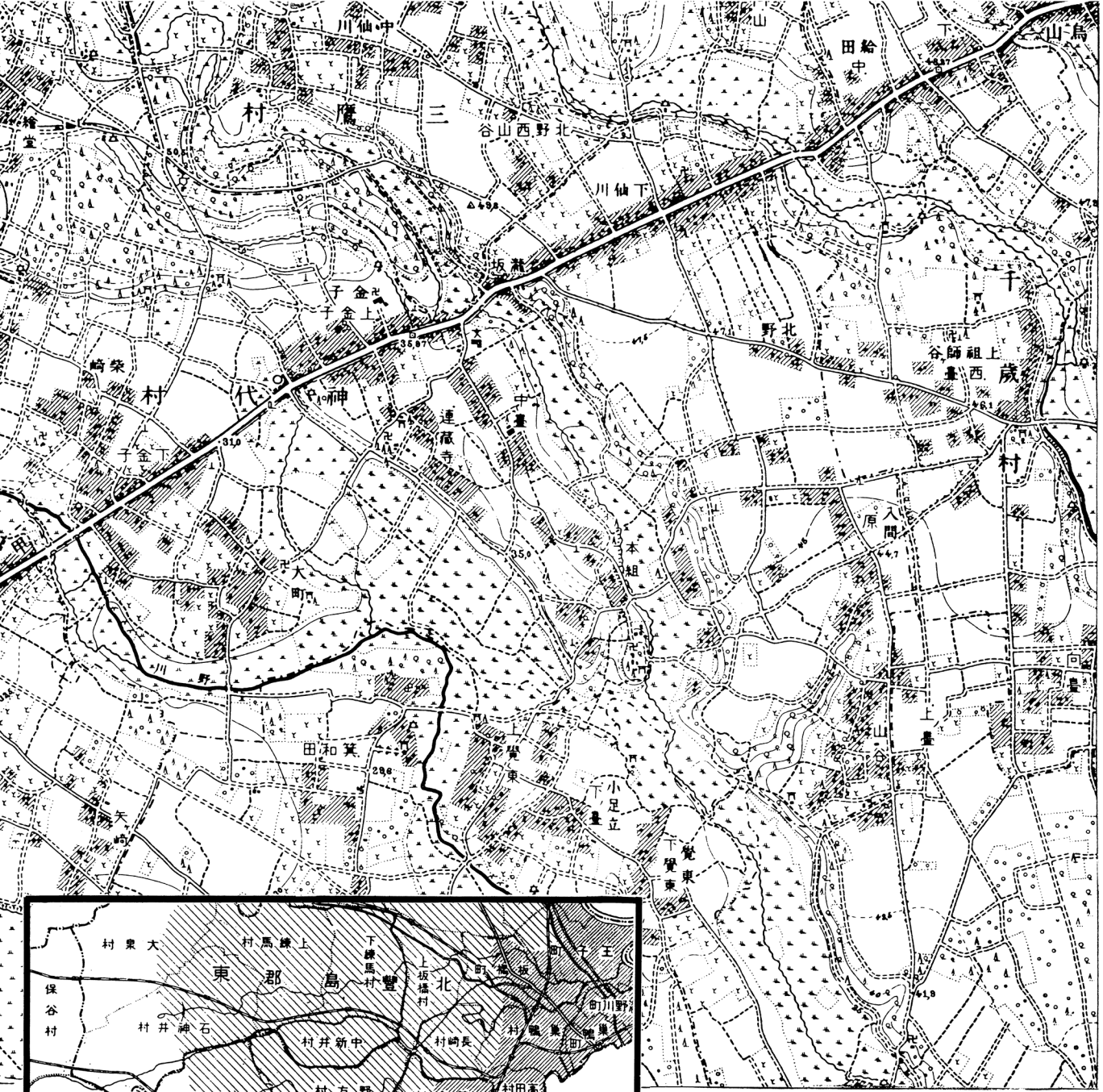


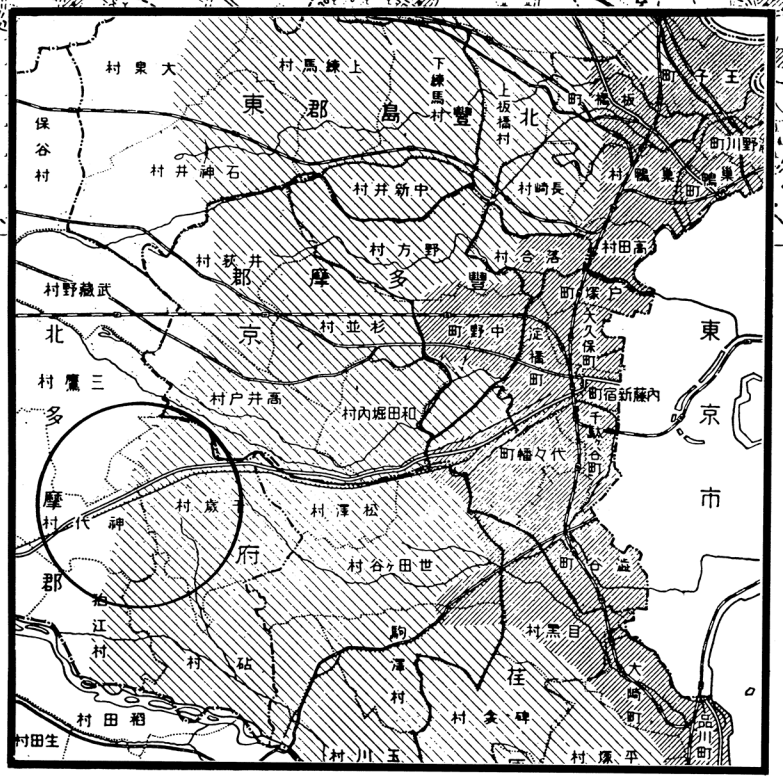
緑ヶ丘団地裏の原っぱでたこあげ('76)



緑ヶ丘児童館前とそのグランド

写真：加藤純一郎





▲二万分一地形図「下布田」より
（明治39年測図同42年製版）
◀西郊農業地帯図より（大正初期）
（『帝都と近郊』小田内通敏著）

古き地図より

帯地宅住

帯地培栽菜蔬

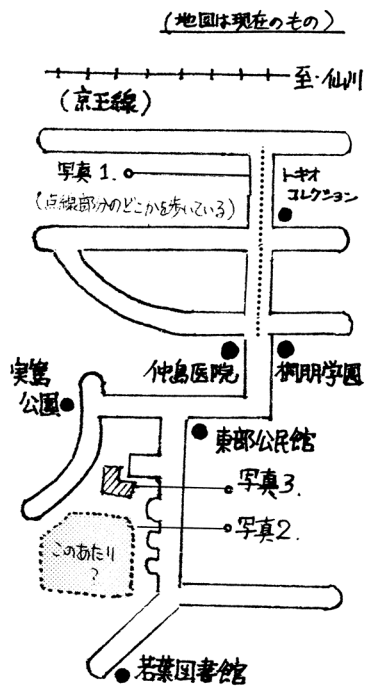


①

ある家族の肖像

〖どこを撮ったのでしょうか?〗

▶写真1.の中を歩いている
左の二名の説明によると……

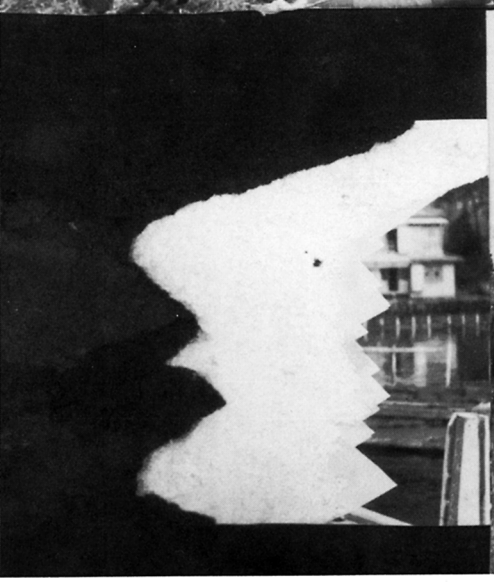




②









③

祖母は古いアルバムを持っている。彼女は明治三十七年（一九〇四年）生まれ、本年（平成五年現在）をもって八十九歳。数年前まで英語の勉強をしており、つい最近も仙川商店街で買物中に外国の方に道を尋ねられ、見事に答えてしまったエピソードを持つ。祖母は幼少の頃からの写真を大切に保管している。

結婚後まもなく、一家揃って現在の調布市若葉町に移り住み、ここに示されているのはおそらくその前後に撮影された、数少ない『仙川界隈』写真の一部である。

冒頭の写真などは『これが仙川ヨ』と言われて、孫の私なんかは『えーっ!!』と叫って驚んでしまった。昭和三十年に仙川で開店したサンライズ現像所のおばさまも、当時は、数えるほどしかないお店のほかは、ほとんどこんな具合であったと話しておられる。こんな風に仙川が『何もなかった』頃を証言できる方は、存外そこらじゅうに居られると思われる。正確な考証のためでも思い出話のためでもよいから、そうした方々が集まって妻畑と木立だけだった仙川を語り、また記録できる機会があったらよいのではないか（ついでにお友達をつくるのがヘタな祖母にもヨイ刺激になったらなー、とか）と、『仙川といえば商店街』しか知らない若輩者は思ってしまうのである。

（中島りえ）





⑥地蔵菩薩立像



⑦左：庚申塔　右：地蔵菩薩立像



⑧百万遍供養塔



⑨左から
庚 申 塔
地蔵菩薩立像
庚 申 塔
如意輪観音坐像

⑪石橋供養塔
⑫庚申塔　地蔵菩薩立像　聖観音立像

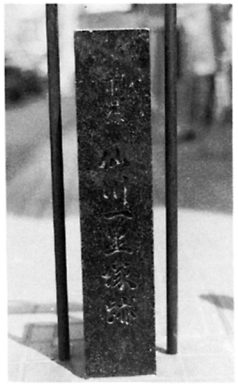
明治末頃の道

1：10,000

カメラ▷山下　琢

●マップ21　せんがわ界隈史散策

～路傍の石仏をたずねて～



②仙川一里塚



①庚 申 塔



③薬師如来坐像



④庚 申 塔

⑤大日如来坐像



⑩庚 申 塔

仙川、失われ行くもの

奥田　道大

仙川に住むようになってかれこれ三十年になります。

別段、縁のあった土地ではなく、家を求めている時、ある人の紹介で建売住宅を見にきたのです。当時母親と目黒に住んでおり、二人で京王線できて、仙川の駅で降りました。プラットホームに降りたって、最初に目に入ったのが質屋さんの林でした。シーズンは忘れましたが、緑豊かな林に、小鳥のさえずる声。しかし、それを「郊外のどこにでもある風景」とは感じませんでした。いまでもなぜだかわかりませんが、「この街はよい郊外住宅地として発展する」予感がしました。

そこから、家のあるところまで歩くのが一苦労でした。商店街には魚屋の一軒位しかなかったころです。甲州街道を逆に歩いていけばいいと言うのですが、歩けど歩けど……。甲州街道沿いの昌翁寺の近くに、いつも雨戸を締め切っていますが、今でも昔ながらの鍛冶屋さんがあり、それが印象に残っています。そこから横道に入って、緑ケ丘団地を通り抜け、くぬぎ林や竹藪を縫って、やっとたどりつきました。

あの鬱蒼とした竹藪やくぬぎ林がいかにも印象的でした。そして、樹齢数百年とも言える立派なケヤキ並木は、旧道のなかの旧道の面影を残していました。夏の夜などは少し怖くなるような道でしたが、かぶと虫が灯を求めて飛び交っていました。ほんの五、六年前までの話です。母は、その先の診療所までよく通っていました。年寄りには少し距離がありますが、林や竹藪のところを抜けると夏でも涼しいと言って、木の株で一休みしては診療所まで通っていたものです。

今ではその面影もない只の道路になってしまっています。ケヤキやなにかは市の保存林でしたが、そんなことは一切お構いなしにほんの一夜にしてすべて切り倒され、竹藪は取り除かれ道路が拡幅し、そのあとにマンションが立ち並びはじめました。以前の印象が余りに強く、母の思い出もある道なので、その変わり果てた姿を見るのが、とてもつらくて、いまではその道を避けて、大きく遠回りして歩いています。本当に嫌なのです。ここ数年はまた通る度に風景がどんどんと後退しています。緑ケ丘小学校の周りにもかなりの竹藪がありました。ここも工事が始まって全部取り去られてしまって、今では薄っぺらなマンションが建っています。不思議なことにあの界隈でまだ緑が残っているところはいずれも三鷹市なんです。調布市と名のついたところが一番変わってしまっています。生産緑地の問題一つとってみても、三鷹市と調布市ではその取り組みが決定的に違っています。

私誌抄　その三

今年になって、はじめて調布市民として市長への手紙を書きました。京王デパートに買物にいった折りに体験した、調布市からの研修職員に関わるエピソードをもとに、大学の新聞に卒業生におくる文章を書いたので、そのコピーを同封して送りました。調布市への思いがあったからこそ手紙も書いたけれど、未だ受け取りましたとの返事もきません。人を仲立ちとして、生きたコミュニケーションを通してこそまちづくりも可能になると思うのですが、調布市もお役所体質、建て前行政で市民に対するようになってくるとだめなんじゃないですか。

まちづくりの担い手としての地主層が手薄であるのと同じ様に、まちづくりを担当できるプロとしての心意気と力量をもった市の職員がいない、育っていない。見方によったらボス的な存在といわれようが、力不足の地主層や議員の牽引力になるようなプロの職員が調布市にはいないのではないか。それぞれの窓口では有能な若い職員はいるかもしれないけれど、もう少しこわもてのするようなプロの職員がいないと、地元との間に信頼感がつながらないし、話しも通じないと僕は感じています。今まで地域に自信を持たせるような行政がなかった。だからはじめにも言いましたように、



街が虫食い状態で心情的には耐えられない状況になってきています。

仙川の街は変わりました。最初の直感のとおり「華のある」というような街に発展しました。駅から甲州街道沿いの商店は魚屋一軒程度しかなかった三十年前の状態からみれば夢のような話しだと思います。京王線でも仙川で降りる人が目立って多い。私の友人が給田にいますが、仙川のほうが買物等で便利だということで、千歳烏山を使わずに仙川の駅を使っていたりします。しかし、私のイメージする「仙川らしさ」、賑わいの中にもしっとりとした街並みの厚みといったものが喪われつつあります。市にしても基本的な街づくりのプランが不透明であったために、地元でも共通の街づくりの問題に固執しながら、地域をなんとかしようという志ある人に仙川は恵まれなかった。地主さんにしてもどんどん畑を潰し一部を駐車場にし、そうこうしているうちに土地をどんどん売り渡すなり、他に転用するなりして、郊外の何処にでもあるような変質をしてつまらない街に化してしまい、今、さらにそのうごきが加速しつつあるように思えます。

だから、いま、私個人では、仙川の街にこだわるつもりはあんまりないのです。三十年前、最初に駅に降りた時の雰囲気というか街の香気、品格といったものが仙川から喪われました。今、房総のほうに小さい家を求めて、家族の生活の重点をそちらのほうに徐々に移しています。

（緑ヶ丘二丁目／聞き書き・大久保信昭　大脇正昭）



〝清貧の思想〟を生きる

昨年の春、仙川の住人にとって平穏ならざることが起きた——買い物客に安らぎをと、仙川薬局の店先に置かれたチュウリップのプランターが、赤・白・黄色の美麗な花を咲かせた途端に、根こそぎ持ち去られてしまったのだ。

仙川商店街のI氏は「このプランターは、仙川薬局の若奥さんが一日一日の成長を慈しみながら、球根から大切に育てたもの。それを家に持ち帰って〝綺麗だ〟と鑑賞する人の感覚が分らない。日本は、先進国だ、貿易黒字とかいっても、〝生命を慈しむ人間性〟において、諸外国に比べて百年も、二百年も遅れをとっていると痛切に感じた」という。

I氏自身、かつて同様の苦い経験がある。I氏の店の前に、手づくりの木製ベンチを用意した。京王沿線から仙川の通称「医者通り」の各医院に通うお年寄りたちにとっては、ホッと一息できるベンチであり、さまざまな交流の輪も生まれた。

そのベンチが、たった一晩しまい忘れたために、後片もなく消えてしまったという。二度も、である。

こうした背景についてI氏は、「些細な出来心といって軽視する風潮こそ問題視しなければならないと思う。〝モノ・カネ〟が優先しがちな日本社会の病巣を摘出するには、モノがなく苦しい時代を多少なりとも体験してきたわれわれ大人が、まず襟を正し、子どもたちに〝清貧の思想〟をきっちり伝えていく責務があるのではないでしょうか」と話す。

ゴルフ場は、自然環境を破壊する。I氏は今年、クラブを一切捨てた——。

（文・青野道子）

珍味、新鮮さで評判――築地・気仙沼より直送

〈四季の特別メニュー〉

春・磯の香りいっぱいの芽かぶ
白魚のおどり喰い
夏・殻ウニ
秋・サンマの刺身
冬・殻がき(生食)

すしの磯春

<出前承ります>

仙川保育園前

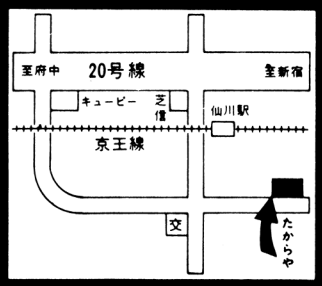
☎ 3300-1710, 5002　　水曜定休

買入れと販売

たからや

営業時間AM10:00～PM 9 :00

調布市仙川町 1 -23- 6　☎3308-7170



丹波路　山路の露　栗ようかん　竹流し水羊かん

笹子見し幸巻餅の柔ら幸　汀女

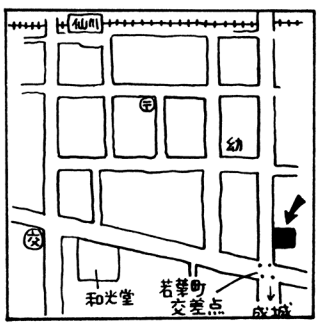
御菓子司 光輪堂

若葉町 2 －14－ 5 （和光堂横）　木曜定休　☎3308-1455

診療時間
・AM 9 ：00～PM 7 ：30
・祭日、 9 ：00～12：00
・日曜、休診

仙川獣医科病院

〒180 調布市仙川町 1 －34－13　☎ 03-3300-4927



あなたの必要な情報を提供いたします

◉一般紙

朝日新聞　東京新聞

日本経済新聞　サンケイ新聞

◉折込、印刷、配布、取扱　◉朝日旅行代理店

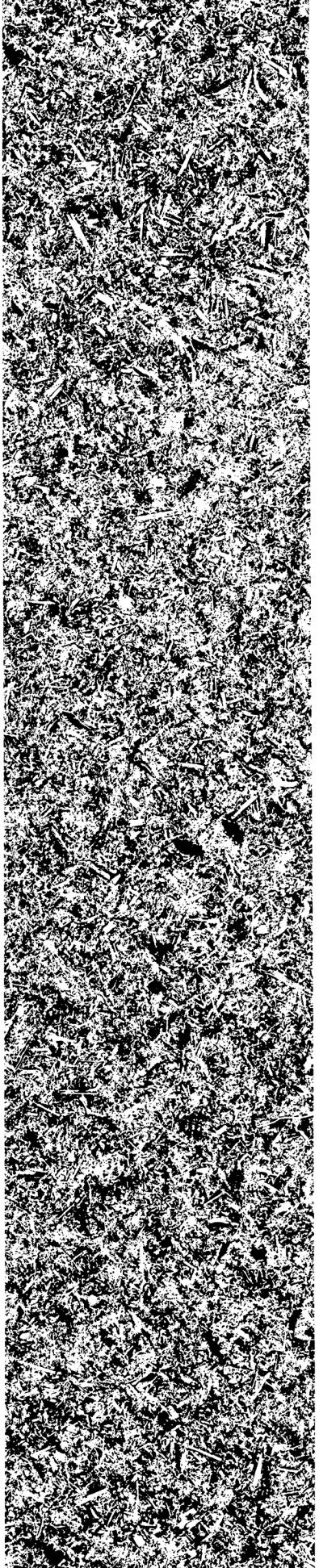
調布市若葉町2-4-25神代高校信号入る　ＡＳＡ仙川　☎3326-4693

所長　橋本　功

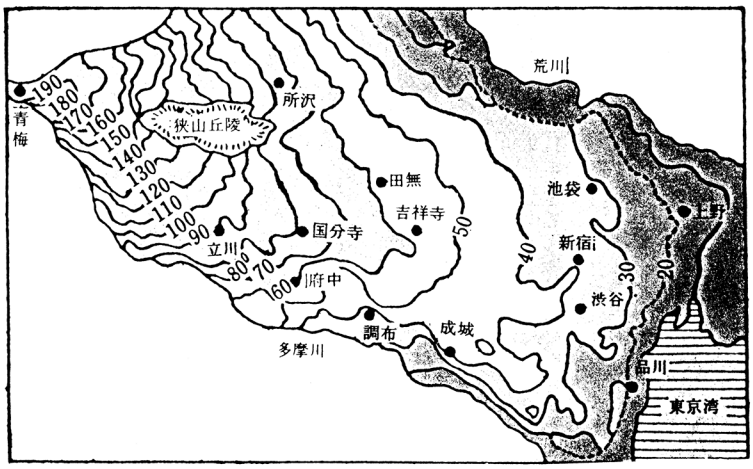
せんがわ界隈史年表

監修　伊藤綽彦
　　川口三八
　　佐美　佑
編述　伊藤綽彦＋編集部

１５０億年前の宇宙の大爆発〝ビッグバン〟、
４６億年前の地球の生成――といった
悠久の創世記はロマンに満ちた興味深いものであるが、
ここではそこまではさかのぼらないことにしよう。
さて、私たちが毎日踏みしめている、
この仙川の大地はいつ頃に生成されたものであろうか。
そして、この仙川に、いつ頃から、
どの辺りに人々は住みはじめたのだろうか。
仙川の界隈史物語は、そこからスタートする。



仙川の大地
その生成と地勢



武蔵野台地の地形

【イントロダクション】

日本列島は、約二五〇〇万年前にユーラシア大陸から離れはじめ、完全に切り離されてほぼ現状の形態となったのは、約一万前のことである。関東平野は数十万年前は未だ海中にあり、武蔵野台地は約一五万年前から一万年前の間に形成された。形成時期により大きく四つの地層、①下末吉面（一五万～一〇万年前）、②武蔵野面（九万～四万年前）、③立川面（三万～一万年前）、そして④沖積面（一万年前～）に分かれる。

それらは、地殻変動や氷河の盛衰による海水面の昇降が繰り返されて、段丘面が次々につくられていったものである。また、山地からは古多摩川などの河川が砂礫を堆積し、扇状地を形成していった。

一方では、箱根山や古富士などの活発な火山活動により、火山灰が盛んに降下し、堆積していった。火山灰は風化して粘土質となり、関東ローム層と呼ばれる赤土となった。

仙川の地形と地層

調布市は武蔵野台地の南西部に位置しており、北から南にかけて二つの段丘（武蔵野面、立川面）と多摩川沖積低地の三段状に地形面が分かれている。最も高い武蔵野段丘は標高五十五～四十メートルで、仙川地区はほぼ全域この段丘上にある。

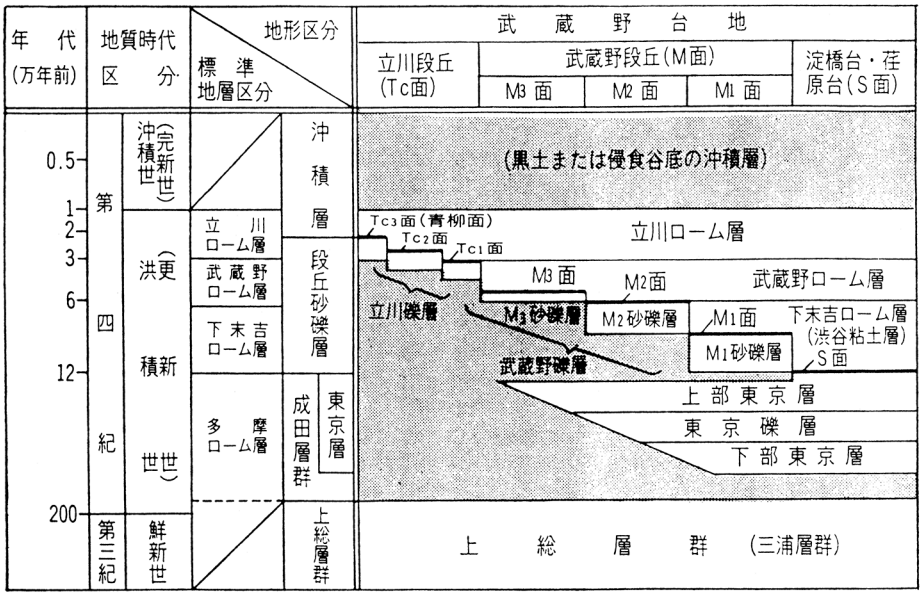
次は調布飛行場から国領町にかけての市の中心部を形成する立川段丘で、標高は四十～三十メートルである。そして、多摩川沿いの標高三十～二十五メートルの沖積低地となっている。

そこで武蔵野段丘上にある仙川のこの大地をながめてみると、表土は黒土（腐植土）を多量に含んでいる。この地を掘り下げていくと、赤土（関東ローム層）が二層――立川ローム層（厚さ約四メートル）及び、武蔵野ローム層（厚さ約四メートル）を形成している。

次に、古多摩川が運んだ砂、礫からなる厚さ約四メートルの武蔵野礫層があり、井戸水はこの地層から汲み上げている。さらにその下には、武蔵野台地の基盤となる砂と泥の東京層、泥岩の上総層群となっている。

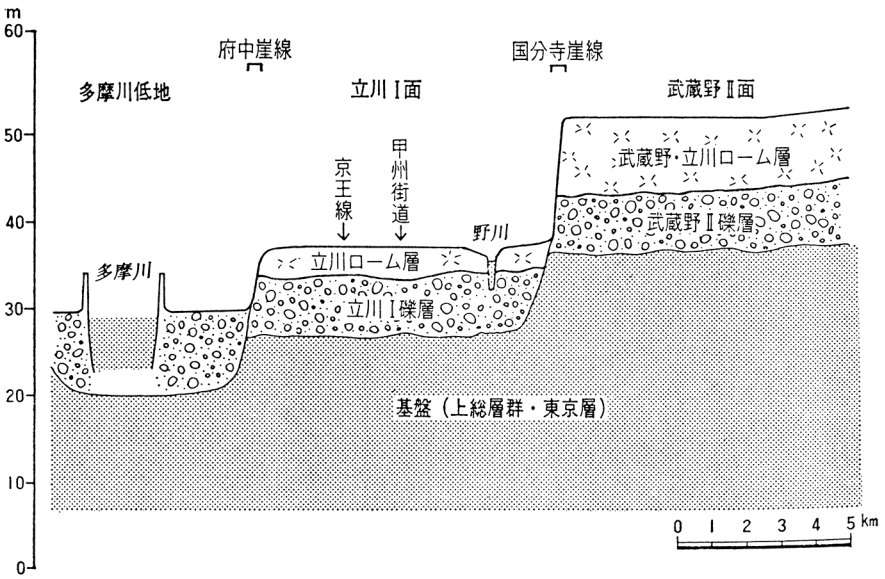
水の湧くハケの地

さて、二つの段丘と沖積低地との境は「ハケ」と呼ばれる急な崖となっており、その基部には豊富な湧水があった。特に、武蔵野段丘と立川段丘の間の「国分寺崖線」には多くの湧水が分布していた。市の中央部を流れる野川、仙川地区を流れる仙川や入間川も、そ



東京の地層（調布市史上巻より）





調布市域の地質断面図（調布市史上巻より）

れらの湧水を水源としている。実篤公園の湧水は池を形成し、今でも貴重なオアシスとなっている。

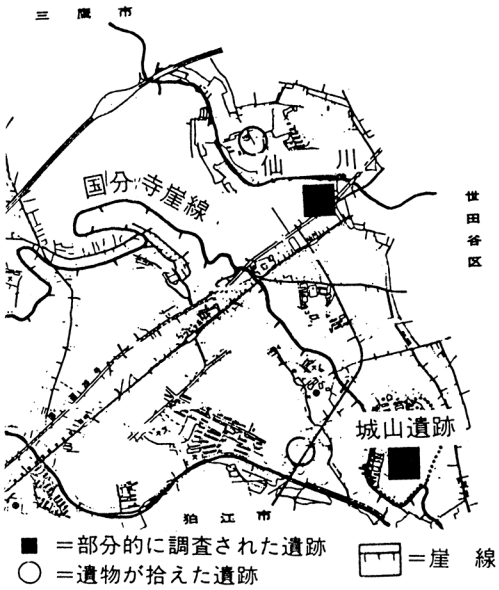
古来、人や動物は水のある所に集まるものであり、市内の最初の集落も、河川やハケ周辺から始まったと考えられる。

先土器時代

●仙川に狩人現われる



B.C.10,000年以前



【イントロダクション】

アフリカで五百万年前に誕生した人類の祖先である猿人は、百五十万年前に原人に進化し、火と石器を持ったハンター（狩人）となり、やがてユーラシアへと分布していった。そして脳容積の増大とともに、三十数万年前には、旧人へとさらに進歩を遂げた。これら石を材料に利器を作った人類最古の時代を旧石器（先土器）時代という。未だ土器をつくることを知らず、その使用の痕跡がないことから無土器時代とも呼ばれる。また、石器以外にも木製品と骨角製品の使用が予想されるが、これらの製品は腐ってしまうので発見されることはほとんどない。

日本においては、宮城県北部から一四万年前の最も古い石器が発見されており、一万二千年以上（BC一万年以前）の頃までの長い期間である。

武蔵野台地と最初のハンターたち

武蔵野台地に最初に人が住み始めるのは、三万～二万年前である。当時は氷河時代の最後の大変寒冷な時期で、海水面が今より百五十メートル以上も低く、日本列島は未だ大陸と陸橋で結ばれ、火山が盛んに噴火を繰り返していた。平均気温も現在より七～八度低く、カラマツ、エゾマツなどの樹林が茂り、草原が広がっていた。また、ナウマンゾウやオオツノシカなどの大型獣も広く生息していた。

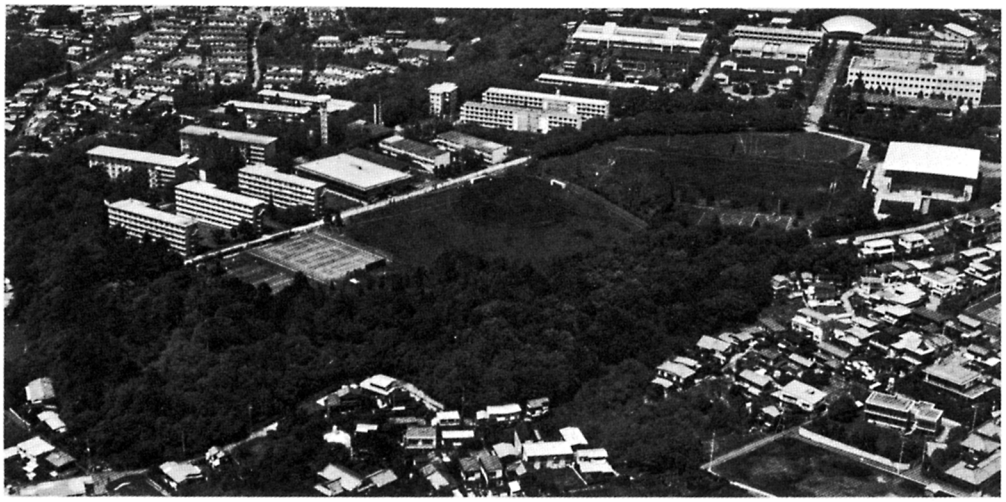
ハンターたちは、木の実、球根を採集し、魚、貝、鳥や獣を捕らえて食料としていた。住居としては、河川や湖沼の近くの日当たりの良い岩蔭や洞窟、または数本の丸太を組んだものを毛皮や木の枝で覆った簡易なテントであった。そして絶えず季節的な移動を繰り返していた。

調布市内では野川遺跡の他、仙川遺跡と入間町城山遺跡から、先土器時代の生活の跡が発掘され、この仙川の地にも二万数千年前から人々が住んでいたことが分かる。

■仙川遺跡（仙川町三丁目）

仙川遺跡は仙川と甲州街道が交差する仙川町三丁目付近にあり、仙川が緑ケ丘団地付近で大きく蛇行するあたりから舌状に張り出した台地の右岸に位置する。

発掘は昭和四七年、遺跡の東側にあたる旧甲州街道と新甲州街道にはさまれた三角形になった地点で、調査は立川ローム層の深さ三メートルまで行われ、合計五つの文化層が確認されている。



入間町城山遺跡全景（写真提供／ＮＴＴ中央研修センタ）

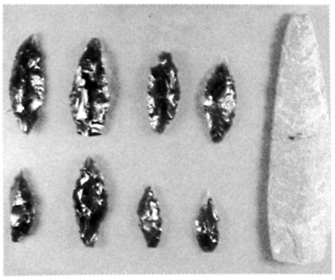
出土遺物は石器や石片、礫を含め約二千三百点あり、そのうち製品として加工された石器は八九点である。石器の種類は掻器・尖頭器（石製の槍先）・ナイフ形石器を中心としており、その九割以上が黒曜石によって作られている。こうした石材は長野県霧ケ峰などの原産地から運ばれてきたもので、先土器時代の幅広い交易および行動範囲を物語っている。

また、縄文、弥生時代の遺跡が出土し古墳時代の住居跡も確認されている。

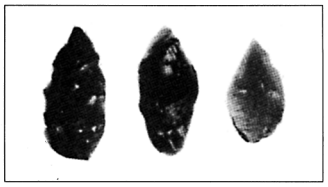
■入間町城山遺跡（入間町一丁目）

城山遺跡は入間町一丁目の現・ＮＴＴ電気通信センタの敷地内に在り、守衛所に申し出れば見学が出来る。遺跡は武蔵野段丘が舌状に大きく張り出した高台に位置し、東側の斜面は、蟹沢（がんざ）と呼ばれる深い谷地形になっている。台地の眼下には野川が流れ、その比高は五～六メートルである。この舌状の台地全体が遺跡であり、昭和二六年、市内において最初の発掘調査地点となった。現在までに十二回の発掘調査が行われ、先土器をはじめ縄文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代にわたる複合遺跡として知られている。また、西南側の谷には斜面を利用した横穴墓墳が確認されている。

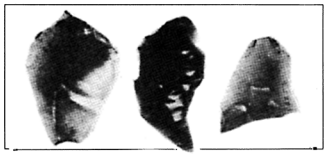
先土器の発掘調査は昭和五六年、地表から約四メートルの深さまで掘り下げての調査であった。遺物は石器と礫器をあわせて二千八百点近く出土し、石器は尖頭器・ナイフ形石器が主体で、その石材は仙川遺跡とおなじく、九割以上が黒曜石で占められ、他にチャートや珪岩質の石器がみられた。



城山遺跡出土尖頭器



仙川遺跡出土尖頭器



掻器



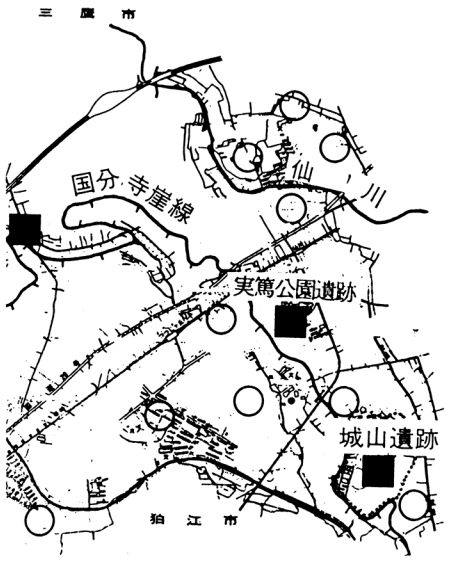
フレーク

縄文時代

●仙川に縄文の花開く



B.C. 10,000年～
B.C. 300年



【イントロダクション】

長い氷河時代は、一万三千年前頃から終わりに近づき地球に温暖な気候が戻ってきた。氷が解けて海水面が上昇し、一万年前頃には大陸と切り離され、日本列島が誕生した。

気候の温暖化に伴い地球や動植物相が大きく変化し、人間の生活環境の変貌は、新たな衣・食・住の生活様式への改革をせまり、縄文文化の時代のトビラを開いた。

縄文時代は約一万二千年前（BC一万年頃）に始まり、約二千三百年前（BC三百年）まで続き、約一万年にわたるこの長い時代は、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六つに区分される。

新しい食料資源の形成

気候の温暖化により、コナラ、クリ、ブナなどの落葉広葉樹やシイ、カシ、クスノキなどの照葉樹が北上し、森林を形成するとともに、ドングリやクリなどの新しい食用植物をもたらした。大形動物は、急激な環境変化に適応できず減少し、狩猟しつくされて絶滅し、かわって、イノシシ、シカ、ウサギや鳥などの中・小形動物が森林の主役となった。海浜部においては、海水面の上昇に伴い各地に内湾部が形成され、ハマグリ、アサリ、シジミなどの貝や魚などの魚介資源が身近なものになっていった。

弓矢と土器の発明

すばしこい小動物を仕留めるために、槍にかわり弓矢が発明され、改良が重ねられ、狩猟技術の大革新がなされた。

BC一万年頃、長崎県の泉福寺洞窟に住む人々が、粘土の粒や紐をはりつけて装飾した最初の土器をつくり、それが縄文土器の起源となり、全国に急速に普及していく。後に縄の文様が多彩にデザインされていくことになり、「縄文土器」と総称される。

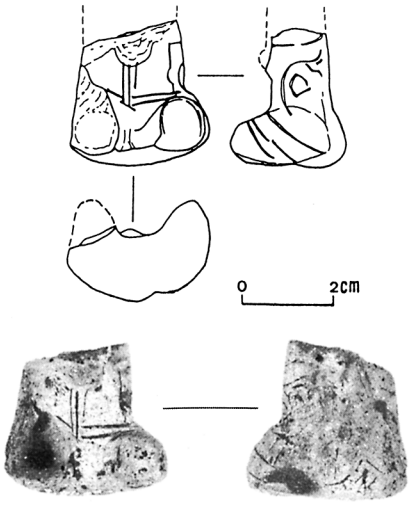
最初につくられた土器は、すべて煮炊き用の深鉢で、ドングリや肉、魚介などの調理が始まった。煮炊きによって、食物の種類は大幅に増え、また衛生的でもあり、食生活は飛躍的に豊かで安全なものとなった。飲料水などを蓄えておくこともでき、生活の安定とゆとりは、新しい文化を育む原動力となっていった。

定住化とムラの出現

BC七千年頃になると、狩猟に依存した移動生活から、狩猟・漁労・採集にバランスよく



縄文土器（市内北浦遺跡出土）



実篤公園遺跡出土　土偶

支えられる、より定住的な生活が始まった。「竪穴住居」が普及するとともに、10数棟が集合した集落が関東地方に出現し、全国に急速に拡がっていった。

また同じ頃、茨城の花輪台の村では、最初の土偶がつくられている。この小さな女性像＝神像に生活の安全や多産、豊漁への祈りをこめたのであろう。〝土偶〟や〝大型石棒〟などの呪術的な道具をつくり始めたことは、精神活動の営みの象徴として画期的なできごとであった。

最盛期から冷涼化による低滞期へ

BC三千～二千年頃が最も栄えた時期であり、日本列島の全人口は約三十万人、人口が集中していた関東地方では一平方キロメートル三人という人口密度の試算もある。

BC二千年頃から気候が冷涼化に向かい、自然環境の変化に伴い、生活の不安定さが増大し、人口と集落数が激減していく。一方、不安な生活は呪術や祭祀を極度に発達させていった。

仙川における縄文人の活動はたいへん活発で、九カ所の遺跡のうち、入間町城山遺跡など八カ所から草創期から後期にかけての遺構や遺物が出土している。実篤公園の開園工事の際に発見された「実篤公園遺跡」を次に紹介する。

■実篤公園遺跡（若葉町一丁目）

昭和五二年三月二九日、公園入口部分で、樹木の移動に際して土器片等が出土したことが調査のきっかけである。出土した遺物はおよそ千二百点で、小形土偶、打製石斧、磨石、そして縄文中期から後期にかけての土器であった。土偶は現存高約三センチメートル（完形でも五～六センチ）で胸部以上と右足を欠損している。この土偶は縄文中期後半の土器としては、市内で初めての出土例であり注目される。

なお、実篤公園は南西に面した武蔵野段丘縁辺から国分寺崖線下までを占地している。公園入口付近が標高四十七メートルほどで、南西方向へわずかずつ下がり、四十五メートル付近から崖線となる。中腹の三十五メートル付近に湧水点があり、そこを境に傾斜は緩やかになり、入間川沿いの低地へと続いている。

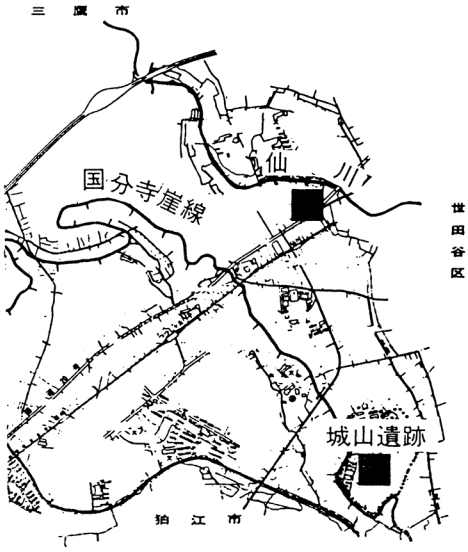
生前の実篤さんが「うちからも縄文土器がでるんですよ」と嬉しそうに語っていたとのことである。

弥生時代

●仙川は歴史の舞台裏へ

B.C.300年～約350年





【イントロダクション】

弥生時代は今から約二千三百年前（BC三百年頃）に始まり、約六五〇年間続いた。中国大陸と朝鮮半島から伝来した「稲作農耕」と金属器による新しい食料生産活動は、縄文時代からの生活スタイルや社会構造に革命をもたらした。今日の日本社会の原型にあたると考えられる時代である。

稲作農耕の伝来

稲作農耕は中国大陸や朝鮮半島から九州地方に伝来し、北上して伝わった。その結果、南関東の多摩地方に伝えられたのは弥生時代の中期頃といわれる。

稲作の伝来は当時の社会構造にも影響を及ぼす。まず、収穫が運任せであった狩猟や採取などの採集型経済から、確実な収穫を見越せる計画的な生産型経済への転換をもたらした。次に、稲作が大勢の人手を必要とすることにより、人々が一カ所に集まって暮らし集落を形成するようになった。その結果、人々の間に身分や階級が生まれ、これが後の豪族へと変化してゆく。

最近の調査の結果、縄文時代にも稲作が行われていたことが判明しているが、全国的な広がりを見せたのは弥生時代である。

弥生土器

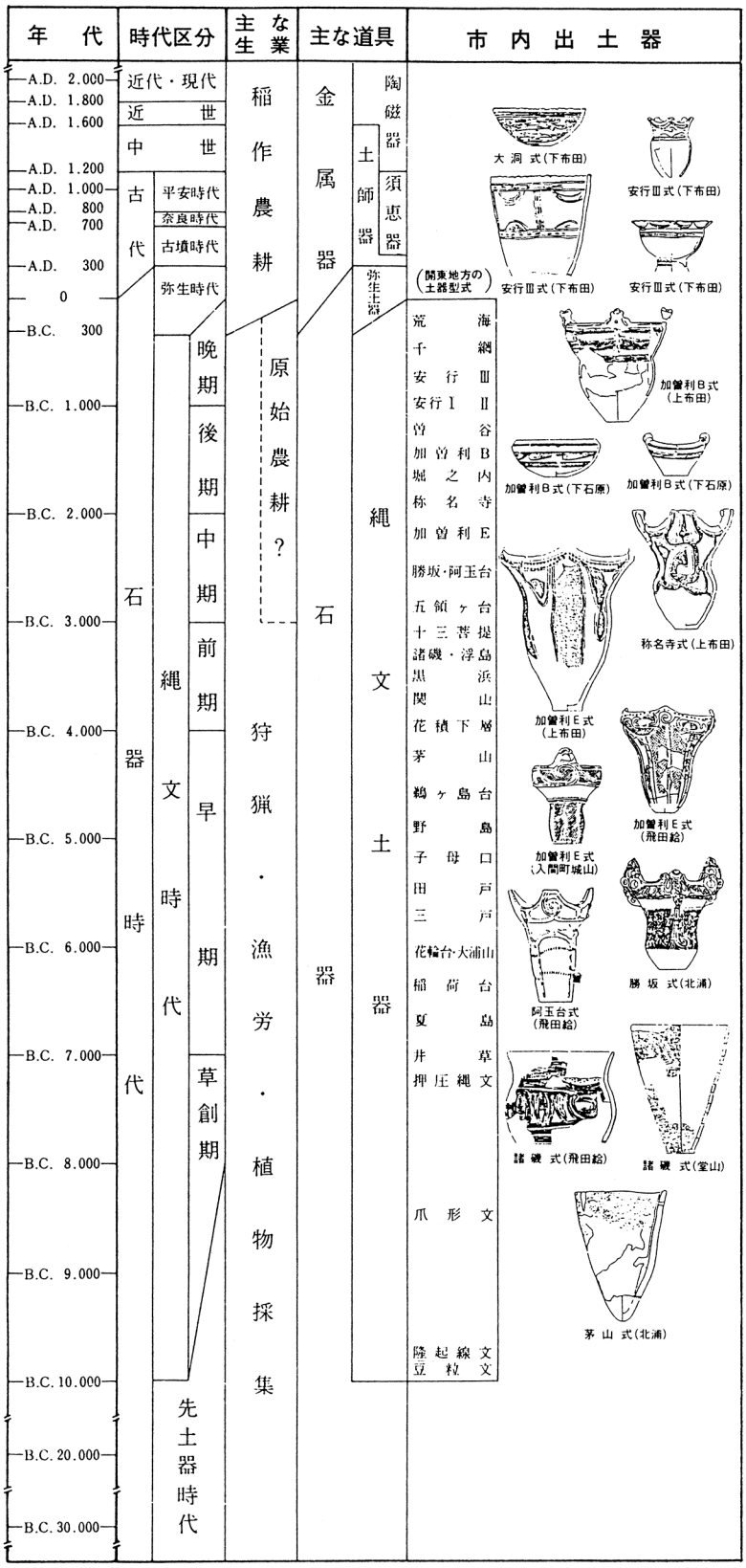
弥生土器の名称は、明治一七年に当時の地名で東京府本郷向ヶ丘弥生町の貝塚から壺形土器が発掘されたことに由来する。同じく時代名もここからきている。

弥生土器は縄文土器に較べると肉が薄く、形が整いスマートである。また、製作技法もさ程の違いはないが、文様は人物や動物、建物を描いたものが登場している。

鉄、青銅などの金属製品の登場

稲作の普及により鍬や鋤の需要が増え、それらの仕上げ加工のために鉄が使用され始めた。また、各集落間で土地や田をめぐっての争いが起こるようになり、鉄や青銅の武器が登場する。やがて、鉄、青銅などの金属による器や道具が主流となり、弥生時代後期に石器は姿を消していった。

●資　料●　大年表と調布市内からの出土土器一覧



調布市郷土博物館発行　「調布の文化財」より



農耕不毛の地　調布

調布市内の弥生時代の遺跡は八カ所にすぎず、発見されている集落跡は深大寺城山遺跡と入間町城山遺跡の二カ所である。しかも、西暦三百年頃後期後半以降のものである。その理由として推測されるのは、北上してきた農耕文化伝播のルートから外れていたこと、そして何よりも当時の自然的条件が未熟な農耕技術に適さなかったことである。ちなみに市内で水田跡は発見されていない。当時の調布は人煙まれな過疎地であったと考えられる。

「入間町城山遺跡」からは、弥生時代最終末のものと推定される住居跡が二軒確認されている。また、仙川沿いから遺物が多少発見されているにすぎない。

せんがわ周辺の遺跡分布図



埋蔵文化財の保護

人々が生活した跡は、長い月日の間に腐りにくいものだけを残して土にもどってしまいます。その限られた手がかりをもとに、当時の生活を復元するのが発掘調査であり、考古学です。遺跡はいろいろなことを私達に教えてくれます。先人達が残した貴重な遺跡を、後世に守り伝えるのは現代に生きる私達の責務です。

遺跡・遺物を発見したら

遺跡として周知されていない土地で遺跡を発見した場合は、その現状を変更することなく文化庁長官に届け出なければなりません。

また、遺物を発見した場合は、遺失物法によって、警察署へ提出することになっています。

遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	時代	出土遺物
1	緑ヶ丘(みどりがおか)遺跡	緑ヶ丘一・二丁目	台地縁辺・斜面　集落跡　縄埋甕　土坑　平火葬墓　中掘立柱建物跡	縄中平中近	縄文土器　土師器　陶磁器　銭貨
2	社田(やしろだ)遺跡	緑ヶ丘二丁目	台地　包蔵地	縄奈中近	縄文土器　土師器　陶磁器
3	柳川(やながわ)遺跡	緑ヶ丘二丁目	台地　包蔵地	縄中奈平	縄文土器　土師器
4	仙川北(せんがわきた)遺跡	緑ヶ丘二丁目	台地　包蔵地	奈平	土師器
5	仙川(せんがわ)遺跡	仙川町二・三丁目	台地縁辺　集落跡　旧礫群　縄集石　土坑　古住居跡	旧縄前弥古	ナイフ形石器　尖頭器　掻器　石核　剥片　縄文土器　石器　弥生土器　土師器　須恵器　鉄製品　陶磁器
6	若葉町(わかばちょう)遺跡	若葉町一・三丁目	台地縁辺　集落跡　縄住居跡　土坑　集石	縄中	縄文土器　土偶　石器
7	大原(おおはら)遺跡	入間町一丁目	台地縁辺　包蔵地	縄中	縄文土器
8	入間町(いりまちょう)城山(しろやま)遺跡(蟹沢(がんざ)横穴墓群)	入間町一・二・三丁目	台地縁辺・斜面　集落跡　横穴墓(2)　旧礫群　縄弥古奈住居跡　土坑　縄炉穴　陥穴　不掘立柱建物跡	旧縄草早中弥古奈	ナイフ形石器　尖頭器　石槍　縄文土器　石器　土師器　須恵器　墨書土器　陶磁器　人骨
9	蟹沢(がんざ)遺跡(蟹沢横穴墓群)	入間町三丁目	台地縁辺・斜面　包蔵地　横穴墓(1)　近土葬墓	旧縄前中古奈近	縄文土器　石器　土師器　天目茶碗　鉄鍋　鉄釘　石臼　人骨
10	南台(みなみだい)遺跡	深大寺東町四・五・六丁目	台地縁辺　包蔵地	縄中後奈平	縄文土器　土師器
11	蛇久保(じゃくぼ)遺跡	西つつじヶ丘一丁目　深大寺東町三丁目　柴崎二丁目	台地縁辺　集落跡　縄古住居跡　縄土坑　土壙墓　埋甕　集石	旧縄中古奈	ナイフ形石器　尖頭器　縄文土器　石器　土製耳飾　土師器　丸玉　陶磁器
12	中台北(なかだいきた)遺跡	東つつじヶ丘二丁目	台地縁辺　包蔵地	縄中奈平	縄文土器　土師器
13	中台(なかだい)遺跡	東つつじヶ丘二・三丁目	台地縁辺　集落跡　縄住居跡　敷石住居跡　埋甕　土壙墓　土坑　集石　古住居跡	縄中後古	縄文土器　蓋形土製品　石器　土師器　須恵器　土製支脚
14	中台南(なかだいみなみ)遺跡	東つつじヶ丘三丁目	台地縁辺　包蔵地	旧縄	縄文土器
15	陵山(りょうやま)遺跡(糟嶺神社(かすみねじんじゃ)古墳)	入間町二丁目	台地縁辺　包蔵地　古墳？(径40m、高さ5m)	縄中古平	縄文土器　須恵器

(10及び11の遺跡は前頁の地図において略)

遺跡一覧表の凡例

- 旧　旧石器時代（先土器時代）
- 縄　縄文時代
- 草　草創期
- 早　早期
- 前　前期
- 中　中期
- 後　後期
- 晩　晩期
- 弥　弥生時代
- 古　古墳時代
- 奈　奈良時代
- 平　平安時代
- 中　中世
- 近　近世
- 不　不明

遺跡分布図の凡例

- ● 古墳
- × 館跡
- 横穴墓
- 塚
- 城跡
- 神社
- は遺跡(埋蔵文化財包蔵地)の範囲を表す

0　1：15,000　1000m

出所▷「地図でみる調布市の埋蔵文化財」
調布市教育委員会　平成2年9月再版

中華料理

萬來軒

ご宴会30名様まで承ります
京王線仙川駅ホーム前
☎03-3308-9288

いわし料理各種・天ぷら
うな重・鍋物(冬)・その他

こしじ

ご宴会25名様まで承ります
京王線仙川駅ホーム前
☎03-3308-9457



仙川郵便局前
東京都調布市仙川町1-19-24
TEL 03-5313-1949
AM 9:00～PM 9:00

BIG WAY
D.P.E. SERVICE 仙川店

住まいづくりのことならなんでもおまかせ

東京都知事許可　般03第5933号

佐藤工務店

建築士　佐藤　満

仙川町1-23-41

☎ 3307-5457
FAX 3307-2360

食事と酒処

一乎

仙川駅線路際
午後5時～深夜1時　日曜定休　☎ 3300-2879

ファッションガード　(特殊捺水)
ソフトな仕上り!

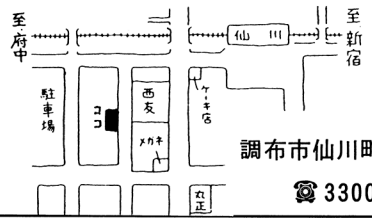


三愛ドライクリーニング

日・祭日営業　☎ 3300-6763

仙川町1-33　(若葉町2丁目交差点際)

仙川寿司



調布市仙川町1-11-4
☎ 3300-7024

JFN ジャパン・フラワー・ネットワーク 加盟店

新鮮なお花を贈られる方に……
全国どこへでもスピーディーに確実に
お届けすることに努めております。

「花とみどりのギフト券」取扱店

イシケンフローリスト

代表 さとう 健次

〒157　東京都世田谷区上祖師谷5-31-11
TEL・FAX (03) 3308-1951

<効果的な適応例>

- しばしば頭痛がする
- 背中が痛い，重い
- 時々ギックリ腰を起こす
- 手，足のしびれがひどい
- 首や肩がこりやすい，痛い
- ヒザが痛む
- 慢性的に腰が痛い
- 疲労しやすい，だるい
- 眠れない，睡眠が浅い
- 座骨神経の障害による痛み

✚仙川腰痛センター

受付時間・予約制AM9:00～PM7:00
仙川町1-3-27 仙川第一ビル1F
☎ 5384-6686

診療受付(月～土)
午前9:30～12:30　午後3:00～6:30
水曜・土曜日は午前中のみ
日曜・祝祭日　休診

わかば町クリニック

内科・胃腸科・循環器科・人間ドック(日帰り)

小田急バス仙川駅入口下車　TEL(03)5313-3331

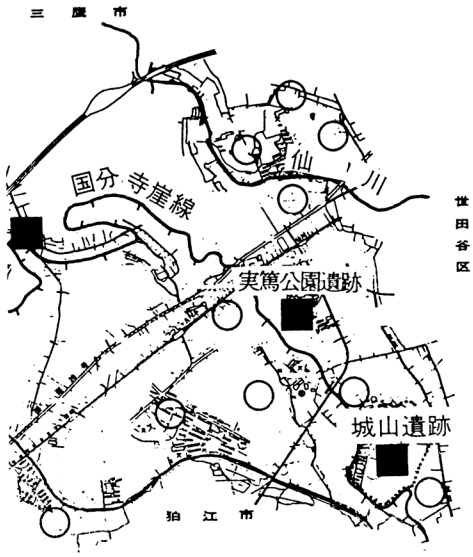
〒182　調布市若葉町2-1-6　仙川セントラルパレス1F

古代

●武蔵国と「調」「布」



約350年～約1,200年



【イントロダクション】

三五〇年頃に始まった大和朝廷の統一事業が六五〇年頃に終わり、その間、近畿地方を中心に大型の古墳（土を高く盛った豪族や有力者などの墓）が建造される。それにより、身分や階級、統治する者とされる者の違いがクッキリと浮かび上がってきた。弥生時代に芽生えた日本社会の原型が、より一層明確に現れて来るのが古墳時代以降である。

このコーナーでは、大和朝廷による中央集権国家の誕生から、中世の足音が聞こえてくる平安時代へと一気に歩を進めてみる。

糟嶺神社古墳（入間町二丁目）

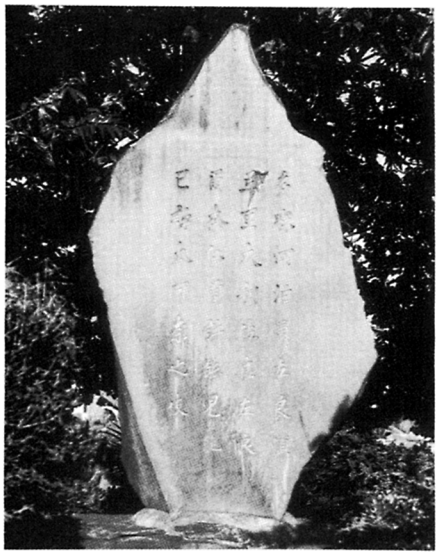
四百年代半ばから、狛江を中心とする多摩川流域でも多くの古墳が造営されるようになった。これらは後に狛江古墳群と名付けられ、全部で百基近い古墳が存在していたと推定されるが現存するのは十数基である。その内の一つに糟嶺神社古墳がある。

糟嶺神社古墳は、南に入間川、東にその支流を抱く入間台地の南端部にある。大きさを記すと、広さ東西径四〇メートル×南北径三三・七メートル、高さ五・三メートル、墳頂平坦部径二〇メートル前後である。現在、北の墳端部に明照院、墳頂平坦部に糟峰神社がある。糟嶺神社碑には、「・・・丘陵ハ字丸山ト呼ビ高サ二間余リ周リ七拾六間余リアリテ形状恰モ墳陵ニ似タリ、古老相ェテ糟嶺神社ヲ葬リ奉リシ所ニシテ所謂多摩墳陵四基ノ一ツナリト云ウ・・・」とある。この碑が立てられた当時、この付近は丸山村（町）と呼ばれ、丘陵の高さは約三・六メートル、外周は約一三七メートル、形状は円墳であったと思われる。縄文土器の出土もあり、陵山遺跡とも呼ばれる。

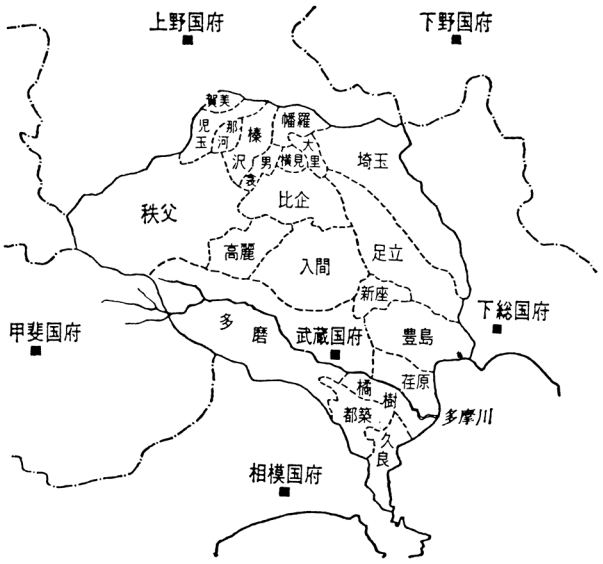
古墳時代の仙川

〝稲作と鉄器〟の新しい農耕文化に取り残された調布・仙川地区は、古墳時代に入っても停滞が続いた。後半期以降になって農耕開発が進につれ、各地に集落が形成されていったが、大きな豪族は生まれず、いわゆる巨大古墳の存在はみられない。

仙川地区では、弥生終末期以降に続き、仙川遺跡と入間町城山遺跡から住居跡が発掘されており、特に城山の台地ではかなり大規模な集落が認められる。また、城山遺跡から蟹沢遺跡にかけて、蟹沢横穴墓群という「横穴墓」（台地の斜面を横穴状に掘った墳墓）が発見されている。



東歌が刻まれた万葉歌碑／狛江市中和泉



武蔵国の21郡（調布市史上巻より）

律令国家の誕生と武蔵国

六四五年の「大化改新」、七〇一年の「大宝律令」を経て、天皇を中心とする中央集権の「律令国家」が確立された。「律令」とは国家統治に必要な諸制度を規定した基本法典の総称であり、「公地公民・班田収授」が実施され、国・郡制の地方行政組織も整備された。

武蔵国は二一の郡部で構成され、各郡は郷の集まりから成っていた。また、一郷は五〇戸と定められている。東国の中でも大国とされたこの国は、現在の東京・埼玉のほぼ全域と川崎・横浜市の大半を占めていた。

二一の郡部の一つに多磨（多摩）郡がある。多磨郡内には一〇の郷があり、青梅・秋川から世田谷までがその領域である。現在の調布市域は、新田（にふた）郷と狛江郷にまたがるものと推定される。この狛江郷は、今の狛江市と調布市の大部分に三鷹市、武蔵野市の一部を加えたエリアである。

調布と多摩の由来

大化改新以降、農民は税金として「租・庸・調」を負担する義務を負い、「調」は地方の特産物を納めることであった。カラムシ（繊維の原料となる植物）が多く採れる多摩川沿岸で、「調」として「布」が朝廷に納められたことから、「みつぎの布」すなわち「調布」と名が付いたとされる。このカラムシの布を一般に「麻」といったことから、このあたりを麻の多いところ「多麻（摩）」と呼ぶようになった、ともいう。カラムシは普通、野山に自生している。それを刈り取り、皮をはぎ、布に織る。織った布は多摩川でさらし、繊維がかたいため板（きぬた）のうえでたたいてやわらかくする。

「万葉集」巻十四の東歌の中にも多摩川の布について、次の歌がある。

「多摩川にさらす手づくりさらさらになにそこの児のここだ愛しき」――原文

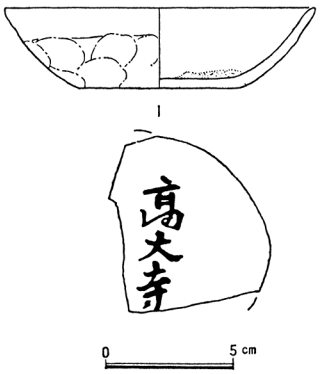
「多摩川の清らかな流れにさらす手づくりの白い布ではないけれども、よりいっそう、なんでまた、この娘はこんなにもかわいいのだろう」――現代語訳

武蔵国への渡来人

七百年代に入ると、中国大陸や朝鮮半島からの渡来人が武蔵国に入植するようになる。「続日本記」によると「七一六年五月、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の高麗人一、七九九人を武蔵に移し、はじめて高麗郡（埼玉県）を置く。七六一年四月、帰



入間町城山遺跡出土　土師器



化新羅人一、三一人を武蔵国に置く」と記されている。この時代はかなりの渡来人が調布・狛江地区に住みつき、彼らの持つ高い文化や技術は地域づくりの源となったものと考えられる。

国分寺の造営と私寺

七四一年、聖武天皇は諸国に鎮護国家を目的とした国分寺の造営を命じた。武蔵国分寺もこの詔勅により、国府のある府中の北、約二キロメートルのところに建立され、東西八町（約九百メートル）、南北五町（約五百五十メートル）の全国一の規模を誇った。この寺は、一三三三年の分倍河原の合戦の際に放火で焼け落ちたが、付近の畑からは、寄進した郡や郷の名が刻まれた瓦が多数出土している。武蔵二一郡に混じって「狛」の字の刻まれた瓦も出土しているが、狛江郷の人々が仏の加護を願って寄進したものであろう。

また、多摩川流域の豪族たちは国分寺造営に協力した見返りとして、私寺の造営を許されたものと考えられる。入間町城山遺跡では、「高大寺」という墨書のある奈良時代後半の土師器が発見されている。文書にも高大寺という名の寺はみられないが、同様の事情のもとに造営された私寺であったことが考えられる。

奈良～平安時代の遺跡

市内での奈良時代の住居跡は、現在までに六〇軒以上にのぼっている。仙川では入間町城山遺跡から住居跡が発見されており、社田、柳川、仙川北遺跡（いずれも緑ケ丘二丁目）及び蟹沢遺跡からは遺物が出土している。

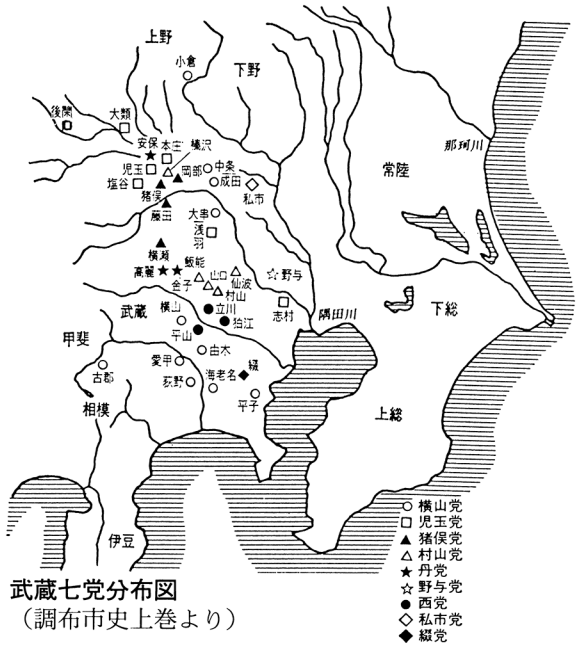
平安時代においては、住居は発見されていないが、緑ケ丘遺跡からは火葬墓がみられ、柳川、仙川北遺跡からは遺物が出ている。しかし、十世紀末になると、遺跡や遺物はほとんど姿を消してしまう。

中世

鎌倉街道と武蔵七党の活躍



約1200年～約1600年



武蔵七党分布図
（調布市史上巻より）

【イントロダクション】

一一八五年、義経率いる源氏軍は驕れる盟主平家一門を倒し檀ノ裏の戦いを制す。そして七年後の一一九二年、征夷大将軍に任ぜられた源頼朝が鎌倉で幕府を開く。関東での幕府誕生は、調布を含む武蔵の国にも少なからず影響を与える。鎌倉道（鎌倉へ通じる道）が整備され、街道沿いもにわかに活気づくが、その反面、各地の武士団が勢力を伸ばし、早くも戦国の世の雰囲気が漂い始める。

武士団の誕生

平安時代も末頃になると公地公民制がくずれ、寺社や有力貴族の私有地である荘園が発生する。社会不安が増大し、荘園領主たちは自衛のために武士団を組織し勢力を張り合うようになった。一方、国司として地方に下ってきたものの中には、任期が満ちても都に帰ろうとせず、そのまま地方に居ついて豪族になる者がいた。

関東地区で活躍した武士団の一つに「武蔵七党」があるが、実際は七つ以上の党名が記録に残されている。また、「党」の字は元来「一緒に行動する仲間」という意味があるが、平安後期には先祖を同じくする諸氏と利害を共にする他氏との地域的な同盟という意味に変わっていった。

西党と狛江入道増西

武蔵七党の内、調布に関わりのあるのが日野に本拠を置く「西党」である。

西党は古くから続く豪族日奉氏の一人日奉宗頼（ひまつりむねより）の子孫を中心に構成され、日野、秋川、稲城、八王子、立川、調布、狛江の各地区で勢力を持っていた。

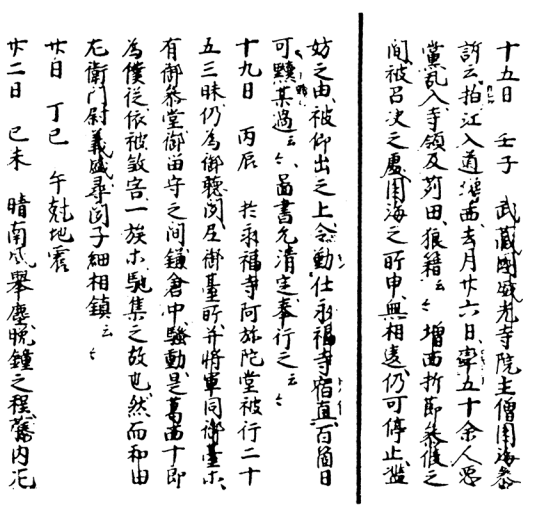
鎌倉幕府の公的な史書である「吾妻鏡」（あずまかがみ、または、あらつまのかがみ）を読むと、三代実朝時代の一二〇八年に武蔵の威光寺（源氏にとって由緒ある寺）の僧円海が、西党武士の一人狛江入道増西を刈田狼藉（他人の領地に押し入って田畑の作物を刈り取ってしまう行為）のかどで訴えている。その内容は「六月二六日に、狛江入道増西が悪党五〇余人を率いて寺領に乱入し、刈田狼藉を働いたから取り締まってほしい」となる。狛江入道増西は数多い西党武士の中でもひとかどの人物として知られたいた。その増西が何故このような行動に出たのであろうか。

そこで「吾妻鏡」に目を戻すと興味深い一文がある。

「一滴の雨も降らず、庶民耕作の術を失う」



江戸名所図会（天保５年）



十五日　壬子　武蔵国威光寺院主僧圓海参訴云、狛江入道逆西去月廿六日、率五十余人悪党乱入寺領及苅田狼藉云々、増西折節不在之間、被召決之處圓海之所申無相違、仍可停止濫妨之由、被仰出之上、令動仕称福寺宿直百箇日可勤其過之由、畠書先清定奉行之云々

十九日　丙辰　於称福寺阿弥陀堂被行二十五三昧、仍為御聴聞足御輿所并将軍同御輿歟、有御参堂御留守之間、鎌倉中騒動是高声十郎為僕従依被致宮一族不馳集之故也、然而和田右衛門尉義盛梟首于細相鎮云々

廿日　丁巳　午剋地震

廿二日　己未　晴南風挙屋晩鐘之程驚内乱

吾妻鏡（国立公文書館蔵）

これは増西が刈田狼藉をはたらいたのと同じ年の五月から六月にかけての出来事として記されている。そこから、増西は自分の領民を救うつもりで威光寺領内に押し入ったのではないか、とする説がある。因みに、鎌倉時代に悪党と呼ばれたのは、主に荘園の本所領家に反抗する地頭・荘官・名主以下の武装集団のことである。またそれとは逆に、幕府の威光寺に対する保護の希薄化をみすかしての侵略とする説もあり、どちらの理由が正しいのかは不明である。

尚、増西の館は、現在の佐須町の晃華学園敷地内に在ったといわれ、南側の段丘崖上に「狛江入道旧館跡」と記された石標がある。

金子氏と島屋敷

狛江氏以外の人物に武蔵七党の一つ、狭山丘陵周辺を本拠とする村山党に属する金子氏がいる。『新編武蔵風土記』の上仙川村の項で、島屋敷（三鷹市新川四丁目にある）を金子氏の館跡としている。発掘調査の結果、この地に中世の屋敷跡が確認されている。鎌倉幕府は武蔵国内の荒野開発をしきりに奨励したので、金子氏の分家にあたる人物が仙川や野川の付近にも入植して、地域の開拓に努めたことであるかもしれない。

戦国大名の小田原北条氏

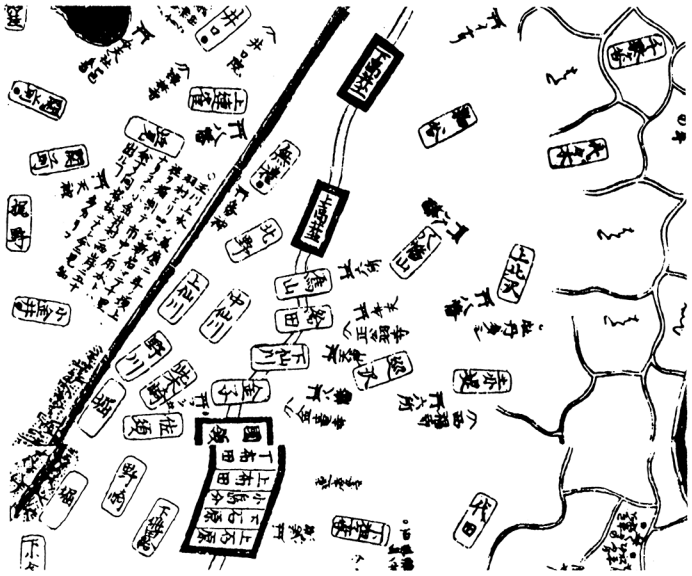
一五世紀末に現れ豊臣秀吉に滅ぼされるまで、相模小田原城を本拠とし調布市域を含む関東地方を支配した戦国大名は北条氏である。鎌倉時代の執権北条氏と区別するために、後北条氏、あるいは小田原北条氏と呼んでいる。一五二四年の『小田原衆所領役帳』（北条氏康が家臣団の所領役高を調査し記録したもの）には、調布市域の地名や年貢関係のことが記載されている。

一五八七年には、小田原北条氏は秀吉の関東侵攻を前に領国農民に動員令を発令した。その時、上石原の郷民にあてた農民徴用状が残されているが、それは、侍・農民を問わず一五～七〇歳までの男は「腰さし類者、ひらひら武者めくよう、支度」せよというものであった。三年後に小田原北条氏は没落するが、秀吉の来攻を前にした非常体制がうかがえる。尚、布田天神には秀吉の禁制が残されており、軍兵が寺社などに放火や掠奪などをしないように戒めた文で、武蔵国多東郡補陀（ふだ）郷と記されている。

江戸時代

仙川は旗本知行の地

約1,600年~約1,870年



安政四丁己年　東都書肆より

【イントロダクション】

一五九〇年、豊臣秀吉は小田原攻めを終えると、徳川家康に対して、北条氏の領地関東八ヵ国への転封を強行した。家康は江戸城に入り、江戸のまちづくりと東国経営をスタートさせた。旧領の三河、遠江、駿河から多くの家臣を呼び集めたが、昌翁寺を創建した飯高氏もその一人である。家臣団の在地性を克服し、かえって新しい領国支配体制の構築を可能とした。一六〇〇年の関ヶ原の戦いに勝った家康は、一六〇三年に征夷大将軍に任ぜられ、江戸幕府が発足した。

村の支配形態

徳川氏の支配下の村は、大別して天領（幕府の直接支配地）と旗本・御家人領（将軍の直接の家来で一万石以下の者のうち、将軍にお目見えできる者が旗本、できないものが御家人）、大名領及び寺社領に分割支配されていた。仙川地区周辺では以下のとおりである。

(一) 天領の村（代官によって治められる）……金子村（金龍寺領もある）、北野村
(二) 一人（飯高氏）の旗本知行の村……下仙川村
(三) 三人（中川氏、佐橋氏、石谷氏）の旗本知行の村……入間村

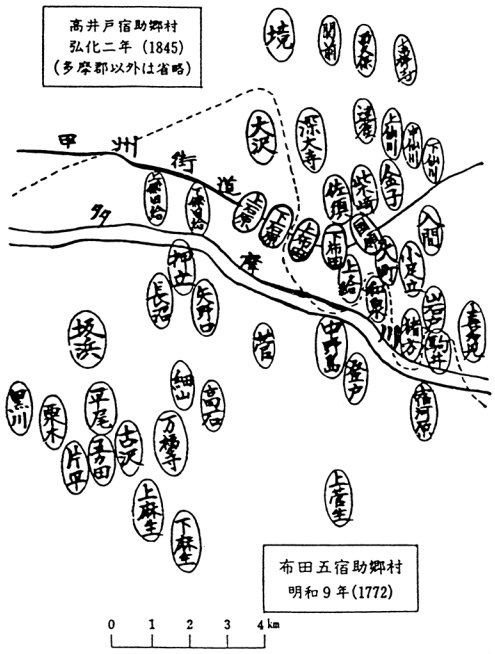
村高＝農業生産の推移

下仙川村と入間村の正保年間（一六四四～四七年）と約二百年後の天保五年（一八三四年）の村高の推移などを取りまとめたのが左図である。

農業生産（村高）の変化

		下仙川村	入間村
17世紀中頃	田方	91石	131石
	畑方	79石	118石
	合計	170石	249石
19世紀中頃	戸数	44戸	80戸
	石高	484石	338石
	増率	285%	136%

〈資料〉「武蔵田園簿」
「旧高旧領取調帳」



宿名 日本橋からの順番		宿継ぎ(1か月のうち) 日本橋からの順番		区間距離
	（日本橋）			
1	内藤新宿	1		2里
2	下高井戸	2	15日勤め	2里 12町40間
3	上高井戸			1里19町30間
4	国領	3	6日勤め	3町
5	下布田			2町
6	上布田			8町
7	下石原			7町
8	上石原			1里10町
9	府中	4		2里
10	日野	5		1里27町48間
11	八王子	6		1里27町

■甲州街道

五街道の一つとして、甲州街道は、徳川氏が関が原戦勝の記念に一六〇〇年に開削し、日本橋～甲府間が四年頃に開通し、下諏訪まで延長され中山道と合流したのが一〇年頃という。全長五三里二町三三間（約二〇六キロ）ほどで、宿駅としては内藤新宿から上諏訪まで四五宿となる。参勤交代の利用は信州の高遠藩、高島藩、飯田藩のみであり、沿道の都市規模も小さく、街道の利用状況は低かった。八王子に幕府直参の千人同心、甲府には旗本・御家人の甲府勤番が置かれ、幕府の力を温存していたことから、軍事目的の強い街道といわれる。

伝馬と助郷の街道制度

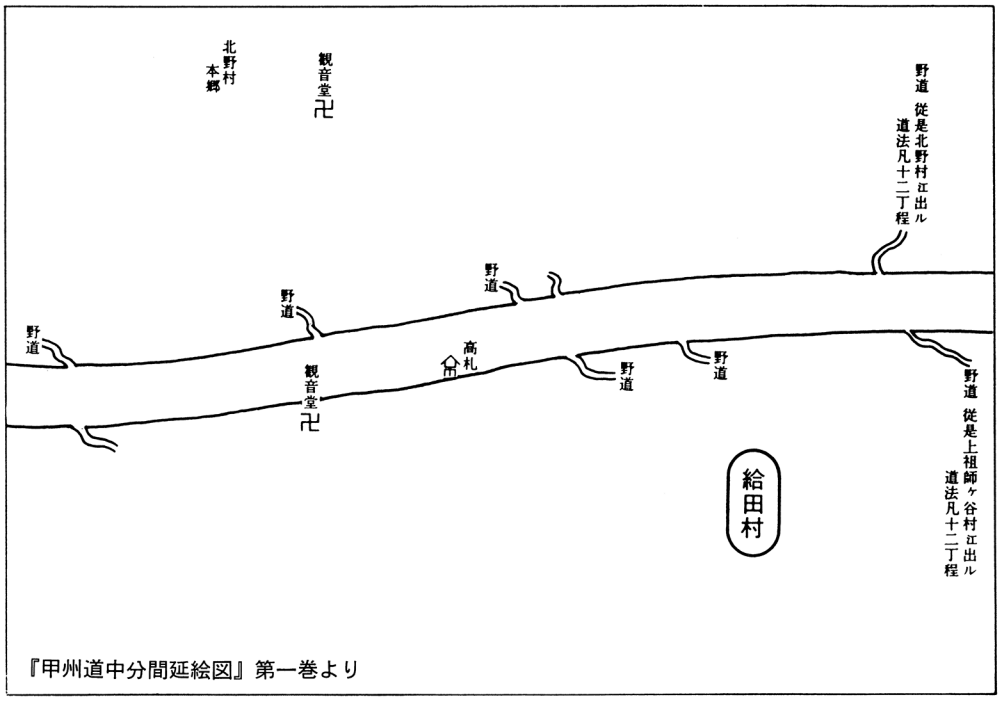
人足と馬を各宿駅に常備し、リレー式（宿継ぎ）で人や物資を輸送する方式を伝馬制度という。甲州街道の各駅は人足二五人と馬二五疋を常備していたが、小さな宿駅は交替で宿継ぎ業務を勤めていた。交通量が増大し、常備の人馬では不足する場合、近隣の村々が人馬を補充する制度を助郷という。具体的には、村高一〇〇石につき人足二人、馬二頭の付加であり、人馬を出せない時は人足一人二〇〇文、馬四〇〇文の分担金を求められた。幕末の交通量増大とともに負担は大きくなり、村々と農民の苦労の種となった。

布田五宿と仙川地区の助郷

甲州街道の開通に伴ない、ハケの付近に住んでいた農民は街道筋に集められ、町場をつくって生活するようになった。調布市域では国領から上石原の布田五宿が、東の高井戸宿と西の府中宿の間での宿駅を勤めた。布田五宿の宿継ぎは、各駅が一ヵ月を六日交替で担当する独特のスタイルをとった。仙川地区の村々は、当初は布田五宿の助郷村であったが、一七七一年の内藤新宿の新設に伴い、高井戸宿助郷村に改編された。

仙川一里塚

街道の両側には、一里ごとに土を盛り、榎や松などが植えられ、旅行者の目印や休息の場所となった。現在、セブンイレブンの角に一里塚の旧跡を示す黒御影石の標識がある。日本橋から五里（二〇キロ）、新宿から二里（一二キロ）の里程が示されたところである。



『甲州道中分間延絵図』第一巻より

■給田村

武州多摩郡の内。現在世田谷区内。村高二百二十三石七斗四升五合、家数四十六軒。東西八町、南北十町余。烏山村の西に続く。畑の多い村であるが西方の仙川沿いには水田もある。村の東寄りを甲州道中が東北から西南へと縦断する。民家はこの往還通り八町余の左右に連なっている。掃除持場は長さ四百八十間余である。上高井戸宿へ十九町、江戸へ四里三十一町、国領宿へ一里三十間であるが、助郷は二里三十一町離れた内藤新宿へ勤めた。

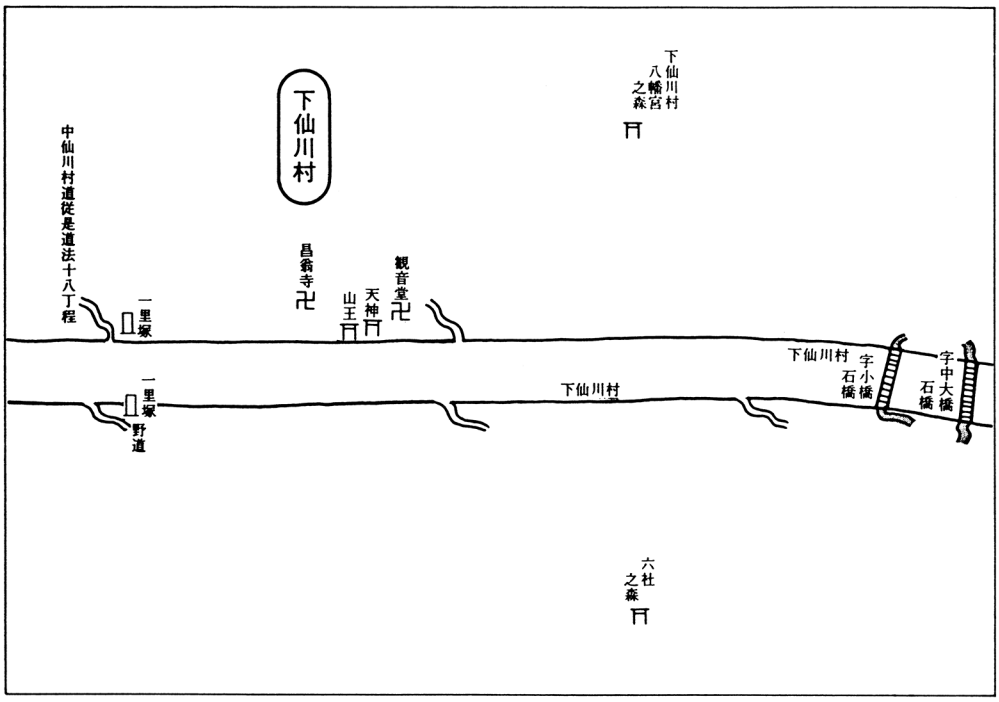
仙川用水

玉川上水を多摩郡境村（現在武蔵野市内）で分水し、上仙川・中仙川・金子・大町の四ケ村の田用水としたものであったが、肥後細川家の、荏原郡戸越（現在品川区戸越）の抱屋敷へ泉水用の水を引くために、多摩郡野川村（現在三鷹市新川）で仙川用水を分水して戸越分水を開いた。その後、戸越分水が廃止になると品川領宿村は、田用水として利用することを許されたが、その際、仙川用水の取水口からの取水権を獲得し、結局、上仙川・中仙川・金子・大町の四ケ村の田用水は、品川用水を野川村で分水する逆の結果となった。

■北野村本郷

武州多摩郡の内。現在三鷹市内。給田・烏山の西にあたり、下仙川村の北になる。寛文末年、仙川の農民が開いて原仙川村と称したが、元禄八年（一六九五）の検地で北野村と名乗り、一村として独立した。村には鎮守も菩提寺もなく、下仙川村の八幡社を鎮守とし、同村の昌翁寺を菩提寺とした。





■下仙川村

武州多摩郡の内。現在調布市の緑ケ丘と仙川二・三丁目および仙川町一丁目、西つつじケ丘の一部。

村況　中世の仙川郷が分れてできた村で、東西八町、南北十四町、明治元年（一八六八）の家数は四五軒であった。用水は上仙川村勝淵（丸池）よりの湧水を利用し、水田は少なく陸田が多かった。甲州街道に接し、村内に一里塚があった。助郷は高井戸宿の定助郷であった。

支配　中世末は金子弾正が領したが、徳川家康が関東入部の頃、今川氏の旧臣飯高主水貞政を召出して、その知行地とし、その後代々飯高弥五兵衛がこれを知行したとされる。

検地　貞享三年（一六八六）二月、役人小日向弥右衛門・和山兵左衛門による検地

村高　一七〇石、内田九〇石八斗八升、畑七九石一斗二升（武蔵田園簿）。一七〇（元禄郷帳）四八四石七升九合九勺五才、本高一七〇石、込高三一四石七升九合九勺五才、内田一三四石五斗五升三合二勺、畑三四九石五斗二升六合七勺（天保郷帳および明治元年明細書上帳）。四八四石八升二合（旧高旧領取調帳）

八幡宮之森

甲州道中の北、五〇〇メートルほどにある。八幡宮は下仙川村の鎮守で、社地は除地が八畝であった。別当は昌翁寺。

昌翁寺

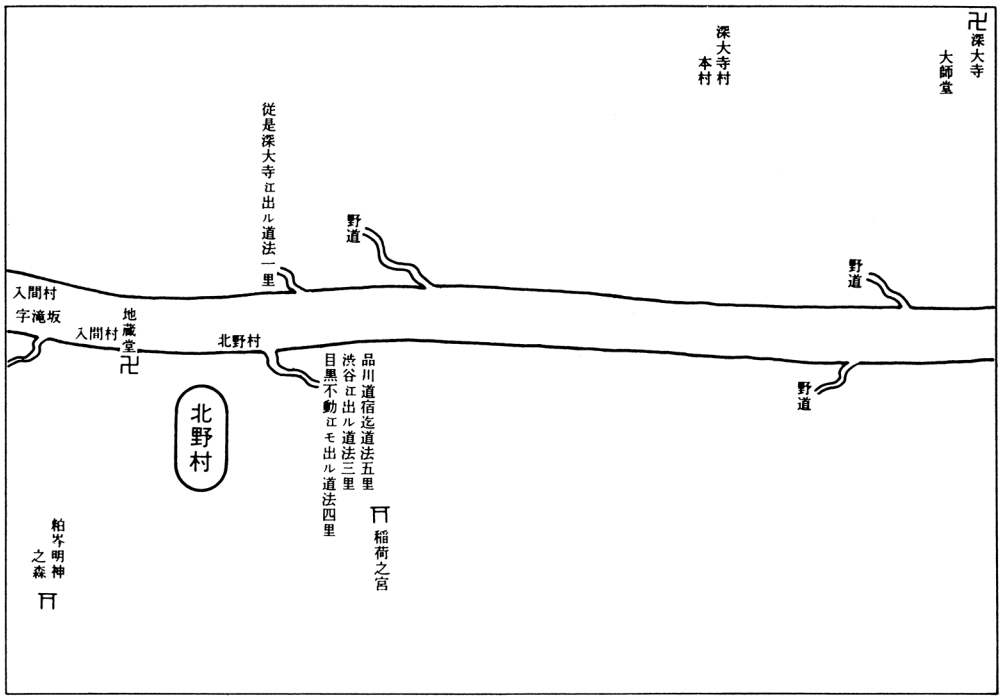
下仙川村にある。天台宗で大悲山無量院と号する。本尊は阿弥陀三尊立像。開基は領主飯高氏の祖、飯高主水貞政である。境内地八反は飯高氏より除地されていた。本堂の東にある観音堂は二間四方。

一里塚

左右の塚とも下仙川村の地内にあった。木立はなかったという。

滝坂

下仙川村の西から入間村の東にかけての坂。両村とも滝坂の地名がある。



■北野村

武州多摩郡の内。現在調布市の若葉町、仙川町、東つつじケ丘の一部となり、飛地が西つつじケ丘にあった。近世の北野村は、この地域と三鷹市域の北野町とをあわせた区域であった。

村況　文化文政期の民戸は七二軒といわれている。この地域の開発は寛文の頃（一六六一～七三）に始まり下仙川村に属したが、元禄検地の頃一村として成立したようで、親村である下仙川村北部一帯と、南の方入間村との境にある区域とに分れ、別に西部金子村内に飛地があった。

村名のいわれは、村の大部分が、親村の北方にひろがる原野であったためと言われ、『甲州道中分間延絵図』（一八〇〇年頃の作成）によると、この辺りは〈北野村本郷〉と記されている。神社は下仙川村の八幡神社を鎮守とし、同じ村の天台宗昌翁寺を村民の菩提寺としていた。

支配　元村である下仙川村は、戦国時代今川氏に仕えていた飯高氏に賜わった村といわれ、昌翁寺も飯高氏が開基とされている。しかしながら北野村については、飯高氏による支配の記録はなく、天保年間は築山茂左衛門、文化文政期は小野田三郎右衛門が代官として支配した御料地であった。幕末期の代官は松村忠四郎であり、明治以後品川県、入間県、つづいて神奈川県に編入される。三鷹村、神代村のそれぞれの大字に分れるのは明治二二以後である。

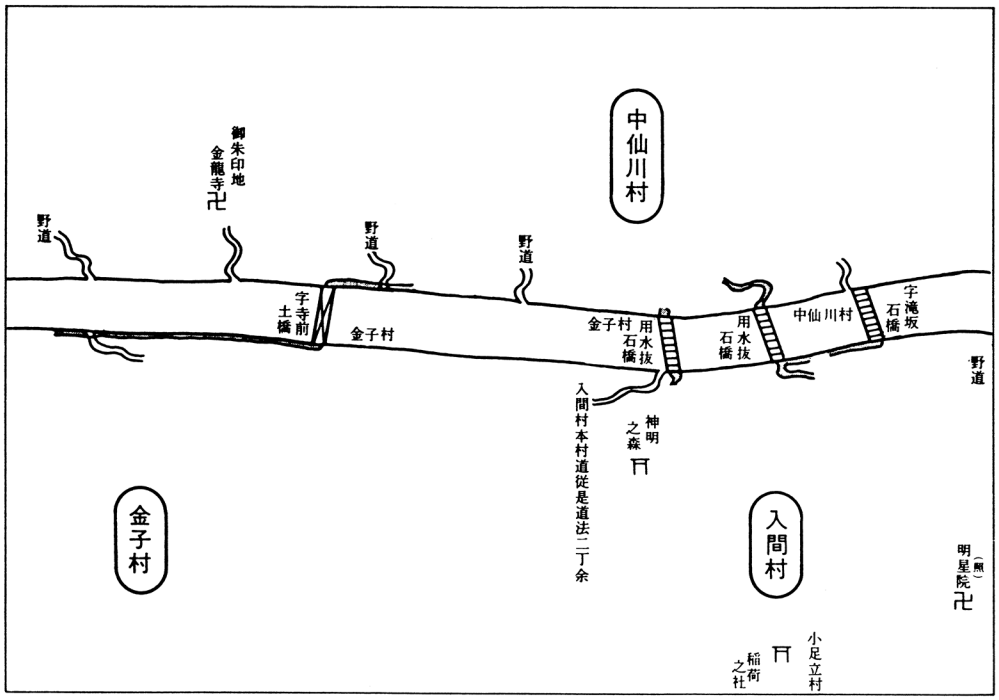
検地　元禄八年（一六九五）織田越前守の検地により、はじめて一村となったといわれるが、その後の検地についての記録は不明である。

村高　元禄郷帳・天保郷帳・宿村大概帳等による石高は二〇三石一斗三升六合。旧高旧領取調帳によると二一二石五斗七升六合である。

■入間村

武州多摩郡の内。現在調布市の入間町と、東つつじケ丘、若葉町の大部分の地域と西つつじケ丘の一部。

村況　村内の北を甲州街道が通り、南に大悲山観音寺明照院（天台宗東叡山寛永寺末、除地一町）と鎮守糟嶺神社がある。村の東北は小高い丘陵、西南は平坦であった。土性は黒野土で、村の中央に水田があり、中仙川の流れを引いて用水としたという。小名には中台、滝坂、原、本村、中原があり、中台（西）、原（東）、本村（中央）に高札場があった。助郷は高井戸宿へ出役した。東西二五町余、南北十三町余。化政期の家数は八三軒あり、その内四十軒が甲州道中沿いにあった。



支配　天正一九年（一五九一）に石谷清定が一五〇石を宛行われる。その後寛永一〇年（一六三三）二月に中川忠次、同年一二月には佐橋吉金が宛行われて三氏相給となり、幕末に至る。のち東京府から神奈川県に属した。

検地　文禄年中（一五九二〜六）検地の伝あり、のち寛文年中（一六六一〜七二）地頭検地ありという。いずれも定かでない。ただ佐橋領については、延宝三年（一六七五）三月、検地帳が作られ、明和六年（一七六九）名主宅の火災により、村方文書が焼失。旧名主新井家に現存する田方水帳は、安永五年（一七七六）複製の上地頭より渡された控帳である。

村高　二四九石四斗六升八合二勺、内田一三二石四斗九升八合、畑一一七石九斗七升七合四勺（武蔵田園簿）。三二〇石五斗三升（元禄郷帳）。三四二石八斗五升九合一勺二才（天保郷帳）。三三七石六斗九升六合（旧高旧領取調帳）。

粕岑明神之森　粕岑明神（糟嶺明神社）は入間村の鎖守。現在糟嶺神社である。甲州道中からは直線距離で一・三キロほど離れている。

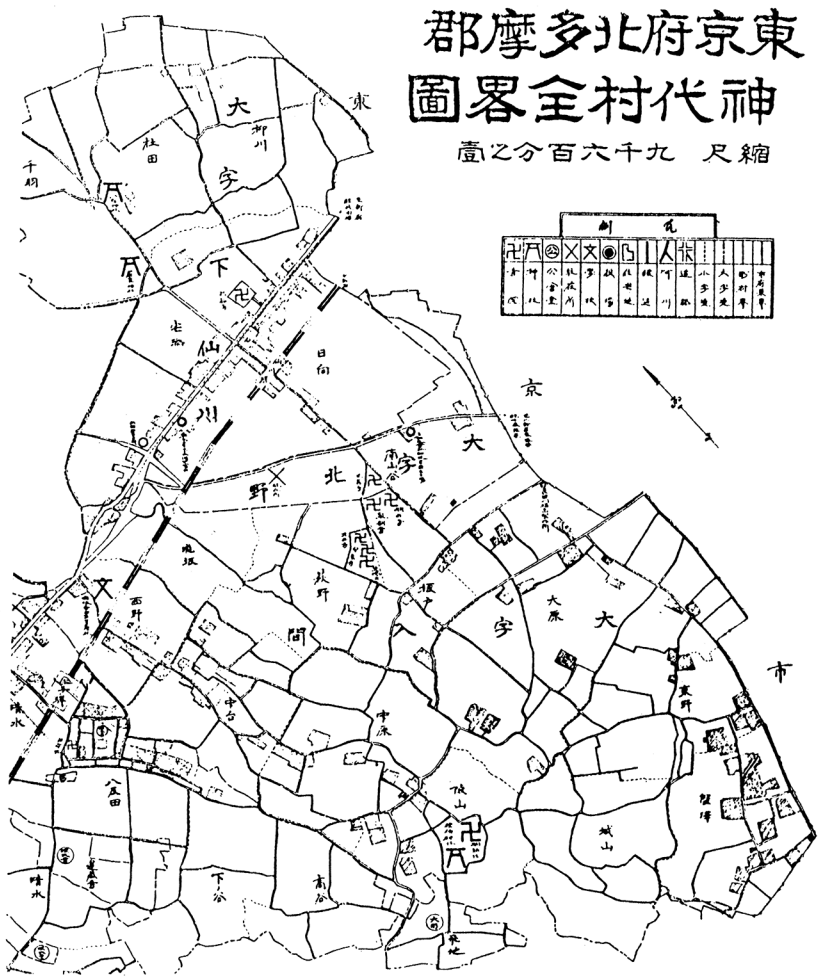
明照院　入間村の内にある。大悲山明照院観音寺と号する。天台宗。粕岑明神社の別当である。本尊は阿弥陀如来坐像。開山は秀海永禄。余地一町歩で、このうち山林が百坪余あった。

■金子村

武州多摩郡の内。現在調布市の西つつじケ丘と菊野台、柴崎、入間町の一部が含まれ、佐須町に飛び地があった。近世を通じて幕府領で、代官による支配が行われた。村の中央を甲州街道が通り、その両側に集落が発達した。村高四三四石九斗三升九合、家数八二軒。東西十三町、西北二六町。助郷は高井戸宿。村の南端を野川が流れ、北には曹洞宗深谷山金竜寺、中央に鎮守弁財天稲荷合社、東南に福僧山蓮倉寺があった。武蔵七党の内、村山党金子六郎家範の子、十郎家忠の居住地との言い伝えもあり、小名間橋附近には鎌倉街道が通っていたという。村は概して平坦で、土性は黒野土、特産に金子瓜とも呼ばれた真桑を産したが、化政期には廃されていたという。

金龍寺　多摩郡金子村の内。深谷山と号する。曹洞宗。本尊は釈迦如来の坐像。開山は岳応守英。珠印地十三石四斗を領する。

〔神代村当時の字名と現在の町名との対照〕



現在の町名	古文書・土地台帳等の小字名	昭和三〇年以前の大字	近世・明治初年の村名
緑ヶ丘一丁目	千羽（せんば）	大字下仙川	下仙川村
〃 二丁目	社田（やしろだ）	〃	〃
〃	柳川（やながわ）	〃	〃
仙川町一丁目	日向（ひなた）	大字北野	北野村
〃	南山谷（みなみざんや）	〃	〃
〃 二丁目	宅添（たくぞえ）	大字下仙川	下仙川村
〃 三丁目	〃	〃	〃
東つつじヶ丘二丁目	滝坂（たきざか）	大字入間	入間村
〃	西野（にしの）	〃	〃
〃 二丁目	〃	〃	〃
〃	中台（なかだい）	〃	〃
〃	中原（なかはら）	〃	〃
〃 三丁目	陵山（りょうやま）	〃	〃
若葉町一丁目	滝坂	大字北野	北野村
〃	萩野（はぎの）	〃	〃
〃	榎戸（えのきど）	〃	〃
〃	南山谷	〃	〃
〃 二丁目	〃	〃	〃
〃	大原（おおはら）	大字入間	入間村
若葉町三丁目	榎戸（えのきど）	大字入間	入間村
〃	中原（なかはら）	〃	〃
〃	南山谷（みなみざんや）	大字北野	北野村
入間町一丁目	大原（おおはら）	大字入間	入間村
〃	東野（ひがしの）	〃	〃
〃 二丁目	城山（しろやま）	〃	〃
〃	陵山（りょうやま）	〃	〃
〃	飛地（とびち）	大字大町	大町村
〃 三丁目	東野	大字入間	入間村
〃	蟹沢（がんざ）	〃	〃

近現代調布市域における行政区域の変遷

出所　調布市史研究資料Ⅴ

年月	区分	上飛田給村	下飛田給村	上石原宿	下石原宿	布田小島分	上布田宿	下布田宿	国領宿	矢ヶ崎村	上ヶ給村	深大寺村	佐須村	柴崎村	金子村	入間村	下仙川村	大町村	北野村（飛地）
維新前	天領，旗本領，寺社領（武蔵国多摩郡）																		
明治2・2～4・11	品川県管轄（武蔵国多摩郡）	品川県8番組							8番組			7番組	8番組			7番組		8番組	7番組
4・12 5・1	入間県編入（武蔵国多摩郡）	入間県8番組							8番組			7番組	8番組			東京府編入	7番組	8番組	7番組
5・1	神奈川県編入（武蔵国多摩郡）	神奈川県第44区（戸籍区）										第48区	神奈川県第44区			第48区		第48区	第48区
6・5	区番組制（神奈川県多摩郡）	神奈川県第10区6番組										第10区7番組			第10区8番組			第10区9番組	第11区1番組
7・6	大区小区制（神奈川県多摩郡）	神奈川県第10大区7小区										第10大区8小区			第10大区9小区			10大区10小区	11大区3小区
11・7	郡区町村制（神奈川県北多摩郡）	飛田給村	上石原宿	下石原宿	布田小島分	上布田宿	下布田宿		国領宿	上ヶ給村		深大寺村	佐須村	柴崎村	金子村	入間村	下仙川村	大町村	北野村
17・6	連合戸長制（神奈川県北多摩郡）	8か村連合	7か宿村連合				戸長役場		◎布田小島分			9か村連合（含大沢村　野崎村　給田村）戸長役場　◎深大寺村						6か村連合	7か村連合
22・4	市町村制（神奈川県北多摩郡）	調布町（8か宿村は大字になる）										神代村（大沢，野崎，給田は他村へ大町，北野村飛地を編入し8か村は大字になる）							
26・4	東京府へ編入（東京府北多摩郡）	調布町										神代村							
昭和18・7	都制施行（東京都北多摩郡）	調布町										神代村							
27・11	町制施行（東京都北多摩郡）	調布町										神代町							
30・4	市制施行（東京都調布市）	飛田給町	上石原	下石原	小島町	上布田町	下布田町		国領町	上ヶ給	深大寺町	佐須町	柴崎町	金子町	入間町	仙川町	大町	北野町	

※佐須村は伊賀者給地

※矢ヶ崎は明治8年国領へ

（町名地番整理による現在の町名〔一部飛地は省略〕）

飛田給町	上石原	下石原	小島町	上布田町	下布田町	国領町	上ヶ給	深大寺町	佐須町	柴崎町	金子町	入間町	仙川町	大町	北野町
飛田給 西町 上石原 下石原 富士見町	上石原 飛田給 西町 野水 下石原 多摩川	下石原 西町 野水 上石原 富士見町 多摩川 小島町	小島町 下石原 富士見町 調布ヶ丘 布田 染地 多摩川	布田 調布ヶ丘 小島町 染地 多摩川	布田 調布ヶ丘 小島町 染地 多摩川 国領町 八雲台	国領町 布田 染地 八雲台	国領町 小島町 布田 染地	深大寺 元町 同北町 同東町 同南町 佐須町 柴崎 西つつじ ヶ丘 菊野台 富士見町 調布ヶ丘	佐須町 深大寺 南町 調布ヶ丘 八雲台	柴崎 佐須町 国領町 八雲台	西つつじ ヶ丘 佐須町 柴崎 菊野台 入間町 国領町 八雲台	入間町 東つつじ ヶ丘 西つつじ ヶ丘	仙川町 緑ヶ丘 西つつじ ヶ丘	西つつじ ヶ丘 菊野台 入間町 国領町	若葉町 仙川町 東つつじ ヶ丘 西つつじ ヶ丘

メガネ・トケイ・宝石

ナ　カ　エ

〒182　調布市仙川町 1-11-17　☎3300-0667

資生堂・コーセー　アルビオン

りきや化粧品店

仙川駅前　中央商店街　　TEL(3300)8024

仙川商店街中央　SSストアー内

佐藤精肉店

日曜定休　　☎3300-6625

手づくりのパン

ホームベーカリー

マルジュウ

仙川駅前通り　　☎3300-6417
6：30～20：00　　日曜定休

おいしいお茶と海苔の専門店

●都内無料宅配（含む三多摩地域）
●地方発送承ります

仙川商店街中央・藤屋ビル１Ｆ
☎3307-7288

お茶と海苔　金山利百（やまりや）

MAXFACTOR
カネボウ化粧品
ソフィーナ
ユンケル　黄帝液
けいめいかしんごん
恵命我神散
くすり

☎3300-4660
仙川商店街中央

広田薬局



パスタ，ピザ，イタリア料理

PICCOLO MONDO
RISTORANTE

AM 11：30～PM9：30　　定休日・月曜日

仙川町 1-12-15
フジヤビル２Ｆ　　☎3326-0243

オーディオ＆ビデオ　ナショナルショップ

あなたの街のあなたのお店

サトウデンキ

仙川商店街中程　　☎3300-5016

時計、宝石、貴金属の店

玉　晶　堂



本店　仙川商店街中程　☎3300-4734
支店　つつじケ丘店　☎0424（82）－4221

ガスの事ならなんでも相談!!
お風呂場，台所，居間……
快適な暮らしを提案します！



東京ガス仙川サービスセンター

㈱安　藤

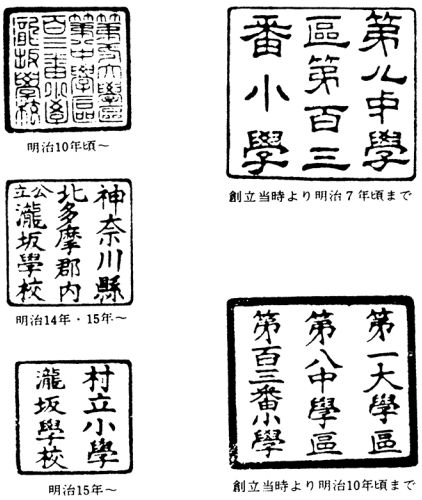
調布市仙川町 1-16-25
TEL 03-3326-3800

67年（慶応3）10月　将軍徳川慶喜が大政奉還。王政復古へ
68年（4、明治元）7月　江戸を東京に改める
9月　8日　明治と改元。一世一元と定める
69年（2）2月　9日　武蔵国多摩郡の仙川地区、品川県に属す
71年（4）11月　廃藩置県が行なわれ、下仙川村、北野村は入間県、入間村は東京府に編入される
72年（5）1月　下仙川村、北野村、入間村、神奈川県に編入
73年（6）　幕末頃より入間村小字滝坂236番地に清水啄三（秋田県士族）の芳泉堂涵養塾があり、寺子屋教育が盛んに行われていた。学制の施行により、この私立涵養学舎の組織を変更し、第一大学区第八中学区武州多摩郡入間村第百三番小学涵養学校に改編。学区は入間、金子、下仙川、給田の4カ村（明治11年に大町村が加わる）
初代校長／清水啄三（任期／明治6年1月～明治11年5月）
所在地／入間村小字滝坂228番地
用地／186坪　教員数／4名　児童／約200名
75年（8）11月　教育費／明治7年7月の文書「第百三番涵養学舎方法」によると、入間村、金子村、下仙川村、給田村から教育基金千円を集め、その利子120円を以て経費に当てるよう計画されている
78年（11）9月　尚、卒業証書は神奈川県師範学校の章印を用いた
小学涵養学校を、第一大学区第八中学区多摩郡入間村第百三番小学滝坂学校と改称
清水啄三が私立学校を設立。このため、滝坂学校は衰微し児童二百名より60名となる。さらに「三十名ニ満タザリシ」（明治13年）この頃の戸数は入間村101戸、下仙川村51戸、給田村48戸、金子村81戸、大町村24戸
79年（12）3月　仙川、昌翁寺およびその周辺火災にあう
82年（15）9月　滝坂学校、新しい敷地（字滝坂内田龍吉所有の畑地）に新校舎落成し、金龍寺の仮校舎より移転。生徒数も90名に増加する
89年（22）4月　市制・町村制が施行され、調布町と神代村が誕生（神奈川県北多摩郡）。神代村は、深大寺、佐須、柴崎、金子、下仙川、入間、大町



「剣術稽古覚書帳」
（田辺家文書）
調布市史中巻より

幕末期、下仙川の田辺正三家の庭先では近藤勇らによる巡回の剣術野稽古がしばしば行なわれた。



公印に見る滝坂学校の歩み

の七カ村と北野村の飛び地を合併して生まれ
新しい村名は、最も大きな村である旧深大寺村の「じんだい」の音を神代の字にあてたものという

1890年（23）7月1日 第一回衆議院議員選挙（当時の選挙人は、神代村13人、調布町43人）

12月31日 現在人口、神代村3499人、調布町3584人

1891年（24）1月 滝坂学校で勅語奉読式が行われた

2月 滝坂学校で教育用品展覧会が開催
生徒成績品934点、参考品343点、経費は有志の寄付で27円2銭

1892年（25）4月 滝坂学校の学区域の変更。給田が外れ、北野が入る

5月 滝坂学校が修業年限4年の滝坂尋常小学校となる

10月 滝坂尋常小学校に補習科（修業年限3年）設置
調布町、神代村ともに東京府北多摩郡に編入

1893年（26）4月1日 滝坂尋常小学校に修業年限4年の高等小学校を併置し、補習科を編入
神代村消防団発足。下仙川地区は第9部となる

1894年（27）5月 神代村、日清戦役記念碑（征清従軍碑）を虎狛神社境内に建立

1897年（30）4月 滝坂尋常高等小学校新築校舎完成

1898年（31）5月9日 現在地（入間町73番地）に藁ぶき屋根の校舎を新築、落成式を挙行する。即ち、30年には生徒数も226名となり、校舎が狭くなった上、敷地も湿地で衛生上好ましくないことから、高燥の地へ移転したわけである。その間約10カ月、尋常科は金龍寺に、高等科生徒は清水彦太郎宅を仮校舎として学習を続けた
東京府下にコレラ流行のため、滝坂尋常小学校で衛生幻灯会を開催
神代村、日露戦役記念碑を深大寺境内に建立

1902年（35）7月 武蔵電気軌道株式会社（後の京王電気軌道〈株〉）が鉄道布設の許可をえる

1906年（39）11月 板垣退助、神代村に来村、村内有志と協議会開く

1907年（40）6月25日 神代村佐須祇園寺で、自由民権の志士、福島・加波山事件英霊の慰

1908年（41）8月31日 神代村消防団発足。下仙川地区は第9部となる

9月12日 滝坂尋常高等小学校新築校舎完成

年度	区内戸数	区内人口	区内学齢児童	区内就学児 男	区内就学児 女	区内就学児 計
明治二二	二六三	一、六八七	三一二	五二	三一	八三
〃 二三	二六四	一、六九五	三四五	七八	五四	一三二
〃 二四	二六三	一、七八二	三三八	八五	五四	一三九
〃 二五	二六四	一、七九一	三五五	九二	七五	一六七
〃 二六	二六六	一、八一〇	三六一	九六	六六	一六二
〃 二七	二六五	一、八四四	三七六	八三	六二	一四五
〃 二八	二六四	一、八五三	三六四	七九	五九	一三八

年度	区外就学児 男	区外就学児 女	区外就学児 計	在籍生徒数	年間教育費	同上児童一人当り	卒業生 尋常 男	卒業生 尋常 女	卒業生 尋常 計	卒業生 高等 男	卒業生 高等 女	卒業生 高等 計
明治二二	二五	四	二九	一一二	二一四円	二円	四	一五				
〃 二三	一〇	二	一二	一四四	二〇九	一・四五	四	二	六	一	一	二
〃 二四	七	二	九	一四八	二三四	一・五八	五	〇	五	一八	一二	三〇
〃 二五	二五	八	三三	二〇〇	三九八	一・九九	七	二	九	一五	一一	二六
〃 二六	二四	四	二八	一九〇	三二八	一・七二	一三	七	二〇			
〃 二七	一九	四	二三	一六八	三三三	一・九八						
〃 二八	一六二	五	二四	一六二	四〇六	二・五〇						

（「滝坂小学校開校九十周年記念誌」より）

霊祭を行なう。板垣退助ら千余名参加

９年（４２）　１２月３１日　現在人口、神代村３８０５人、調布町４３３１人

　　３月１０日　神代村字佐須の祇園寺住職中西悟玄らにより〝週刊多摩新聞〟発刊。「生」には必ず目的あり、希望あり、旨操あり。要するに精髄宿らずんばあらず……。本紙は諸君が人たり民たる途を索むる具として献ず。云々との発刊の辞

　　７月２４日　神代村下仙川で赤痢が発生し、一カ月余にわたり、患者数５０名余、死者７名にのぼる猖獗を極めた

１２年（４５、大正元）４月　京王線、新宿～調布間の線路工事に着手

１３年（　２）　４月１５日　京王線、笹塚～調布間開通。下仙川駅開業（１４年に仙川駅に改名）

　　６月　神代村、調布町の甲州街道沿いに電灯がともる

　　民間の自主的義勇の消防組発足。警鐘付火ノ見梯子及び器具置場（下仙川字日向７６４番地）

１４年（　３）　神代村各字に青年団（青年会）結成

１５年（　４）　５月　京王線、新宿３丁目～調布間開通

１６年（　５）　３月　神代村青年会創立、深大寺尋常高等小学校で発会式

　　６月　京王線、調布～多摩川原間開通

　　９月　京王線、調布～飛田給間開通

　　１０月　京王線、調布～府中間開通

　　この年神代村に電気供給開始

１７年（　６）　１月１５日　消防組が腕用手挽ポンプ車購入

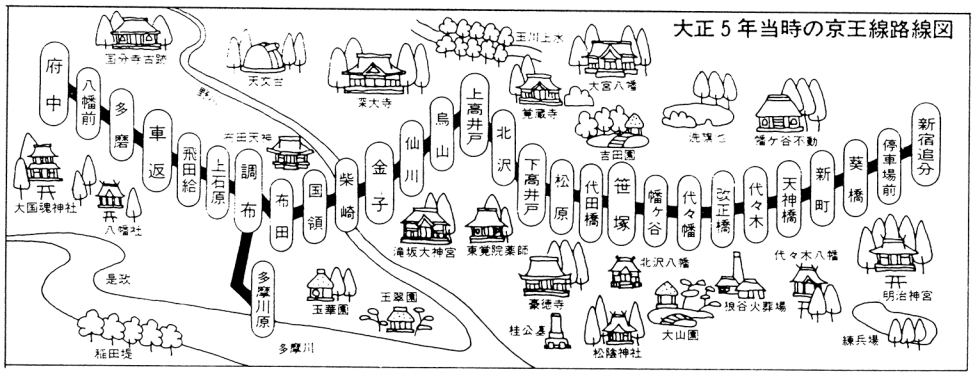
２０年（　９）　６月２５日　京王線、調布～新宿間全線複線化する

　　１０月　１日　第一回国勢調査、神代村（５８４戸、３９６７人）、調布町（７２０戸、４６５２人）

２２年（１１）　３月　２日　下仙川青年警備隊発足

２３年（１２）　５月　１日　京王線、調布～府中間複線化する

　　９月　１日　関東大震災が午前１１時５８分、関東地方とその近辺におこる。北多摩郡は、各町村とも被害は軽少だった。神代村は、家屋半壊１戸、死亡者１人、負傷者１人。調布町は、全壊７戸、半壊１戸、負傷者５人



『京王帝都電鉄30年史』より

9月　2日　午後5時ごろ、不逞の徒が来襲してきたとの流言があり、仙川地区の消防団は直ちに夜警の準備をして、村内の各所で徹夜警戒を行なう

9月　3日　入間の明照院付近に怪物があらわれ武器を持って抵抗するとの通報があり、仙川地域の消防団は直ちに警鐘を乱打して現場に急行する

24年（13）　4月　1日　調布～多摩川原間複線化する

7月　下仙川字千羽（現、緑ケ丘）に薬用植物園できる

25年（14）　8月14日　仙川、昌翁寺再建される

26年（15、昭和元）　7月　滝坂尋常高等小学校に青年訓練所付設

27年（2）　神代村青年団結成

2月16日　下仙川762番地に鉄骨火の見櫓完成

12月17日　京王線、烏山～調布間の軌道位置および勾配変更改良工事が完成し、新線による運転を開始。①烏山から仙川へ上り、金子へ急坂を下った旧線路を平坦化するため、仙川付近の線路を凹道に導く工事。②旧線路が仙川から滝坂の急坂を下り、金子〈現在、つつじケ丘駅〉で甲州街道上併用軌道となり、さらに街道の北側を走って布田で再び南側にふみ切り、調布へ着いたのを金子付近の併用軌道をとりやめ、終始街道の南側を調布まで新線を敷設した。仙川のすぐ西から国領まで、きれいな一直線路となる

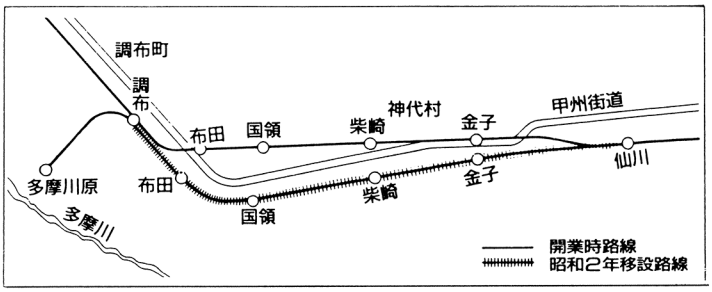
28年（3）　浄土真宗本願寺派の正善寺、明西寺、光西寺、安養寺、光徳寺、西照寺などの六寺が、関東大震災後の区劃整理により、築地の小田原橋から移ってきて、寺町をつくる（桐朋学園の南方）

5月22日　京王線、新宿～東八王子間直通運転開始

9月　滝坂尋常高等小学校に移築の中央校舎竣工

大正12年の関東大震災の際、東京府立第一高女が全焼し米国からの救援のアメリカ材によって応急に建築したものを本校に移築したものである。なお、京王線が現在の線路を走ることになり、以来、交通事故の不安と騒音の公害に悩まされることになった

11月　滝坂尋常高等小学校にピアノが有志個人より寄贈される（635円56銭）



京王線の仙川・調布間新旧路線図

29年（4）4月　村内13カ所に御大典記念貯水池（槽）設置
11月22日　上祖師谷に至誠会第二病院ができる
30年（5）12月1日　関東防火デー実施
朝9時より午後3時まで、村内を一巡する。各部思い思いに趣好を凝らした宣伝を行う。大師様境内で昼食、約5里疲労の色濃い。終って酒肴を持って慰労した
31年（6）　甲州街道（新宿追分～谷保）、コンクリート舗装となる
32年（7）7月　和光堂東京工場ができる。当時の住所地番は、東京府北多摩郡神代村北野字南山谷841番地
33年（8）8月9日　西照寺わか草子供会はじまる
36年（11）　第一回関東防空大演習施行。本格的な燈火管制を行う
37年（12）8月20日　津村薬用植物園発足
神代村防護団結成式
この年から仙川駅に駅員配備（有人駅化）
38年（13）1月14日　下仙川出征兵士を壮行
本日現在の下仙川出征兵士は現役兵を含め23人
5月25日　仙川農事実行組合設立
7月9日　入間下ノ台農事実行組合設立
7月10日　入間上ノ台農事実行組合設立

自治制発布五十周年記念刊行『郷土概観』（東京府発行）のなかの神代村についての記事を、次に載せる
戸口　戸数899戸、人口5454人
農業　農業戸数455戸、耕地面積　田122町4反　畑472町8反で、米、麦、蔬菜類、養蚕などを主とし、昭和12年1ケ年の収穫高は次の通りである
米3740石、麦4731石、蔬菜類319、543円、繭11貫256匁
最近、養蚕とともに養豚、養兎、乳牛などの畜産および椎茸栽培、庭園、街路樹、果樹、園芸などの副業も年をおって増



下仙川出征兵士（写真提供　川原武次氏）

加しつつある。なお、東京府農林課および村農会などの指導のもとに、栽培方法の改善指導、生産品の規格統制、販路の開発向上など、ますます振興発展の実績をあげている

商業　商業戸数85戸、おおむね甲州街道沿道、電車軌道各駅付近にいとなまれ、将来の発展を嘱望せられている

工業　従来、純農村のおもむきがあったこの村も、隣接千歳、砧の二村が世田谷区に編入以来、急激に工場の新設が多くなり、大小工場は現在6、その従業員約7百人、現に建設過程の大工場2があって、将来加速度に工業地帯化せられるものと予想されている

教育　村立滝坂尋常高等小学校　職員数13人（男8、女5）　児童数559人（男257、女302）

村立深大寺尋常高等小学校　職員数10人（男6、女4）　児童数460人（男239、女221）

現在は、戸数900、人口5400余、都市に接続、近郊の明媚なる風光と名勝旧跡に恵まれ、かねて交通の至便の点などが因となり、最近急激に発展膨張し、新しき文化住宅地帯、工場地帯などとしてますます発展の度を加えつつある

消防組は警防団と改組

消防組第九部解組式、警防団結団式

釘萬スクリュウ仙川工場ができる。48年に株式会社萬平製作所に改める

滝坂尋常高等小学校、滝坂国民学校と改称

私立山水高等女学校（現、桐朋学園）、九段の仮校舎から神代村入間の本校舎へ移転。財団法人山水育英会（山は陸軍、水は海軍を表わす）によって、同年4月に出征軍人軍属の子弟教育のために設立されたものである

太平洋戦争勃発し、各部落鎮守において戦勝の祈願が行われ、学校代表の職員児童が参列した

神代村翼賛壮年団結成

39年（14）　3月　1日

4月24日

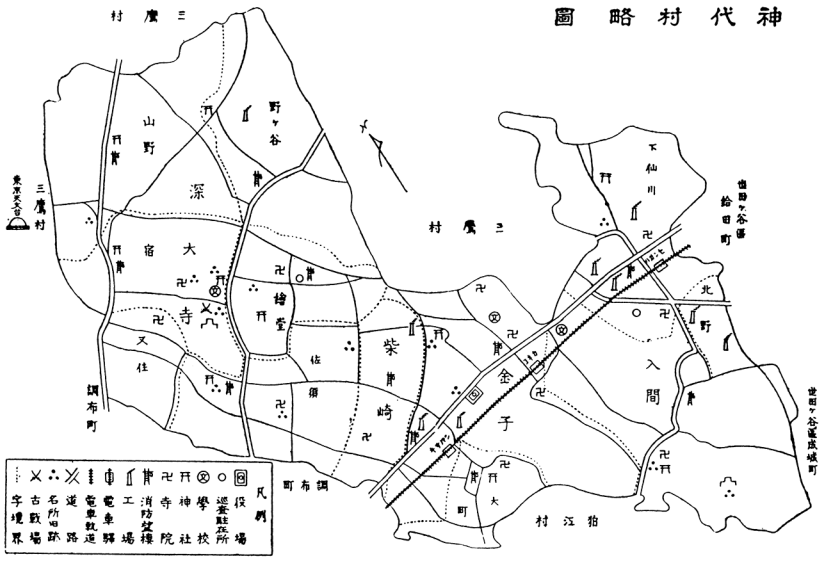
6月

41年（16）　4月　1日

9月　1日

12月　8日

42年（17）　3月26日



『郷土概観』より

4月18日　午後12時20分空襲警報発令、同3時50分解除。都内最初の敵機侵入である

9月　9日　府立神代高等女学校（元府立第十五高等女学校、現、神代高校）、神代村入間の新校舎へ移転。調布地区における最初の公立旧制中等学校であり、北多摩郡における最初の府立高等女学校でもあった

12月　5日　神代村婦人会結成

43年（18）1月　滝坂国民学校挺身隊の結団式が糟嶺神社で行われる

4月15日　山水高等女学校火災。午前7時30分ごろ火災発生、一棟を全焼、第2校舎を半焼

5月　5日　下仙川の警防団詰所完成

7月　東京府から東京都制実施

44年（19）2月21日　神代高女の学徒勤労動員始まる

3月27日　下仙川に木造警鐘台設置（供出した鉄骨の代替）

8月25日　神代村の寺院などで赤坂区（現、港区）青南国民学校の学童疎開受け入れがはじまる。〈受け入れ先〉①入間寮（府立女子商業校舎・現在の神代高校のグランドにあった木造平屋づくりの建物）3年男女、5年男女のおよそ100名　②家庭寮（神田家政学院寮ー東つつじケ丘3丁目31の3、現存せず）5年男子36名　③神代寮（府立第一高女寮ー西つつじケ丘2の14、現存せず）4、6年女子、92名　④明照院（入間町2の19の12）4年男子5年女子　⑤金龍寺（西つつじケ丘2の14の1）4、6年男子　⑥昌翁寺（仙川町3の7の1）6年男子およそ23名。この中に俳優の仲代達矢がいた

9月　1日　滝坂国民学校高等科児童の勤労動員始まる

45年（20）2月17日　この年の秋、陸軍の指令により中原一丁目の崖に総延長900メートルにもなる巨大な濠が作られる。幅は3～4・5メートル、八カ所の入口を持ち、調布飛行場で使用するガソリンのドラム缶を保管していた

滝坂国民学校前踏み切りに米軍機搭載の爆弾落下、防空壕に生き埋めの3人救出される。京王線一時不通



桐朋学園奉安殿付近清掃作業（昭和17年頃）

太平洋戦争の時期に、飛来する敵機を撃ち落とし国土を守る役目の高射砲隊の陣地が、神代村に5カ所、調布町に1カ所あった。神代村高射砲陣地　①武者小路家裏の高台（若葉町1丁目）　②金龍寺裏の住友住宅（西つつじケ丘2丁目）　③三鷹天文台南の高台　④神代植物公園内　緑の相談所　⑤御塔坂上の西側。調布町では下布田椿地蔵南のハケ上

2月21日　敵機およそ10機、神代高等女学校上空を通過

2月25日　大雪降る、約50センチ

6月11日　午前11時～午後零時半、P51を主とする数十機、神代高等女学校上空を通過。二、三機は急降下機銃掃射を行なう。被害なし

8月15日　天皇、「終戦」詔勅放送

47年（22）

3月　7日　神代村消防団発足

4月　1日　新学制の実施により、滝坂国民学校は6年制の神代村立滝坂小学校として新発足

都立神代高等女学校に併設中学校を設置（一年生の募集なし、49年4月廃止）

5月　滝坂国民学校の高等科は廃止され、新制3年制の神代村立神代中学校が柴崎の旧陸軍通信部隊跡に開校

11月　私立山水学園、桐朋学園と改称

48年（23）

4月　1日　都立神代高等女学校、神代新制高等学校として新発足。定時制課程を併設

桐朋学園に桐朋女子高等学校・中学校が新発足

6月　5日　滝坂小学校PTA結成

10月　9日　木代修一桐朋学園校長を中心に「多摩文化会」を発足。文化人と地域社会との交流を図る

50年（25）

6月　仙川商栄会が会員数27店で発足

51年（26）

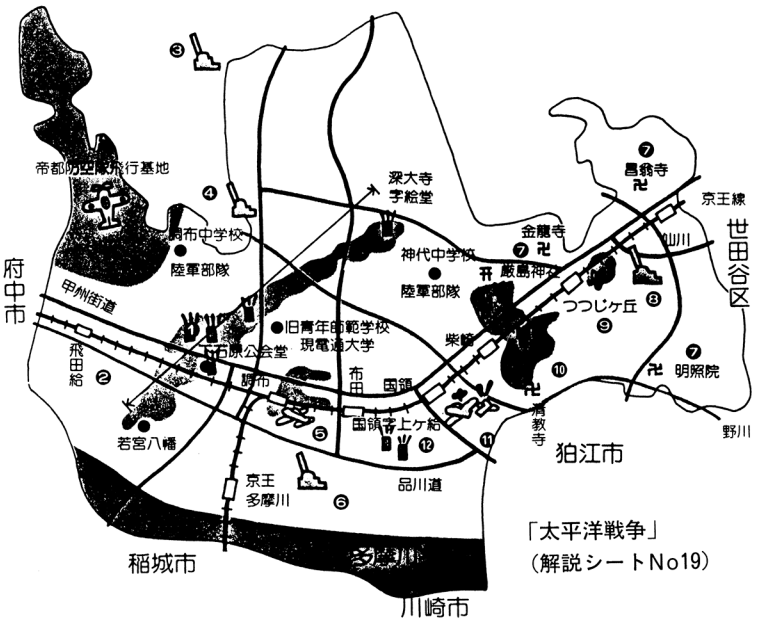
5月　電気通信省職員訓練所東京第一電気通信学園神代分室ができる

10月　東京第一電気通信学園神代分室が中央電気通信学園に名称変更

52年（27）

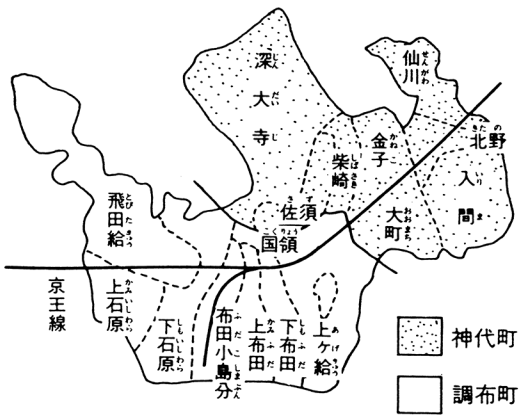
3月　キューピー株式会社仙川工場ができ、マヨネーズの製造開始

入間町城山遺跡で市内最初の発掘学術調査実施



「太平洋戦争」
（解説シートNo19）

	4月 1日	桐朋女子高等学校に音楽科設置（48年に開設した「子どものための音楽教室」を母体に）
	5月10日	中央電気通信学園、入間に移転完了。日本電信電話公社の設立により公社に移籍
	10月 1日	神代村で教育委員選挙（11月1日教育委員会発足）
53年（28）	11月 3日	神代村、町制施行して神代町となる
	4月10日	仙川～経堂間に小田急バスが走る。和光堂、桐朋学園前の狭い道路を通り、甲州街道を右折し現在の仙川終点に至る。（6メートル未満の道路には大型バスが通れなくなり、66年8月1日で廃止）
54年（29）	4月	仙川商栄会有志により「6の日会」が旗上げし、商店会活動が活発化する
		銭湯・第三あづま湯が開業（現、ビリヤード・サンコートのところ。72年に閉店）。京王線で千歳烏山の銭湯に行く者にとっての福音
		この頃、京王線は千歳烏山駅での折り返しが多く、仙川駅の運転間隔は大きかった
	4月 1日	若葉町に敬心英語学院が開校（67年に仙川町に移転し、敬心外国語学院に改称）
55年（30）	4月 1日	神代町と調布町の両町合併により調布市が誕生（人口45、090人、面積22・28キロ）
		桐朋学園初等部（幼稚園、小学校）発足
	4月18日	桐朋学園短期大学（音楽科）開学
	12月20日	武者小路実篤、水の湧く地を求めて三鷹市牟礼より入間町荻野468番地（現、若葉町1丁目）に移り住む
56年（31）		京王線・仙川駅々舎の改造工事。都道114号線の仙川橋上に建てられていた駅舎とは別に、ホーム中央上部に巾17メートルの駅専用の道路橋を架設して、ここに駅舎を新築し、今まで階段は巾3メートルのものが一カ所だけであったが、これを3・5メートルのもの二カ所にして、駅舎を頂点に八の字型に新設された
	10月	株式会社栄太楼が調布工場を開設
57年（32）		仙川商店街の道路が舗装され、街路灯が設置



市になるまえの調布町と神代町



調布市の誕生
「わたしたちの調布」（昭和55年）より

1月21日　京王線、急行4両編成運転開始
5月　1日　京王が甲州街道北側に開発した、つつじケ丘高級分譲地の販売開始
5月15日　京王線、金子駅をつつじケ丘駅と改称。高級住宅地つつじケ丘の最寄駅であるため、同駅名とした。千歳烏山駅に代わり、電車ここで折り返し運転となる

58年（33）
59年（34）
5月19日　仙川商店街、火災
3月21日　京王線、全線4両編成運転開始
4月　桐朋教育研究所開設
7月11日　諏訪郷友会学生寮長善館、巣鴨より現在の若葉町に移転

60年（35）
京王、若葉町分譲地売出し。武者小路実篤邸前方の入間田んぼ（現、若葉町一丁目）が埋め立てられて分譲地となった。このころ、税金・公共料金・諸物価値上がりで、農家は貸家・アパート・駐車場経営の副業や商人に転業、用水汚染や養豚・酪農の悪臭への苦情もあり、田畑は住宅化していく

61年（36）
4月20日　滝坂小学校分校（現、若葉小学校）が入間にできる。市内最初の鉄筋コンクリート校舎
5月10日　桐朋学園大学（音楽学部）開学式（短期大学閉学）
11月　1日　最初の地番整理で仙川町1～3丁目、緑ケ丘1・2丁目誕生

62年（37）
5月　1日　第2回町名地番整理で若葉町1～3丁目、入間町1～3丁目誕生
6月25日　栄太楼総本舗調布工場火災
12月　第一銀行（現、第一勧業銀行）が仙川町で営業開始
つつじケ丘駅の南、金子田んぼの90パーセントの面積が住宅公団に買収され、百年ほど続いた米づくりも一部を残して61年を最後に終止符をうつ
月兎ソースが入間町で創業
都営緑ケ丘団地入居始まる
この年に緑ケ丘2丁目共栄商店会発足

63年（38）
2月　若葉小学校独立開校
5月　1日　京王線、全線大型車5両編成運転開始
5月　2日　京王線、新宿～東八王子間特急運転開始（所要時間40分）
10月　1日


仙川商店街（S.30年代前半）


仙川商店街（S.34年頃）『調布今昔』より

11月　1日　私立調布若葉幼稚園が入間町に開園
12月18日　京王線、全線大型車6両編成運転開始
このころ、バス路線では小田急バスの仙川～経堂のほかに、小田急バスの吉祥寺～仙川～覚東と、京王バスのつつじケ丘～覚東があり、桐朋学園前の道をバスが走っていた
芦花公園～仙川間の甲州街道バイパスが完成

64年（39）　4月　仙川（特定）郵便局が開局
4月22日　桐朋学園短期大学部（文科、音楽科）開学
10月19日　京王線・新宿～京王八王子間、特急で37分に（特急の最高時速が95キロメートルに）
10月21日　東京オリンピック大会マラソン（国立競技場～飛田給折り返し点）があり、調布市内甲州街道沿道を16万人が埋める。市内は、聖火コース、50キロ競歩コースにも活用された

65年（40）　4月　1日　若葉町に第四中学校独立開校（神代中学校分校から）。都内でも初の「蜂の巣校舎」の六角形教室として注目を浴びた
白百合女子大学（文学部国文学科・仏文学科・英文学科）、緑ケ丘に開学
7月　仙川プール、仙川町にオープン
7月28日　日本住宅公団神代団地入居開始（戸数1874戸）
8月　4日　私立仙川かおる幼稚園が仙川町に開園
11月　1日　緑ケ丘小学校分離開校（滝坂小学校から）

66年（41）　3月　4日　私立調布白菊幼稚園東つつじケ丘に開園
4月　桐朋学園短期大学部の音楽科を芸術科に改組し、音楽専攻のほかに演劇専攻を新設
6月28日　台風第4号が関東地方を襲い、仙川が氾濫し、調布市消防団第13分団水防作業に従事。市内初の災害救助法の適用。
9月30日　私立東京緑ケ丘幼稚園が緑ケ丘に開園
11月　米沢有為会東京興譲館（学生寮）が新宿区西大久保より入間町に移転
仙川商栄会、市商工会による商店街診断実施

67年（42）



桐朋学園前を走るボンネットバス
本誌12号所収／佐野 敦 氏　撮影

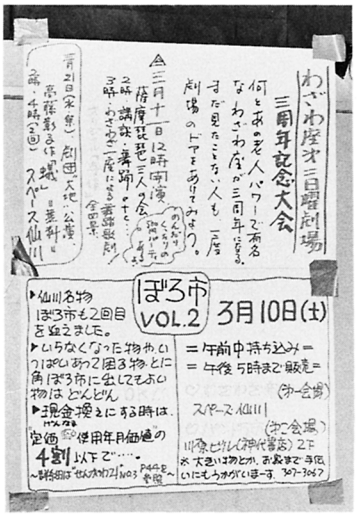
	5月	西友ストア仙川店開店
68年（43）	5月	丸正仙川店開店
	11月　1日	京王線7両編成運転開始
69年（44）		仙川商栄会、市商工会・電気通信大学の協力により商業調査実施。内容は、商業環境の変化に対応した商店経営のあり方について
71年（46）	1月11日	都立神代高校、服装自由化される。当時の神高新聞に「服装自由化＝なんのことはない。私達が私達にあった服を着る……。自分の個性を自然に出せばいいではないか」とある
71年（46）	2月10日	仙川の一里塚、小島の一里塚が市の旧跡文化財として指定される
	4月　1日	京王線、相模原線（京王多摩川～京王よみうりランド間）開通。新宿～京王八王子間が特急で35分に
	9月	仙川2丁目にトーマツボウルがオープン
72年（47）	6月	入間町に清水スイミングプールがオープン
	11月	駅前に仲よし広場オープン
73年（48）	4月	新旧甲州街道分岐点の三角地帯で、先土器から古墳時代にいたる遺跡を発掘。2万年前のこの地に人類が生存していた
	6月	京王ストア仙川店開店
		世田谷区成城4丁目に会員制のスポーツ施設成城グリーンプラザがオープン
	12月　5日	仙川青友会発足
74年（49）	3月31日	都立神代高校の全校舎が鉄筋化される
	7月20日	市立図書館緑ケ丘分館（緑ケ丘図書館）開館
	8月	仙川商店街の夏祭りに阿波踊りが登場
	10月18日	京王線、相模原線（京王よみうりランド～京王多摩センター間）開通
75年（50）	3月30日	市立図書館若葉分館（若葉図書館）開館に先立ち、長岡輝子氏の講演会が行われる
	4月12日	若葉図書館の児童室が開館する。7月5日に成人室も開館する
	6月　1日	若葉町に市立の東部公民館、東部保育園、東部児童館の3館が同時に開館する




駅前 仲よし広場

７６年（５１）　１０月２０日　京王線８両編成運転を開始
　　１月１９日　小劇場「スペース・仙川」が、桐朋学園正門通りにできる。
　　じじばば劇団〝わざわ座〟結成の〝檄〟を宣言
　　３月２８日　劇団わざわ座旗揚げこけおどし公演（第二日曜劇場公演として定着）
　　５月１８日　中央高速自動車道路の調布～高井戸間が開通
７７年（５２）　４月　１日　市立第八中学校開校（第四中学校に併置、９月１１日新校舎に移転）
７８年（５３）　５月１２日　市立実篤公園開園（入口付近の管理棟建設の際、縄文土器・細石刃・焼石など出土した）
　　８月　１日　実篤が７６年に９０歳の生涯を閉じ、その後安子夫人の意志により、邸宅および多くの遺品、美術品が調布市に寄贈された
７８年（５３）　８月２５日　せんがわのまちコミ誌『せんがわ・２１』創刊
　　８月　仙川町の飲食店主有志９人による仙川飲食店グループがスタート
　　１０月　仙川商店街の仙川商栄会が法人化され、仙川商店街協同組合となる
　　仙川商店街協同組合、スタンプサービス券（仙川スタンプ）の発行開始
　　１１月　仙川商店街協同組合、「お客様専用駐車場」開設（２３台）
７９年（５４）　４月　調布わかば福祉作業所、入間町に開所
　　仙川飲食店グループが仙川うまいもの会として、１３加盟店で発足
８０年（５５）　１月１３日　第１回「輝け仙川！町内音楽祭」スペース仙川にて開催。大雪の降る中、紅組白組１８組の参加で行われた。勝敗の行方は観客の多数決によって紅白同数の引き分けとなる
　　３月　京王線と都営地下鉄新宿線の相互乗り入れ開始
　　４月　１日　敬心外国語学院が専修学校の認可を受け、敬心外国語専門学校となる
８１年（５６）　１１月　９日　消防団１３分団火の見櫓完成（高さ１５メートル）
８２年（５７）　６月　仙川商店街のアーチ、街路灯建設工事完了
８３年（５８）　４月　仙川はやし連中、２４年ぶりに活動再開
　　５月　サンライズカルチャーセンターがオープン
　　５月１７日　市立緑ケ丘地域福祉センターオープン
　　仙川商店街道路のカラー舗装完成披露式典が行なわれる。





15～17日の三日間、商店街をあげて記念セールを行い、17日にはパレードと竣工披露の式典を挙行した。15日初日には商店街中央の東西通りぬけを可能にした6メートル市道わきの280坪の空地に、地元商店から50台を繰りだしてワゴンセールを開催した。青天にアドバルーンを3つあげいつもの3割～7割安で商品をだしたが、前宣伝がいまひとつであったためか、店によって売れ行きもさまざま。しかし、「お祭りだし、おつき合いだからね」と笑顔がほころぶ。周辺の京王・西友・丸正の各大型ストアも協賛セールを展開、京王ストア前には万国旗がはりめぐらされ、丸正ストアでは金魚すくい、西友ストアはアナウンスでカラー舗装完成を連呼するなど、仙川ぐるみの大祝祭の盛り上がりをみせた。16日は豪雨のためワゴンセールは中止となったが、天の配剤か雨がカラー舗道を洗い、翌日の式典のために思いがけず舗道を清めなおすことになった。17日は、五月晴れの快晴に恵まれ、パレードもすがすがしいものになった。桐朋学園の金管吹奏科8名による「ワシントンポスト」の演奏を先頭に、斉藤理事長、消費者を代表して調布一の長寿・片柳マスさん、金子市長らが続き、全長400メートル・幅4メートルのカラー舗道の歩きぞめをした。京王線の上に架かる仙川橋を渡ったところで、テープカットと薬玉割りがおこなわれた

8月　ミニFM局ラッズ、商店街通りラッズ美容室内に開局。11月から週2回の定期放送を実施

84年（59）　3月10日　第2回「輝け仙川！町内音楽祭」4年振りに開催。第1回目と同じく朝から雪が降る中、老若男女18組が紅白に分かれて自慢のノドを競いあう。会場のスペース仙川は満席、表の通りにビデオ中継する盛況ぶりであった。3時間半に及ぶ音楽祭は白組決勝で幕を閉じる。

85年（60）　3月30日　市立緑ケ丘児童館オープン

11月16日　調布緑ケ丘郵便局オープン

3月　大正橋の掛替工事完了。

〝まちの顔〟仙川駅舎の改修工事完了



実篤記念館オープニング



モール化記念　薬玉割り

８６年（６１）
4月　桐朋学園大学卒業試験の公開を始める（調布グリーンホール）
「コミュニケーション of 仙川」発行開始。橋本新聞舗の奨学生配達員の若者たちにより毎月刊行。B4判一枚の仙川情報紙。（後に「ぷらっと仙川」と改題し発行続く）
10月29日　市立武者小路実篤記念館オープン
若葉町の山内牧場、牛の種類を乳牛から肉牛へと切替え、併せて野菜とブドウ栽培を開始する。これにより昭和24年から続いていた搾乳の歴史が幕を閉じる
８７年（６２）
1月　2日　第一回新春初笑い「こしじ寄席」開催
2～4日の3日間、いわし料理〝こしじ〟の2階座敷で桂南治氏他5名程の寄席芸人を招いて行われた。以来、毎年正月の恒例寄席に
8月　1日　仙川商店街の夏祭り、〝THE　おらほせんがわ祭り〟として、一大イベントにリニューアルされる
9月　2日　第1回仙川音楽会開催（主催　スタジオJUN）。
〝街の中に音楽を〟と、桐朋学園の若きOBたちの協力を得て、毎月第1水曜日夜に川口屋をベースにホームコンサートを開催。89年6月に第19回を迎える
８８年（６３）
4月26日　〝実篤と新しき村〟仙川フォーラム88発足
8月　1日　仙川商店街の夏祭りにリオのカーニバル登場
11月13日　〝実篤と新しき村70年〟シンポジウム開催（実篤記念館主催）
11月20日　新しき〝村〟と〝街〟の交流サミット開催（仙川フォーラム88主催）
12月　3日　第3回仙川音楽祭開催（仙川フォーラム88主催）
12月　都営緑ケ丘団地住宅改善第1期工事完成





仙川界隈史年表をまとめるにあたり、ここに挙げてある個人、団体、自治体、研究機関などの種々の調査報告書、パンフレット、単行本、地図などの記述・表現を、そのまま、ないしは多少変えて使わせていただいておりますが、ひとつひとつの出典についてお断わりをしてありません。また、それぞれの参考文献・資料所収の図版を使わせていただいております。さらに、たくさんの方々から貴重なお話を伺うことができました。ここに、厚くお礼申しあげます。

主な参考文献・資料

近世調布の村むら　調布市史研究資料Ⅱ　調布市市史編集委員会　調布市　1984年
行政資料に見る調布の近代　調布市史研究資料Ⅴ　同　同　86年
調布の民俗覚書　調布市史研究資料Ⅳ　同　同　85年
調布の近現代史料第一集　調布市史研究資料Ⅺ　同　同　93年
調布市議会20年史　調布市議会20年史編集委員会　同　75年
市議会のあゆみ　4年間の活動記録　調布市議会事務局　83年
われわれの郷土　調布の歴史　20周年記念誌編集委　調布ロータリークラブ　83年
調布今昔写真集　調布市教育委員会　74年
調布市漫歩　調布市教育委員会　64年
ちょうふ　史跡と観光　アートタウン　調布市観光協会　86年
調布市史　上巻　調布市市史編集委員会　調布市　91年
調布市史　中巻　同　同　92年
調布市教育史　同　同　82年
調布市史　民俗編　同　同　85年
調布市百年史　調布市百年史編集委員会　同　68年
郷土の七十年　竹内武雄　啓明出版　79年
私の歩んだ八十年　郷土神代と共に　山岡柳吉　自家出版　82年
がき大将奮戦記　調布市長・八年の町づくり　金子佐一郎　アート・プロジュース87年
多摩の歴史　5　武蔵野郷土史刊行会　有峰書店　75年
調布の歴史　園田光司（国際商科大学）　自家出版　記載なし
調布の歴史年表　増補版　調布市郷土博物館　82年
調布町沿革誌　調布町沿革誌刊行委員　調布町役場　51年
神代町の栞　神代町役場総務課　神代町役場　52年
深大寺及附近の歴史　大久保清次　五輪社　69年
調布市実篤公園遺跡　埋蔵文化財調査報告3　調布市教育委員会・遺跡調査会　97年
調布市入間町城山遺跡　同　同　81年
15
しろやま（城山遺跡第九次調査概報）　同　同　82年
東京の遺跡　東京都教育庁社会教育部文化課　85年
市制施行25周年記念特別展　調布展　調布市郷土博物館　80年
調布の歴史　同　同　85年
調布の原始・古代　ー見学のてびきー　記載なし
開校百周年記念誌　記念事業協賛会　市立滝坂小学校　73年
住宅改善のあゆみ　住宅改善完成記念誌　緑ヶ丘団地自治会　92年
歴史のおくりもの　調布の文化財案内　調布市教育委員会　87年
調布の野仏と村の信仰　調布市郷土博物館　記載なし
路傍の石仏　調布市の石造物（一）　調布市文化財専門委員会議　教委　88年
調布の文化財　第1号～13号　調布市郷土博物館　～93年
郷土ウォッチング　第1号～6号　同　～93年
解説シート　第1号～22号　同　～93年
調布の動物ばなし　同　92年
調布の自然と生活　第8版　調布市教育委員会・中学校社会科副読本編集委員会　78年
調布の自然と生活　新訂第5版　同　88年
わたしたちの調布　調布市教育委員会・社会科副読本編集委員会　80年
同　同　同　60年
同　第3刷（部分改訂）　同　88年
子どものための調布市の歴史　調布市立図書館　93年
調布のいせき　調布市教育委員会社会教育課　82年
調布市仙川遺跡　東京都埋蔵文化財調査報告書2　東京都教育庁　74年
調布市消防団　第13分団のあゆみ　調布市消防団第13分団　82年
抜萃の栞　第一（調布の今昔などあり）田中　愛　自家出版　65年
調布歴史散歩　1仙川　2滝坂　中西駿郎　調布市立図書館報　77年
調布のあゆみ　中西駿郎　調布市郷土史料保存会　82年
郷土　中仙川　郷土中仙川作成委員会　82年
商店街みて歩き　仙川商栄会・その1　新三多摩新聞　83年4月23日
同　その2　同　83年5月28日
仙川商店街通りです　市報ちょうふ418号　77年

仙川　「大手攻勢」負けじの活気　読売新聞・都民版　78年6月5日
ショッピングモールせんがわカラー舗装完成記念　仙川商店街協同組合　83年
昔咄　仙川あたり　川原イト　民協会報23号　82年7月
大慈山永久院昌翁寺（小冊子）　記載なし
和光堂のあゆみ　和光堂社史編纂室　和光堂株式会社　69年
週刊多摩新聞全集　調布史談会復刻　調布史談会　70年
調布史談会誌　合冊綴（1〜10号）　同　記載なし
僕の調布にも空襲があった　古橋研一　みんなしんぶん社　86年
神代農業の戦後史　大林茂一　自家出版　82年
調布こぼれ話　調布市役所企画調整部広報課　調布市　79年
調布こぼれ話　Ⅱ　同　同　82年
調布市農業実態調査報告書　地域社会計画センター　87年
調布市農業振興長期計画策定調査報告書　同　同　88年
調布市農業振興長期実施計画策定調査報告書　同　同　89年
自治制発布五十周年記念刊行　郷土概観　東京府　38年
旧高旧領取調帳　関東編　木村　礎校訂　近藤出版社　69年
武蔵名勝図会（復刻）　1823年刊　植田孟縉　慶友社　67年
新編武蔵風土記稿（復刻）　1810年刊　調布史談会　80年
帝都と近郊　小田内通敏　有峰書店　74年
北多摩神社誌　北多摩神道青年会・むらさき会　76年
東京府北多摩郡勢一覧　東京府北多摩郡農会　16年
北多摩郡誌　東京府北多摩郡役所　12年
郷土　北多摩　東京都北多摩中学校長会・北多摩郡保谷中学校長会　52年
東京西郊における農村変容の一形態（1）　小池暉一　桐朋女子学園紀要7　60年
大都市近郊農村の変貌過程ー仙川地域社会の研究ー　桐朋女子社会科研究部　64年
リモートセンシングを使った吉祥寺〜仙川付近の被覆調査　宮武隆二郎・森　茂　桐朋学園大学研究紀要第7集　81年
低次中心地への地理学的アプローチ　—調布市仙川・つつじケ丘を例にとって—　森　茂　同　第5集　79年
桐朋女子学園創立二十周年記念誌　桐　記念誌編集委員会　61年
桐朋学園創立四十周年記念誌　桐　記念誌編集委員会　桐朋学園（女子部）　81年
桐　桐朋学園（女子部）創立五十周年記念誌　記念誌編集委員会　91年
桐朋の教育　創立五十周年を記念して　桐朋女子中・高等学校　91年
創立五十周年記念誌　記念誌編集委員会　東京都立神代高等学校　90年
甲州街道の研究　東京都立板橋高等学校地理研究部　74年
甲州道中の研究　八王子市郷土資料館　八王子市教育委員会　74年
甲州道中高井戸宿　文化財シリーズ26　杉並区教育委員会　81年
烏山　甲州街道間の宿の民俗　世田谷民俗調査団　世田谷区教育委員会　81年
甲州道中分間延絵図　第一巻　東京美術　78年
一里塚について（小島村之一里塚跡・下仙川村之一里塚跡）　原育夫　自家出版　70年
京王帝都電鉄三十年史　京王帝都電鉄総務部　京王帝都電鉄株式会社　78年
10年のあゆみ　同　同　58年
京帝たより　100号記念縮刷版　京帝たより編集部　同　61年
京王五十三次　清水正之　京王多摩文化会　62年
のびゆく狛江　社会科副読本編集委員会　狛江市教育委員会　79年
わたしたちの狛江市　小学校社会科副読本編集委員会　同　79年
狛江市史　狛江市史編さん委員会　狛江市　85年
狛江村誌　石井扇吉　狛江村役場　35年
泉竜寺縁起（小冊子）　記載なし
伸びゆく三鷹　中学校社会科作成委員会　三鷹市教育委員会　79年
三鷹市史　三鷹市史編さん委員会　三鷹市　70年
稲城のあゆみ　稲城市史編集委員会　稲城市　91年
日野市史　通史編一　日野市史編さん委員会　88年
大正震災志　上・下　内務省社会局　岩波書店　26年
歴史と風土　武蔵野　桜井正信　社会思想社　69年
地図の風景　関東編1東京・神奈川（残された武蔵野の緑と泉　仙川周辺）　そしえて文庫85　そしえて　80年
角川日本地名大辞典13　東京都　地名辞典編纂委員会　角川書店　78年
地図　調布市旧大字小字名記載図（史談会二十周年記念刊）　調布史談会　84年
地図　ふるさとマップ　ちょうふ　調布市企画調整部広報課　調布市　88年
地図　同　同　同　91年
地図　ステーションマップ京王帝都京王線　仙川駅周辺図　ゼンリン　記載なし
地図　調布市明細図（若葉町1〜3・入間町1〜3・仙川町1丁目）　白水社　同
地図　溝ノ口（二万五千分一地形図）　国土地理院　60年
地図　成城（一万分一地形図）　地理調査所　58年
地図　調布市全図　市政15周年記念　調布市　70年
地図　仙川駅付近案内図　協栄社　記載なし
地図　調布中仙川新川地区有名商店街御案内　金子　芳明堂印刷所納　同

モール



このページは商店と企業の皆様に開かれた伝言欄です。事務的なお知らせからちょっと工夫した生活情報まで幅広く活用され、とにかく気になるページに育つのが楽しみです。

オープン

▼珈琲は焙煎の度合いでいろいろな味と香りが楽しめます

20種類の豆を2通りでどうぞ!!　話題のガヨマウンテン新発売中。早朝7時～21時（無休）。11時までのモーニングサービスもお薦めです。

珈琲屋豆の音
☎3326－1404

▼開業9年を迎え、店舗拡張して新装オープン!!

広さ2倍、本は3倍の品揃えになりました。割安な古書を友に、読書の秋をお楽しみ下さい。

古書の訪文堂書店
☎3308－6455

メッセージ

▼天高く…食欲の秋に、メニューを広げる電子レンジを

ビューティトワレ、アルカリイオン整水器が〝健康指向〟で好評です。

サトウデンキ
☎3300－5016

▼ブライダル、新たな出会いの秋シーズンを迎えて!!

あっさりムードのお店で、豊富な宝石・貴金属の中からゆっくりとあなたの個性と出会ってください。

玉晶堂
☎3300－4734

▼白百合女子大放送研のビデオディスクジョッキー8年目

ビルボード最新40曲からリクエストに応じる。素敵なリクエストにはカクテル無料券。毎週土曜日19～21時頃。

ザ・ボウル・ガーデン
☎3326－1315

▼仙川商店街中央のSSストアーです

毎週土曜日は青果、鮮魚、精肉の特売日です。定休・日曜日前の大特価品を豊富に品ぞろえして、ご来店をお待ちしています。

SSストアー
☎3300－6625

▼アメリカの医療　カイロプラティック

カイロプラティックとは、筋肉・神経系統のバランスを調整し脊椎・骨盤の歪みを正すことにより体の正常な機能を回復させる安全で痛みのない自然療法です。カイロプラティックは病気の根本原因を取り除きます。

仙川腰痛センター



まちニティ・ショップ・カタログ……広告掲載店INDEX…

●着る
aZI……23
いながわ……44
ehime……82
カスミ……166
キクヤ……104
クイン……22
三愛クリーニング……130
CHEVAL……24
たげ屋……24
たんぽぽ……166
ツカモト……44
明治屋靴屋……44
陸右エ門……166

●飾る
カットサロンたけし……24
玄徳……166
真珠……166
美容室LERNE……166
堀内美容室……22

●飲む・食べる
あかべこ……100
アンカー　ヒア……24
磯春……118
一平……130
伊那……168
家族庵……24
こしじ……130
光生軒……166
サニーメイト……23
三進……166
ザ・ボール・ガーデン……166
jei……168
仙川寿司……130
チャティー・ずう……22
DEJAVU……166
トンカツさき本……82
とんかつ仙川……22
なみはな……24
平野屋……166
ピッコロモンド……144
ぷあぷあ／ハートランド……82
ペルリ……44
まほうつかいのでし……166
まや徳……166
まり……166
萬来軒……130
桃乃花……44
野州茶屋……44
よしきり……23
山小屋……82
リセンヌ……168
れあーる……22

●買う
アキヤマ……44
イシケンフローリスト……130

Sengawa ショッピング

☎5384－6686

▼ちゃんこ鍋（二〇〇〇円より）すきやき鍋（二一〇〇円）うどんすき（二一〇〇円）

その他一品料理、定食メニュー豊富です。御家族での会食、お友達との会合に是非御利用下さい。パーティー、コンパ御相談ください。**桃の花**

☎3326－8047

求人

▼女性パートスタッフ求む

年齢20～40歳位まで。時給800円より、詳細は面談。9時～21時（水曜休み）最短22分仕上げで好評のD・P・Eサービスの**BIGWAY**

☎5313－1949

▼美容師求む

技術者／中間生／インターンを募集中です。美容の好きな方もお問い合わせ下さい。

美容室玄徳

☎5384－4736

イベント

▼NEW NIGHT LIFE エンターテイメント

〝ポケットに宝石を持つ芸人〟たちが繰り拡げる素敵なナイト・ショー。歌あり、踊りあり、コントあり!! 9／11・18・25、10／2・9・16・23、毎土曜20時開演（約60分）郡司イベントホール仙川（甲州街道ロイヤルホスト前）当日三千円、前売二千八百円

郡司事務所

☎3300－3211

▼心で結ぶショッピングモール――〝ハーモニータウンせんがわ〟の大駐車場

昨年4月のオープン以来、仙川駅に近く、買物に便利と、好評にてご利用いただいております。駐車台数150台は、商店街が持つ駐車場としては日本有数。1時間400円、30分毎200円。ステッカーのあるお店でお買上げ金額により無料サービス券を提供。

9時～22時（無休） ☎3307－6325

P 仙川商店街駐車場 加盟店

イトウ……166
ウエマツ……166
玉晶堂……144
光輪堂……118
佐藤精肉店……144
サトウデンキ……144
しみずや……22
鈴仙……104
青香園……104
セブン・イレブン調布仙川店……100
たからや……118
手島米店……168
ナカエ……144
藤屋……表2
ほうすいえん……166
丸正食品仙川駅前店……82
マルジュウ……144
丸藤……44
ヤナバ電機商会……166
山田屋金物店……22
山利屋……144
りきや化粧品店……144

●備える

永楽信用金庫……66
芝信用金庫……66
仙川郵便局……168
第一勧業銀行……66
多摩ボデー……100
東京相和銀行……66
三菱銀行……66
むさしや質店……22

●知る・見る

サンライズ……104
神代書店……表3
聖教新聞……22
東国書林……104
橋本新聞舗……118
BIGWAY……130
訪文堂書店……24

●習う・創る・遊ぶ

アトリエはちの巣……168
トーマツボウル仙川……100
なかや本店……44
モッテ……24
スペース仙川……224
ハクビ仙川着物教室……22
パチンコ コトブキ……100
プラザ ギャラリー……168

●からだ

市川歯科……168
大塚矯正歯科医院……表2
仙川耳鼻咽喉科……23
仙川獣医科病院……118
仙川腰痛センター……130
広田薬局……144
若葉歯科医院……44
わかば町クリニック……130
和光堂……1

●住まう

グローバル設計……表3
佐藤工務店……130
東京ガス仙川サービスセンター……144
フェリカ インテリア……23
やさま畳店……24

――数字は掲載頁です。



FESTA DO BRASIL!!

一九九三・ブラジル・フェア

――夏・まつり・サンバ――

主催　ブラジルフェア実行委員会
後援　プラザギャラリー　協力　ブラジル大使館

7月31日～8月3日

小さいブラジルが、仙川アヴェニュー広場に出現します。

×　×

ブラジルって、こんな国です。

ブラジルには、こんな物産があり、ブラジルには、こんな音楽があり、そして、ブラジルには、こんな日系人達が暮しています。

×　×

こうしたブラジル。直接、体験して頂こうというのが、このブラジル・フェアです。

八十五年前。移民船笠戸丸は、ブラジルに日本人移住者、第一陣を運びました。以来、日本にとって、遠くて近い国になりました。

×　×

人手不足でブラジルから招かれた日系人は約二十万人といわれています。

バブル崩壊で、この日系の人達は、必ずしも物心両面で満足できる環境にありません。

だから、ブラジル・フェアは、この方達にも呼びかけます。

（ここで、日頃のウサを晴しませんか。小さなブラジルがありますよ！）

×　×

ブラジル・フェアの当日。

仙川アヴェニューの広場には香ばしいカフェのかおりが一ぱいになります。

なぜなら、デミタス・カップに、トロリとしたブラジル流カフェが用意されているからです。

一口、飲んでみて下さい。それだけで、サンパウロの東洋人街にいる気分です。

×　×

ブラジルのお土産を手にした人は、覚えがあると思います。

目もあざやかなモルファ蝶の飾り皿。

アマゾンの巨大魚のウロコでできてるキーホルダー。

ちょっとしゃれたコパカバーナのアクセサリー。

珍らしい石でできてる工芸品。

広場に並らぶブラジルの物産は、小さいお子さんにも、喜ばれること、うけあいです。

×　×

夏にふさわしいサンバのリズム。

人々の足どりを軽くします。

仙川アヴェニューにいる人々は、まるでカルナバルに浮かれる、キャリオカ（リオッ子）のムード。

≪絵画展示≫

プラザ・ギャラリーの幾つものギャラリーは、ブラジルを題材にした絵画で埋めつくされます。

- 活き活きとしたカーニバルの踊り子
- 哀しく、おかしいピエロ
- モジダス・クルーゼスの夕景色
- 古い都レシーフェの憂愁
- なぜかわびしい、サントス埠頭
- サンパウロの風は、人間くさく
- ポルト・アレグレの朝は肌寒い

そんなブラジル百景を見事にとらえた絵画が並らびます。

二百四十号の油絵の大作は、思わず息をのむ迫力だし、ズラリと並らぶ百号級の力作は、見る人の心を奪わずにおかない傑作ぞろいです。

作者は、谷口金治画伯。
何回かブラジルに行くうちに、ブラジルの魅力にとりつかれたそうです。
谷口画伯は、サンパウロ美術館で個展を開き、大好評を得ました。ブラジルを題材にした絵画、百数十点の作品を、一挙に展示。

≪ポケット・ミュージカル上演≫

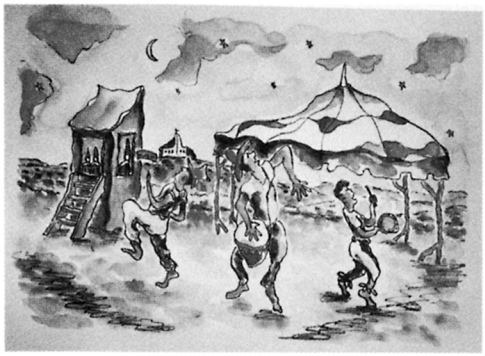
ブラジル・フェアの開催中、ミュージカルが上演されます。
『カフェの実は赤くなりましたか』平成二年、朝日放送主催のコンクールで、「劇団ノルテ」が大賞を受賞した作品。
小さいお子さんも充分楽しめる作品になっています。
サンパウロ州、ミランドポリス、アリアンサ。
そこに一風、変わった日系人の農場―「ユバ農場」があります。
農園の子供達は、絵を学び、ピアノを習い、バレエを踊ります。
ブラジルでは、知名度もかなり高く、何年か前、大統領夫人の主催する慈善公演に、ブラジリア国立劇場に招かれて、公演もしています。
ユバ・バレエ団として、日本へも二回やって来て日本中を公演、大好評でした。
そのバレエ団のリーダー・小原女史は、日本とブラジルの文化の交流を……という願いをこめて、独特の農民バレエを作り上げていきます。その苦しみを描いたのが、『カフェの実は赤くなりましたか』。

× ×

出演は、二代目の仮面ライダー役で活躍した佐々木剛、他に劇団ノルテのメンバーです。

× ×

劇中、随所に現地の状況を撮影したスライドを上映しながら、唄あり踊りありの、楽しいミュージカルに組み立てられています。



リト・手彩色「祭りの仲間」谷口金治

上演時間の予定は、次の通りです。
三一日、一日　后一時、三時、五時
二日、三日　后二時、五時

× ×

作・演出の高垣葵（まもる）氏は、劇団ノルテの主宰者。昭和三十年代に大ヒットしたNHK連続ラジオ・ドラマ『一町目一番地』や、TBSラジオ『パパいってらっしゃい』等の作者です。
高垣氏は、三十数年前、取材旅行でブラジルに行き、以後、ブラジルに魅せられて、ブラジル関係の作品を、多数執筆しています。

× ×

NHK・ドラマ『エウ・ソウ・ジャポネーズ』（私は日本人という意味のポルトガル語）では、日系人の国籍の問題をとり上げ、芸術祭優秀賞を受賞しています。
他にも、NHK・ラジオで連続放送劇『ブラジルから来た太郎君』を放送。ポルトガル語と日本語の言葉のカベを扱って、NHK局長賞を受賞しています。
『アルヘンチーナの花嫁』、『南十字の下に』、『碧（あお）いコンドル』……等々、南米・ブラジル関係の作品は十指にあまります。

× ×

さて、こうして、ブラジル・フェア。ブラジルが大好き……という人達が集って、プチ・ブラジル実現を目ざしました。

× ×

仙川アベニュー広場。
夏の宵は、ブラジル・フェア！
人生はカーニバル。ワ、わ、輪、和。

× ×

戦後、日本がまだ貧しくて、移住者を海外へ送り出そうとした時、いろんな国が横を向きました。その中で、ブラジルだけが、「どうぞ、日本の人達、いらっしゃい！」と呼んでくれました。そんな歴史をふりかえると、〝ブラジル・フェア〟成功させなくては……と思います。

× ×

ブラジル・フェア実行委員会
総合プロデュース　高垣　葵（まもる）
（お問合せ）
〇三・三三〇〇・一〇一〇
プラザ・ギャラリー

ブラジルの名物料理・フェジョアーダや日本の茶の湯コーナーも登場。サンバショウも華かに繰りひろげられ、仙川界隈史の国際化時代を画する一大イベントでした。

タネ・園芸・造園

ウエマツ㈱

仙川町2－21－9　☎3307-4187

ホビーショップ（手作り　手染め）

たんぽぽ楽

仙川駅前　☎3308-4637

生活雑貨

イトウ

仙川町1－11－10　☎3300-1764

美容室

玄徳

火曜定休

仙川駅前　10時～20時　☎5384-4736

着付け，レンタル衣裳承ります

美容室 LERNE

第2なかよし広場

〒182 調布市仙川町1－3　☎3308-5582

15年たちました。コーヒーやお酒を飲みながら
夢を語ろう

喫茶＆スナック

まり

10：00～24：00　商店街中央　日曜定休　☎3309-6384

そば処

平野屋

桐朋学園前　☎3308-0115

ミセスの装い・おしゃれのみせカスミ

Kasumi

〒182 調布市仙川町1－13－9　☎3300-6768

カット＆パーマ　着付

おしゃれサロン

真珠

若葉町1－28－20（東部公民館斜め前）　☎3309-2180

---

pasta and tea

DÉJÀ VU

仙川町1－13－12　☎3307-5400

中華料理

光生軒

11：00～20：00　桐朋学園前　☎3300-4413

JEAN'S FAMILY

陸右エ門

RIKUEMON

☎3326-2282

自然食品の店

ほうすいえん

元気な野菜たちがいっぱい！
せひ一度　御来店下さい！



スペース仙川1F横
仙川町1-13-16 ☎3326-2356

たべてみんしゃい、うまいけん

広島風　お好み焼

まや徳

MAYATOKU

京王ストア駐車場東側　☎3326-3455

冠婚葬祭・御料理仕出し承ります。
御宴会等に御座敷60名様まで承ります。

大衆割烹 三進

☎3300-5655

パーティ予約受付中

ザ・ボウル・ガーデン

客席120席／　永楽信金2F　☎3326-1315

あなたの街の電気店

ヤナバ電機商会

若葉町2－24－19　☎3307-3182

ゆであげスパゲティの店

コンパ会食OK

ぼうつかいのでし

神代書店2F　☎3309-4644

タネ・園芸・造園

ウエマツ㈱

仙川町2－21－9　☎3307-4187

ホビーショップ（手作り　手染め）

たんぽぽ楽

仙川駅前　☎3308-4637

生活雑貨

イトウ

仙川町1－11－10　☎3300-1764

美容室

玄徳

火曜定休

仙川駅前　10時～20時　☎5384-4736

着付け，レンタル衣裳承ります

美容室 LERNE

第2なかよし広場

〒182 調布市仙川町1－3　☎3308-5582

15年たちました。コーヒーやお酒を飲みながら夢を語ろう

喫茶＆スナック

まり

10：00～24：00　商店街中央　日曜定休　☎3309-6384

そば処

平野屋

桐朋学園前　☎3308-0115

ミセスの装い・おしゃれのみせカスミ

Kasumi

〒182 調布市仙川町1－13－9　☎3300-6768

カット＆パーマ　着付

おしゃれサロン

真珠

若葉町1－28－20（東部公民館斜め前）　☎3309-2180

pasta and tea

DÉJÀ VU

仙川町1－13－12　☎3307-5400

中華料理

光生軒

11：00～20：00　桐朋学園前　☎3300-4413

JEAN'S FAMILY

陸右エ門

RIKUEMON

☎3326-2282

自然食品の店

ほうすいえん

元気な野菜たちがいっぱい！ぜひ一度御来店下さい！

スペース仙川1F横

仙川町1-13-16 ☎3326-2356



たべてみんしゃい、うまいけん

広島風　お好み焼

まや徳

MAYATOKU

京王ストア駐車場東側　☎3326-3455

冠婚葬祭・御料理仕出し承ります。
御宴会等に御座敷60名様まで承ります。

大衆割烹 三進

☎3300-5655

パーティ予約受付中

ザ・ボウル・ガーデン

客席120席／　永楽信金2F　☎3326-1315

あなたの街の電気店

ヤナバ電機商会

若葉町2－24－19　☎3307-3182

ゆであげスパゲティの店

コンパ会食OK

まほうつかいのでし

神代書店2F　☎3309-4644

あなたのまちの郵便局

調布仙川郵便局

☎3300-3001

RESTAURANT & BAR

Bourbon
Cocktails
& Foods

[jéi]

'70S～'80S
Good Sounds

仙川駅より1分　☎03-3308-2887　日曜・祭日定休

白昼夢終章

李仙瓊

綺睡庵主

一度来ていただいたら 二度行きたくなる様な

味の店 伊那

桐朋学園前　☎03-3326-1586

お米は日本の味
おにぎりは母の味

おいしい米屋のおにぎり　**手島米店**

仙川商店街駐車場前　本店☎3309-4641　仙川店☎3307-5649

美しい歯と歯肉の健康のために

イチカワ歯科

GENERAL DENTISTRY・ORTHODONTICS

予約診療制
診療時間・AM9:00～PM6:00
夜間診療・月曜日PM8:00まで
日曜・祭日休診

仙川クリニック　182東京都調布市仙川町1－12－40　TEL 03-3308-8241
広尾クリニック　150東京都渋谷区広尾4-1-11広尾ガーデンヒルズ　TEL 03-3486-8266

こどものアトリエ

はちの巣

21世紀を創造するこどもたちへ

- 幼児～小学生
- 水曜日・金曜日
- 2：30～6：30

こどもたちは自由な創造空間で
おもいっきり心を開いています。

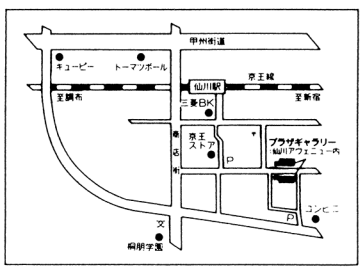
お問い合せは 3300・3616
世田谷区給田 1-9-22
＜仙川駅より歩いて5分＞

プラザ・ギャラリー

〒182 東京都調布市仙川町1-25-2-107
(仙川アヴェニュー内)

10:00am～6:30pm(水曜定休)

phone　03-3300-1010
facsimile　03-3305-7491



せんがわ界隈史の会発足！

――ごあいさつとお願い――

都内の空気よりはおいしい、とまではいかなくても少しはましな、そして多少田園が残っている〝せんがわ〟。この地に住んで、安住の地と決めておられる方々も少くないと思われます。

このあたりの農家は大正の末頃までは、米、麦、雑穀、いも類の外、現金収入の多い養蚕が特に盛んでした。昭和の初期頃より西瓜、蔬菜（そさい）作りが始まり、その後、化学肥料（当時は金肥といった）が高値であったので、それを補うために酪農養豚養鶏等がだんだんと普及されていきました。

しかし、宅地化が進むにつれて、畑地も少くなり、糞尿等の処理も困難なため次第に減り、現状ではほとんど姿を消しています。

そして現在は、アパート駐車場経営の、いわゆる兼業農家が大多数を占めています。この様な変化も、京王線が当地を通ったこととと非常につながりが深いと思います。

この京王線も開通七十周年を迎えました。かっては中央線がこの地を通る予定でしたが、当時の機関車の煙が、当時の養蚕家にとって命よりも大切な桑の葉に害があると言うことで大反対をし、追い払ってしまったのです。しかし後日「これでは文明開化に遅れる」ということで京王線の誘致にかたむいた、と古老より伝え聞いています。

× × ×

私共も、この土地に生まれ育った者として、これまでに伝え聞いた話などを思いおこしながら、拙いながらも『せんがわ界隈史』の一頁ずつを埋めていければ……と思っています。

そしてこの地の古文書、記録等を収集し、また、古老、先輩たちから昔話をお聞きしながら、将来的には一冊の本に編みあげていきたいと存じます。

是非とも「界隈史の会」の発足とその活動に、ご賛同とご協力をお願い致します。

昭和五八年十一月

発起人　榎本　晃道
　　小幡　正一
　　川原　主計
　　田辺　喜勝
　　浜島　寛

（連絡は、田辺まで
☎３３００・２５１６）

せんがわ界隈史の会
第二期目に向けて

自分のまちの歴史を自分達の手で残したい。その様な思いから、「せんがわ界隈史の会」は昭和五八年に地元の有志の方々により発足しました。

仙川のまちも、都市化の波や土地税制の強化で、残り少ない農地やみどりの空間そして古い佇まいも、共に大きな時代の津波の中に飲み込まれようとしています。

激変するこのまちの様子を書き留め、堆積したいろいろな出来事を調査し記録することは、この地に生まれ育った者の責務であると感じています。そして一冊の本にまとめたいというのが大きな願いです。

今回、「せんがわ界隈史」特集号が多くの方々のご執筆とご協力でまとめられたこの機会に、改めて今後の活動に向けてのご参加とご協力をお願いいたします。

身近なこのまちの歴史を知ることは、ここに住む方々のこのまち仙川を愛する大きな心のよすがになると信じます。

平成五年七月

世話人

新井　一男　川口　三八
川原　主計　斉藤宇之吉
酒井　一真　佐々木孝一
高橋　喜市　田辺　広吉
田辺　喜勝　浜島　和男
藤橋　道夫　山内　鋭治

※五十音順・敬称略

（連絡は、田辺喜勝まで
☎３３００・２５１６）

せんがわ まちシティ情報センター

一九七八・一・一五

●設立趣意●

せんがわ（緑ケ丘、仙川町、若葉町、入間町）の空間での住む人（一万世帯二・五万人）と働き、学び、買い物、遊びにくる人達による新しき街・せんがわ（文化と福祉の結びついた街の生活）づくりへの試み

◇せんがわのまち、とにかく気に入っているという人が多い。

切通しを走る京王線の風情。夕方都心からもどって、改札を出るとホッとするのは駅前に大きな建物がなく、又広場の狭さが逆に郊外駅の情緒を残しているからだろうか。新宿まで20分余という便のよさ。道路幅の狭さが親密な雰囲気をつくり、呼びこみがとびかい活ばつな商店街。西側には斜面地の景観が楽しめ、緑のたたずまいが残る家並み。桐朋、白百合や中央電通などの学園、若者のまち。図書館、公民館、児童館、老人憩いの家などの公共施設も整備され、読書会などのサークル活動も活ばつとのこと。わざわ座をはじめ、長善館の長持行列などいくつかのユニークな活動。ナショナルブランドで親しい企業の工場が3つもあるのも、このせんがわの水質が古来よかったからであり、故武者小路氏も水の湧く地を求めてせんがわに移り住んでこられたのだった。その屋敷跡は、いま実篤公園として、せんがわに開かれた。昔からめぐまれた風土と暮らしをもつ街。

◇でも、実際のところせんがわはいま〝素敵な〟まちになりえているかどうか？

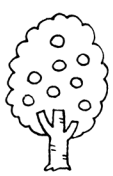
あなたやわたしにとって、コレがせんがわの魅力であり、せんがわの生活と文化であると言うるものがあろうか。何かとても、もったいない感じがする。商店街の盆おどりや、もちつき大会、秋の八幡・糟嶺両神社の例祭も、せんがわの〝お祭り〟というにはさびしい、工夫がたりない。各学園祭や長善館祭なども、せんがわのまち全体でもっと楽しめるはずの催し物と思える。せんがわで、人やグループが、どんなことを考えたり、やったりしているのか？　まちという場での人と人との出会いの魅力と、その関係の仕方のさまざまな可能性を、拓くための工夫と努力が欲しい。そして、その交流と協力のためには、お互いの活動内容やスケジュールを、まず知らせ合うことが大切となろう。せんがわでの地域・生活・文化情報の交流を活ばつ化するための具体的な道具が欲しい。

◇いま、せんがわのまちは、どこへいこうとしているのだろうか。

まちの活気といったものを考えてみる時、商業と商店街の果たす役割は大きい。いま商店街は次々に新装・改築がなされ、商店構成も変わりつつある。成熟期を迎えつつあるせんがわ商圏はこの建築ラッシュの中で、新たな展開をなしうるであろうか。いま、何より必要なのは、せんがわのまちに対する総合的な眼くばりの中で、このまちの性格と魅力をつかみ、住み、働き、学び、買い物し、遊ぶ人達、みんなで共に追及しうる、まちづくりのヴィジョンと明確な意志をもつことではないだろうか。道にあふれる自転車や乳母車の波、ゆっくり立ち話しもできない人の流れ、ちょっと腰かけて話しをしたいと思っても、道に開かれたスペースもベンチひとつない店々のつらなり、再考したいものだ。

◇いままで、私たちは遠くの方ばかり眺めていて、自分の足もとにころがっている、一番大切なものをみようとしませんでした。新聞、ラジオ、テレビ、雑誌、書物から日々、ぼう大な情報を手にすることが出来ますが、さて、せんがわや調布といった身近なことについての情報は皆無といえます。いま私たちは、このせんがわのまちとそこでの生活をいかなるかたちで織り上げ、そして次代の子どもや孫たちに伝え、ゆだねようとしているのか。

◇この世紀末を21世紀に向けて拓くために、日本の各地で、ひとは、むらは、まちは、いま己の〝風と土と心〟を問うことから、各々の歩みを始めている。さて、せんがわのまちでは。



せんがわ　まちニティ情報センター

▼その目的

もっとも身近な生活空間であるとともに、多くの魅力と可能性を秘めた、このせんがわの地において、風土と人を大切に生かした〝新しき街・せんがわ〟づくりを目指す。そのためにまず、このまちに住む人たちの間の、意志と情報と活動の交流を活発化し、各人の知恵や工夫を結びつける場として、この情報センターを位置づける。

▼その性格

せんがわにおける総合的な情報センターとして、せんがわの資料室、広報室、企画室の役割を担い、雑誌社やボランティアバンクやシンクタンクの機能を追及する。ここでセンターといっても、それは建物ではない。各個人、サークル、町内会・自治会・子供会、商店・企業、行政の間で、人と情報を結びつける働きであり、絶えずみんなに開かれた、無限にひろがるネットワークである。

▼その活動

当面の活動テーマを次の様に考えている。（具体的な活動イメージと内容は省略）

イ、〝新しき街・せんがわ〟をまちのキャッチフレーズへ

ロ、まちシンポジウム〝新しき街・せんがわ　今日そして明日〟の開催

ハ、まちコミ誌「せんがわ・21」の刊行

ニ、まちコミネットワーク〝みんなの掲示板〟システムの拡充整備

ホ、スライド〝せんがわ・風と土と心〟の映像制作

ヘ、新しき街の〝鎮守の杜〟構想――実篤公園の生きた運営を考える

ト、まちコンサートや仙川寄席の開催

チ、せんがわボロ市や朝市の開催

リ、せんがわ哲学堂講座の開講（自由大学）

ヌ、せんがわデータバンクの設置

ル、せんがわ百科の作成（文芸年鑑も）

ヲ、個展はせんがわで開こう会

ワ、「実篤と新しき村」シンポジウムと美術展（春5月実篤生誕祭の頃）

カ、新しき街芸術祭（秋学園祭の頃）

ヨ、新しき村や街との交流と連帯など多様で多彩な諸活動を創拓する。

▼その構成

。メンバー　この活動の趣旨に賛同し、積極的な関心と参画の意志を持ち、チエとパワー（労力）をおしまない人。

。賛助会員　このセンターの目的と活動に賛同し、維持のために支援してくれる人。

賛助会員会費…一口五〇〇〇円の随時カンパ

。維持読者　「せんがわ・21」の刊行維持のために支援してくれる人。

維持読者会費…一口一〇〇〇円の随時カンパ

。町の先生　プロとして、この活動への助言と協力をしてくれる人。このせんがわに住み、又かかわり意識を持つ人で、学びの原点にもどって、フレッシュな話をしてくれる人。年に一度は、基本的に手弁当で、講義や執筆をしてくれる人。

。事務局スタッフ　センターの持続的な運営のために、若干名の専従、半専従のスタッフをおき、有給とする。

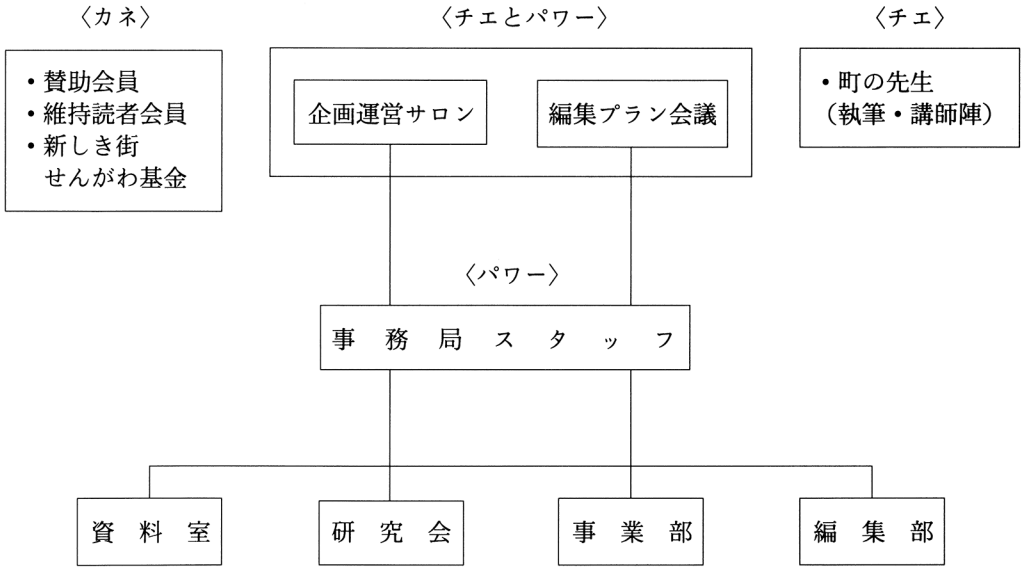
▼その運営

有志のボランティア活動が基本で、チエ・パワー・カネを持ち寄り、センターの維持運営にあたる。将来的には、コミュニティ財団の設立や公益信託の活用なども含めて、地域の新たな共同財としてのあり方を追及する。

。新しきまちせんがわ基金　地域の人たちの浄財をあおぎ、新しき街づくりへの諸活動の資金にあてる。



▷その組織と活動（当面の活動内容）



- 編集部
  - 。せんがわ・21刊行（年四回）
  - 。せんがわ・21カタログ刊行（年四回）
  - 。せんがわ・まちカタログ刊行（年一回）
  - 。せんがわ界隈誌企画（二〜三年後刊行）
- 事業部
  - 。せんがわ風ボロ市（月一回）
  - 。まちニティカレッジ（月一回）
  - 。せんがわ界隈誌の会（月一回）
  - 。せんがわ音楽祭（年一〜二回）
- 研究会
  - 。新しき〝街〟研究会（月一回）
    - ・せんがわ・21プラン
    - ・仙川駅周辺地区計画
- 資料室
  - 。せんがわに係わる資料の収集
  - 。まちづくりに係わる資料の収集

■最近の活動から（92年6月〜11月）
仙川まちづくり土曜サロン

第一回 〝駅周辺のまちづくり計画と仙川の将来〟
－激変の90年代、新しき街づくりに向けて
①仙川駅周辺地区計画の歩みとこれから
伊藤恭二氏／パシフィック総合開発
②風土・地政からみた仙川のまちの将来
山下信男氏／NOMOS研究会

第二回 〝地区計画〟と〝仙川のまちづくり〟
－今、改めて地区計画を学ぶことから
①スライドで学ぶ〝個性豊かなまちづくり〟
『地区計画－制度編』及び『同－事例編』
②まちづくりにおける〝計画〟と〝事業〟
山本雅之氏／地域社会計画センター

第三回 〝都市計画と街づくり戦略〟
加川浩氏／加川設計事務所

第四回 〝アート・あっと・ホームな街／仙川づくり〟
①世界の中の仙川、仙川の中の世界
末吉保雄氏／桐朋学園大学
②今、仙川のまちづくりに大切なこと
山下信男氏／NOMOS研究会

第五回 〝増大する固定資産税・相続税等への対策〟
－土地の「保有」から「活用」に向けて
①平成4年度の税制改正と新土地税制のスタート
菅原徹也氏／菅原税理事務所
②資料にみる〝新定期借地権〟の制度と活用
大脇正昭氏／地域科学研究会

第六回 〝夢を共有できる街になれば最高だ〟
－仙川は世界の中心になれるか
山岡義典氏／プランニング・コンサルタント

○ せんがわ２１　人財＆カンパ大募集!! ○

せんがわまちニティ情報センターは、せんがわにおける総合的な情報センターとして、せんがわの資料室・広報室・企画室の役割を担い、雑誌社やボランティアバンク、シンクタンクの機能を追求しています。有志のボランティア活動が基本で、チエ・パワー・カネを持ち寄り、センター及び『せんがわ・21』の維持運営にあたっています。現在、センターでは、『せんがわ・21』の定期刊行のために取材・編集及び制作スタッフを募集しております。また、資金面でのご支援もいただきながら、新しき街・せんがわづくりのための諸活動を展開していきます。

□賛助会員とは――センターの目的と活動に賛同し、維持のために支援してくれる人。

賛助会員会費・・・一口５０００円の随時カンパ

□維持読者とは――『せんがわ・21』の刊行維持のために支援してくれる人。

維持読者会費・・・一口１０００円の随時カンパ

◆お申込・会費は郵送あるいは、当方へお電話下されば取りに伺います。尚、下記の口座もご利用下さい。当該支店にお振込みいただければ、手数料はかかりません。

郵便振替　口座番号　東京５―５７０６８８

加入者名　せんがわまちニティ情報センター

銀行等　芝信用金庫　仙川支店　普通９０３１２５８

永楽信用金庫　仙川支店　普通３４４２９

第一勧業銀行　調布仙川支店　普通１８０２３４８

東京相和銀行　仙川支店　普通１１９０６８

三菱銀行　仙川支店　普通７７３４７

口座名　せんがわまちニティ情報センター　青野友太郎

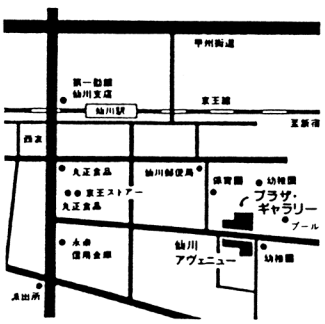
せんがわギャラリー〔表紙の言葉〕

学校からの勤め帰りに、家内が猫を連れてきたのが１２年前でした。その頃、私はよく墨絵を描いて楽しんでおりましたが、仔猫が家族の一員となってからというものは、その可愛らしさのとりこになってしまい、初恋のラブレターのように猫の絵を描きまくることになりました。絵の中では、野良やよその家の猫が加わって、絵はがきになり、絵本になり、カレンダーにもなりましたが、主役たる我が家の猫〝ジャリ〟は今年の５月に天国へ旅立ってしまいました。これからは、私の絵の中でいつまでも仲間と音楽に興じてくれることと思います。

「絵が猫だらけになったわけ」雨田光弘

プラザ・ギャラリー　展覧会スケジュール　（1993年９月以降）

日時／会場	プラザ・ギャラリー（南）	プラザ・ギャラリー（北）	
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
９／４→／24	佐々木徹　展 オープニング・パーティ　9/4	長谷川晶　展 オープニング・パーティ　9/4	杉浦忠雄　展 オープニング・パーティ　9/4
10／２→／26	柴田敏雄　写真展 オープニング・パーティ　10/2		八柳尚樹　展 オープニング・パーティ　10/2
11／６→／30	谷内庸生　展 オープニング・パーティ　11/6	坂口　登　展 オープニング・パーティ　11/6	浅倉　清　展 オープニング・パーティ　11/6
12／４→／23	第５回チャリティー 打ち上げパーティ（12／23）		



TEL／３３００・１０１０

キリトラナイデ（Ｂ４に拡大コピーして）下サイ

まちニティ　アンケートのお願い

Ｎｏ．１４（93.9）

① 本誌をどこで入手しましたか？
□ 宅　配　□ 商　店　□ 学　校　□ 図書館　□ 公民館
□ 書　店　□ 友人・知人　□ その他（　　）

② 本誌への全体としての感想は？

③ 本誌のなかで、特に印象にのこったことは？

④ いつごろの〝せんがわ〟がよかったですか？

⑤ あなたにとっての〝せんがわの原風景〟は？

⑥ 今後、〝せんがわ界隈史〟でとりあげていくテーマや出来事としては？

⑦ あなたが友人・知人に〝せんがわ〟を紹介する言葉は？

⑧ 今、仙川の街に一番欲しいものは？

⑨ これからの仙川の街にとって大切なことは？

⑩ 〝せんがわ界隈史の会〟について、
□ 関心のあるテーマなので、参加したい。
□ 昔の写真や古い記録などの資料を提供できる。
□ 昔からの伝聞や体験について話したり、書くことができる。

芳名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（　　才）　ＴＥＬ＿＿＿（　　）＿＿＿＿＿

住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　□仙川在住　＿＿年　□仙川以外

次号のテーマ「せんがわのまちづくり－２１世紀へのシナリオ」

編集室から

▼大東京圏の中での小さなコミュニティの町史編纂室（?!）が本格的にスタートして、半年余の成果をお届けします。大部のゲラ刷りを見た友人が、まるで合併吸収される町の最後の記念誌みたいだネ、と。いやいや「仙川独立国」に向けての温故知新の書なのですが。さて!!

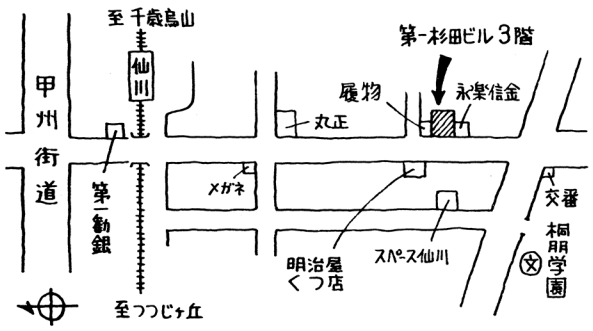
▼特に、伊藤綽彦氏の労作「界隈通年史」をベースにした「界隈史年表」は、数十名の各位に加筆及び資料提供の依頼を新たに行い、編集部の総力をあげてとりまとめたものです。「主な参考文献・資料」の頁で、お詫びと謝辞を記しております様に、オリジナルとはいえませんが、いささかユニークなまちニティレベルの試みかと存じます。読者各位のご協力を得て、6年後の99年9月に、決定版『せんがわ界隈史』の上梓を期したいと念じております。

▼さて、読者各位もご賢察の通り、本誌の編集・制作コストはどうしたのか、という肝心の問いについては、現時点では、誰も回答することが出来ません。今、話題の「TAMAらいふ21」から、「〇〇21」を最先行した本誌へのご祝儀として、賛助金が出ておりますのでご安心下さい、という訳には未だなっておりません。

▼富山の置き薬方式で、先行後利はなくとも、〝先読後カンパ〟で参りたく、各位のご厚志・ご高配を心から祈念しております。

▼日本のリストラ・創世の秋、読書と食欲の秋を迎え、ご親戚や、恋人・友人・知人への味わい深いプレゼントに、本誌のご活用を!!

▼商業誌でなく、同人誌でもない、せんがわの〝共同財〟にご支援を!!



□ 編集後記 □

▼地震・津波・台風・土砂崩れ、今年は日本列島だけでなく、地球までが狂ったような夏でした。そんな中、仙川だけがこんなに平和で、何か申しわけない気もします。しかし平和の時にこそ、備えが必要です。本誌がその備えになるかどうか…。（山岡義典）

▼今年の夏こそカヌーで川下りを……と思いはじめて三年。仕事や天候の都合で中止を余儀なくされ、今年の夏もまた出版予定の著書のため中止。何とか印税だけで生活をしたいもんだと思いつつ、涼しかった夏が終わろうとしています。ウーン…。（こやま　きょうへい）

▼赤い百日紅の花は美しい。調布市の花なのだが、仙川地域にはあまり見かけない。もっと美しいものがあるからまあいいか。（加藤純一郎）

▼最初は編集作業を横目で見ているだけでした。そのうち校正を手伝いました。気がつくと版下を作っていました。充実した夏だなぁ。（山下　琢）

▼僕は仙川の住人ではありません。しかし、仙川に「棲む」人間であると思っています。ちょっとしたきっかけで少しばかり編集の手伝いをさせて頂きましたが、いい勉強になりました。（大久保信昭）

▼どんなものにも歴史はある。この言葉を実感したのが今回の界隈史特集。何気ない事柄にも、表面から伺えない深い奥行きが潜むことを知りました。（松尾洋介）

▼先土器・縄文時代に仙川人（びと）が大活躍！　仙川の街の元気の素はギャートルズパワーにあり。温故知新は、〝夢見る力〟に……。（青野友太郎）

▼編集協力 ― 栗田行雄　川口信子　福田彩乃　久保直子　佐藤永蔵　稲川昭三郎　村上豊　藤丸卓男　社会研究フォーラム

せんがわ・21―第14号
せんがわ界隈史　特集号

発行日　1993年9月25日
頒　価　カンパ誌代2000円
発行部数　7000部
編集長　松尾洋介
発行兼編集人　青野友太郎
編集及　せんがわまちニティ情報
発行所　センター
調布市仙川町1・16・18
第一杉田ビル3F
〒182 ☎3326・2707
印刷所　㈱和幸印刷
製本所　㈱和幸印刷



❶ 1969年



❷ 1958年

せんがわ鳥瞰（かん）

～航空写真に見る〝むら〟から〝まち〟へ～

写真提供▷桐朋学園

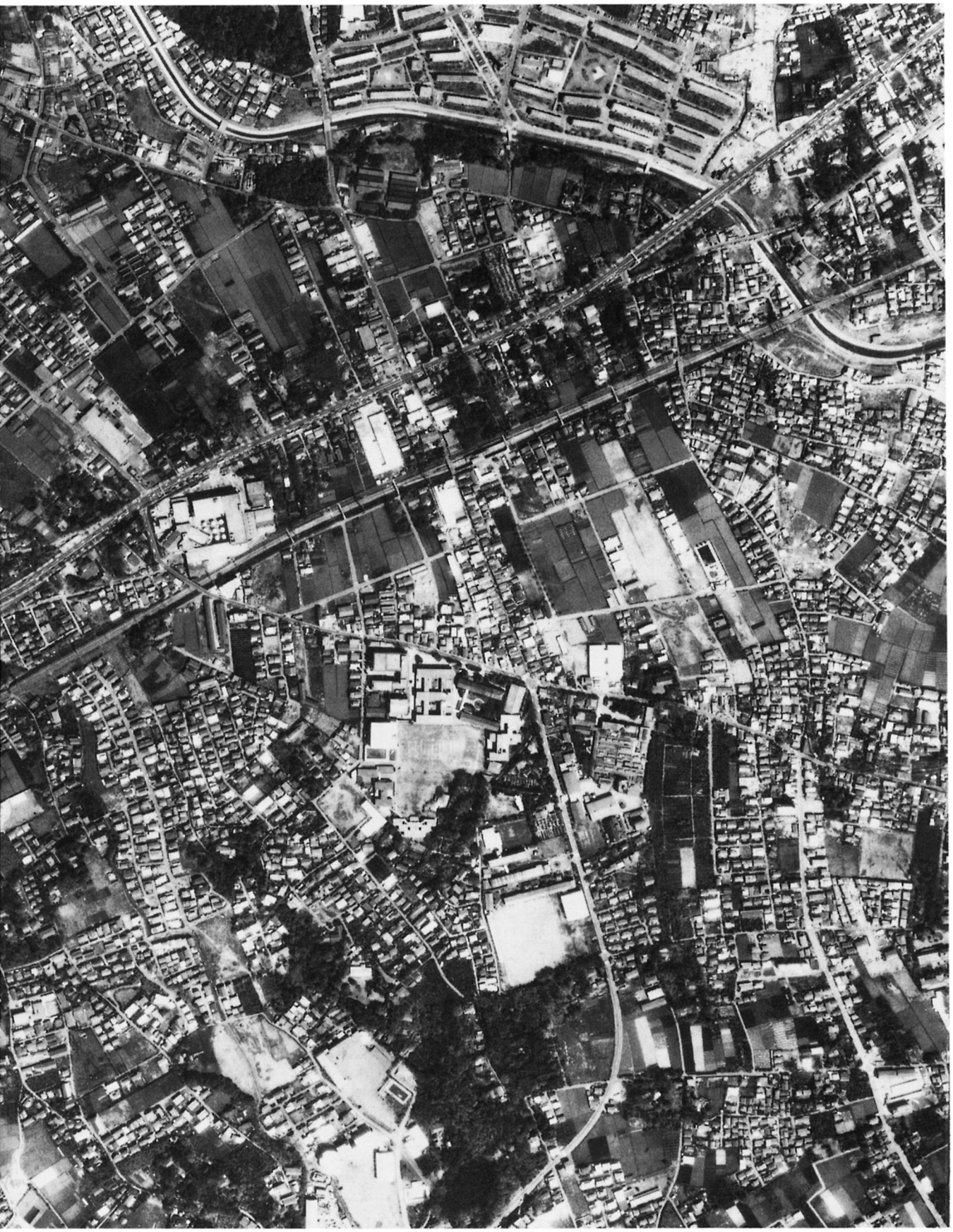


❸ 1947年

縮尺：1／7500



❹ 1963年



❺ 1971年



❻ 1984年

仙川の変わらざる原風景



雑木林、竹林、畑もまだまだ沢山ある。にわとりの放し飼いはあるし、ぶどう園もある。牛を飼っている牧場だってある。樹齢五百年位の杉、欅、二百年余りの榎や柿の木ならずい分ある。その上、名前もめずらしい、〝なんじゃもんじゃ〟なんて言う木もある。今ではめずらしいもの、探し出せば自然に興味が湧いて来るものが、沢山ある。遺跡に指定されてはいないが、ちょっと掘れば縄文時代の土器のカケラなどが出て来る場所だって多い。

街の様子や風景は、日々変わる。絵を描く人や、写真を撮る人にとっては、その変わり様に日々落胆させられるのは事実である。













自然と人の生活と街の風景、なんとなく調和に乏しい感じがする。

それでも毎年、楽しみにしていることがいくつもある。駅前の桜。そのすぐ先に、見事な赤い実をつける飯桐。少し給田寄りで、線路の切り通し斜面に、切られても切られても伸びて来て、食べられる実のなる桑の木。八月初めの〝おらほせんがわまつり〟等々。

話が前後するが、道路に面して数カ所、びわの木がある。子供の頃は田舎で猿のように木に登って、びわを食べたものだ。今ではそんなことも出来ないので、無人の野菜販売所に並べてあったびわを二袋買って、夢中になって一気に食べた。四百円也。粒は不揃いでもまあまあおいしいし、大満足。嬉しかった。

（写真・文　加藤純一郎）

















かつてのある日
——そのごの出合い

東っつじヶ丘三丁目を歩く。人も車もうんと少ない小径。十二月昼下がり。なるべく晴れた寒い日。散歩道としては絶好の条件。

おいでおいでと手招きする木もれ日をゆっくりと追いかける。目の前は谷間の様子。その向こうは切れ目のない森。北側には京王線が見える。小径沿いの雑木林に幾分か視界をさえぎられながらも、右へ右へと視線を移す。通称「若葉の森」だと私は思い込んでいる。

実篤公園はその森と谷間のあいだ。

ある十二月の半ば頃のこと。朝早く、南の国行きの航空券を手にして成田空港へ向かった。成田は本当に遠い。これじゃ、まず間に合わない。家を出る時からそう思えた。航空機は全く動く様子もない。そこに見えているのに、出発三十分前にチェックインカウンターは閉じた。定刻通りに離着陸するのはたまにしかない航空会社なのに!

気分を変えるため、その日、陽が傾き始めた頃、実篤公園へ行った。鯉が多い。水は少し濁り気味。冬枯れの木々には風もない。鯉の動きに時折目をやりながら、池の側で絵を描く女性。淡いベージュのきれいな帽子。立ったままでいるとかなり寒いだろう。冬の日らしく、光量が時間とともに次第に少なくなるのが見える。帽子のせいか、後ろ姿がやけに素敵なお嬢さんに思える。

好奇心の赴くままに恐るおそる右側に回ってやっと横顔をのぞき込む。バケモノ扱いする訳ではないのだけれど、近寄り難く、寄ればいきなり文句を言われる。きっとそうだ。そんな人に間違いないと私は思い込んだ。こんな印象を持ちつつも少しずつ話しかけた。その間、絵のほうは描いては消し、描いては消す。やたらと時間をかけたいのか気分が乗らないだけなのか、ちっとも進まない様子。突然、私はうんと楽しい空想をつくりあげた。翌日再び彼女を見た。その翌日、本当に南の国へ旅立った。

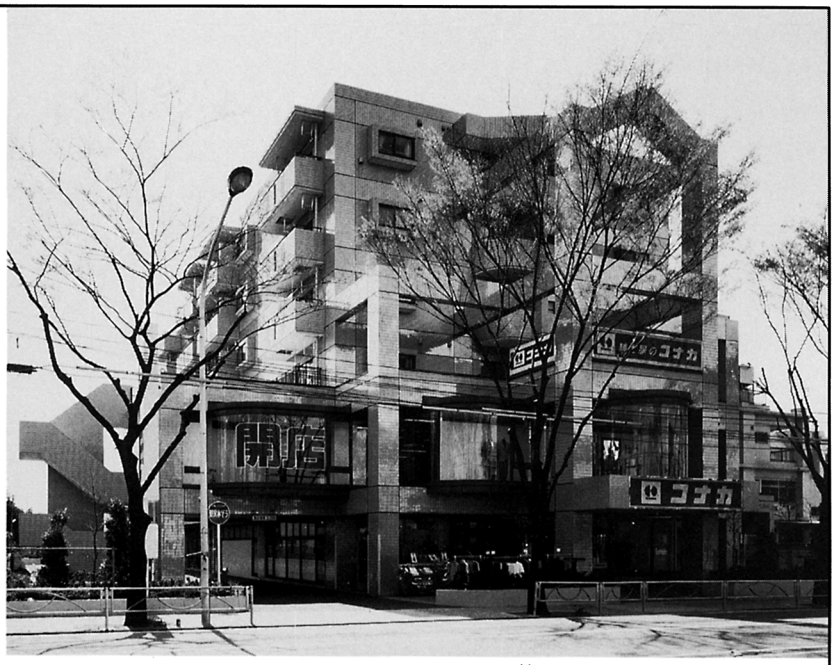
一年半程の時間が流れ、三度目彼女にあった。ある日一枚の絵を見た。一見して彼女のものだと分かった。その数日後、初めて顔をしっかり見ることが出来た。素敵な顔だった。

加藤　純一郎



アパートの管理猫(若葉町２丁目にて)

• 個性あふれる
街づくり



仙川・つつじケ丘作品－その48
ウエストンヒルズ

株式会社 グローバル設計

調布市仙川町１丁目15番地47号
ひなたビル

TEL 03-3300-0081
FAX 03-3300-7200



古き良き昭和25年当時

書籍と文具 神代書店

桐朋学園前 ☎3300-5633



せんがわギャラリー

●雨田　光弘（あまだ みつひろ）

1935年東京に生れる。彫刻家・音楽家の父・雨田光平の傍らで絵の手ほどきを受ける。桐朋学園でチェロを鈴木聡氏に師事。卒業後、日本フィルハーモニー交響楽団に12年間在籍。現在はフリーとして、ソロ、室内楽等での演奏活動と同時に、水彩画の製作も手がける。85年より毎年展覧会と演奏会を同時に行う『展音会』を府中市において開催。話題作に絵本の『愛のあいさつ』(串田孫一共著)、『田園交響曲』など。中原１丁目在住。



カンパ誌代 **2,000円**